

調—0443

0142

0143

調-0443

國際法先例彙輯 (10)	
同 盟 (1)	
目 次	
一、日韓協約（對清攻守同盟協約）（明治二十七年）	一頁
二、日韓議定書（明治三十七年）	四
三、日英協約（明治三十五年、明治三十八年、明治四十四年）	一
(一) 第一回日英協約（明治三十五年）	一
(2) 駐英獨代理大使ノ私的提議	一
(3) 英政府ノ内意探究	一
(4) 英政府ト正式ニ意見交換ヲ開始	一二
(5) 英政府協約及ビ別款案文提示並ニ之ニ對スル帝國側修正	一三
英國政府修正セル協約及ビ外交文書案文ヲ提示	一〇
帝國側修正案ノ提示及ビ修正交渉	一一

(二) 諸國ノ同盟協約

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp>

(7) 協約調印	二七
(参考) 第一回日英協約ト軍事協約ノ締結	三四
(二) 第二回日英協約(明治三十八年)	四二
(1) 第一回日英協約ノ範囲擴張問題ノ發端ヨリ日英兩國政府間ニ於ケル交渉ノ開始マデ	四六
(2) 帝國政府案ノ提示及ビ之ヲ基礎トセル英國政府案ノ提示	五一
(3) 帝國政府修正案及ビ英國政府再修正案ノ提示	五九
(4) 英國再修正案ニ對スル帝國政府最終提案及ビ之ニ對スル英國政府修正	七九
(5) 英國政府修正ニ對スル帝國政府ノ回答ヨリ條約調印マデ	九〇
(6) 露佛兩國政府ニ對スル通達	九九
(参考) 第二回日英協約ト軍事協約ノ締結	一〇〇
第三回日英協約(明治四十四年)	九九
(1) 英米仲裁裁判條約締結問題ト日英協約	一〇〇
(2) 帝國政府案ノ提示	一〇一
(3) 英國政府ノ修正案及ビ之ニ對スル帝國政府ノ意見提示並ニ條約ノ調印	一一一
第四回日英協約(明治四十五年)	一一一
(1) 日英協約ト帝國ノ世界大戰參戰	一一八
(2) 帝國政府ノ英國政府ニ對スル援助申出	一二八
(3) 英國ノ日本海軍ノ出動方要請	一二九
(4) 英國ノ援助要請ニ基ク軍事行爲ノ範囲ニ關スル日英折衝	一二五
(5) 國際聯盟ノ設立ト日英協約改訂問題	一五六
(参考一) 日英協約改訂問題ニ對スル中華民國ノ態度	一七三
(参考二) 日英同盟ト國際聯盟(「ベーチー」博士意見要略)	一七四
(6) 日英協約ノ效力問題——附、對聯盟通告文ノ效力問題	一七八
(7) 「ワシントン」會議ト日英協約——日英協約ノ終了	一〇六
第五回日英協約(大正三年)	一一一
(1) 佛國ノ同盟提議	一一一
(2) 露國ノ同盟提議	一一六
第六回日露同盟及日英露佛同盟條約締結交渉(大正三年)	一一一

序

本書ハ帝國ト諸外國トノ間ニ締結セラレタル同盟條約ノ内、明治二十七年ノ日韓協約（對清攻守同盟協約）ヨリ大正七年ノ日支軍事協約ニ至ルマデノモノヲ蒐集編纂セルモノナリ。本書ノ内容ニ付一般的の考察ヲ試ミルニ、抑モ同盟條約ハ數國ガ一定ノ場合ニ於テ、兵力ニ依ル援助ヲ包含スル應援義務ヲ定ムル處ノ一時の又ハ恒久的ノ結合ノ條約ナリ。同盟條約ト稱シ、單獨不講和宣言ト稱シ、或ハ單ニ協約ト稱スルモ、名稱上ノ差異ハ問フ處ニアラズ。又同盟條約ハ最高度ノ政治條約ナルヲ以テ、二國間ノ結合ノ目的ヲ或ハ前文ニ、或ハ條約中ニ記載スルモ、時ニハ種々ノ政治的條項ヲ併存スルコトアリ。例ヘバ日英協約ノ各々ニ於テ一種ノ勢力範囲ヲ兩國ガ相互的ニ認ヌタルガ如シ（四九頁參照）。然レドモ同盟條約ニ於テ最も重要ナルハ應援義務發生事由ノ項条ナリトス。之ニ關シテハ個々ニ付述ブル遑ナキモ、第二回日英協約中同盟國一方ノ或種ノ行動ガ防禦的且非挑發的ノモノト認メ應援義務ノ發スベキ旨ノ了解アリタル如キハ特ニ注目スベキモノナリ（六二、六三頁參照）。次ニ同盟條約ノ性質上、戰爭トノ關係ハ極メテ複雜微妙ナリ。本書收錄ノ同盟條約中、帝國ガ戰爭ヲ遂行中締結シタルモノニ日韓協約、第二回日英協約、倫敦宣言等ニ對スル加盟、日露秘密同盟條約、日支軍事協約等アリ。戰爭前ニ締結シタルモノニ第三回日英協約アリ。其ノ孰レノ

場合ニ於テモ參戰ノ如何ニ付テハ微妙ナル問題ヲ生ズルモノ、之ニ關シ本書中特ニ注目すべきハ第三回、日英協約ニ依ル帝國ノ世界大戰參戰ノ際ニ於ケル當該條約ノ適用問題ニ關スル加藤外務大臣ノ意見（一）九頁參照）。日英協約ニ依リテ帝國ガ英國ト同一ノ地位ニ立ツモノナリトノ大正四年七月二十八日附帝國覺書（二二八頁）等ナリ。從テ參戰問題ニ付テハ詳細ノ敍述ヲ施シタリ。又、同盟條約ノ效力ニ付テハ政治的重要性ノ故ニ往々當事國間ノ意思ノ齟齬ヲ來タスコトアリ。斯カル效力問題ニ付テハ第三回日英協約ニ於テ、國際聯盟ニ對スル日英共同通告ガ同協約第六條ニ依ル當事國ノ意思通告ヲ構成スルヤノ問題（一七八頁以下參照）。露國ニ於ケル政府ノ變更ニ基ク大正五年ノ日露祕密同盟條約ノ效力問題（二八七頁以下參照）等アリ。最後ニ附言スベキハ同盟條約ハ殆ド常ニ軍事協約ヲ附隨スルコトナリ。然レドモ右ハ軍當局間ノ協定ノ形式ヲ採ルヲ以テ公表セラレザルモノ多ク、コノ點ハ資料ノ不足ヲ免レザルモ、本書ニハ執務ノ参考上記録中ニ存シタル限リニ於テ之ヲ收錄セリ（囑託、早稻田大學法學部助教授一又正雄記）。

## 日韓協約

(對清攻守同盟協約) (明治二十七年)

明治二十七年日清兩國間ニ戰端開カレタルニ拘ラズ、韓國ノ大官連ノ言動不謹慎ニシテ大院君ノ如キ露國公使ニ對シ日清兩國間ノ調停ヲ慇懃スルガ如キコトアリ、茲ニ於テ陸奥外務大臣ハ「朝鮮政府ニテモ此際清國ニ向テ宣戰スルコト是迄ノ行懸上最モ適當ナル順序」ナリトナシ「但シ若シ第一宣戰シ難キ事情アラバ宣戰ニ代ルベキ丈ノ言動ヲ公然發表セシメル事最セ必要」ナルヲ以テ、大院君及其他ノ者ニ嚴ク談判スル様八月十三日在京城大鳥特命全權公使ニ訓令シタリ。右訓令ト行達ヒニ大鳥公使ハ八月十七日來電ヲ以テ、韓國ト七月二十四日ヲ以テ左ノ如キ基礎ニ於テ攻守同盟ヲ締結スベキコトヲ請訓シ來レリ。

1. The object of proposed alliance is to maintain Korea independence on a firm footing and to promote the interests of Japan and Korea by driving Chinese soldiers out of the Korean territory.
  2. Japan will undertake all warlike engagements both offensive and defensive against China while Korea will hold herself to give every facility possible for the supply of provisions and the movements of Japanese soldiers.
- 右ニ對シ陸奧外務大臣ハ前項訓電ト其趣旨同1ナルコト但シ第一段ニ付朝鮮政府ノ意ニ反シテ軍需品ノ供給ヲ強制スルガ如キコトナキ様注意スベキ旨ヲ八月十七日訓電セリ。
- 大鳥公使ハ八月二十三日ニ至リ數日中ニ條約締結ヲ見ルベキヲ以テ至急全權狀ヲ附與セラレンコトヲ

要求シ來レルガ、陸奥外務大臣ハ右權限附與以前ニ條約案文ヲ電送ベキ旨ア命タリ。

八月二十五日大島公使ノ電送シ來レル條約案文左ノ如シ。

Treaty : Treaty of alliance between Japan and Corea. The Governments of Japan and Corea having been placed in position giving mutual assistance both offensive and defensive since the 在朝鮮日本公使 has been entrusted 明治廿七年七月廿五日 with the expulsion of Chinese soldiers out of the Corean territory, the undersigned duly authorized by their respective Governments, have, with the view of establishing relations thus existing and of arriving at the end common to both countries agreed to the following terms.

Article I. Article II. quite the same as stated in my telegram 46.

Article III. This treaty will cease to exist at the conclusion of treaty of peace with China.  
陸奥外務大臣ハ八月二十六日右條約案文ヲ承認シ、右條約案ニ調印バハ権限ヲ與ヘバキコトヲ訓電セルヲ以テ、大島公使ハ同日直チニ調印ヲ了シタリ。右條約全文左ノ如シ。

#### 大日本兩國盟約

大日本兩國政府ハ日本曆明治二十七年七月二十五日ニ於テ朝鮮國政府ヨリ清兵撤退一節ヲ以テ朝鮮國京城駐在日本特命全權公使ニ委託シテ代辦ゼシメタル以來兩國政府ハ清國ニ對シ既ニ攻守相助クルノ位地ニ立テリ就テハ其事實ヲ明著ニシ併ニ兩國事ヲ共ニスルノ目的ヲ達センカ爲メ下ニ記名セル兩國大臣ハ各々全權委任ヲ奉シ訂約シタル條款左ニ開列ス。

#### 第一條

此盟約ハ清兵ヲ朝鮮國ノ境外ニ撤退セシメ朝鮮國ノ獨立自主ヲ鞏固ニシ日朝兩國ノ利益ヲ増進スルヲ以テ目的トス。

#### 第二條

日本國ハ清國ニ對シ攻守ノ戰爭ニ任シ朝鮮國ハ日兵ノ進退及ヒ其糧食準備ノ爲メ及フ丈ケ便宜ヲ與ヘシシ

#### 第三條

此盟約ハ清國ニ對シ平和條約ノ成ルヲ待テ廢罷ス可シ  
此レカ爲メ兩國全權大臣記名調印シ以テ憑信ヲ昭ニス

大日本國明治二十七年八月二十六日

特命全權公使 大島圭介  
外部大臣 金允植

大朝鮮國開國五百三年七月二十六日

調—0443

0147

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp>

## 二、日韓議定書（明治三十七年）

四

明治三十六年滿韓問題ニ關シ帝國政府ハ露國ト直接交渉ヲ行ヒツツアリシガ、其終局ノ如何ニ歸着スベキニ拘ハラズ、此際韓國ヲ我方ニ引付ケ置クコトハ帝國ノ政策上極メテ緊要ナルヲ以テ、右ノ目的ヲ以テ何等カ密約ヲ日韓間ニ結ビ置クタゞ、小村外務大臣ハ同九月二十九日附ヲ以テ在韓林公使ニ對シ其考案並ニ手段方法等ニ關シ意見ノ回報ヲ求メタリ。茲ニ於テ林公使ハ種々工作ノ結果、明治三十七年一月十九日、韓國側、閔泳誥、李址鎔、李根澤ノ三名各自ノ委任狀ヲ得テ林公使ヲ訪問シタルヲ以テ、林公使ハ其ノ立案セル密約文ヲ提示セリ、右本文左ノ如シ。

一、日韓兩國間ニ恒久不易ノ親交ヲ保持シ東洋ノ平和ヲ確保スル爲兩國政府ハ常ニ誠實ニ相互ノ意

思ヲ疏通シ且緩急互ニ相扶掖シ

一、大日本帝國政府ハ大韓帝國ノ皇室ノ安寧及領土ノ獨立保全ヲ誠實ニ保障スヘシ

一、兩國政府ハ相互ノ承認ヲ經シテ將來本協約ノ主意ニ違反スヘキ協約ヲ第三國トノ間ニ締結スルコトヲ得ス

一、未悉ノ細條ハ大韓帝國外部大臣ト大日本帝國代表者間ニ臨機妥協スヘシ

一、本協約ハ相互間ニ祕密ニ付スヘシ

韓國側代表ハ翌二十日韓國側提案ヲ送付シ來リタルガ、其ノ全文左ノ如シ。

大韓帝國外部大臣ハ大日本帝國代表者ト妥商シテ左關案件ヲ議定スルコト

一、日韓兩國國際上ノ障礙ヲ嚴重ニ處置シ情誼ヲ完全ニ疏通スルコト

一、東亞大局ノ平和ニ關シ萬一時變ニ遭遇スル時ハ日韓兩國ハ誠實ナル友誼ヲ以テ互ニ相提携シ安寧秩序ヲ永久ニ維持スルコト

一、不備ノ細目ハ外部大臣ト日本國代表者間ニ臨機妥定スルコト

林公使ハ右案文ニハ種々不備ナル點アルモ、交渉遷延セバ障碍生ズベキヲ以テ右條約案ニ對スル調印方ヲ請訓シ來レリ。小村外務大臣ハ韓國側對案ノ第一條ハ主トシテ亡命者ニ關スルモノニシテ其處分ハ一時ニ終リ且別ニ公文ノ約束アルヲ以テ協約中ニ掲グルノ要ナク、又第二條ハ意味薄弱ニ過グ故ニ

林公使立案ノ提案ニ若干ノ修正ヲ附シテ之ヲ維持スベキコトヲ訓電シタリ。然レ共林公使ハ一月二十一日韓國內ノ事情ヲ具申シ、韓國側對案モ第二條ニ於テ、我方眼前ノ目的ハ達シ得タルヲ以テ、此際至急之ニ調印シ度旨ヲ再度請訓シ越セリ。茲ニ於テ小村外務大臣ハ同日直チニ訓電ヲ發シ、一先づ韓國側對案ニ基キテ協約ヲ締結シ、追テ時機ヲ見計ヒ我希望ノ案ト引換フルコト、閔、李兩人ヨリ異議ナキ旨ノ書面ヲ取付ケベキコトヲ命ジタリ。

右密約ハ一月二十三日將ニ調印ノ運ビニ至リタルニ、嚴正中立ニ關スル書面ニ對スル帝國ノ回答ヲ得ルコトヲ條件トベシトノ韓國皇帝ノ反對ニ依リテ、調印済ノ密約モ交換セラルニ至ラズ、茲ニ一頓挫ヲ來スニ至レリ。

明治三十七年二月五日遂ニ日露國交斷絶スルヤ、韓國側モ漸ク日本ニ歸服シ、日韓兩國ノ提携ニ異論ヲ唱フルモノナキニ至リタルヲ以テ、二月十三日外部大臣李址鎔ハ在韓林公使ヲ來訪シ、右ノ旨ヲ述ベタル後、曩ニ交換ヲ延引シタル密約ヲ交換シタシト申出タルニ付キ、林公使ハ昨今ノ情勢ニテハ韓

國ハ我々ト提携シ居ル次第付キ此際ハ一層進ミタル詳細ノ條約ヲ締結スルヲ以テ時機ヲ得タルモノト信シ、同大臣ニ對シ時勢ノ變遷ヲ詳細ニ説明シタル上左ノ約案ヲ示シタリ。

大日本帝國皇帝陛下ノ特命全權公使林權助及ヒ大韓帝國皇帝陛下ノ外部大臣臨時署理陸軍參將李址鎔ハ各相當ノ委任ヲ受ケ左ノ條款ヲ協定ス

第一條 日韓兩帝國間ニ恒久不易ノ親交ヲ保持シ東洋ノ平和ヲ確立スル爲大韓帝國政府ハ全然大日本政府ニ信賴シ專ラ大日本帝國政府ノ助言ヲ受ケテ内治外交ノ改良ヲ圖ルヘシ

第二條 大日本帝國政府ハ大韓帝國ノ皇室ノ安全康寧ヲ誠實ニ保障スヘシ

第三條 大日本帝國政府ハ大韓帝國ノ獨立及領土保全ヲ確實ニ保障スヘシ

第四條 第三國ノ侵害ニ因リ若クハ内亂ノ爲大韓帝國ノ皇室ノ安寧或ハ領土ノ保全ニ危險アル場合ハ大日本帝國政府ハ速ニ臨機必要ノ措置ヲ採ルヘシ而シテ大韓帝國政府ハ右大日本帝國政府ノ行動ヲ容易ナラシムル爲十分ナル便宜ヲ供スヘシ

第五條 兩國政府ハ相互ノ承認ヲ經スシテ後來本協約ノ主意ニ反スヘキ協約ヲ第三國トノ間ニ訂立スルコトヲ得ス

第六條 本協約ニ關聯スル未悉ノ細條ハ大日本帝國代表者ト大韓帝國外部大臣トノ間ニ臨機妥定スヘシ

右ニ對シ小村外務大臣ハ左ノ修正ヲ要ベキ旨二月十四日訓令セリ。

第一條中「全然」及「専ラ」ナル文字ヲ削リ「大日本政府」ヲ「大日本帝國政府」ト改メ又「助言」以下ヲ「助言及助力ヲ受ケ施政ノ改善ヲ圖ルヘシ」と改ム故ニ第一條ハ左ノ如クナルベシ

第二條中「誠實」ヲ「確實」ニ改ム

第六條中「妥定」ヲ「協定」ニ改ム

此外尙第四條ノ末ニ左ノ一項ヲ加ヘタキ希望アリ即チ「大日本帝國政府ハ前項ノ目的ヲ達スル爲軍略上必要ノ地點ヲ占有スルコトヲ得ヘシ」トノ一項ナリ然レドモ若シ貴官ニ於テ右ノ一項ヲ加フルガ爲ニ本協約ノ成立ヲ妨グ又ハ商議ヲ遷延セシムル恐レアリト認メラルニ於テハ之レガ提出ヲ見合ハサルベク此點ニ關シテハ々貴官ノ裁量ニ任スヘシ

貴官ノ御見込ニテハ先方ヨリモ多少ノ修正ヲ申込ベキ由ニ付貴官ハ前陳ノ案ヲ基礎トシ商議ヲ進メラルベク愈々纏リタル時ハ調印ノ前に於テ其全文ヲ電報シ訓令ヲ請ハルベシ協約ノ日附ハ事實調印ノ日ニテ差支ナシ

右ニ對シ林公使ハ二月十六日附來電ヲ以テ更ニ左ノ如ク請訓シ來レリ。

前電御訓示ニ基キ我議定書草案ニ修正ヲ加ヘ昨日外務大臣ニ提議シ其調印ヲ促シタルニ同官ハ昨夜之ヲ閣議ニ付セリ然ルニ議政始メ各大臣等ハ我提案第一條末項ハ帝國政府ノ助言及助力ヲ受ケテ施政ノ改善ヲ圖ルコトアルニ對シ深ク危懼ノ念ヲ挾ミ是ヒ獨立國ノ體面ヲ損傷シ且ツ清國ニ隸屬シタルト同一ノ惡例ヲ後世ニ貽ス恐レアリト議シ且ツ今回ノ宣戰詔勅ニ見ルモ日本政府ノ主意專ラ韓國ノ獨立ヲ扶植シ領土ヲ保全スルニ在ルヤ明カナルヲ以テ今一應日本政府ノ考慮ヲ求メ韓國ノ獨立ト相待テ穩當ナル文字ヲ議定書ニ表示シ以テ日韓兩國ノ親交ヲ永遠ナラシメントノ意見ニ一致シ外

部大臣ハ右ノ主意ヲ體シ今朝來頻リニ本使ニ向テ左ノ修正案ニ同意ヲ求メ居レリ

第一條末項ニ「大韓帝國政府ハ大日本帝國政府ニ信賴シ大日本帝國政府ノ助言及助力ヲ受ケ施政ノ改善ヲ圖ルコト」トアルヲ「大韓帝國政府ハ大日本帝國政府ヲ確信シ施政ノ改善ニ關シ其忠告ヲ容ルコト」及第二條末項ニ「皇室ノ安全康寧ヲ確實ニ保障スルコト」トアルヲ「皇室ヲ確實ナル親誼ヲ以テ安全康寧ナラシムルコト」第四條中「充分ナル便宜ヲ供スルコト」トアルヲ「充分便宜ヲ與フルコト」又其第四項「軍略上必要ノ地點ヲ占有スルコトヲ得ルコト」トアルヲ「軍略上必要ナル地點ヲ臨機使用スルコトヲ得ルコト」ニ改メ右ニテ帝國政府ノ同意ヲ得ルニ於テハ早速閣議ヲ經テ調印ノ運ビト爲スベキ旨申出デタリ右韓國側ノ修正案ニ關シ閣下ノ御意見ヲ伺フベキ旨先方ニ約シタルニ付何分ノ回訓ヲ請フ

右請訓ニ對シ小村外務大臣ハ韓國政府ヨリ提出ノ修正案ハ大體ニ於テ可ナルモ、第一條末文ヲ「其忠告及助力ヲ用フルコト」ニ改メ又第四條第二項「軍略上必要ナル地點ヲ臨機使用云々」ノ「使用」ハ「收用」ニ改メ度ク、右ノ主意ニ依リ更ニ韓國側ト交渉スベキコトヲ命ジタル。林公使ハ右訓令ニ從ヒ交渉シタルニ、韓國側ハ第四條第二項ノ修正ニハ同意シタルモ第一條末項ノ「助力」ノ二字ヲ用フルコトニ關シ事實上日本ハ忠告及助力ヲ受クルハ免ルベカラザル必要ニ屬シ寧ロ我ヨリ進シテ之ヲ希望シツツアルモ之ヲ永久的ニ兩國ノ關係ヲ定ムル議定書ニ明記スルハ到底政府ノ議ヲ繕メ難シト述べタリ。因テ小村外務大臣ハ日露協商ニ於テ我方ヲ露國ヲシテ助言及助力ノ權ヲ併セ認メシムバコトヲ主張シタルガ故ニ今回ノ協約ニ於テモ可成之ト相對セシメンシガ爲是迄助力ノ二字ヲ加フルコトヲ希望シタルモ、事實韓國ニ對シテハ強テ此二字ヲ插入スルノ必要ヲ認メザルニ付先方ノ申出通りニテ速ニ協議ヲ

纏ムベキコトヲ林公使ニ訓電セリ。茲ニ於テ兩國間ニ條約案文ニ付妥結ヲ見ルニ至リ、二月二十二日午前十一時外部大臣ハ議定書ノ漢文ニ記名調印シテ林公使ニ送付シ來リ更ニ午後五時林公使ハ外部大臣ト面會シタルニ議定書第一條末段忠告ヲ用ユルコトノ「用」字ヲ「容」字ニ訂正シタキ旨韓國皇帝ヨリノ希望ニ付キ右一字改正ノ議ヲ申出デタルヲ以テ、此旨請訓シタルニ、小村外務大臣ハ、同日午後一時四十分發電ヲ以テ、議定書ハ林公使提出通ニテ御裁可ヲ經タルニ付調印スベク、且追テ通知スル迄互ニ祕密ニ附スベキ旨訓令シ、又字句ノ修正ニ付テハ午後八時十分發電ヲ以テ差支ナキ旨ヲ訓令シタリ。茲ニ於テ翌二月二十三日調印ノ運ビトナリタル處、二十二日夜再ビ韓國側ニ異論ヲ生ジ、外部大臣ハ二月二十三日朝後難ヲ恐レテ京城外ニ逃走ヲ決意シタル等ノ經緯モアリタルガ、林公使良ク之ヲ思ヒ止ラシメ、二十三日夜ニ至リ調印ヲ了スルニ至レリ。尙右議定書ハ我方ハ二月二十七日、韓國側ハ三月八日各官報ニ掲載發表セラレタリ。協定全文左ノ如シ。

日韓議定書

大日本帝國皇帝陛下ノ特命全權公使林權助及大韓帝國皇帝陛下ノ外部大臣臨時署理陸軍參將李址鎔ハ各相當ノ委任ヲ受ケ左ノ條款ヲ協定ス

第一條

日韓兩帝國間ニ恒久不易ノ親交ヲ保持シ東洋ノ平和ヲ確立スル爲大韓帝國政府ハ大日本帝國政府ヲ確信シ施設ノ改善ニ關シ其忠告ヲ容ル事

第二條

大日本帝國政府ハ大韓帝國ノ皇室ヲ確實ナル親誼ヲ以テ安全康寧ナラシムル事

大日本帝國政府ハ大韓帝國ノ獨立及領土保全ヲ確實ニ保證スル事

第三條

第四條

第三國ノ侵害ニ依リ若クハ内亂ノ爲大韓帝國ノ皇室ノ安寧或ハ領土ノ保全ニ危險アル場合ハ大日本帝國政府ハ速ニ臨機必要ノ措置ヲ取ルヘク而シテ大韓帝國政府ハ右大日本帝國政府ノ行動ヲ容易ナラシムル爲十分便宜ヲ與フル事

大日本帝國政府ハ前項ノ目的ヲ達スル爲軍略上必要ノ地點ヲ臨機收用スル事ヲ得ル事

兩國政府ハ相互ノ承認ヲ經シテ後來本協約ノ趣意ニ違反スベキ協約ヲ第三國トノ間ニ訂立スル事ヲ得ザル事

第五條

本協約ニ關聯スル未悉ノ細條ハ大日本帝國代表者ト大韓帝國外部大臣トノ間ニ臨機協定スル事

第六條

明治三十七年二月二十三日 特命全權公使 林 権 助 國

光武八年二月二十三日

外部大臣臨時署理

陸軍參將 李 坊 壽 銘 國

三、日英協約（明治三十五年、明治四十年、明治四十四年）

（一）第一回日英協約（明治三十五年）

（1）駐英獨代理大使ノ私的提議

明治三十四年四月九日在英林全權公使ハ加藤外務大臣ニ對シ倫敦駐在獨國代理公使「エカードスターイン」男爵ガ全ク其私見トシテ同公使ニ對シ左ノ如ク語リタル旨報シ來レリ（詳細ハ四月十五日附公信參照）。

「絶東ニ於ケル權力均衡ヲ維持シ且ツ將來變更ノ日ニ備フルガ爲メ約五ヶ年間（其後ニ至リ之ヲ繼續シ得ベキコトトシテ）左ノ條件ヲ以テ日、獨、英三國ノ同盟ヲ組織スルヲ得策トス即チ（一）日本國ハ韓國ト交渉上自由ノ行動ヲ與ヘラル事（二）同盟國中ノ一國ガ一敵國ト交戦スル場合ニハ殘リニ同盟國ハ中立ヲ守ルベキ事但若シ第三國ニシテ同盟國ノ敵國ヲ援助スルコトアル場合ニテハ二同盟國ハ之ニ干涉スベキ事之ヲ概言スレバ歐洲ニ於ケル三國同盟ト同一ナル三國同盟ヲ東亞ニ組織スルニ在リ」

（2）英國政府ノ內意探究

茲ニ於テ加藤外務大臣ハ在英林公使ニ對シ右三國同盟ニ對スル英國ノ意向探報方ヲ訓令セリ。依テ同公使ハ四月十七日英外相「ランスダウン」侯訪問ノ際偶然的ニ、且同官一個ノ意見ドシテ「北京談判終了シ且ツ外國兵撤退シタルノ後ニ至ラバ露國ハ再び清國皇室ヲ其掌中ニ握ルベク而シテ南清

一一

總督等ハ其業ニ既ニ類齡ニ赴ケルハミナラズ又實際世評ノ如ク有力ナル人物ニアラザルノ故ヲ以テ長ク此等總督ニ依頼スルコト能ハズ故ニ將來清國ニ於ケル紛糾ハ終ニ終熄ノ期ナカルベシ、事情斯ノ如クナルニ依リ予ハ日、英ノ利益ヲ維持シ依テ絶東ノ平和ヲ確保スル爲メ日英兩國間ニ或ル永久的協定ヲ成立セシムルノ見込アラザルベキヤ」ト告グタルニ同侯モ亦何等力施措スル所無カルベカラズト思考スルヲ以テ此件ニ付キ何人カ意見ヲ有スルモノアレバ何時ニテモ欣然其議ニ與カルベシトノ旨ヲ告ゲ「此事タル必ズシモ兩國間ニノミ限ルヲ要セズ或ハ他國ヲ加フルモ亦可ナラズヤ」ト附言セリ。

更ニ五月十五日林公使「ランスダウン」候ト會談ノ際、極東ニ於ケル永續的協商ニ就キ曩ニ爲シタル提説ニ付キ考量セラル所アリヤラ質シタルニ、同侯ハ公使所説ヲ一層明確ニ知ランコトヲ求メシガ故、同公使ハ「日本ノ外交政略ハ是マデ既ニ聲明シタル如ク清國ノ門戸開放及ビ其保全ト朝鮮ニ於テ有スル利益ヲ保持スルニ在リ而シテ英國及ビ日本國ハ其清國ニ對スル利害相同ジキガ故ニ須ク相結ンデ以テ吾人ノ利害ニ阻碍ヲ試ミントスル他國ノ連衡ヲ妨グザルベカラズ」ト述べタルニ、右ニ對シ「ラ」侯ハ「サリスベリー」候ニ語ルベキ旨ヲ約シタリ。

## (3) 英國政府ト正式ニ意見交換ヲ開始

其後在英林公使ハ英國政府當局（主トシテ駐日英國公使「サー・クロウド・マクドナルド」）ト極秘裡且私的ニ意見ヲ交換シタル結果、同盟問題ニ關シ正式ニ兩國間ノ意見ヲ交換スベキ時機ニ達シタルコトヲ認メ、小村外務大臣ハ明治三十四年十月八日附ヲ以テ英國政府ト意見ノ交換ニ取懸ルコト

ヲ委任シタリ、茲ニ於テ林公使ハ十月十六日「ラ」侯ト會見シ、同盟問題ニ關シテ意見ヲ交換スルノ允可ヲ得タルコトヲ告ゲ、未ダ詳細ノ訓令ニハ接シ居ラザルヲ以テ同公使個人ノ意見ナルコトヲ断リテ「ラ」侯ノ問ニ對シ左ノ如ク答ヘタリ。

日本側ノ希望—常ニ韓國ニ於ケル自己ノ利益ヲ維持シ他國ヲシテ之ヲ妨害セシメザルニ在リ清國ニ對スル日本ノ政策—日本ノ對清政策タル全然英國政府ノ聲明シタル政策ト同一タリ、即チ同帝國ノ領土保全及ビ門戸開放是ナリ

同盟ノ性質—二國若クハ二國以上ノ國ガ締盟國ノ一方ト兵戰ヲ開クトキハ他ノ一方ハ直チニ兵力ヲ以テ其同盟國ヲ援助スベシ

「ラ」侯ハ右ノ意見ニ同意ヲ表シ、英國政府ノ希望ハ此等條件ノ外更ニ日英兩國ノ關係ヲシテ終始極メテ親密ナラシメ東亞問題ニ關シ兩國ガ互ニ全分ノ信任ヲ以テ常ニ相共ニ提携事ニ當ラシトスルニ在リト述べタリ。右會談ノ終リニ當リ林公使ハ獨逸國ヲ本件ニ加入セシムルコトノ是非如何ニツギ「ラ」侯ノ意見ヲ尋ねタルニ同侯ハ當分ノ間本問題ヲ日英兩國間ニ留メ置キ同國へハ追テ談話進捗スルヲ俟テ申込ム方望マシキ旨ヲ答ヘタリ（右林公使ノ行動ハ外務大臣發電ヲ以テ是認セラレタリ）。

(4) 英國政府協約及ビ別款案文提示並ニ之ニ對スル帝國側修正  
明治三十四年十一月六日英國外務大臣「ラ」侯ハ内閣會議ヲ經タル上ニテ協約及ビ別款ノ草案ヲ林公使ニ手交セリ、其案文左ノ如シ（原文別紙第一號）。

一二

英國政府提出案

大不列顛及ビ日本兩國政府ハ偏ニ東亞ニ於ケル現狀及ビ全局ノ平和ヲ維持スルコトヲ希望シ且ツ

韓國ガ如何ナル外國ニモ併存セラレザルコト及ビ清國ノ獨立ト領土保全ヲ維持シ同國ニ於ケル商業及ビ工業ニ付キ各國均等ナル企業權ヲ享有スルコトニ關シ特別ナル利益關係ヲ有スルヲ以テ下名ハ正式ニ各其政府ノ委任ヲ受ケ茲ニ左ノ如ク約定セリ

第一條 大不列顛國若クハ日本國ノ一方カ上記ノ利益ヲ防護スル上ニ於テ別國ト戰端ヲ開クニ至リタル時ハ他ノ一方ノ締約國ハ嚴正中立ヲ守リ併セテ他國カ其同盟國ニ對シテ交戦ニ加ハルヲ妨クルコトニ努ムヘシ

第二條 上記ノ場合ニ於テ若シ或他ノ國カ同盟國ノ一方ニ對シテ交戦ニ加ハル時ハ他ノ一方ノ同盟國ハ來テ援助ヲ與ヘ協同戰闘ニ當ルヘシ講和モ亦相互合意ノ上ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第三條 兩締約國ノ一方ハ他ノ一方ト協議ヲ經シテ上記ノ利益ニ關シ他國ト別約ヲ爲ササルヘキコトヲ茲ニ約定ス

第四條 大不列顛國若クハ日本國ニ於テ上記ノ利益カ危殆ニ迫レリト認ムル時ハ兩國ハ相互ニ充分ニ且ツ隔意ナク通告スヘシ

別款

兩締約國ハ更ニ茲ニ次ノ約定ヲ爲ス

兩締約國ノ海軍ハ平時ニ於テ可成協同ノ動作ヲ爲スヘシ而シテ其一方ノ軍艦カ他ノ一方ノ港内

ニ於テ入渠スルコト及ビ海軍貯炭所ノ使用其他兩國海軍ノ安寧及ヒ效力ニ資スヘキ事項ニ付テハ相互ニ便宜ヲ與フヘシ

茲ニ於テ帝國政府ハ十一月二十八日外務大臣官邸ニテ臨時内閣會議ヲ開催シ英國政府ノ提出案ニ對スル修正案トシテ左記ヲ決定シ、翌二十九日桂總理大臣ヨリ上奏ニ及ビタリ（修正案英文ハ別紙第二號）。

日本國及び大不列顛國ノ政府ハ偏ニ極東ニ於ケル現狀及ビ全局ノ平和ヲ維持スルコトヲ希望シ且ツ別國ガ韓國ヲ併存シ又ハ其領土ハ一部ヲ占領スルヲ妨クルコト及ビ清帝國ノ獨立ト領土保全ヲ維持シ同國ニ於ケル商業及ビ工業ニ付キ各國均等ノ企業權ヲ享有スルコトニ關シ特別ナル利益關係ヲ有スルヲ以テ下名ハ正式ニ各其政府ノ委任ヲ受ケ茲ニ左ノ如ク約定セリ

第一條 日本國若クハ大不列顛國ノ一方カ上記ノ利益ヲ防護スル上ニ於テ別國ト戰端ヲ開クニ至リタル時ハ他ノ一方ノ締約國ハ嚴正中立ヲ守リ併セテ他國カ其同盟國ニ對シテ交戦ニ加ハルヲ妨クコトニ努ムヘシ

第二條 上記ノ場合ニ於テ若シ他ノ一國又ハ數國カ同盟國ノ一方ニ對シテ交戦ニ加ハル時ハ他ノ一方ノ同盟國ハ來テ援助ヲ與ヘ協同戰闘ニ當ルヘシ講和モ亦相互合意ノ上ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第三條 兩締約國ノ一方ハ他ノ一方ト協議ヲ經シテ他國ト上記ノ利益ヲ害スヘキ別約ヲ爲サルヘキコトヲ茲ニ約定ス

第四條 日本國若クハ大不列顛國ニ於テ上記ノ利益カ危殆ニ迫レリト認ムル時ハ兩國ハ相互ニ

充分ニ且ツ隔意ナク通告スヘシ。

第五條 本同盟ハ本協約締結ノ日ヨリ五ヶ年間效力ヲ有スルモノトシ、兩締約國ハ好ニ隨テ更ニ繼續シ得ヘキモノトス尤モ其有效期限ノ盡ル時ニ於テ同盟國ハ一方カ現ニ交戦中ナル時ハ本同盟ハ講和結了ニ至ルマテ當然繼續スルモノトス。

別款

兩締約國ハ更ニ茲ニ次ノ約定ヲ爲ス。

第一款 兩締約國ノ海軍ハ平時ニ於テ可成協同ノ動作ヲ爲スヘシ而シテ其一方ノ軍艦カ他ノ一方ノ港内ニ於テ入渠スルコト及ヒ石炭搭載其他兩國海軍ノ安寧及ヒ效力ニ資スヘキ事項ニ付

テハ相互ニ便宜ヲ與フヘシ。  
第二款 兩締約國ハ何レモ東洋ニ於テ最大海軍力ヲ有スル別國ノ海軍力ニ比シ實力上優勢ナル海軍ヲ常ニ東洋ニ維持スルコトニ努ムヘシ。  
第三款 大不列顛國ハ日本國カ現ニ韓國ニ於テ有スル優勢ナル利益ヲ擁護進スル爲メ適宜必要ハ措置ヲ採リ得ルコトヲ承諾ス。

小村外務大臣ハ林公使宛右修正案ヲ電送スルト共ニ十二月十一日附ヲ以テ左ノ如キ訓令ヲ發シダリ。  
貴官ハ本大臣電信ヲ以テ送達シタル修正案ヲ英國政府ニ提出セラルベシ右修正案ヲ提出スルニ際シ貴官ハ外相「ランスマウント」侯ニ向ツテ日本政府ハ同盟問題ニ就キ總テノ方面ヨリ最モ慎重且ツ完全ナル考査ヲ遂ゲタリ而シテ其提出スル所ノ修正ハ同盟兩國ノ實際ノ目的ヲ達スルニ便益ナ

第一 條約

第一 條約ノ前文及ビ第二條

「東洋」ヲ「極東」ト改メ「外國」ヲ「別國」ト改メ又「又ハ數國」ナル語ヲ插入シタルハ主トシテ彼ニ比シ此ヲ撰ビタルニ過ぎズシテ特別ノ説明ヲ要セズ。

帝國政府ハ韓國ノ占領モ亦其併合ト均シク特別利害關係ノ事項ト目すべきモノナリト考へタルヲ以テ其意味ニ於テ修正ヲ加ヘタリ。

因ニ曰フ修正案ノ前文ニ於テ「清國ノ獨立ト領土保全」トアルハ「清帝國ノ獨立ト領土保全」ノ誤ニシテ「同國ニ於ケル」トアルハ「同帝國ニ於ケル」ノ誤ナリ帝國政府ノ意ハ清帝國ノ領土全部ヲ包含スルニ在リ。

第二 第三條

帝國政府ハ「關シ」二代フルニ「害スヘキ」ナル語ヲ以テセントス此レ其修正ハ同盟當國ノ

意思及ビ利益ニ恰合スルモノト信ズルガ故ナリ。

第三 第五條

日本政府ハ有效期限ヲ定ムルコトヲ願ハシク考フルナリ但シ英國政府ニ於テ希望セラルニ

於テハ本條項ヲ別款ノ内ニ加フルモ差支ナシ。

第四 別款第一款

一千八百九十六年ノ日佛條約第十四條ノ條項アルノ故ヲ以テ帝國政府ハ貯炭所設置ノ權利ヲ免許スルコト困難ナリ而シテ本款ハ帝國政府ノ修正シタル通リニテモ實際ニ於テハ何等不都合ナカルベシト信ズ。

第五 別款第二款

帝國政府ノ視ル所ヲ以テスレバ同盟當國ハ本同盟ノ效力ヲ及ボス地方ニ於テ優勢ナル海軍力ヲ斷ヘズ保持スルコトヲ要ス此レ帝國政府ノ本條項ヲ甚ダ必要トスル所以ナリ

第六 別款第三款

日本國ト韓國トノ間ノ地理上、歴史上及ビ實業上ノ關係ニ鑑ミ帝國政府ハ或ル程度マデ同半島ニ於ケル行動ノ自由ヲ留保スルヲ深ク肝要ノ事ト考フ而シテ帝國政府ハ本款ノ規定ハ實際必要ノ程度ヲ超越スルモノト謂フヲ得ズト信ズルナリ

貴電ヲ以テ報告セラレタル本同盟ノ範圍ヲ擴張シテ印度等ニ於ケル英國ノ利益ヲ包含セシムルモ可ナルベシトノ「ランスタウン」侯ノ發意ニ對スル回答トシテ貴官ハ帝國政府ノ信ズル所ニ據レバ此ノ如キ擴張ハ断じテ不良ニシテ且ツ不得策タルベシト述ベラルベシ抑々日英兩國ハ清國ニ於テ共通且ツ均一ナル利益ヲ有ス而シテ此等利益タル獨リ同地域ニ於ケル他邦ノ利益ト背馳セザルノミナラズ反テ之ト協合スルモノタリ本同盟ノ目的ハ總テ列國ニ共通ナル此等利益ノ防護ニ在ルガ故ニ本同盟ハ之ヲ全ク非利己主義ナリト謂フテ可ナリ然ルニ若シ本同盟ノ範圍ヲ擴張シテ同盟兩國ノ各自領土上ノ權利ノ防護マデヲ包含スルモノトセバ此レ本同盟ノ目的トシテ防護スル所ノ共通且ツ均一ナル利益ノ範圍ヲ超越スルモノナリ

本同盟ヲ發表スベキヤ否ノ問題ニ關シテハ帝國政府ニ於テモ此ノ種ノ協約ヲ公然ト發表スルハ慣例ニ非ルヲ知ルト雖モ其然ル所以ノモノハ一般ニ多クノ同盟ハ特別ナル國ニ對向スルモノニシテ而モ其國名ヲモ明ニ指定スルノ事實アルガ故ナリト思ハル然ルニ本同盟ノ目的ハ之ニ反シテ清國ニ關シ列國ノ聲明シタル政策ト協合スルモノナリ加フルニ若シ之ヲ公然發表セザルニ於テハ其目的及び範圍ニ關シテハ誇大有害ナル訛傳流説ヲ生ジテ同盟當國ノ不利トナルベシト信ズ故ニ帝國政府ハ英國政府ニ於テ本協約締結ノ上ハ其條文ヲ公然發表スルニ同意セラレンコトヲ希望ス尤モ別款ニ就イテハ絕對的祕密ヲ確守スベキコト勿論トス

貴官ハ前述ノ説明及ビ意見ヲ貴官ノ最モ適當ト認メラル方法ヲ以テ提供セラルベシ

林公使ハ十二月十二日修正案ヲ外務大臣「ヲ」侯ニ提出シタリ、之ニ對シ、英國政府ハ別款ニ關シ難點ヲ示シ、或ハ第一款ノ條項ヲ外交文書ノ交換ニヨリ整フヲ可トスト言ヒ（祕密保持ノタメ）或ハ別款各項ヲ全然削除シ其第三款ノミヲ協定ノ前文ニ插入スベシト言ヘリ、茲ニ於テ十二月三十一日我方ヨリ左ノ公文書案ヲ提出セリ（英文別紙第三號）。

公 文 書 案

下名日本國皇帝陛下ノ特命全權公使ハ下名及大不列顛國皇帝陛下ノ外務大臣ガ各其政府ヲ代表シテ本日訂結シタル極東ニ於ケル現狀維持ヲ目的トスル協約ニ關シ又右協約ト關聯シ之ト同一ノ效力及期限ヲ有シ且ツ日本國及英國間ノ意思共通ニ係ル追加事項ヲ内密ニ文書ノ交換ニヨリ記錄ニ載スルコトヲ以テ願ハシキ義ト思考シ適當ナル權限ニ據リテ茲ニ右追加事項ノ要領ヲ確認ノタメ

、「ランスタウン」侯閣下ニ提示スルノ光榮ヲ有ス即チ。

第一項 日本国及大不列顛國ノ海軍ハ平時ニ於テ可成協同ノ動作ヲ爲スベシ而シテ其一方ノ軍艦ガ他ノ一方ノ港内ニ於テ入渠スルコト及石炭塔載其他兩國海軍ノ安寧及效力ニ資スベキ事項ニ付テハ相互ニ便宜ヲ與フベシ。

第二項 日本国及大不列顛國ハ孰レモ從來有益ニ遵守シタル主義即チ東洋ニ於テ何レノ第三國ノ海軍ヨリモ其實力上優勢ナル海軍ヲ維持スルノ主義ヲ繼續スルコトハ該方面ニ於ケル平和ヲ鞏固ニスルニ至ルベキヲ確信スルヲ以テ將來ニ於テモ各自ニ右海軍ノ優勢ヲ出來得ル限り維持スルコトニ決意セリ。

第三項 日本国及大不列顛國ハ韓國ノ獨立ヲ認メ且ツ兩國孰レ該地方ニ於テハ全ク何等侵略的意志ヲ有スルコトナキヲ聲明ス然レドモ該國ニ於ケル日本ノ利益ノ優越ナルニ鑑ミ大不列顛國ハ日本ガ右利益ヲ擁護増進スルタメ必要ト認ムル所ノ措置ヲ採ルノ權利アルコトヲ承認ス。右得貴意候。敬具。

(5) 英國政府修正セル協約及ビ外交文書案ヲ提示

明治三十五年一月十四日「ラ」侯ハ正式ニ左記協約及外交文書ノ案文ヲ林公使ニ手交セリ。

協 約 案

大不列顛國及日本國ノ政府ハ偏ニ極東ニ於ケル現狀及全局ノ平和ヲ維持スルコトヲ希望シ且ツ清

帝國及韓國ノ獨立ト領土保全トヲ維持スルコト及該二國ニ於ケル商業工業ニ付キ各國均等ノ企業權ヲ享有スルコトニ關シ特ニ利益關係ヲ有スルヲ以テ茲ニ左ノ如ク約定セリ。

第一條 大不列顛國及日本國ハ相互ニ清國及韓國ノ獨立ヲ承認シタルヲ以テ兩國何レモ該二國ニ於テハ全ク何等侵略的意志ヲ有スルコトナキヲ聲明ス尤モ日本國政府ハ韓國ニ於テ日本國カ有スル政治上併ニ商業上ノ特別ナル利益ニ關シ英國皇帝陛下ノ政府ノ注意ヲ喚起シ英國皇

帝陛下ノ政府モ亦均シク清帝國ニ於ケル大不列顛國ノ特別ナル利益ニ就キ注意ヲ喚起シタリ依テ兩國政府ハ若シ右等ノ利益ニシテ別國ノ侵略的行動ニヨリ侵迫セラレタル場合ニハ何レモ各自ノ利益ヲ擁護スル爲メ必要缺クヘカラナル措置ヲ採リ得ヘキコトヲ承認ス。

第二條 我提出ノ修正案第一條ト同シ但シ「上記ノ利益ヲ防護スル」ノ句ヲ「上記各自ノ利益ヲ防護スル」ニ改ム。

第三條及第四條 ハ各我修正案ノ第二條及第三條ト同シ

第五條 ハ我修正案第四條ト同シ但シ「兩國ハ相互ニ」ノ句ヲ「兩國政府ハ相互ニ」ニ改ム。

第六條 本協約ハ其調印ノ期日ヨリ直チニ實施シ該期日ヨリ五ヶ月間效力ヲ有スルモノトス若シ右期限ヨリ十二ヶ月前ニ締盟國ノ何ヨリモ本協約ヲ廢止スルノ意志ヲ通告セサル時ハ本

協約ハ締盟國ノ一方カ廢棄ノ意志ヲ表示シタル當日ヨリ一ヶ年ヲ終了スル迄ハ引續キ效力ヲ有スルモノトス然レトモ右終了期日ニ至リ同盟國ノ一方カ現ニ交戦中ナル時ハ同盟ハ講和結丁ニ至ル迄當然繼續スルモノトス。

右證據トシテ下名ハ正式ニ各其政府ノ委任ヲ受ケ茲ニ本書ニ署名スルモノナリ。

兩國間ニ取り換スベキ外交文書案

以書簡申進候陳者本日貴我兩人ガ各其政府ヲ代表シテ締結シタル協約ニ關シ本官ハ次ノ事ヲ閣下ニ開申スルノ光榮ヲ有シ候

大不列顛國政府（日本國政府）ハ大不列顛國（日本國）海軍ノ平時ニ於テ成ルベク日本國（大不列顛國）海軍ト協同ノ動作ヲナスベキコトヲ承認ス而シテ其一方ノ軍艦ガ他ノ一方ノ港内ニ於テ入渠スルコト及石炭塔載其他兩國海軍ノ安寧及效力ニ資スベキ事項ニ付テハ相互ニ便宜ヲ與フベキコトヲ約諾ス

現下日本國及大不列顛國ハ何レモ極東ニ於テ如何ナル第三國ヨリモ實力上優勢ナル海軍ヲ維持シツアリ大不列顛國（日本國）ハ出來得ベキ限り極東ノ海上ニ於テ如何ナル第三國ノ海軍ヨリモ優勢ナル海軍ヲ集合シ得ル様ニ維持スルニ努ムルコトヲ弛フスルノ意志毫モ之レアルナシ

右申進候 敬具

前記案文ヲ林公使ニ手交スルニ當リ「ラ」侯ハ先キノ約案ニ於テ清國ノ獨立及保全ト韓國ノ併存ヲ妨グルトノ間ニ存スル外見上ノ不均等ニ付キ議院ニ於テ起り得ベキ批難ヲ避ケンガ爲スカ協約前文及第一條ニ變改ヲ加ヘタル旨ヲ述ベタリ。

(6) 帝國側修正案ノ提示及ビ修正交渉

帝國政府ハ大體ニ於テ修正協約及外交文書案ヲ受諾スルニ決シタルモ、第一條ハ其儘ニテハ少ナクトモ推理ノ上ニテ日本が清國ニ於ケル自己ノ利益ヲ放棄スルモノナリトノ攻撃ヲ受クベク、此種ノ批難ノ起ルヲ遙タル爲メ左ノ修正ヲ加ヘンコトヲ欲シタリ。

第一條「日本政府ハ」以下全部ヲ削除シ之ニ代フルニ左ノ文句ヲ以テスルコト

韓國ニ於ケル日本國ノ政治上併ニ商業上及工業上ノ特別ナル利益及清國ニ於ケル日本國及大不列顛國ノ利益ニ鑑ミ兩國政府ハ若シ右等ノ利益ニシテ侵迫セラレタル場合ニハ何レモ各自ノ利益ヲ擁護スル爲メ必要缺クヘカラサル措置ヲ採リ得ベキコトヲ承認ス

右ノ如ク該條ヲ修正スルトキハ日本政府ノ異議ニ應ズベク又英國政府ニ取リテモ満足ナラント信セラル次ニ所望ノ形式上ノ變改ハ左ノ如シ。

"Having in view, however, the special interests, political as well as commercial and industrial, possessed by Japan in Korea, and the interests of Great Britain and Japan in China, the British and Japanese Governments recognize that if those interests should be threatened, it would be admissible for each Power to take such measures as may be indispensable in order to safeguard its interests."

次ニ形式上ノ變改ハ左ノ如シ。

第一、協約前文ニ於テ「韓王國」ニ代フルニ「韓帝國」ノ語ヲ以テス

第二、第六條ニ於テ「右期限ヨリ十二ヶ月前」ヲ「右五ヶ年ノ終了ヨリ十二ヶ月前」ニ改ム

第三、協約ノ末文ニ於テ「本書」ヲ「本協約」ト改ム

114

一月十八日林公使「ラ」侯ニ修正案ヲ手交シタル際同侯ハ「別國ノ侵略的行動ニ依テ」ナル句ハ韓國ニ於ケル日本ノ侵略的行動ノタメ戰爭ニ引き込マル懸念ヲ公衆ガ抱クトヲ鎮メンガ爲ナルコトヲ述べソノ存置方ヲ主張セリ。

右ニ關シ小村外務大臣ハ林公使宛ニ左ノ訓令ヲ發シタリ(一月二十日附)。

(貴電第〇號ニ關シ)第一條修正案ニ於テ「別國ノ侵略的行動ニヨリ」ノ句ヲ削除スルニ方リ帝國政府ハ日本又ハ英國ノ利益ガ清國又ハ韓國ニ於ケル内亂ニヨリテ侵迫セラレタル場合ニハ第三國ノ行動ニヨリ右等ノ利益ガ侵迫セラレタルトキト同様ニ保護的措置ヲ必要トスルコトアルベキコトニ着眼シタルナリ故ニ帝國政府ハ若シ英國政府ニ於テ他ノ諸點ニ於テ第一條ニ對スル日本政府提議ノ修正ニ同意スルニ於テハ該條中ニ右ノ句ヲ插入スルコトニ異議ヲ挾マザルベシ但シ「別國ノ行動ニヨリ」ノ句ノ後ニ「又ハ内亂ニヨリ」ノ語ヲ加ヘンコトヲ欲ス帝國政府ハ又我修正ニシテ其儘擋カルニ於テハ前顯ノ一句ヲ「ランスタウン」侯ノ申出ノ如ク第五條ニ加フルコトニモ異議ヲ有セズ。

一月二十二日林公使ハ右訓令ノ趣ヲ「ラ」侯ニ通牒シタルニ候ハ「内亂」ナル語ヲ插入スルコトハ難色ヲ示セリ、次ニ同侯ハ帝國側ノ希望ニ應ジテ起案シタル左記第一條中ノ修正ヲ提示セリ。

然レトモ大不列顛國及日本國ノ特別ナル利益即チ其利益タル大不列顛國ニ取リテハ主トシテ清國

ニ關シ又日本國ニ取リテハ其清國ニ於テ有スル利益ニ加フルニ韓國ニ在テ政治上並ニ商業上格別ナル程度ニ於テ有スル利益ニ鑑ミ日英兩政府若シ右等ノ利益ニシテ別國ノ侵略的行動ニヨリ侵迫セラレタル場合ニハ何レモ各自ノ利益ヲ擁護スルタメ必要缺クヘカラサル措置ヲ採リ得ベキコトヲ承認ス

"Having in view however the special interests of Great Britain and Japan of which those of Great Britain relate principally to China which Japan in addition to the interests which she possesses in China is interested in a peculiar degree both politically and commercially in Korea, the British and Japanese Governments recognize that if those interests should be threatened by the aggressive action of any other Power, it would be advisable for each Power to take such measures as may be indispensable in order to safe-guard its interests."

帝國政府ハ右「ラ」侯ノ修正案ニ同意シ「内亂」ナル語ノ插入ニ關スル主張モ放棄スルニ決シ、此ノ旨一月二十五日林公使ニ訓電シタル處之ヨリ先一月二十四日「ラ」侯ハ一月二十六日内閣會議ニ於テ採用セラレタル左ノ如キ第一條修正案ヲ林公使ニ手交シタリ、右ニ對シ帝國政府ハ「工業上」ナル語ノ插入ノミヲ希望シ他ハ之ヲ受諾ノ旨回答セリ。

兩締約國ハ相互ニ清國及ヒ韓國ノ獨立ヲ承認シタルヲ以テ兩國何レモ該二國ニ於テハ全ク何等侵

略的意思ヲ有スルコトナキヲ聲明スル然レトモ大不列顛國及ヒ日本國ノ特別ナル利益即チ其利益タ

ル大不列顛國ニ取リテハ主トシテ清國ニ關シ又日本國ニ取リテハ其清國ニ於テ有スル利益ニ加フ

115

ルニ韓國ニ在テ政治上並ニ商業上格別ナル程度ニ於テ有スル利益ニ鑑ミ兩締約國ハ右ノ利益ニン  
テ別國ノ侵略的行動ニヨリ若クハ清國又ハ韓國ニ於テ締約國孰レカ其臣民ノ生命及財産ヲ保護ス  
ルカ爲メ干涉ヲ必要トスヘキ内亂ノ發生ニヨリテ侵迫セラレタル場合ニハ何レモ之ヲ擁護スルタ  
メ必要缺クヘカラサル措置ヲ採リ得ヘキコトヲ承認ス

## 右 英 文

“The High Contracting Parties having mutually recognized the independence of China and of Corea declare themselves to be entirely uninfluenced by any aggressive tendencies in either Country. Having in view however their special interests, of which those of Great Britain relate principally to China, while Japan in addition to the interests which she possesses in China is interested in a peculiar degree both politically and commercially in Corea, the High Contracting Parties recognize that it will be admissible for either of them to take such measures as may be indispensable in order to safe-guard those interests if threatened either by the aggressive action of any other powers or by disturbances arising in China or Corea and necessitating the intervention of either of the High Contracting Parties for the protection of the lives and property of its subjects.”

1月11十八日「ラ」侯ハ右「工業上」ナル語ノ挿入ニ同意シタリ。

## (7) 協 約 調 印

茲ニ於テ日英兩國政府間ニ協約案文ニ付意見ノ一致ヲ見タルヲ以テ協約ハ一月11十日調印セラレタ  
リ、右協約全文左ノ如シ。

日本國政府及大不列顛國政府ハ偏ニ極東ニ於テ現狀及全局ノ平和ヲ維持スルコトヲ希望シ且ツ清  
帝國及韓帝國ノ獨立ト領土保全トヲ維持スルコト及該二國ニ於テ各國ノ商工業ヲシテ均等ノ機會  
ヲ得セシムルコトニ關シ特ニ利益關係ヲ有スルヲ以テ茲ニ左ノ如ク約定セリ

第一條 兩締約國ハ相互ニ清國及韓國ノ獨立ヲ承認シタルヲ以テ該二國孰レニ於テモ全然侵略  
的趨向ニ制セラルルコトナキヲ聲明ス然レモ兩締約國ノ特別ナル利益ニ鑑ミ即チ其利益タ  
ル大不列顛國ニ取リテハ主トシテ清國ニ關シ又日本國ニ取リテハ其清國ニ於テ有スル利益ニ  
加フルニ韓國ニ於テ政治上並ニ商業上格段ニ利益ヲ有スルヲ以テ兩締約國ハ若シ右  
等利益ニシテ別國ノ侵略的行動ニ因リ若クハ清國又ハ韓國ニ於テ兩締約國孰レカ其臣民ノ生  
命及財產ヲ保護スル爲メ干涉ヲ要スヘキ騒擾ノ發生ニ因リテ侵迫セラレタル場合ニハ兩締約  
國孰レモ該利益ヲ擁護スル爲メ必要缺クヘカラサル措置ヲ執り得ヘキコトヲ承認ス

第二條 若シ日本國又ハ大不列顛國ノ一方カ上記各自ノ利益ヲ防護スル上ニ於テ別國ト戰端ヲ  
開クニ至リタル時ハ他ノ一方ノ締約國ハ嚴正中立ヲ守リ併セテ其同盟國ニ對シテ他國カ交戦  
ニ加ハルヲ妨クルコトニ努ムヘシ

第三條 上記ノ場合ニ於テ若シ他ノ一國又ハ數國カ該同盟國ニ對シテ交戦ニ加ハル時ハ他ノ締

約國ハ來リテ援助ヲ與ヘ協同戦闘ニ當ルヘシ講和モ亦該同盟國ト相互合意ノ上ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第四條 兩締約國ハ孰レモ他ノ一方ト協議ヲ經シテ他國ト上記ノ利益ヲ害スヘキ別約ヲ爲サルヘキコトヲ約定ス

第五條 日本國若クハ大不列顛國ニ於テ上記ノ利益カ危殆ニ迫レリト認ムル時ハ兩國政府ハ相互ニ充分ニ且ツ隔意ナク通告スヘシ

第六條 本協約ハ調印ノ日ヨリ直チニ實施シ該期日ヨリ五ヶ年間效力ヲ有スルモノトス若シ右五ヶ年ノ終了ニ至ル十二ヶ月前ニ締約國ノ孰レヨリモ本條約ヲ廢止スルノ意思ヲ通告セサル時ハ本協約ハ締約國ノ一方カ廢棄ノ意思ヲ表示シタル當日ヨリ一ヶ年ノ終了ニ至ル迄ハ引續キ効力ヲ有スルモノトス然レトモ右終了期日ニ至リ同盟國ノ一方カ現ニ交戦中ナル時ハ本同盟ハ講和結了ニ至ル迄當然繼續スルモノトス

右證據トシテ下名ハ各其政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ之ニ記名スルモノナリ

附屬交換公文  
以書翰致啓上候陳者本日貴我兩名ガ各其政府ヲ代表シテ締結シタル協約ニ關シ本使（本大臣）ハ左ノ如ク閣下ニ開陳スルノ光榮ヲ有シ候

日本國政府（大不列顛國政府）ハ日本國（大不列顛國）海軍ノ平時ニ於テ成ルベク大不列顛國（日本國）海軍ト協同ノ動作ヲ爲スベキコトヲ承認ス而シテ其一方ノ軍艦ガ他ノ一方ノ港内ニ於テ入渠スルコト及石炭搭載其他兩國海軍ノ安寧及效力ニ資スベキ事項ニ付キテハ相互ニ便宜

リモ優勢ナル海軍ヲ集合シ得ル様ニ維持スルニ努ムルコトヲ弛フスルノ意思ヲ有スルコトナシ  
右得貴意候 敬具

（別紙第一號）

DRAFT AGREEMENT.

The undersigned duly authorized by their respective governments, actuated solely by a desire to maintain the *status quo* and general peace in the Far East; being moreover specially interested in preventing the absorption of Corea by any Foreign Power and in maintaining the independence and territorial integrity of China and in securing equal opportunities in that country for the commerce and industry of all nations hereby agree as follows:-

Article. I. If either Great Britain or Japan in the defence of the interests above described should become involved in war with another Power the other High Contracting party will maintain a strict neutrality and use its efforts to prevent other Powers from joining in hostilities against its ally.

Article. II. If in the above event any other Power should join in hostilities against that ally, the other High Contracting Party will come to its assistance and will conduct the war in common and make peace in mutual agreement with it.

Article. III. The two High Contracting parties agree that neither of them will, without consulting the other, enter into separate arrangements with another Power affecting the interests above described.

Article. IV. Whenever in the opinion of either Great Britain or Japan their above mentioned interests are in jeopardy they will communicate with one another fully and frankly.

#### SEPARATE ARTICLE.

It is further agreed between the High Contracting Parties that the naval forces of the two Powers shall, so far as is possible, act in concert in time of peace; and that mutual facilities will be given for the docking of the vessels of war of one Power in the ports of the other, and also for the use of coaling stations and other advantages conducing to the welfare and efficiency of their respective navies.

(司総裁11号)

The undersigned, duly authorized by their respective Governments, actuated solely by a desire to maintain the *status quo* and general peace in the Extreme East, being, moreover, specially interested in preventing the absorption of Corea or occupation of any part of its territory by any other Power, and in maintaining the independence and territorial integrity of the Empire of China, and in securing equal opportunity in that Empire for the commerce and industry of all nations, hereby agree as follows:

#### Article I

If either Japan or Great Britain, in the defence of the interests above described, should become involved in war with another Power, the other High Contracting Party will maintain a strict neutrality and use its efforts to prevent other Powers from joining in hostilities against its Ally.

#### Article II

If, in the above event, any other Power or Powers should join in hostilities against such Ally, the other High Contracting Party will come to its assistance and will conduct the war in common and make peace in mutual agreement with it.

#### Article III

The two High Contracting Parties agree that neither of them will, without consulting the other, enter into separate arrangements with another Power to the prejudice of the interests above described.

#### Article IV

Whenever, in the opinion of either Japan or Great Britain their above mentioned interests are in jeopardy, they will communicate with one another fully and frankly.

This Alliance shall remain in force for five years; from the date of the signing of the

present agreement may be renewed at the pleasure of the High Contracting Parties. But if, when the date fixed for its expiration arrives, either Ally is actually engaged in war, the Alliance shall ipso facto continue until peace is concluded.

SEPARATE ARTICLES

It is further agreed between the High Contracting Parties.

Art. I. The naval forces of the two Powers shall, so far as is possible, act in concert in time of peace, and that mutual facilities will be given for the docking and coaling of the vessels of war of one Power in the ports of the other and other advantages conducing to the welfare and efficiency of their respective navies.

Art. II. Each of the High Contracting Parties shall endeavour to maintain in the Far East as all firms naval forces superior in efficiency to the naval strength of any other power which has the largest naval forces in the Far East.

Art. III. Great Britain recognizes that Japan may take such suitable measures as she deems necessary to safeguard and promote the preponderating interests which she actually possesses in Korea.

(司紙機川號)

DRAFT NOTE.

The undersigned Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary of His Majesty the

Emperor of Japan, referring to the Agreement having for its object the maintenance of the status quo in the Extreme East, which he and His Britannic Majesty's Principal Secretary of State for Foreign Affairs have this day concluded on behalf of their respective Government and deeming it desirable to place on record by means of a confidential exchange of notes, the several additional points connected with and having the same force and duration as said Agreement, in respect of which a common understanding exists between Japan and Great Britain, has the honour, acting under due authority, to submit to the Right Honorable the Marquis of Lansdowne, for confirmation, a summary of those additional points, that is to say:

1st. The naval forces of Japan and Great Britain will, so far as is possible, act in concert, in time of peace, and mutual facilities will be given for the docking and coaling of vessels of war of one Country in the ports of the other, as well as other advantages conducing to the welfare and efficiency of the respective navies of the two Powers.

2nd. Japan and Great Britain being convinced that a continuation of the rule which each of them has hitherto pursued with advantage of maintaining in the Far East, a naval force superior in efficiency to the naval strength of any third Powers, will tend to the consolidation of peace in that quarter, are each resolved to maintain so far as is possible, the same naval superiority in future.

3rd. Japan and Great Britain recognize the independence of Corea and declare themselves to be entirely uninfluenced by any aggressive tendencies in that region, but in view of Japan's preponderating interests in that Country, Great Britain recognizes the Right of

Japan, to take such measures as she may find necessary to safeguard and promote those interests.

The undersigned avails &c. &c. &c.

参考

第一回日英協約ト軍事協約ノ締結

在本邦英國公使ハ外務大臣ニ對シ、右英帝國陸軍武官ガ英國陸軍當局ニ對シ日英協約、關聯シテ祕密軍事協約ニ到達シタキ希望ヲ表明シタル旨ヲ述べタリ、茲ニ於テ右英帝國陸軍武官ニ對シ個人トシテ右提議ヲ行ヒタルモノカ、帝國陸軍武官トシテ行ヒタルモノカヲ問合セタル所（明治三十五年四月三十日附）右會議ハ双方共全ク個人的ニ行ハレタルコト判明セリ。

其後右軍事協約締結ヲ正式交渉ニ移シタル結果、同年七月七日兩國陸海軍代表ハ戰時共同作戰ニ關シ討議シ、ソノ議決ハ彼我兩國政府ノ承認ヲ得タリ。（帝國ニテハ「允准ヲ經タリ」ノ語ヲ用フ）又翌七月八日ニハ陸軍代表者間ニ於テ戰時陸軍ノ協同行為ニ關シ評議ノ爲メ會議ヲ開キ、諸般ノ議決ヲナセリ。

在本邦英國公使ハ明治三十六年一月十六日附書翰ヲ以テ右會議報告書ヲ送付シ來レント共ニ同報告書第三項ニ基キ情報交換ニ關シ必要ナル措置ヲ講シノトヲ求メ來レリ、右書翰及附屬報告書左ノ如シ。

SECRET.

Tokyo, Jan., 16. 1903.

Monsieur le Ministre.

I have the honour to transmit to you herewith the secret report of a Conference held in London on the 7th of July last between representatives of the military and naval forces of Japan and Great Britain.

I have received instructions from the Marquess of Lansdowne, His Britannic Majesty's Principal Secretary of State for Foreign Affairs, to inform the Imperial Government that this report meets with the approval of His Majesty the King.

In carrying out His Lordship's instructions, as I now have the honour to do, I would call Your Excellency's attention to paragraph III of this report, by which it was agreed that all intelligence "should be freely exchanged" through the channels of the respective naval and military. "attaches in Tokyo and London" etc. I understand that the Naval Attaché of this Legation is thus engaged in the exchange of intelligence but that the military authorities have not yet received instructions to co-operate in a similar manner with Colonel Churchill my Military Attaché. I therefore take this opportunity to beg your Excellency to be good enough to move the Imperial War Department in a sense pursuant to this so valuable and important object.

I take this opportunity to renew to Your Excellency the assurance of my highest consideration.

JMB

調—0443

0163

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp>

三

(Signed.) Claud M. Mac Donald.

H.B.M. Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary.  
His Excellency  
Baron Konura.

H.I.J.M. Minister for Foreign Affairs.

*SECRET.*

Report of Conference held at Winchester House, War Office, on the 7th of July 1902, between British and Japanese Naval and Military Representatives to discuss concerted action in war.

PRESENT.

Lieut. General Sir W.G. Nicholson, K.C.B. } Representing Great Britain  
Rear Admiral R.N. Custance, C.M.G. }  
Rear Admiral G. Ijiiin } Representing Japan  
Maj. General Fukushima }

The following Officers also attended :—  
Lieut. Colonel E.A. Altham, A.Q.M.G.  
Commander G.A. Ballard, R.N.

Major E. Peach, D.A.Q.M.G.

Captain C. Tamari, Japanese Naval Attaché.

Major T. Utsunomiya, Japanese Military Attaché.

Lieut. Commander T. Takarabe, Imperial Japanese Navy.

On the proposal of Rear Admiral Custance the Conference accepts the following general principles :—

- (1) That it is impracticable to lay down except in general terms any plan of operations, as such plans must depend upon the circumstances of the moment. In any case the principal objects must be—
  - (a) To destroy the enemy's fleet.
  - (b) To destroy the enemy's field army.
- (2) That speaking generally, the Naval plan offering the most advantages would be to concentrate from the two Navies (Japanese and British) as strong a force as possible without delay, against the main body of the enemy's fleet; and to assign such cruisers as could be spared for the purpose, to the protection of communications where threatened by hostile ships.
- (3) No offensive military operations can be undertaken until the command of the sea is secured. Such operations would probably be necessary but their objective must depend upon circumstances. A common plan of military action should, however, be discussed and a mutual understanding arrived at.

The Conference further discussed the following points :

三

調—0443

- I. A mutual signalling system. This is already being prepared by the Japanese Naval authorities in conjunction with the British authorities on the China Station.
- II. A mutual cipher code, for use in telegrams and to be extended to wireless telegraphy.

This is also being dealt with by the same authorities.

III. Interchange of Intelligence.

It was agreed that all intelligence should be freely exchanged through the channels of the respective British and Japanese Naval and Military Attachés in London and Tokio, and that the Attachés of the two nations at all other stations should be instructed to exchange information in the same manner. Rear Admiral Ijūn further represented that, in the opinion of his Government, it is desirable that a Japanese Naval Officer should be stationed in peace at Hong Kong, and also that a Naval Officer of each Power should in case of necessity be attached to the fleet of the other in the far East.

Major General Fukushima suggested that an Officer of the Japanese Army should be stationed in India, and said that if it were desired to station an Officer of the Indian Army in Japan he would be welcomed.

The Conference recommend the consideration of the above proposals.

The Conference are further of opinion that in war, Officers of one Power should be always attached to the Headquarters of the other both in the Field and at Sea.

IV. Coaling arrangements in War.

It was agreed that the British Government should endeavour to supply sufficient Westport coal for the use of the Japanese fleet during war. The supply needed is estimated at about 20,000 tons per month. The Japanese Government guarantee to have sufficient stock of Welsh coal for the use of their own warships, at the commencement of the war, to last four months, and that sufficient Japanese coal will be available for the use of British fleet auxiliaries during was.

V. Transport facilities.

It was agreed that the British Naval Commander-in-Chief on the China Station should be instructed to make detailed arrangements with the Japanese authorities for such additional transport as would be required by them. It was agreed by the Conference that either nation might avail themselves of the services of the hired vessels of the other in which case the original hirer shall pay for them.

VI. Docking and Repairing facilities.

In time of peace the expenses of docking and repairing ships and armaments should be charged in accordance with the Regulations of the dockyard or arsenal at which these works are carried out. This arrangement is not to be necessarily adhered to in time of war.

VII. Facilities for Telegraphic Communications.

The Conference recommend that in a war in which the two Powers are actively engaged in mutual alliance, Japanese official telegrams should be transmitted over all British lines under the same conditions and in the same manner as British official telegrams.

四〇

VIII. Submarine Cables.

Owing to the geographical situation of Japan and her limited resources her authorities are not in a position to obtain rapidly additional cable lines. Their present reserve of submarine cable is only sufficient to connect Tsushima to a port in South Korea, and they desire therefore that the British authorities should arrange that a further reserve should be available sufficient to lay lines between other necessary points. The Conference recommend this proposal for consideration. Rear Admiral Custance states that this point is being taken up by the Admiralty.

It was decided that Military Plans of operations should be discussed in detail at a subsequent meeting between Lieut. General Sir W. Nicholson and Major-General Fukushima.

(Sd.) W. G. Nicholson, Lt. Genl.

(Sd.) Rear Admiral G. Ijui, I. J. N.

(Sd.) R. N. Custance, Rear Admiral.

(Sd.) Y. Fukushima, Major General I. J. A.

於小村外務大臣、陸軍側と協議ノ上、  
日本回線ナヤ。

Tokyo, January 28, 1903.

Monsieur le Ministre,

I have the honor to acknowledge the receipt of Your Excellency's dispatch, Secret No. 6,

under date of the 16th inst. Enclosing a copy of the Report of the conference held in London July last between the Naval and Military Representatives of Great Britain and Japan, and Communicating to me, under instructions of the Marquis of Lansdowne, the gracious approval thereof of His Majesty the King.

Your Excellency has, further more, Expressed the desire that necessary steps should be

taken by the military authorities in Tokyo to give effect to the provision for the exchange of intelligence contained in point III of the said report.

If affords me great pleasure, inform Your Excellency that the necessary instructions have been issued to the Army General Staff to Enter into exchange of intelligence with the Military Attaché to British the Legation in Tokyo.

Accept, Monsieur le Ministre, the renewed assurance of my highest consideration.

(Signed) -Bn. Konura

His Excellency  
Sir Claude M. MacDonald  
etc., etc., etc.

(二) 第二回日英協約（明治三十八年）

四二

(1) 第二回日英協約ノ範囲擴張問題ノ發端ヨリ日英兩國政府間ニ於ケル交渉ノ開始マデ

明治三十八年三月二十四日在英林全權公使ハ特ニ英國外務大臣「ランスダウン」侯ノ招ニ依リテ同侯ヲ往訪シ非公式會談ヲ爲シタル際、「ラ」侯ハ日英協約第三周年記念式ニ於ケル小村外務大臣ノ演説ニ關シ本邦駐劄英國公使ヨリノ報告ヲ讀上ゲ右ノ演説中同盟協約ノ範囲ヲ擴張シテ一層廣大ナル基礎ニ置カソコトヲ希望スル旨ノ語アリシニ言及シ、「如何ナル方法ニ於テ協約ヲ繼續スベキヤノ問題ヲ考慮スルハ今ヤ最肝要トナルニ至レリ而シテ英國政府ニ取リテハ同盟ニ關スル將來ノ政策ガ適當ナル時機ニ於テ決定セラルルヲ期センガ爲メ本問題ヲ熟考スルノ必要ヲ認ム固ヨリ今ニ於テ當國將來ノ方針ヲ誓約スルゴトハ極メテ困難ナリト雖モ余ノ見ル所ヨ以テスレバ當國輿論ノ傾向ハ同盟ヲ繼續セントスルニ在ルガ如ク而シテ協約ヲ繼續スルニ付テハ三ヶノ方法アリ

第一 現條約ヲ一ヶ年ノ豫告ヲ以テ廢棄シ得ルモノトナスコト

第二 期限ヲ定ムルコト

第三 條約ノ範囲ヲ擴張シテ現狀ヨリモ一層廣大ナル基礎ニ置クコト

今思フニ右ノ中有利ナル方法ハ第二若クハ第三ニシテ第一ノ方法ニ至リテハ深ク考慮ヲ加フルニ足ラズ今ヤ同盟條約ヲ如何ニスベキヤノ問題ヲ熟考スベキ時正ニ至レリ余ハ本件ニ關シ公然トナク日本政府ノ意見ヲ聞キ以テ正式ニエラズシテ意見ノ交換ヲ開始セントス從テ貴公使ヨリ前述ノ旨ヲ貴

國外務大臣ニ稟申セラレンコトヲ望ム」ト述ベタル旨林公使ヨリ三月二十四日外務大臣宛報告シ來レリ。

右ニ對シ小村外務大臣ハ三月二十七日前記演説ニ於テ「同盟ガ引續キ其強固ヲ加ヘンコト」ノ希望ヲ表明スルニ止メ、範囲ヲ擴張シ又ハ之ヲ一層廣大ナル基礎ニ置カントスルノ希望ヲ表明シタルコトナカリシモ「ラ」侯ニ對シ左ノ通り申出ヅベキ旨林公使ニ電訓セリ。

日本政府ハ日英同盟ガ兩國ノ豫期セシ所ヲ充タン相互ノ爲有益ナルコトヲ證シタリト信ズ依テ我政府ハ同條約ノ繼續問題ヲ慎重ニ考量スルノ覺悟ニシテ又事情變遷ノ結果如何ナル變更ヲ同條約ニ施スノ必要アルニ至レルカノ問題ヲ講究センガ爲メ若シ英國政府ニシテ同様ノ意向ヲ有セラルニ於テハ日本政府ハ英國政府ト意見交換ヲ開始セントスルノ意向ヲ有ス

四月八日ノ閣議ニ於テハ第一回日英協約ノ根本的主義タル（一）ノ性質ガ防守同盟ナルコト（二）其效力ノ及ブ範圍ガ清韓兩國ニ限定セラレ居ルコト、ニ關シテハ變更ノ必要ナキノミナラズ之レヲ變更セザルヲ可トスベク唯期限ヲ一定スルコト及訂約以來生ジタル局面ノ變化ニ應ジ（韓國ノ地位ノ變化）適當ノ變更ヲ加フルコトニ付キ考究ヲ要ストナシ、右ノ意見ノ基礎ニ於テ英國政府ノ提議アリタルヲ機トシ同國政府ト協約繼續ニ關シ意見ノ交換ヲ開始スベキ旨ヲ決定セリ（四月十日御裁決）。右ノ決定ニ基キ外務大臣ハ四月十六日林公使ニ宛テ同盟繼續ニ關スル交渉開始ニ付キソノ心得ト共ニ大要左ノ意味ヲ以テ議定書（我方ノミノ心得トシテ作成）ノ形式ニ由リ之ヲ取結ブヲ最モ良策ト思フ旨訓合セリ。

四三

四四

日本國政府及大不列顛國政府ハ千九百二年一月三十日倫敦ニ於テ兩國各自ノ代表者間ニ訂結セラレタル協約ガ從來一般ノ利益ニ資シタルコトヲ確認シ若シ之ヲ繼續センニハ將來ニ於オ亦等シク一般ニ有益ナルヲ信シ茲ニ日本國ガ其韓國ニ於ケル政治上ノ特殊利益ヲ擁護センガ爲メ該國ニ於テ執ルヲ必要トスル措置ヲ領認シ左ノ如ク約定セリ

第一條 兩締約國ハ上記千九百二年一月三十日ノ協約ヲ本議定書調印ノ日ヨリ七箇年ノ期限間繼續延長スルコトヲ茲ニ約定ス

第二條 現在ノ日英協約第六條ト同シ但シ必要ノ字句變更ヲ加フルコト

右英文

“The Governments of Japan and Great Britain, convinced that the agreement concluded at London between their respective representatives on the 30th January, 1902, has contributed in the past to the general interest, believing that said agreement if renewed would in like manner prove generally beneficial in the future, and taking note of the measures which Japan finds it necessary to take in Korea to safeguard her special political interest there, have agreed as follows:

Article 1. The High Contracting Parties hereby agree to renew and prolong the above mentioned agreement of the 30th day of January, 1902, for the period of seven years from the date here of.

Article 2. The same as Article VI of the present Agreement with the necessary changes.”

五月十七日林公使ハ「ラ」候ト話ヲ開始シタルモ、是ヨリ先キ同公使ハ同盟ノ範囲ヲ擴張スルコト望マシカラザル旨ノ日本政府ノ意見ヲ説明シ置キタルニ拘ハラズ「ラ」候ハ左ノ如ク語レリ。本件ニ付テハ内閣各大臣ト協議ヲ經タルニ全體一致ヲ以テ同盟ノ繼續ヲ可トセリ尤モ英國政府ハ本問題ニ對スル輿論ノ傾向ニ鑑ミ日英同盟ヲシテ今日ニ於ケルヨリハ一層有力ノモノタラシムコトヲ希望ス

例ヘベ現行條約ニテハ締盟國ノ一方ガ他方ノ援助ヲ求ムルハ單ニ他方ガ聯合セルニヶ國ヨリ攻撃ヲ受ケタル場合ニ限ル然ルニ英國政府ノ希望スル所ハ締盟國ノ一方ガ何等一國ヨリ謂ハレナク攻撃セラルル場合ニハ他方ハ之ヲ援助スベキ旨協約ノ條文ヲ以テ規定セントスルニ在リ、英國ハ其海軍ノ全力並ニ其他ノ方法ヲ以テ日本ヲ援助スベク其代リニ日本ハ其陸軍ヲ以テ英國ヲ援助スベシ尤モ英國政府ハ英國ガア弗利加又ハ歐羅巴ニ於テ戰爭ニ從事スルニ方リ日本ノ援助ヲ請求セムトスルノ意思アルニ非ズ要スルニ露國ハ現ニ公言セル如ク現下戰爭終了ノ上ハ其海軍擴張ノ爲メ全力ヲ盡スベク其場合ニ於テ日本ガ右露國海軍力ノ膨張ニ對シ權衡ヲ保ツニハ莫大ノ盡力ヲ要スベシ然ルニ若シ日本ガ他國ヨリ攻撃セラルル場合ニハ全英國艦隊來リテ之ヲ助クベキコトヲ同盟條約ニ規定セバ露國ハ必ず其海軍擴張ノ意思ヲ拋棄スベシ事茲ニ至ラベ露國ハ恐ク其力ヲ印度ニ注グベシ然ルニ此場合ニ於テ日本陸軍ノ英國ヲ援助スベキヲ知ラバ露國ハ亦何等爲スアルヲ得ザルベシ”

右ニ略陳シタル考案ハ必ずシモ英國政府ガ其儘正式ニ提議セムトスル所ニハアラズト雖モ英國與論ト一致スルモノナリ且又現行同盟協約ガ未ダ其期限ニ達セザルニ當リ之ニ變更ヲ施サムガ爲メ

四五

ニハ 輿論ノ求ムル所ヲ容ルルコト得策ナリトス

「ラシスダウン」侯ハ日本政府ニ於テ前述ノ基礎ニ依リ談判ヲ行フノ意アルヤア知ラムト希望シ果シテ然ルニ於テハ更ニ進デ細目ヲ商議セムトスル旨述ベタリ。

(2) 帝國政府案ノ提示及ビ之ヲ基礎トセル英國政府案ノ提示

茲ニ於テ帝國政府ハ五月二十四日開議ヲ開催、協約ノ性質ヲ攻守同盟ニ變ズル根本方針ト新協約ノ具體的大綱トヲ決定シ、同日御裁決ヲ得タルヲ以テ翌二十五日林公使ニ對シ左ノ如キ帝國政府ノ意見ヲ英國政府ニ提出スベキコトヲ命ジタリ。

貴電ニ關シ本大臣電信中ニ於テハ單ニ同盟協約ノ適用セラルベキ地域ノ擴張問題ノミヲ考量セル

モノニシテ此見地ヨリ帝國政府ハ協約ノ擴張ヲ以テ獨リ英國ニ取りテノミ利益アルモノト信ジタルナリ然ルニ今回「ラシスダウン」侯ノ提議ハ協約ノ適用セラルベキ地域ト共ニ其性質ヲモ擴張

セムトスルニ在リ斯クノ如キ擴張ハ同盟國双方ニ取リテ等シク利益アルヲ見ル從テ帝國政府ハ主義ニ於テ之ニ同意シ新協約ニハ左ノ旨ノ規定ヲ設クベキモノト思惟ス

第一 同盟ノ目的ハ東洋ニ於ケル全局ノ平和ヲ確保シ且ツ清國ニ於ケル列國ノ共通利益（即チ清國ノ領土保全及門戸開放ノ主義）ヲ維持シ並ニ東亞及印度ニ於ケル兩締盟國各自ノ領土權及特殊利益ヲ擁護スルニ在リ

第二 兩締盟國ノ一方カ正當ノ理由ナクシテ一國若クハ數國ヨリ攻撃ヲ受ケタルトキ又ハ一國若クハ數國ノ侵略的行動ニ依リ侵迫セラレタル前記ノ権利若クハ利益ヲ防護セムカ爲メ戰端ヲ開

第三 前記ノ規定ニ依リ兩締盟國ノ一方カ他ノ一方ニ援助ヲ與フヘキ地域ハ東亞及印度ニ限ル且此義務ハ該地域内ニ於テ戰闘ノ起ラサル限り發生セサルモノトス

第四 日本カ韓國ニ於ケル政治上、軍事上及經濟上ノ特殊利益ヲ擁護セムカ爲メ正當且必要ト認ムル措置ヲ執ルノ権利ハ英國ニ於テ十分ニ之ヲ承認ス

第五 本協約ハ調印ノ日ヨリ十ヶ年間効力ヲ有ス

第六 現時ノ日露戰爭ニ對シテハ英國ハ嚴正中立ヲ維持シ若シ他ノ一國若クハ數國カ日本ニ對シ交戦ニ加ハルトキハ英國ハ來リテ日本ニ援助ヲ與ヘ媾和モ亦日本ノ相互合意ノ上ニ於テ之ヲ爲スヘシ

帝國政府ハ又左ノ趣旨ヨリ成ル秘密約款ヲ緊要ト認ム

第一 兩締盟國ハ孰モ極東ニ於テ最大海軍力ヲ有スル別國ノ海軍力ニ比シ實力上優勢ナル海軍ヘシ

第三 日本カ韓國ニ對スル別國ノ侵略的行動ヲ豫防シ並ニ同國ノ國際關係ヨリ紛争ノ發生スルコトヲ杜絶セムカ爲メ同國ニ對シ保護權ヲ確立スルトキハ英國ハ日本ノ處置ヲ贊助スヘキコトヲスヘシ

第二 兵力的援助ノ性質及程度並ニ該援助ノ實行方法ハ兩締盟國陸海軍當局者ニ於テ之ヲ協定ス

第三 日本カ韓國ニ對スル別國ノ侵略的行動ヲ豫防シ並ニ同國ノ國際關係ヨリ紛争ノ發生スルコトヲ杜絶セムカ爲メ同國ニ對シ保護權ヲ確立スルトキハ英國ハ日本ノ處置ヲ贊助スヘキコトヲスヘシ

林公使ハ五月二十六日右ノ條項ヲ「ラ」候ニ報告セリ。

英國政府ハ右帝國政府案ヲ基礎トシテ同盟協約案ヲ作成シ（英國政府ハ議會ノ關係上祕密約款ヲ好マズ、全部之ヲ公文中ニ挿入セリ）六月十日「ラ」候ヨリ林公使ニ手交セラレタリ、右案文左ノ如シ（英文別紙第一號）。

前文

大不列顛國政府及日本國政府ハ一千九百二年一月三十日兩國政府間ニ締結セル協約ニ代フルニ新約款ヲ以テセムコトヲ希望シ。

（ロ）（イ）東洋ニ於ケル全局ノ平和ヲ確保スルコト

清帝國ノ獨立及領土保全并ニ清國ニ於ケル列國ノ商工業ニ對スル機會均等ノ主義ヲ保障シ以テ清國ニ於ケル列國ノ共通利益ヲ維持スルコト

（ハ）東部及東南部亞細亞ニ於ケル兩締盟國ノ領土保全ヲ維持シ并ニ該領土ノ附近諸國ニ於ケル兩締盟國各自ノ特殊權利及利益ヲ防護スルコトヲ目的トスル左ノ各條ヲ約定セリ

第一條 大不列顛國若クハ日本國ニ於テ本協約ノ前文ニ記述セル利益ノ何レカカ危殆ニ迫ルモノアルヲ認ムルトキハ兩國政府ハ相互ニ充分且隨意ナク通告シ該利益ヲ擁護セムカ爲メニ採ルヘキ措置ヲ協同ニ考量スヘシ

第二條 兩締盟國ノ一方カ自ラ挑發スルコトナクシテ一國又ハ數國ヨリ攻撃ヲ受ケタルニ依リ若

クハ一國又ハ數國ノ侵略的行動ニ依リ戦端ヲ開キ其結果前文（ハ）項ニ掲ケタル該締盟國ノ權利及特殊利益カ危殆ニ迫ルトキハ他ノ一方ノ締盟國ハ直ニ來リ援助ヲ與ヘ協同戰闘ニ當リ媾和モ亦双方合意・上ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第三條 大不列顛國ハ日本國カ韓國ニ於ケル政治上軍事上及經濟上ノ特殊利益ヲ擁護セムカ爲メ正當且必要ト認ムル措置ヲ採ルノ權利ヲ充分ニ承認ス

但シ該措置ハ常ニ列國ノ商工業ニ對スル機會均等ノ主義ト抵觸セサルヲ要ス

第四條 日本國ハ等シク他ノ一方ニ於テ大不列顛國カ印度國境ニ接近スル地方ニ於テ有スル特殊利益及該利益ヲ擁護セムカ爲メ正當且必要ト認ムル措置ヲ採ルノ權利ヲ承認ス

第五條 兩締盟國ハ孰レモ他ノ一方ト協議ヲ經シテ他國ト上記ノ利益ヲ害スヘキ別約ヲ爲サズルヘキコトヲ約定ス

第六條 本協約ハ第七條ノ規定ニ抵觸セサル限り調印ノ日ヨリ十ヶ年間效力ヲ有ス

右十ヶ年ノ終ニ亘ル十二ヶ月前ニ締盟國ノ孰レヨリモ本協約ヲ廢棄スルノ意思ヲ通告セサルトキハ本協約ハ締盟國ノ一方カ廢棄ノ意思ヲ表示シタル當月ヨリ一ヶ年ノ終ニ至ル迄引續キ效力ヲ有ス然レモ他ノ一方ニ於テ本同盟ハ當リ媾和モ亦双方

第七條 現時ノ日露戰爭ニ對シテハ大不列顛國ハ嚴正中立ヲ維持シ他ノ一國又ハ數國カ日本國ニ對シ交戰ニ加ハルトキハ大不列顛國ハ來リテ日本國ニ援助ヲ與ヘ協同戰闘ニ當リ媾和モ亦双方

合意ノ上ニ於テ之ヲ爲スヘシ

左ノ約款ヲ包含スル公文交換ノコト

(イ) 現時ノ戦争終局ノ後兩締盟國ハ各歐洲中何れノ國タルヲ問ハス其極東ノ海面ニ於テ有スル

海軍ニ比シ實力上優勢ナル海軍ヲ常ニ該海面ニ集中スルヲ得ヘキ状態ニ維持スルコトヲ努ム

ヘシ

(ロ) 日本国ハ戰時ニ方リテハ隨時印度ニ於ケル英國軍隊ノ兵力ニ等シキ兵力ヲ準備維持スヘシ  
但シ

ヲ限度トス

(ハ) 上記ノ義務ニ屬スルモノノ外兩締盟國ノ一方カ本日調印ノ協約中ニ規定セル場合ニ際シ他ノ一方ニ兵力的援助ヲ與フヘキ條件及該援助ノ實行方法ハ兩締盟國陸海軍當局者ニ於テ協定

スヘク又該當局者ハ相互利益ノ問題ニ關シ凡テ充分ニ且隔意ナク隨時互ニ協議スヘシ

「ラ」候ハ右條約案ニ關シ左ノ如キ意見ヲ述べタリ。

第二條ニ關シ英國ガ日本ヲ援助スル場合ニハ戰闘區域ハ實際ニ於テ全世界ニ亘ル可シ蓋シ右援助ハ英國海軍ヲ以テシ同海軍ハ英領地ノ存在スル各地方ニ於テ敵ニ會スルコトアル可ケレバナリ之ニ反シ日本ガ英國ニ與フベキ援助ハ其陸軍ヲ以テスルニヨリ其戰域ハ實際ニ於テ或範圍内ニ限ラル可シ

第四條ニ關シ印度國境ノ附近地方ニハ軍略上ノ利益アルノミニシテ毫モ經濟上ノ利益アルナシ是即チ同條ノ辭句ガ第三條ト稍々異ル所以ナリ

交換スペキ公文(イ)ニ於ケル歐洲ナル文字ハ故ラニ之ヲ用キタリ蓋シ米國ハ「ブイリッピン」ニ於テ强大ナル海軍力ヲ維持スト雖モ日英兩國ト紛爭ヲ生ズルコトアルベントモ思ハレズ實際ニ於テ米國ハ日英ニ對スル暗黙ノ同盟國ニシテ我兩國ガ警戒ヲ要スベキ諸國ノ内ニ數ヘザルコトヲ得ルナリ

(3) 帝國政府修正案及ビ英國政府再修正案ノ提示

右英國政府提出ノ案文ニ對シ帝國政府ハ六月二十三日林公使ラシテ次ノ如キ修正案ヲ英國政府ニ提出セシメタリ(英文別紙第二號)。

日本國政府及大不列顛國政府ハ一千九百二年一月三十日兩國政府間ニ締結セル協約ニ代フルニ新約款ヲ以テセムコトヲ希望シ

(ロ)(イ) 東亞及印度ノ地域ニ於ケル全局ノ平和ヲ確保スルコト  
清帝國ノ獨立及領土保全並ニ清國ニ於ケル列國ノ商工業ニ對スル機會均等主義ヲ確實ニシ以テ清國ニ於ケル列國ノ共通利益ヲ維持スルコト

(ハ) 東亞及印度ノ地域ニ於ケル兩締盟國ノ領土權ヲ保持シ並ニ該地域ニ於ケル兩締盟國ノ特殊利益ヲ防護スルコトヲ目的トスル左ノ各條ヲ約定セリ  
第一條 日本国又ハ大不列顛國ニ於テ本協約前文ニ記述セル權利及利益ノ中何レカ危殆ニ迫ルモノアルヲ認ムルトキハ兩國政府ハ相互ニ充分ニ且隔意ナク通告シ侵迫セラレタル該權利又

ハ利益ヲ擁護セムカ爲メニ採ルヘキ措置ヲ協同ニ考量スベシ

第二條 兩締盟國ノ一方カ自ラ挑發スルコトナクシテ一國若クハ數國ヨリ攻撃ヲ受ケタルニ依リ又ハ一國若クハ數國ノ侵略的行動ニ依リ本協約前文ニ規定セル地域ニ於ケル該締盟國ノ權利又ハ利益ヲ防護セムカ爲メ戰端ヲ開クニ至リタルトキハ他ノ一方ノ締盟國ハ直ニ來リテ其同盟國ニ援助ヲ與ヘ協同戰闘ニ當リ媾和モ亦双方合意ノ上ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第三條 日本國ハ韓國ニ於テ政治上軍事上及經濟上ノ特殊卓絶ナル利益ヲ有スルヲ以テ大不列顛國ハ日本國カ該利益ヲ擁護増進セムカ爲メ正當且必要ト認ムル指導監督及保護ノ措置ヲ韓國ニ於テ採ルノ權利ヲ承認ス但シ該措置ハ常ニ列國ノ商工業ニ對スル機會均等主義ト抵觸セナルコトヲ要ス

第四條 兩締盟國ハ孰レモ他ノ一方ト協議ヲ經シテ他國ト本協約前文ニ記述セル利益ヲ害スヘキ別約ヲ爲ササルヘキコトヲ約定ス

第五條 現時ノ日露戰爭ニ對シテハ大不列顛國ハ引續キ嚴正中立ヲ維持シ若シ他ノ一國若クハ數國カ日本國ニ對シ交戰ニ加ハルトキハ大不列顛國ハ來ソテ日本國ニ援助ヲ與ヘ協同戰闘ニ當リ媾和モ双方合意ノ上ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第六條 本協約ハ前條ノ規定ト抵觸セサル限り調印ノ日ヨリ直ニ實施シ十ヶ年間效力ヲ有ス右十ヶ年ノ終了ニ至ル十二ヶ月前ニ兩締盟國ノ孰レヨリモ本協約ヲ廢棄スルノ意思ヲ通告セナルトキハ本協約ハ兩締盟國ノ一方カ廢棄ノ意思ヲ表示シタル當日ヨリ一ヶ年ノ終了ニ至ルマテ引續キ效力ヲ有ス

然レトモ若シ右終了期日ニ至リ同盟國ノ一方カ現ニ交戰中ナルトキハ本同盟ハ媾和ノ成立ニ至ルマテ當然繼續スヘシ

公文交換ヲ以テ規定スベキ事項

(イ) 兩締盟國ハ各々歐洲ノ何レノ一國ガ極東ノ海面ニ於テ有スル海軍ニ比スルモ實力上優勢ナル海軍ヲ常ニ該海面ニ集中スルコトヲ得ベキ様準備スルコトニ努ムベシ

(ロ) 兩締盟國ノ一方が本日調印ノ協約中ニ規定セル場合ニ際シ他ノ一方ニ兵力的援助ヲ與フベキ條件及該援助ノ實行方法ハ兩締盟國陸海軍當局者ニ於テ協定スベク又該當局者ハ相互利害ノ問題ニ關シ相互ニ充分且協意ナク隨時協議スベシ

右帝國政府ノ修正案ニ關シ林公使ノ参考迄ニ開示シタル帝國政府ノ修正ニ關スル意見次ノ如シ。

協約前文

帝國政府修正ノ目的ハ單ニ同盟協約ノ適用セラルベキ地域ヲ一層明瞭且正確ニ規定セントスルニ在リ印度ガ英國ニ取リテ最大ノ利益ヲ有スル地點タルコトハ韓國ノ日本ニ於ケルガ如シ而シテ日本ノ協約案中ニ用ヒラレタル字句ハ明ニ印度ノ全部及亞細亞洲中印度以東ノ全地域ヲ包含スルノ趣意ニ出デタルモノナリ帝國政府ハ其以テ同盟ノ目的ト解スル所ハ全然英國政府ノ所見ト符合スルコトヲ確信ス

今回締結セムトスル協約ノ主眼タルヤ帝國政府ノ見ル所ヲ以テスレバ第三國ノ攻撃又ハ侵略ニ對シ兩締盟國ノ前述地域ニ於ケル權利及利益ヲ防護セムトスルニ在リ右ノ説明ニ徵シ又修正案第二條ノ規定ニ鑑ミ帝國政府ハ其修正ニ係ル協約前文ガ全然英國政府ノ同意ヲ得ルニ至ルベキヲ確信ス

### 第一條

別ニ註釋ヲ加フルノ要ナシ

### 第二條

帝國政府ハ英國政府ガ本條ニ關シ日英兩案比較ノ上日本案ニ同意スルニ躊躇セザルベキヲ推測ス日本案ハ同盟ノ性質ヲ一層明確ニ規定スルヲ見ルベシ

### 第三條

帝國政府ハ「ランスタウン」候所見ノ如ク韓國ニ關スル一切ノ約款ヲ移シテ公然タル協約中ニ之ヲ規定スルコトニ同意ス然レドモ現行協約中ニ韓國ニ關スル規定アルニ顧ミ且英國ガ韓國ト條約上ノ關係アルヲ考フルトキハ帝國政府ガ本條ノ英國案ニ於ケルヨリモ一層確實ニセムコトヲ希望スルハ自然ノ勢ニシテ帝國政府ハ英國政府ニ於テ直ニ此修正ニ同意スペキヲ疑ハズ此變更タルヤ何等英國政府ノ義務ヲ加重スルモノニ非ズ

### 英國案第四條

帝國政府ハ左ノ理由ニ依リ本條ノ削除ヲ提議ス即チ帝國政府ハ印度ニ境スル諸國ト何等ノ關係ヲ有セズ從テ英國ガ此等ノ地域ニ於テ採ル處置ハ其何タルヲ問ハズ帝國政府ニ於テ之ヲ承認スベキコト云フヲ俟ダザルナリ本條ハ假令此規定ヲ設クルモ兩締盟國ノ義務ニ於テ毫モ消長ヲ來ス所ナク加之韓國ニ關スル項ト異リテ同盟ト何等ノ關係ヲ有スルモノト云フベカラズ

日本案ノ第四條第五條及第六條ハ英國案ノ第五條第七條第六條ニ夫々該當スルモノニシテ別ニ説明ヲ要セズ

交換セラルベキ公文ニ關シテハ帝國政府ハイ項規定ノ適用ヲ戰爭ノ終局後ニ限ルベキ十分ノ理由ヲ見ズ從ツテ「現時ノ戰爭終局ノ後」ナル語ヲ削除セムコトヲ提議ス

英國案(ロ)項ニ關シテハ帝國政府ハ其正確ナル意義ヲ明瞭ニ了解スルコト能ハズ何レニスルモノ本項ハ全ク片務的ニシテ又當然(ハ)項ノ範圍内ニ屬スベキ問題ニ關スルモノナリ從テ帝國政府ハ本項ノ削除ヲ可トス

英國案(ハ)項ハ「上記ノ義務ニ屬スルモノノ外」ナル語ヲ削除セムコト

英國政府ハ七月一日帝國政府ノ修正案ニ對スル再修正案ヲ提示シ來レリ。ソノ主ナル修正箇所左ノ通り。

第二條「侵略的行動ニ依リ」ノ次ニ「其攻擊又ハ侵略的行動カ何レノ時ニ於テ發生スルヲ問ハス」ヲ插入スルコト

「該締盟國ノ權利又ハ利益」ヲ「該締盟國ノ領土權又ハ特殊利益」ト改ムルコト

第三條「經濟上ノ特殊卓絶スル利益」ノ「特殊」ト「卓絶」トノ中孰レカ一ヲ削除スルコト

「常ニ列國ノ商工業」ヲ「常ニ他國ノ條約上ノ權利又ハ他國ノ商工業」ト改ムルコト

五六

第四條 新ニ左ノ條項ヲ第四條トシテ插入スルカト

「日本國ハ大不列顛國カ印度國境ニ接近スル地方ニ於テ有スル特殊利益及該利益ヲ擁護セムカ

爲メ正當且必要ト認ムル措置ヲ採ルノ權利ヲ承認ベ」

右英文

Article IV. Japan recognizes the special interests of Great Britain in the region in proximity to the Indian frontier and her right to take such measures as she may deem proper and necessary in order to safeguard those interests.

第五條 (日本案第四條) 「記述セバ利權」ヲ「記述セル目的」ニ改ムルカト

公文交換ヲ以テ規定スベキ事項中

(ロ) 新ニ次ノ條項ヲ(ロ)トシテ插入スルコト

「日本國ハ戰時ニ方リテハ隨時印度ニ於テ維持セラルル英國軍隊ノ兵力ヨリモ少カラサル兵

力ヲ印度ニ於テ使用ベルコトヲ得ヘキ様維持ベキコトヲ約定ス」

右英文

(B) It is agreed that Japan will in the event of war maintain a force available for service in India, (in any?) which shall be not less than the force of British troops maintained from time to time in that country.

(ハ) (日本案) (ロ)項

新ニ次ノ條項ヲ插入スルコト

「日本國ハ大不列顛國ニ海軍ノ援助ヲ與フル目的ノ爲メ亞細亞ノ海面以外ニ艦船ヲ派遣スルノ義務ナク又大不列顛國ハ日本國ニ陸軍ノ援助ヲ與フル目的ノ爲メ極東ニ軍隊ヲ派遣スルノ義務ナキコトヲ相互ニ同意ベ」

右英文

(D) It is however agreed that Japan shall not be bound to send ships out of Asiatic waters for the purpose of affording naval assistance to Great Britain and that Great Britain shall not be bound to send troops to the Far East for the purpose of affording military assistance to Japan.

右英國修正案ニ對スル林公使ノ意見及其ノ受理ノ際ニ於ケル林公使ト「ラ」侯トノ間ノ會議ニ關シ  
林公使ノ報告スル所左ノ如シ。

第二條ニ「其攻擊又ハ侵略的行動カ何レノ場所ニ於テ發生スルヲ問ハズ」ナル語ヲ插入セルハ本協約適用ノ場合ヲ擴張シタルガ如シ然シトモ若シ此語ナキトキハ他國ニ於テ本條ノ適用ヲ免ルルノ遂少カラザルベキヲ以テ之ヲ插入スルヲ正當ト思惟ス

第三條ニ於テ「他國ノ條約上ノ權利」ナル語ヲ加ヘタルコトニ關シテハ是ノ「モロッコ」問題ノ結果トシテ必要ヲ見ルニ至レルモノナルコト此修正ノ語調ニ徵シラル所ナリ本官ハ左ノ理由ニ依リ此修正ノ不當ヲ「ランヌダウン」侯ニ指摘セリ。

若シ日本ニシテ本條規定ノ目的ニ關シ他國ノ條約上ノ權利ヲ承認スルコトニ同意スルニ於テハ他國ハ最惠國條款ヲ利用シ日本ト同一ノ地歩ヲ請求スルナルベク而シテ是レ多クノ場合ニハ日

五八

本ノ韓國ニ於ケル特殊利益ヲ害スル結果ヲ來シ以テ本條ノ精神ヲ滅却スルニ至ラム。『ランスタウン』侯ハ本官所說ノ至當ナルヲ認メ本問題ニ關シテハ更ニ開僚ニ謀リ其再考ヲ求ムベキ旨ヲ述べ他ノ一方ニ於テ本官ニ求ムルニ此修正ヲ帝國政府ニ提出シテ其考量ニ供セムコトヲ以テセリ。思フニ英國政府ハ此字句ニ何分ノ修正ヲ加フルコトニ同意スルナラム。

英國案第五條 印度ニ於ケル英國ノ利益ニ關スル約款ノ復活ニ關シテハ『ランスタウン』侯曰ク日本ハ本條ヲ以テ云フヲ俟タザル規定トシ之ヲ不用ト認メタルガ故ニ本條ノ主義ハ固ヨリ日本ニ於テ異議ナキコトト信ズ從テ余ハ英國ガ印度ノ地方ニ於テ採ルコトアルベキ處置ヲ公然辯解スルノ目的ノ爲メ本條ヲ保存セムトス。

英國案第五條ニ於テ『利益』ナル語ヲ『目的』ト修正セルハ唯協約前文ノ字句ニ從ヒタルニ過ギズ。英國案公文(ロ)ニ關シテハ本官ハ左ノ旨ノ意見ヲ述べタリ。

本約款ハ片務的ニシテ且不必要ナルノミナラズ日本ヲシテ戰時ニ際シ其陸軍ノ兵力ヲ自由ニ且最有利ニ使用スルコトヲ得ザラシムルモノナリ戰時ニ於テハ日本ノ陸軍ノ兵力ハ印度ニ於ケルヨリモ滿洲又ハ其他ノ地點ニ於テ使用スル方時宜ニ適スル場合起ルヤモ知ルベカラズ。

右本官ノ所說ニ對シ『ランスタウン』侯ハ答ヘテ曰ク

英國政府ハ日本ガ萬一ノ場合ニ於テ英國ニ來援スルノ誠意アルヲ疑ハズト雖一種ノ保障トシテ之ニ類スル何分ノ約款ヲ存センコトヲ欲ス但シ此約款ノ字句ハ余自ラ充分満足ナルモノト思考セズ余ハ日本政府ニ於テ英國案ノ粗略ナル字句ヲ基礎トシテ何分ノ改正ヲ加ヘラレムユトヲ望ム

公文(ニ)關シテハ侯ハ本項ヲ以テ單ニ意見ヲ述べタルモノニ過ギズト云ヘリ。

(4) 英國再修正案ニ對スル帝國政府最終提案及ビ之ニ對スル英國政府ノ修正  
桂外務大臣ハ林公使ガ『ラ』侯ニ述ベタル意見ヲ承認スルト共ニ帝國政府ノ回答トシテ左ノ旨ヲ「ラ」侯ニ開陳スペキコトヲ電訓セリ(英文別紙第三號)。

帝國政府ハ英國政府ノ提議ニ係ル修正ヲ慎重ニ考量セリ然レドモ其修正中同意シ難キ點アルヲ發見セリ。

本條ノ修正ハ之ニ同意ス

協約前文

第二條

「其攻撃又ハ修略的行動カ何レノ時ニ發生スルヲ問ハス」ナル語ヲ挿入スルノ點ハ之ニ同意スルコトヲ得ズ此字句ハ不必要ニシテ又毫モ本協約ノ強固ヲ加フルモノト思惟セズ第二條中其他ノ修正ハ之ニ同意ス

第三條

帝國政府ハ「特殊」ナル語ヲ削除スルコトニ同意ス「他國ノ條約上ノ權利又ハ」ナル語ハ之ヲ削除シ最初英國政府ノ提議ニ係ル字句即チ「但シ該措置ハ常ニ列國ノ商工業ニ對スル機會均等主義ト抵觸セサルコトヲ要ス」トアルニ依リ列國ノ實際ノ利益ヲ保護スルニ充分ナリト思惟ス

ルヲ以テ此字句ヲ其儘保存スルヲ可トス且夫レ韓國ニ於ケル各國特殊ノ條約ニ基ク權利ハ該國ト韓國トノ條約ノ規定ニ依リテ異ナリ從テ此等ノ權利ハ同盟ニ關係ナク直接關係國ノ間ニ各別ニ措置スルコトヲ要ス帝國政府ノ所感ヲ以テスレバ第三國ヲシテ同盟國ノ一方ニ對スル其爭點ノ論據トシテ直ニ同盟協約ヲ援用スルノ權利ヲ得セシムルガ如キ約款ヲ協約中ニ挿入スルハ失當ナルベシ

## 英國案第四條

是帝國政府ノ同意スル能ハザル所ナリ日本ハ印度ノ國境ニ接近スル諸國ト何等條約上ノ關係ナシ從テ日本ハ英國ガ此等ノ地域ニ於テ其利益ヲ擁護セムガ爲適當ト認ム措置ヲ採ルノ權利ヲ承認スルコト云フヲ俟タズ然レドモ日本ガ斯ル措置ニ協力スルハ是帝國政府ノ意思以外ニ同盟ノ範圍ヲ擴張スルモノナリ

## 日本案第四條

帝國政府ハ「利益」ナル語ニ代フルニ「目的」ナル語ヲ以テスルコトニ同意ス  
祕密協商ニ關シテハ凡ソ戰時ニ方リテ與ヘラルベキ相互援助ノ性質ハ必ズヤ戰闘ノ狀況ニ依リテ異ナラザルヲ得ズ而シテ其戰況ナルモノハ豫メ想定スルコトヲ得ザルモノナリ帝國政府ハ此事情ニ鑑ミニ再考ヲ加ヘタルニ援助ノ性質ヲ豫メ規定セムトスルハ失當ニシテ機宜ニ適スルモノニ非ズスノ如キハ同盟ニ強固ヲ加ヘザルノミナラズ却テ之ヲ阻害シ且薄弱ナラシムル所以ニシテ從テ本問題ハ何レノ事項ニ關シテモ隨時狀況ニ應ジ兩國ノ陸海軍官憲ニ於テ協定スルニ任ス  
ヲ得策トス依テ帝國政府ハ英國案ハノミヲ除キ其他ノ祕密協約ヲ全部削除セムコトヲ提議ス

右帝國政府ノ意見ハ英國政府ノ同意ヲ得ルニ至ラムコトヲ希望ス

右帝國修正意見ヲ英國政府ニ提出スルニ先立チ、林公使ハ英國案第四條ニ對スル帝國政府ノ所見ニ關シ左ノ如ク請訓シ來レリ。

英國案第四條ニ對スル帝國政府ノ所見ニ關シテハ本官ハ帝國政府ニ於テ明瞭ニ英國政府ノ眞意ヲ解セザル所アルヲ恐ル日本ガ印度國境附近ノ諸國ト條約上ノ關係ナキハ事實ニシテ日本ハ無論英國ガ其利益ヲ擁護セムガ爲メ此等ノ地域ニ於テ如何ナル措置ヲモ採ルノ權利ヲ承認スベシトノ貴旨ハ亦之ヲ諒ス然レドモ英國ガ明確ニセムトスルノ點ハ凡テ同國ガ此等ノ地域ニ於テ採ルコトアカルベキスル處置ノ正當ナルコトヲ本條ヲ以テ承認シ從テ同國ガ此等ノ地域ニ於テ採ル處置ノ結果トシテ他國ヨリ印度ノ國境ヲ攻擊セラルニ方リ何等カニテモ日本ノ援助ヲ豫期スルコトヲ得ムトスルニ在リ換言スレバ印度ニ對スル第三國ノ攻擊ガ印度國境以外ノ地域ニ於ケル英國ノ處置ニ基ケルモノナリトノ理由ニ依リ前述ノ如キ處置ハ日本ラシテ援助ヲ與フルノ義務ヲ免レシムルノ論據トナルガ如キ場合ナカラムコト是レ英國ノ明確ニセムトスル所ナリ從テ英國政府ハ印度國境附近ノ地域ニ於テ自國ノ利益ヲ擁護スル處置ノ正當ナルコト解セムガ爲メノ論據トシテ本條ヲ存セムコトヲ希望スルモノナリ然レドモ英國ガ印度附近ノ諸國ニ於テ採ル措置ノ結果トシテ攻擊ヲ受クル場合ニハ帝國政府ハ援助ヲ拒絶スルノ意ナリヤ果シテ然ラバ本官ハ是レ協約擴張ノ本旨ヲ全滅却スルモノナルヲ恐ル蓋シ英國ガ最初ヨリ印度本部ニ於テ攻擊ヲ受クルガ如キ場合ハ實際殆ド起ルベカラザルコトニ屬スベキヲ以テナリ思フニ攻擊ハ印度附近ノ諸國ニ對シテ開始セラル

六二

ベキコード最事實ニ近カルベシ英國ガ其處置ノ正當ナルコトヲ辯解セムガ爲ニ必要トル論據ハ日本ガ韓國及其附近地方ニ於ケル處置ノ正當ナルコトヲ辯解セムガ爲ミニ必要トル論據ニ同ジ本官ハ再び「ランドダウン」侯ニ交渉スルニ先チ右ノ點ニ關シテ速ニ貴訓ヲ請フ

右林公使ノ請訓ニ對シ桂外務大臣ハ左ノ如ク訓令シタリ。

帝國政府ハ「何レノ場所ニ於テ發生スルヲ問ハス」ナル語ヲ第二條ニ插入スルコトニ同意ス。英國政府案第四條ニ關シテハ同政府ノ眞意ノ在ル所ハ能ク分明シ居ルモ而モ帝國政府ハ猶ホ本條ヲ削除セムト欲スルモノナリ其本條ノ削除ヲ欲スル理由ノ重ナルモノハ下ノ如シ即チ本條ハ地域ノ點ニ於テ協約前文ニ規定スル所ノ本協約ノ範圍ヨリ全ク離レタル事實ヲ執リ來テ之ヲ其圈内ニ容レムトルモノナルコト是レナリ尤モ帝國政府ハ本條ノ削除ヲ主張スト雖モ之ニ依テ以テ閣下ノ想到セラレタル理由ノ下ニ同盟國ニ援助ヲ與フルノ義務ヲ免カルルノ辭ト爲サムトルガ如キ意志ハ毫モ之レナキ所ナリ且又帝國政府ハ第二條ノ適用ヲ見ムガ爲ミニハ印度ノ國境内又ハ國境上ニ於テ敵ノ攻撃アルヲ絶対必要ト爲スモノニアラズ帝國政府ノ見解ヲ以テスレバ敵國ノ攻擊ニシテ苟モ印度ニ於ケル英國ノ領土權ヲ侵迫スベキ性質ノモノタラシメバ同條ハ確ニ茲ニ其適用ヲ見ルベキナリ

若シ閣下ニ於テ英國政府ノ疑念ヲ解クノ必要アリト思料セラルレバ閣下ハ外相「ランドダウン」候ニ向テ下ノ如ク言明セラルモ差支ナシ曰ク英國政府ガ印度國境ニ近邇セル地方ニ於テ執ラムトル措置ニシテ印度ニ於ケル英國ノ領土權ヲ防護セムガ爲ミニ必要ト見做サルモノナラバ帝國政府ノ所見ヲ以テスレバ斯ル措置ハ第二條ノ適用ヲ妨グル論據トナラザルベシト

閣下ハ前陳ノ趣旨ヲ體シ義ニ本大臣電信ヲ以テ訓令セル所ヲ遂行スルニ努力セラレムコトヲ希望我第二次修正ノ寫ハ數日前之ヲ在本邦英國公使ニ手交シ小村男ヨリモ又本大臣ヨリモ我修正ノ理由ニ關シ本大臣電信ノ趣旨ヲ以テ繆々證明セルコトナリシガ兩國共ニ同公使ハ帝國政府ノ所見ニ同意ナル旨ヲ述べタリ

七月十日本大臣ノ接見日ニ際シ同公使ハ現ニ本國政府ニ電報シ我修正ヲ容レムコトヲ提言シタル旨本大臣ニ告ゲタリ茲ニ之ヲ附言ス

七月十四日林公使ハ我方最後ノ修正ヲ「ラ」侯ニ通告シタリ又前記外務大臣發電ニテ陳述スルコトヲ承認セラレタル點ヲモ同侯ニ傳ヘタリ。

七月十九日「ラ」侯ハ我最後ノ提案ニ對スル英國政府ノ修正ヲ林公使ニ通告セリ即チ左ノ如シ。

第一 第二條ニ於テ「本協約前文ニ記述セル地域ニ於ケル該締盟國ノ領土權又ハ特殊利益」トアルハ「地域ニ於ケル」ノ語ヲ削除ス

第二 第三條ニ於テ「機會均等主義ト抵觸セサルコトヲ要ス」トアルハ「機會均等主義ニ反セサ

シ。



六六

尊重セザルヲ得ズ而シテ條約ヲ改正變更スルノ必要アル場合ニハ夫々關係國ト各別ニ商議スルノ外ナカルベシ果シテ然ラバ侯ノ所望ニ應シ書面ヲ以テ保障ヲ與フルモ日本ニ取りテ害ナカルベシト思惟ス

第三 英國政府ハ其原案第四條ヲ保存セムコトヲサヘ主張ス其理由トスル所ハ前條(韓國ニ關スル規定)トノ權衡ヲ保ツニ足ル何分ノ條項ハ本協約ニ對スル議會ノ承認ヲ得ムガ爲メ必要ナリトスルニ在リ今回立案ニ係ル本條ノ字句ハ貴電ニ依リ本官ガ「ラン・スダウン」侯ニ陳述セル所ト殆ド相同ジ本官ハ此規定ニ於テ何等異議ヲ挾ムベキ點アルヲ見ズ

第四 第五及第七ハ註解ヲ加フベキ點ナシ

第六 公文(ハ)ヲ移シテ協約ノ本文ニ置ク理由ハ明瞭ニシテ註釋ヲ要セズ

公文(ニ)ヲ附加セル所以ハ英國議會ノ意向ヲ推量セルニ出デタルモノナリ目下英國政府ノ際會スル軍隊改革ノ難問題ニ顧ミ且現ニ印度ニ於ケル英國軍隊ノ兵數不足ナルニ方リ若シ英國ニシテ軍隊ノ極東派遣ヲ日本ヨリ請求セラルルノ虞アルトキハ英國議會ニ於テ不安ノ念ヲ抱クコトアルベキニ依リ英國政府ハ斯ル不安ノ念ヲ去ルニ足ルベキ規定ヲ協約中ニ設クルノ必要ヲ感ズ今回英國政府ノ提議セル修正ハ必ズシモ其字句ノ慮同意スルヲ須ヒズト雖モ本官ハ別ニ其異議ヲ容ルベキ點アルヲ見ザルガ故ニ帝國政府ニ於テニ同意セラレムコトヲ望ム、本官ハ帝國政府ノ希望ヲ貫徹セムガ爲メ全力ヲ盡シタリ思フニ英國政府ヲシテ此以上ノ變更ニ同意セシメムコトヲ試ムルモ到底其效ヲ奏セザルナラン

コノ間右修正中問題トナリタル韓國ニ於ケル條約上ノ權利ナル語句ニ付キ「ラ」侯ガ在本邦英國公使ニ宛テタル七月二十六日附訓令左ノ如シ(原文別紙第四號)。

外務大臣ト會見ノ節貴官ノ使用セラレタル措辭ヲ承認ス

右ハ我政府ノ意見ヲ正確ニ表示セルモノナリ

約定ニ屬スル公文ノ措辭ハ改良スルノ餘地ナキニアラズ要スルニ我政府ノ希望ハ日本ハ日本政府ガ第三國例ヘ合衆國ノ條約上既定ノ權利ヲ侵害シ因テ以テ開戰ヲ見ルニ至リタル場合ニ於テ我政府ガ之ニ加ハルノ義務ヲ負ハザルノ一點ニアルノミ本大臣ハ日本公使トノ會談ニ據リ右ノ如キ事態萬々一發生スル場合ニ於テハ日本政府ハ我ニ來援ヲ求メザルベシトノ事ヲ明カニ了解セリ

第一桂外務大臣ハ當時日露媾和會議列席ノタメ米國ニ在ル小村全權委員ニ對シ林公使トノ往復電文ヲ一束電送シテソノ意見ヲ求メタルニ對シ、小村全權委員ハ左ノ如キ意見ヲ送リ來レリ(七月三十日附)。

第一、本官ノ見ケ所ニ依レバ左ノ點ハ帝國政府ニ於テ同意ヲ與ヘ不可ナカルベシ  
甲 第二條ノ「地域ニ於ケル」ナル語ヲ削除スルコト  
乙 英國政府案第四條ハ今回同政府ノ提議セル林公使來電所載ノ形式ヲ以テ復活スルコト  
丙 英國政府案公文(ハ)ヲ移シテ協約本文中ニ入ルルコト

第二、然レドモ左ノ點ハ帝國政府ニ於テ同意スベカラズ

甲 英國政府案公文(二)

乙 韓國ニ於ケル條約上ノ權利ノ問題ニ關シ公文ヲ交換スルコト

六八

右二ヶ條ノ規定ニ對スル我異議ノ理由ハ本官電信中ニ明示シアリ而シテ英國政府ハ右二ヶ條ヲ復活スルニ何等十分ナル理由ヲ附セルモノト認ムルコト能ハズ凡ソ國會及輿論ノ批難ヲ受ケザル様ノ形式ヲ以テ條約ヲ作成スルノ必要アルハ我亦英國ト異ルコトナシ然レドモ右二ヶ條ニ對シ我異議ヲ挾ムハ一層重大ナル理由アレバナリ同盟國兵力ノ配置及同盟國ノ一方ガ他ノ一方ニ與フベキ援助ノ性質ニ關スル問題ハ明ニ兩國陸海軍當局者ニノミ專屬スルモノナリ元來同盟ナルモノハ全ク信義ヲ以テ結合スル盟約ナリ而シテ必要ノ場合ニ於テ兵力ノ配置ヲ協定スルノ任ヲ委セラルベキ將校ハ素ヨリ其政府ヨリ全然信任ヲ受クル者タルベク此等將校ハ兩國共通ノ目的ニ對シテ最良ノ協定ヲ爲スベキモノト推定セザルヲ得ズ從テ英國ノ提議セル制限ノ如キハ同盟ノ便益ヲ不必要ニ制限スルモノト認ム韓國ニ於ケル條約上ノ權利ヲ留保スルノ點ニ關シテハ本官思フニ日本ハ韓國現行條約ノ有效ナルコトヲ承認スルモノニシテ何國ノ條約上ノ權利ヲモ無視スルノ意アルニ非ズ若シ現状ニ變更ヲ加フルノ必要アラバ此等ノ變更ハ他國政府ガ之ニ類スル場合ニ方リ必要上措置セルト同様ノ方法ニ於テ各關係國ト別々ニ直接商議ニ依リ協定セザルヲ得ザルベシ韓國ノ形勢ハ錯雜ヲ極メタリ本官思フニ英國政府ニ於テハ第三國ニ對シ直接ニ同盟協約ノ規定ヲ援用スルノ権利ヲ與フルガ如キ約款ヲ主張シ以テ一層ノ難局ヲ致スコトアルベカラズ同盟ノ目的ハ東洋ニ於ケル全局ノ平和ヲ維持スルニ在リ

從テ日本ガ安リニ韓國ニ於ケル列國條約上ノ權利ヲ無視シ以テ此平和ヲ危クスルガ如キハ豫想スベカラザル事ニ屬ス尙(修正英國案第四條ニシテ同意セラルルニ於テハ)茲ニ一言スベキ點アリ

即チ韓國ノ對外形勢ハ印度國境ニ接近スル或ル邦國ノ形勢ニ類スルモノアリ而シテ此等諸國ノ條約上ノ關係ヨリ生ズル紛爭ノ危險ハ韓國ノ條約上ノ關係ヨリ生ズルモノニ比シテ少カラザルコト是レナリ

在日本公使ガ同國政府ノ訓令ニヨリ七月三十日行ヒタル桂外務大臣トノ會議ノ要旨左ノ如シ。

本大臣ハ英國政府ガ協約第三條中ヨリ條約上ノ權利ナル語ヲ削除スルコトニ同意シタルコトヲ喜ブモ之ニ關シ外交文書ヲ交換セントスルコトハ帝國政府ニ於テ断じテ同意シ難シ帝國政府ハ始メヨリ他國ト韓國トノ條約ヲ破毀シ又ハ條約上ノ權利ヲ蹂躪スルノ意ナシ本大臣ハ英國政府ガ何故ニ此點ニ付懸念セラレ談判ノ中途ヨリ條約權云々ヲ主張スルニ至リタルカラ理解スルニ苦シム又假令韓國ヲ以テ我保護國トナスモ之ガ爲メ他國ト韓國トノ條約ハ直ニ無效ニ歸スベキモノト思考セズ若シ我保護權ト他國ノ條約權ト相容レザルモノアラバ直接ニ其國ト交渉ヲ開キ之ヲ矯正スベキノミ又韓國ニハ從來陰謀盛ニ行ハレ皇帝ヲ始メ諸大臣モ他國ト種々不都合ナル條約ヲ締結シ遂ニ今回ノ戰争ヲモ惹起シタルモノナルヲ以テ向後ハ此ノ如キ事態ヲ繰返ヘサザル様充分ニ豫防セザルベカラズ之ガ爲ミニハ帝國政府ニ於テ何等カノ手段ヲ執ルヲ要ス隨テ「ランスタン」候ノ提議セラルル如キ文書ハ全ク不用ナルノミナラズ帝國政府ノ措置ヲ幾分ニテモ掣肘スルガ如キ性質ノ取極ニハ同意スルコトヲ得ズ

英國公使ハ之ニ對シ英國政府ガ條約權ノ侵害ニ關シ照會シ談判ノ中途ニ至リ主張スルニ至リタルハ實ハ小村男爵ト自分ト會見ノ結果日本ハ韓國ヲ其保護國トスベキ旨自分ヨリ本國政府ニ電報シタルニ起因スルモノナラン然レドモ帝國政府ニ於テ既ニ他國ノ條約ヲ破毀シ又ハ條約權ヲ蹂躪スルノ意ナク此旨ヲ明白ニ英國政府ニ聲明スルニ於テハ英國政府ニテモ強テ文書ノ交換ヲ主張セザルベシ又韓國ニ於ケル陰謀ヲ防止スルガ爲メ何等カノ手段ヲ執ルコトモ至極尤モナゾト云ヘリ

次デ本大臣ハ英國政府提出ノ第四條即チ印度ニ關スル箇條ハ帝國政府ニ於テ今尙ホ不必要ト信ジ居ルモ英國議會ニ對スル政府ノ立場ヲモ善ク諒解シ居ルニヨリ同盟國ノ友誼トシテ可成英國政府ノ意ニ應ジタキ希望ヲ以テ目下考慮中ナル旨ヲ語リタリ

又第七條ノ第二項トシテ挿入セントスル英國政府提出ノ二號案モ亦不用ナリ如此問題ハ全ク第七條ノ第一項即チ八號案ニテ總括シ居ル旨ヲ述ベシニ英國公使モ全然同意ニテ此問題ハ如何様ニモ片付ケベシト答ヘタリ尙最後ニ本大臣ハ第三條即チ韓國問題ニ關スル箇條ニシテ全ク日英兩國ノ意見相合スルヲ得バ本條約ノ締結ヲ見ルコト容易ナルベキ旨ヲ附言シタリ

(5) 英國政府修正ニ對スル帝國政府ノ回答ヨリ條約調印マデ  
八月一日桂外務大臣ハ英國政府最後ノ修正ニ對スル帝國政府ノ回答トシテ「ラ」侯ニ左ノ如ク通知スベキコトヲ林公使ニ命ジタリ。

右修正ノ理由ハ簡單ニ左ノ如シ。

英國政府案ニハ英國ガ有スル特殊利益ノ地域ニ關シ何等明言ナキヲ以テ同條ノ前部ハ極メテ廣義ニ解釋セラレ隨テ協約ノ範圍ヲ不相當ニ擴張スルノ批難アルヲ免レズ

本條ヲ此ノ如ク修正スルトキハ本協約前文ノ趣意及字句ニ照應スルコト英國案ニ勝リ而カモ大體ニ於テ本條ノ目的トスル所ヲ毀損スルコトナシト思惟ス英國政府案公文(ハ)ヲ第七條トシテ協約中ニ包含セシムルコト並ニ同公文中「本日調印ノ協約中ニ規定セル場合」トアル内「本日調印ノ」ヲ削除シ「現協約中ニ規定セル場合」ニ改ムルコトニ同意ス

然レドモ帝國政府ハ修正第七條第二項ニ同意スルコト能ハズ全然現協約ヨリ之ヲ削除スベキコトヲ提議ス

同盟國兵力ノ配置及同盟國ノ一方ガ他ノ一方ニ與フベキ援助ノ性質ニ關スル問題ハ明カニ兩國陸海軍當局者ニノミ專屬スルモノナリ元來同盟ナルモノハ全ク信義ノ盟約ナリ而シテ必要ノ場合ニ於テ兵力ノ配置ヲ協定スルノ任ヲ委セラルベキ將校ハ素ヨリ其政府ヨリ全然信任ヲ受クル者タル

七二

ベク此等將校ハ兩國共通ノ目的ニ對シテ最良ノ協定ヲ爲スモノト推定セザルヲ得ズ從テ英國ノ提議セルガ如キハ同盟ノ便益ヲ不必要ニ制限スルモノト認ム

我修正案第四條第五條第六條ハ第五條第六條第八條トナル

第三條ニ關シ英國政府ガ「他國ノ條約上ノ權利」ナル語ヲ削除スルコトニ同意セラレタルハ帝國政府ノ頗ル満足スル所ナリ然レドモ帝國政府ハ「ラシスダウン」侯ノ發議ニ係ル外交文書交換ノ事ニハ同意スルコト能ハズ其理由左ノ如シ

第一 帝國政府ハ此ノ如キ公文ヲ交換スルノ必要アルヲ認ムル能ハズ

第三條ハ帝國政府ガ韓國ニ於テ列國ノ有スル條約上既定ノ權利ヲ無視セントスルノ意思アルガ如ク解釋スベキ何等ノ語ヲ包含セズ帝國政府ノ觀ル所ニ據レバ假令保護權ヲ設定スルコトアリトルモ其設定ノ事實ハ列國ト韓國トノ條約ヲ當然消滅ニ歸セシムモノニアラズ又日本ハ何國ノ條約上ノ權利ヲモ無視セントスルノ意アルニ非ズ日本ハ韓國現行條約ノ有效ナルコトヲ承認スルモノニシテ若シ右條約上既定ノ權利ニ影響ヲ及ボスベキ何分ノ變更ヲ加フルノ必要アラバ此等ノ變更ハ他國政府ガ之ニ類スル場合ニ方リ必要上措置セルト同様ノ方法ニ於テ各關係國ト各別ニ直接商議ニ由リ協定セザルヲ得ザルベシ

第二 日本ハ第三國ニ對シ直接ニ本協約ヲ引用スルノ權利ヲ與ヘ以テ韓國問題ヲシテ國際紛争ノ問題タラシムルガ如キ新約款ヲ締結スルコトヲ得ズ

第三 侯ノ發議ニ係ル公文中ニ引證シタル場合ニ於テ日本ハ英國ヨリ援助ヲ受クルノ權利アリヤ否ノ問題ハ帝國政府ノ意見ニテハ第二條ノ適用ニ委シ同條ニ依リ解決セラルベキモノナリ加之ナラズ確實明白ノ取極ヲ以テ豫メ第二條ノ適用以外ニ或ル場合ヲ置クコトハ現協約ノ眞意ト目的ニ符合セザル處アリ何トナレバ斯ノ如キ規定ハ戰爭ヲ豫防セントスル本協約ノ效力ヲ大ニ減損スルコトアルベキヲ以テナリ

八月三日「ラ」候ハ林公使ニ對シ左ノ如ク語レリ。

余ハ貴國公使ノ同意ヲ經テ左ノ旨ヲ内閣會議ニ於テ聲明セリ

日本ガ韓國ノ條約ヲ侵犯スルコトアルベシトノ問題ハ本件商議中起リタル所ナルガ此問題ニ關シテハ日本公使ハ余ニ確言スルニ何國ト雖約ヲ尊重スルノ嚴正ナルコト日本人ニ如クモノナク日本人ガ條約ヲ侵犯スルコトアルベシトノ嫌疑ヲ受クルハ其最意外トスル所ニシテ又萬一斯ノ如キ假定ノ場合實現スベキ杞憂アリトスルモ其場合ハ第二條ノ規定ヲ以テ充分之ニ處スルコトヲ得ベク即チ同條ノ規定ニ依レバ斯カル原因ヨリ發生スベキ戰爭ハ所謂「挑發スルコトナクシテ攻撃ヲ受ケタルニ因ル」場合ト認マラレザルベキ旨ヲ以テセリ

内閣員ハ此聲明ニ依リ日本ノ修正ニ同意シ從テ此問題ニ關シ義ニ英國政府ノ提議セル公文ハ之ヲ省略スベシ

第四條ニ關シテハ英國政府ハ其形式ヲ改善セムガ爲メ本條ノ字句ヲ左ノ如ク變更セムコトヲ希望ス

七三

承認ス

第七條ニ關シテハ英國政府ハ日本政府ハ日本政府ノ主張スル論據ノ有力ナルヲ認メ第二項即チ「但シ前記ニ依リ協定セラルル措置ハ」云々ヨリ同項結尾迄削除スルコトニ同意ス

八月七日桂外務大臣ハ右ニ關シ「ラ」侯ニ左ノ如ク通知スベキコトヲ命ジ林公使ハ翌八日「ラ」侯ニ通知セリ。

帝國政府ハ第四條ニ關スル英國政府ノ修正ニ同意ス蓋シ貴電ニ徵スルニ英國政府ガ新字句ヲ可トスルハ單ニ形式ヲ改善セムトスルノ意ニ出デタルモノニシテ其意義ニ於テ何等重要ナル差異アルガ爲ミニ非ザレバナリ

協約調印ノ期日ニ關シテハ帝國政府ハ「ラ・ン・ス・ダ・ウ・ン」侯ノ提議ニ對シ全ク異存ナシ將又發表ノ

期日ニ關シテハ帝國政府ハ大體ニ於テ候ト所見ヲニスルモノニシテ追テ之ヲ發表スルモ媾和談

判ノ成功ニ何等害ヲ及ボスコトナキヲ兩國政府ニ於テ確認スルニ至ルマデ其ノ發表ヲ見合スヲ機

宜ニ適スル措置ト思惟ス

帝國政府ハ兩國政府ニ於テ協約ノ性質及範圍特ニ其第三條及第四條ニ關シ説明ヲ與フルノ必要ア  
ル場合ニ至リ其説明ノ一途ニ出デムコトヲ期セムガ爲メ兩國政府ノ間ニ豫メ協定ヲ遂グルヲ得策  
ト認ム而シテ此話ニ關シ速ニ協定ノ成立セムコトヲ希望スル所以ハ帝國政府ハ協約發表ノ際権密  
院ニ對シテ斯ノ如キ説明ヲ與フルノ必要アルモ知ルバカラザレバナリ右説明ヲ與フルニ方リ帝國  
政府ハ第三條ニ關シ韓國ニ於ケル他國ノ條約上既定ノ權利ヲ尊重スルハ帝國政府ノ確ク決心スル  
所ナル旨ヲ聲明スルニ躊躇セザルベシ然レドモ假ニ日本ガ此等ノ權利ヲ侵害スル結果トシテ戰爭  
ヲ見ルニ至ルコトアリトセムニ此場合ニ於テハ其戰争ハ挑發ニ基カズル戰爭ト認メラレザルベキ  
旨「ラン・ス・ダ・ウ・ン」侯ガ内閣會議ニ於テ聲明セラレタル點ニ關シテハ帝國政府ハ前述説明ノ際何等  
言及スルナカラムコトヲ希望ス此點ヲ全ク緘默ニ附スルハ我國內政策ニ便ニセムガ爲メ且特ニ協  
約ノ效力ヲ充分ニ發揮セムガ爲メ極メテ望マシキ事ニ屬ス第四條ニ關シテハ帝國政府ニ於テ必要  
ノ場合ニ至ラバ説明スルニ「英國ガ其印度ノ領地ヲ擁護セムガ爲メ印度國境ノ附近ニ於テ採ルコ  
トアルベキ措置ノ結果トシテ第三國ヨリ攻撃ヲ受クル場合ニハ日本ハ斯ノ如キ攻撃ヲ以テ第二條  
ニ所謂挑發ニ基カズル攻擊ト認ムベク尤モ第二條ニ依ル武力的援助ハ印度ニ於ケル英國ノ領土權  
ヲ防護セムガ爲メ戰端ノ開カレタル場合ノミニ限リ之ヲ行フモノタルハ同條ノ明記スル所ニシテ  
復タ契約ヲ須タザルナリ」トノ旨ヲ以テセムトス

右ニ關シ「ラ」侯ハ八月九日ニ至リ左ノ如キ八月八日附公文ヲ林公使ニ手交セリ。

本大臣ハ今朝閣下ノ本大臣ニ手交セラレタル覺書ノ要領ヲ閲議ニ提出セリ我政府ハ第四條ノ新語  
句ヲ以テ意義ニ於テ貴國政府ノ案ニ異ル所アリト認メズ然レドモ形式上我方ノ語句ヲ擇ブヲ以テ  
貴國政府ニ於テ之ニ同意セラレタルハ我政府ノ喜ブ所ナリ若シ閣下ニ便宜ナラバ本大臣ハ本月十  
二日ヲ以テ調印セムト欲ス而シテ今日協約ヲ發表スルヲ望マシカラズトスルニ於テ貴國政府ノ我  
政府ト意見ヲ同ウセラレタルハ本大臣ノ欣喜スル所ニシテ媾和談判進行ノ模様稍判明セバ發表ノ  
期日ヲ決定スルコトヲ得ベシ此問題ニ付テハ隨時協議スルコト必要ナラント思ハル第三條及第四  
條ノ範囲及性質ニ付キ貴國政府ノ與ヘントセラルル説明ニ關シテハ我政府ハ閣下ノ覺書ニ記載セ  
ラレタル所ニ付何等ノ異議ナシ雙方ヲ拘束スベキモノハ協約正文ナルコト云フ俟タズト雖モ貴

國政府ガ韓國ニ於テ別國ノ有スル條約上既定ノ權利ヲ飽クマデ尊重スル意思ナリトノ宣言ハ我政府ニ於テ之ヲ歓迎スベシ元來兩締盟國一方ガ別國ノ條約權ヲ侵害シタル場ニ處スベキ方法ニ關シ兩締盟國ノ孰レタルヲ問ハズ自ラ進ンデ何等陳辯スベシト云フガ如キハ當初ヨリ我政府ノ趣意ニアラズ我政府ノ希望ハ締盟國ノ孰レニ於テモ此點ニ付嚴重ナル質問ニ逢ス場合ニ於テハ兩締盟國ハ既定條約權利ノ神聖ヲ充分ニ承認シ居ル旨ヲ答ヘ且其一方ガ此等ノ權利ヲ侵害シタル結果トシテ攻撃ヲ受クルコトアラバ是等二條ニ所謂「挑發スルコトナクシテ攻撃ヲ受ケタル」場合ト看做サレザルベキ旨ヲ答辯スベシト云フニ過ギズ然レドモ我政府ヨリ進ンデ之ヲ論題トスルガ如キハ我政府ノ毫モ希望セザル所ナリ第四條ニ就テハ貴信ノ云フ所ト第四條第二條及協約前文ヲ綜合シタル效果ヲ正當ニ解釋シタルモノナリト思料ス。

右ヲ以テ條約案文ニ付キ彼我兩國ノ意見一致ヲ見ルニ至リ八月十二日調印セラレタリ。協約全文左ノ如シ。

日本國政府及大不列顛國政府ハ一千九百一年一月三十日兩國政府間ニ締結セル協約ニ代スルニ新約款ヲ以テセムコトヲ希望シ

(イ) 東亞及印度ノ地域ニ於ケル全局ノ平和ヲ確保スルコト  
清帝國ノ獨立及領土保全並清國ニ於ケル列國ノ商工業ニ對スル機會均等主義ヲ確實ニシ以テ清國ニ於ケル列國ノ共通利益ヲ維持スルコト

(ハ) 東亞及印度ノ地域ニ於ケル兩締盟國ノ領土權ヲ保持シ並該地域ニ於ケル兩締盟國ノ特殊利益ヲ防護スルコト

ヲ目的トスル左ノ各條ヲ約定セリ

### 第一條

日本國又ハ大不列顛國ニ於テ本協約前文ニ記述セル權利及利益ノ中何レカ危殆ニ迫ルモノアルヲ認ムルトキハ兩國政府ハ相互ニ充分ニ且隨意ナク通告シ其ノ侵迫セラレタル權利又ハ利益ヲ擁護セムカ爲ニ執ルベキ措置ヲ協同ニ考量スヘシ

### 第二條

兩締約國ノ一方カ挑發スルコトナクシテ一國若ハ數國ヨリ攻撃ヲ受ケタルニ因リ又ハ一國若ハ數國ノ侵略的行動ニ因リ該締盟國ニ於テ本協約前文ニ記述セル其ノ領土權又ハ特殊利益ヲ防護セムカ爲交戦スルニ至リタルトキハ前記ノ攻撃又ハ侵略的行動カ何レノ地ニ於テ發生スルヲ問ハス他ノ一方ノ締盟國ハ直ニ來リテ其ノ同盟國ニ援助ヲ與ヘ協同戰闘ニ當リ講和モ亦雙方合意ノ上ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第三條

日本國ハ韓國ニ於テ政事上、軍事上及經濟上ノ卓絶ナル利益ヲ有スルヲ以テ大不列顛國ハ日本國カ該利益ヲ擁護増進セムカ爲正當且必要ト認ムル指導、監理及保護ノ措置ヲ韓國ニ於テ執ルノ權利ヲ承認ス但シ該措置ハ常ニ列國ノ商工業ニ對スル機會均等主義ニ反セサルコトヲ要ス

第四條

大不列顛國ハ印度國境ノ安全ニ繫ル一切ノ事項ニ關シ特殊利益ヲ有スル以テ日本國ハ前記國境ノ附

近ニ於テ大不列顛國カ其ノ印度領地ヲ擁護セムカ爲必要ト認ムル措置ヲ執ルノ権利ヲ承認ス 七八

第五條  
兩締盟國ハ孰レモ他ノ一方ト協議ヲ經シテ他國ト本協約前文ニ記述セル目的ヲ害スヘキ別約ヲ爲サナルヘキコトヲ約定ス

第六條

現時ノ日露戰爭ニ對シテハ大不列顛國ハ引續キ嚴正中立ヲ維持シ若シ一國若ハ數國カ日本國ニ對シ交戦ニ加ハルトキハ大不列顛國ハ來リテ日本國ニ援助ヲ與ヘ協同戰闘ニ當リ講和モ亦雙方同意ノ上ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第七條

兩締盟國ノ一方カ本協約中ニ規定スル場合ニ際シ他ノ一方ニ兵力的援助ヲ與フベキ條件及該援助ノ實行方法ハ兩締盟國陸海軍當局者ニ於テ協定スヘク又該當局者ハ相互利害ノ問題ニ關シ相互ニ充分ニ且隔意ナク隨時協議スヘシ

第八條

本協約ハ第六條ノ規定ト抵觸セサル限り調印ノ日ヨリ直ニ實施シ十箇年間效力ヲ有ス右十箇年ノ終了ニ至ル十二箇月前ニ兩締盟國ノ孰レヨリモ本協約ヲ廢棄スルノ意思ヲ通告セサルトキハ本協約ハ兩締盟國ノ一方カ廢棄ノ意思ヲ表示シタル當日ヨリ一箇年ノ終了ニ至ルマテ引續キ效力ヲ有ス然レトモ若シ右終了期日ニ至リ同盟國ノ一方カ現ニ交戦中ナルトキハ本同盟ハ講和ノ成立ニ至ルマテ當然繼續スヘシ

(6) 露佛兩國政府ニ對スル通達

日英同盟新條約ハ英國政府ヨリ露佛兩國政府ニ通達セラレタルモ、右通達ニ際シ「ランスダウン」候ヨリ在露佛大使ニ與ヘタル訓令寫左ノ如シ（明治三十八年九月十四日附在英公使來信添附）（原文別紙第五號）

日英同盟ノ儀ニ付「ランスダウン」候ヨリ駐露英國大使「ハーチンジ」  
ニ送リタル書翰譯文

以書東致啓上候陳者千九百二年一月三十日ノ日英協約ニ代ルベキ新協約今般兩國間ニ成立致候ニ付爰ニ其寫一通差進候ヘバ早機ヲ以テ右新協約ヲ露國政府へ御通報相成度候  
右新協約ハ本年八月十二日ヲ以テ記名調印ヲシタルモノニ有之候因テ貴官ハ其發表ヲ今日マデ見合セタルハ當時日露兩國講和談判開始後ナリシニ因ル旨并ニ右談判進行中如此文書ヲ公ニスルノ不當ニシテ且ツ其時機ヲ得ザリシハ論ヲ俟タザル所ナル旨辯明セラルベク候  
露國政府ガ今回ノ協約ハ極東ノ時務ニ付利害關係ヲ有スル孰レノ國ニ於テモ異議ナキ國際條規ナルヲ認メラルヘキハ本大臣ノ信ジテ疑ハザル所ナリ本協約ノ前文ニ掲ゲタル目的ハ兩締約國ノ方針トスル處ナル旨貴官ヨリ特ニ露國政府ノ注意ヲ促サルベク候  
我政府ガ東亞ニ於ケル平和ヲ維持セント努メ且ツ清帝國ノ保全及獨立并ニ該國ニ於ケル各國ノ商工業ニ對スル機會均等主義ヲ維持センコトヲ求ムルニ於テ列國ノ好意及援助ヲ期待シ得ベキハ我政府ノ信ズル所ニ有之候

八〇

他ノ一方ニ於テ兩締約國ノ特殊利益ハ兩國ニ於テ之ヲ主張スルニ充分ノ權利アル性質ノモノナリ故ニ此等ノ利益ハ之ヲ擁護スルヲ須要トスル旨ヲ發表スルモ敢テ怪ムニ足ラズ又何等疑惑ヲ生ズベキモノニハ無之ト被存候

本大臣ガ特ニ貴官ノ注意ヲ促サントスルハ第二條ノ條文ニシテ同條ノ明カニ規定スル所ニ據レバ一方ノ締盟國ガ他ノ締盟國ノ援助ニ赴カザルヲ得ザル場合ハ兩締盟國ノ一方ガ他ノ一國又ハ數ヶ國ヨリ挑發セザル攻撃ヲ受ケタル場合若ハ他ノ侵略的行動ニ對シテ其領土權及特殊利益ヲ防禦スル場合ニ限ル次第ニ有之候

韓國問題ニ關スル第三條モ特ニ注意ヲ促スノ值アリ同條ハ日本ガ目下韓國ニ於テ現ニ占有シ且今後占有セザルヲ得ザル所ノ卓絶ナル地位及該國ニ於ケル其政事上軍事上及經濟上ノ利益ヲ保護センガ爲ニ必要ナル一切ノ措置ヲ執ルノ權利アルコトヲ最モ明白ナル語ヲ用ヒテ承認スルト同時ニ此等ノ措置ハ列國ノ商工業ニ對スル機會均等主義ニ反スルコトヲ得ザル旨ヲ規定セルモノナリ新協約ガ此點ニ於テ千九百二年ノ協約ト著シク經庭スル所アルハ疑ナキ所ナリ然レドモ韓國ガ日本ニ接近シ居ルコト、其自立ノ能力ナキコト及其薄弱ナルガ爲生ジ來ル所ノ危險ハ勢ヒ同國ヲシテ日本ノ監理輔導ノ下ニ就カザルヲ得ザラシメタルハ明白ナル事實ニ有之候而シテ此點ガ頃日日本ト締結セラレタル講和條約ニ於テ容易ニ露國ノ首肯スル所トナリタルヲ見ルハ我政府ノ満足スル所ナリ又日韓兩國間ニ存在スベキ關係ニ對スル諸外國ノ意見モ亦之ニ均シカルベキハ我政府ノ確信スル所ニ有之候

右ノ如ク締結セラレタル同盟協約ハ純然平和的ノ趣旨ニ出ゲ且ツ争ヒ難ヤ效力ヲ有スル所ノ權利并ニ利益ノ保護ヲ目的トスルモノナルヲ以テ我政府ハ貴官駐劄國ノ政府ガ之ヲ諒トセラルベキヲ敢テ豫期スルモノナリ將又本協約ノ締結ハ今回辛ニシテ戰爭ヲ終了セシメタル決定ヲ速カナラシムルニ與テ力ナキニシモ非ザリシコト信ズルヲ正當ト思惟シ且ツ今後多年間其範圍内ニ包含セラル地域ニ於テ世界ノ平和ヲ確保スルニ裨補スル所アルベキヲ切ニ信ジテ疑ハザルモノニ有之候 敬具

(別紙第一號)

Preamble. The Governments of Great Britain and Japan, being desirous of replacing the agreements concluded between them on the January 30th, 1902, by fresh stipulation, have agreed upon the following articles which have for their object (a) the consolidation and maintenance of the general peace in the East; (b) the preservation of the common interests of all Powers in China by insuring the independence and integrity of the Chinese Empire and the principle of equal opportunities for the commerce and industry of all nations in China; (c) the maintenance of the territorial integrity of the possessions of the High Contracting Parties in Eastern and South-eastern Asia and the defence of their special rights and interests in the countries in the proximity of such possessions:

Article I. It is agreed that whenever in the opinion of either Great Britain or Japan, any of the interests referred to in the preamble of this agreement are in jeopardy, the two Governments will communicate with one another fully and frankly and will consider in common the measures which should be taken to safeguard those interests.

Article II. If in consequence of hostilities due to unprovoked attack or aggressive action on the part of any other Power or Powers, the rights and special interests of either Party mentioned in section "c" of the preamble should be endangered, the other Contracting Party will at once come to its assistance and will conduct the war in common and make peace in mutual agreement with it.

Article III. The right of Japan to take such measures as she may deem right and necessary in order to safeguard her special political, military and economic interests in Corea is fully recognized by Great Britain, provided always that such measures do not infringe the principle of equal opportunities for the commerce and industries of all nations.

Article IV. Japan, on the other hand, equally recognizes the special interests of Great Britain in the region adjacent to the Indian Frontier and her right to take such measures as she may deem proper and necessary, in order to safeguard those interests.

Article V. The High Contracting Parties agree that neither of them will, without consulting the other, enter into separate arrangements with another Power to the prejudice of the interests above described.

Article VI. The present agreement shall, subject to the provisions of Article VII, come into effect immediately after the date of its signature, and remain in force for ten years from they date. In case neither of the High Contracting Parties should have notified twelve months before expiration of the said ten years the intention of terminating it, it shall remain binding until the expiration of one year from the day on which either of the High Contracting Parties shall have denounced it. But if, when the date fixed for its expiration arrives, either ally is actually engaged in war, the alliance shall *ipso facto* continue until peace is concluded.

Article VII. As regards the present war between Japan and Russia, Great Britain will continue to maintain strict neutrality unless some other Power or Powers should join in hostilities against Japan, in which case Great Britain will come to the assistance of Japan and will conduct the war in common and make peace in mutual agreement with Japan.

Notes to be exchanged containing the following stipulations:—

A. After the conclusion of the present war each of the Contracting Parties will endeavour to maintain at all times available for concentration in the waters of the Far East a naval force superior in strength to that of any European Power in those seas.

B. It is agreed that Japan will in the event of war provide and maintain a force which shall be equal to the force of Britain troops from time to time in India up to a limit of...000

C. Subject to the above obligation, the conditions under which armed assistance shall be afforded by either Power or to the other in the circumstances mentioned in the agreement signed this day and the means by which such assistance is to be made available will be arranged by the naval and military authorities of the Contracting Parties who will from time to time consult one another fully and freely upon all questions of mutual interests.

(*正義の義*)

Preamble. The Governments of Japan and Great Britain, being desirous of replacing the Agreement concluded between them on the 30th January, 1902, by fresh stipulations, have agreed upon the following Articles which have for their objects (a) the consolidation and main-

tenance of the general peace in the regions of Eastern Asia and India, (b) the preservation of the common interests of all Powers in China by insuring the independence and integrity of the Chinese Empire and the principle of equal opportunities for the commerce and industry of all nations in China, (c) the maintenance of the territorial rights of the High Contracting Parties in the regions of Eastern Asia and India and the defence of their special interests in said regions.

Article I. It is agreed that whenever in the opinion of either Japan or Great Britain, any of the rights and interests referred to in the preamble of this Agreement are in jeopardy, the two Governments will communicate with one another fully and frankly and will consider in common the measures which should be taken to safeguard those menaced rights or interests.

Article II. If, by reason of unprovoked attack or aggressive action on the part of any other Power or Powers, either Contracting Party should become involved in war in defence of its rights or interests in the regions defined in the preamble of this Agreement, the other Contracting Party will at once come to the assistance of its ally and will conduct the war in common and make peace in mutual agreement with it.

Article III. Japan, possessing special paramount political, military and economical interests in Korea, Great Britain recognizes the rights of Japan to take such measures of guidance, control and protection in Korea as she may deem proper and necessary to safeguard and advance those interest, provided always that such measures do not infringe the principle of equal opportunities for the commerce and industry of all nations.

(三條目)

#### REPLY OF THE JAPANESE GOVERNMENT REGARDING

##### BRITISH AMENDMENTS.

The Japanese Government have carefully considered the amendments proposed by the British Government and have so far as possible given their consent to them, but they have not found it possible to accept them all. Preamble. The amendments are accepted. Article II. The insertion of the words "whenever arising" is unacceptable. The words are unnecessary and it is not understood that they would in any wise strengthen the agreement. The other amendments to Article II are accepted. Article III. The Japanese Government consent to the suppression of the word "special". They prefer to omit the words "the treaty rights of other nations or" and adhere to the original wording which was proposed by the British Government and which is, it seems to them, quite sufficient to protect the real interests of all Powers, that is to say: "provided always that such measures do not infringe the principle of equal opportunities for the commerce and industry of all nations". Again the special treaty rights of each Power in Korea depend upon the treaty engagements of such Power with Korea and should be separately dealt with, between the Powers directly concerned, independently of the alliance. The Japanese Government feel that it would be a mistake to admit into the agreement any clause which would give third Powers the right to appeal directly to it in support of their contentions against either ally. The Japanese Government are unable to consent to the proposed British Article IV. Japan has no treaty relations with states in proximity to the Indian

HM

frontier and it goes without saying that Japan admits the right of Great Britain to take any measures she sees fit to safeguard her interests in those regions, but co-operation of Japan in such measures would extend the scope of the alliance beyond the intention of the Japanese Government. Article IV, Japanese draft. The Japanese Government consent to the substitution of the word "objects" in place of "interests". As to the proposed secret understanding, considering that the nature of the reciprocal assistance to be rendered in case of war must necessarily depend upon the character of the conflict which can not be foreseen, the Japanese Government, upon further consideration, have concluded that any attempt to define in advance the nature of the assistance would be unwise and a mistake, and would hamper and weaken rather than strengthen the alliance and that the question in all its phases might with advantage be left to the military and naval authorities of the two countries for adjustment according to circumstances as they arise. The Japanese Government therefore propose the entire suppression of the secret understanding excepting only Note C of the British draft.

(密級機密)

Telegram from Lord Lansdowne.

Dated—July 26th, received July 27th.

We approve of the language used by you in conversation with the Minister for Foreign Affairs, which expressed our views correctly.

With reference to language of note as to treaty, the words the words used might be improved, our wish being simply that, supposing the Japanese Government were to violate the established treaty rights of a third power, e.g. the United States, and thus lead to war, His Majesty's Government should not be compelled to take part.

In conversation with the Japanese Minister I understood clearly that, should such a case arise, which was not at all likely, the Japanese Government would not think of calling on us for assistance.

We consider it essential that Article 4, the form of which has been altered in deference to the criticism of the Japanese should be retained and this for the reasons you mention.

We are however willing that Article 7 should be replaced by a note as we do not consider it so important.

(密級機密)

Confidential.

THE MARQUESS OF LANSDOWNE TO SIR C. HARDINGE.

Foreign Office, September 6, 1905.

Sir,

I Inclose, for your Excellency's information, a copy of a new Agreement concluded between His Majesty's Government and that of Japan in substitution for that of the 30th January, 1902. You will take an early opportunity of communicating the new Agreement to the Russian Government.

It was signed on the 12th August, and you will explain that it would have been im-

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

INCLOSURE.

Agreement between the United Kingdom and Japan, signed at London, August 12, 1905.

\* A similar despatch was addressed to His Majesty's Ambassador at Paris.

参 考

第二回日英協約ト軍事協約ノ締結

(明治四十年五月二十九、三十兩日、英國海軍省ニ開カレタル日英軍事協商會議ニ於テ海軍大將男爵山本權兵衛ト元帥「サー、ジョン、フキツシャー」トノ間ニ議定セラレタル事項覺書)

一、日英同盟ノ目的ヲ達成センガ爲ニハ同盟海軍力ハ常ニ其時ニ於ケル外交政略上敵ト爲ルベキ虞アリト認ムル諸國ノ海軍力ニ匹敵スル如ク保持スルヲ要ス此點ニ關シ同盟國ノ一方ハ他方ニ對シ相互ニ有スル責任ノ存スルトコロヲ識認スルノ義務アリトス

二、兩同盟國ガ單一ノ國ヨリ攻撃ヲ受ルコトハ殆ンド有リ得ベカラザルコトト認メ得ベシ依テ同盟海軍兵力ノ標準ハ之ヲ二國以上聯合ノ敵ニ取ラザルベカラズ

三、日英同盟ノ追撃ヲ受ル場合ニハ兩國海軍ハ互ニ全力ヲ盡シテ緩急相援フヲ努ムベキハ勿論ナリト雖モ初ヨリ相互物資ノ援助ヲ期待スル如キコト無キヲ要ス

四、海軍作戦ノ目的ハ海上権ヲ獲得シ海上ノ交通ヲ安固ナラシムルガ爲メ敵艦隊ヲ擊滅スルヲ以テ第一トスルコトヲ茲ニ宣明ス

然レドモ時宜ニ由リテハ未ダ全ク上記ノ目的ヲ達成シ得ザルモ先づ陸軍大部隊ノ海上輸送ニ着手スルノ必要ヲ見ルコトアルベキヲ認ム

五、同盟軍作戦ノ畫策ハ敵我ノ對勢並ニ其ノ狀況ニ因リ變化スベキモノナレバ豫ノ茲ニ精細ナル策定ヲ爲シ置クモ事ニ臨ミ應用ヲ期シ難ク或ハ却テ凝固ノ不利ヲ來スコトアルベシ

然レドモ時ノ平戰何レタルヲ問ハズ同盟國艦隊ノ配備ハ宜ク蓋然聯合敵國艦隊ノ配置ニ應ジテ之ヲ定メザルベカラザルハ明ナルトコロニシテ之ガ配備ヲ爲スニ當リテハ一面ニ過多ナル勢力ヲ備フルガ爲メニ他ノ方面ニ弱點ヲ發起セシムルガ如キコト無キヲ要ス概言スルニ同盟利益ノ爲ニ英國ノ取ルベキ最良最有效ナル手段ハ歐洲ニ於ケル敵艦隊ノ其根據地ヨリ出ヅルヲ要擊シテ之ヲ擊破シ敵ヲシテ敢テ東洋ニ到ルヲ得セシメザルニ在リ

本會議ニ於テハ事ノ戰略上ニ涉ルモノト技術ニ關スルモノトニ論ナク今茲ニ精細ナル取極ヲ爲シ置クモ事ニ臨ミ殆ンド無效ニ屬スベキヲ慮リ茲ニハ兩同盟海軍間ニ既ニ存在スル親密ナル關係ヲシテ將來尙一層深厚ナラシムルノ手段ヲ講ジ且ツ兩軍間ニ於ケル情報意識ノ交換等ヲシテ毫モ遺憾ナカラシムルノ途ヲ取ルコトヲ最モ必要事ト認メ之ヲ勸告スルモノナリ

六、各同盟海軍ハ第二項ニ示セル如キ聯合ノ敵ニ當ランガ爲メ石炭、兵器、其他一切ノ軍需品ノ供給ニ關シ各個獨立ノ計畫準備ヲ爲スヲ要ス然レドモ此件ニ就テモ亦他ノ諸事項ト等シク相帮助スベキハ勿論ノコトトス

- 六、同盟信號書、同盟電信暗號書等ニ關シ明治三十五年ノ軍事協商ニ於テ決定シタル事項ハ將來尙之ヲ有效トス而シテ其改善ヲ圖ル爲メ兩國ヨリ各適當ナル海軍將校ヲ任命シ東京ニ於テ會合ヲ爲サシムベシ
- 七、譯報ノ交換ヲ繼續スベキコト而シテ望樓、無線電信所ニ關シテモ亦相互必要ナル事項ヲ告知スベキコトトス
- 八、戰時同一方面ニ作動スル同盟艦隊ハ意識情報ノ交換ヲ容易ナラシムル爲メ互ニ將校ヲ派遣シテ相互ノ幕僚タラシムベキコト而シテ此將校ハ信號員トシテ各相當ナル兵員ヲ引率スベシ
- 九、從前ノ通り日本海軍將校一名ヲシテ香港ヲ根據トシテ英國支那艦隊司令長官ノ幕僚ニ加ハラシメ英國艦船ノ移動等ニ關スル情報ヲ日本海軍官憲ニ致サシムルコト然ルベシト認ム是レ危機切迫ノ時ニ當リテハ特ニ其必要ヲ認ムルトコロナリトス
- 十、又日本艦隊ノ移動等ニ關スル情報ヲ英國支那艦隊司令長官ニ致スコトハ在東京英國大使館附武官之ニ任ズベシ
- 十一、上記各將校ヲシテ必要ナル情報ヲ蒐集スルコトヲ得セシメンガ爲メ其駐在地ノ官憲ハ各種ノ便宜援助ヲ與フルヲ要ス
- 十二、兩國海軍間ノ關係ヲ一層親密ナラシメンガ爲メ彼我海軍演習其他便宜ノ時機ニ於テ相互通報スベシ
- 十三、千將校ノ便乗ヲ許シ視察ヲ遂ゲシムルコト然ルベシト認メ推舉ス
- 十四、修理力ニ關スル要領ハ常ニ相互ニ告知シテ之ヲ知悉セシメ置カザルベカラズ
- 十五、船舶ノ入渠及修理ニ關シテ互ニ便宜ヲ與フルコト從前ノ如クナルベシ而シテ兩國海軍工廠ニ於ケル
- 十六、兩國海軍ノ輸送局ハ自國ノ徵發表中ニ在ル相當ナル船舶ニ關スル最近要領ヲ常ニ相通報スベシ
- 十七、海上輸送ニ關シ兩國陸軍當局者間ニ協定セントスル精細ナル事項ハ純粹ナル海軍問題ニ非ルヲ以テ本會議ノ範圍外トス
- 十八、必要ニ際シテハ英國ニ於テ香港、澎湖島間ノ海底電信線ヲ沈設シ日本ニ於テ威海衛ト日本幹線トノ連絡ヲ爲シテ各地間ニ直接連絡ヲ設定スルヲ可トス而シテ兩國ハ其國有及民有ノ電線ヲ以テ他方ノ官報ヲ傳送スルニ當リ互ニ優先取扱ヲ爲スベシ
- 十九、兩國海軍ノ協同作戦ニ於ケル指揮權問題ニ關シテハ左ニ記載スル主義ヲ取ルコトニ同意ス
- 二十、日英各艦隊ヲ各別ノ方面ニ獨立ニ作戦セシメ尙ホ敵ニ對シ同盟軍ノ優勢ヲ保チ得ル限りハ兩國艦隊ヲシテ然カセシムルヲ以テ最有效トスベシ即チ英國艦隊ハ歐洲海面（印度洋、大西洋ヲ含ム）ニ於テ作戦シ日本艦隊ハ絶東洋ニ於テ作戦スルヲ可トセン
- 二十一、然リト雖特ニ絶東ニ於テハ兩國艦隊同時ニ各別ノ目的ニ向ヒ相策應シテ作戦スルノ必要起ルコトアルベク或ハ又更ニ一步ヲ進メテ協同作戦ヲ爲スノ必要ヲ見ルニ至ルコトアルベシ
- 二十二、如斯場合ニ於テハ兩國司令長官ハ出來得ル限り相協議シテ作戦スベク而シテ各司令長官ヨリ同一方面ニ分派セラレタル分遣艦隊ノ總指揮官ヲ定ムルノ必要ヲ生ズルトキハ隨時之ヲ協定スルヲ可トス
- 二十三、平時戰時ヲ問ハズ一般ニ左ノ原則ヲ守ルヲ可トス

一外國ニ於テ其海軍勢力ヲ著シク一方ヨリ他ノ方面ニ移動スルコトアラバ之ニ應シ我同盟海軍ノ勢力モ亦直ニ之ヲ移動シテ之ニ拮抗セシムルヲ要ス以テ如何ナル時ニ如何ナル所ニ於テ戰爭ノ發起ベルコトアリトベルモ之ニ應ジ得ベキ相當ノ勢力ヲ各必要ノ地點ニ於テ有スルコトヲ保スルヲ得べラ

十一、本協定ヨリ發起シ來バキ部分的問題ニ關シテハ東京、倫敦ニ在ル大使館附海軍將校ヲ介シ日英兩國海軍省間ノ意見ヲ交換シ以テ之ヲ決定スベキセノトベ  
明治四十年六月四日倫敦ニ於テ

## SECRET

## MEMORANDUM REGARDING NAVAL CO-OPERATION IN WAR, DRAWN UP BY

BRITISH AND JAPANESE NAVAL OFFICERS AT A CONFERENCE

HELD AT THE ADMIRALTY, MAY 29-30, 1907.

1. To secure the objects of the Agreement it is essential that the allied naval forces should be maintained on an equal footing with those of time appear to indicate as the more possible opponents, and it is the duty of each party to the Agreement to recognise their obligations to the other in this respect.
2. It is considered improbable that the Allies would be attacked by any single Power, and it is the strength of some coalition therefore which should represent the standard of allied forces to be aimed at during the term of the Agreement.
- If the Anglo-Japanese Alliance is attacked, each of the Allies would naturally use its utmost endeavours to help the other, but neither side should count beforehand on any assistance from a material point of view from the other.
3. The Conference reiterates the principle that in order to secure sea communication—or in other words the command of the sea—the first objective in any war must be the destruction of the enemy's fleet; at the same time they recognise that in certain eventualities, it may become necessary for one of the Allies to transport large bodies of troops over-sea prior to the accomplishment of the abovementioned principle.
4. As the plan of operations to be adopted by the Allied Forces will depend upon their strength relative to that of the enemy, and upon the varying circumstances of war, it is not possible to lay down any hard and fast scheme, since such, if strictly adhered to, might lead to serious disadvantages.
- The Peace and War disposition of the allied fleets should however correspond to the disposition of the fleets of any probable combination. It should be accepted in principle that the allied forces should never be unnecessarily strong in one place, if they become thereby undesirably weak in another.
- Generally speaking, Great Britain could best guard the allied interests by destroying the ships of an enemy as they issued from their European bases, and thus prevent them from reaching any Eastern theatre of war at all.
- The Conference, therefore, consider that no useful purpose can be served by making any detailed agreement either on strategical or technical questions. They confine their recommenda-

tions to those points that will tend to make the intimate relations already existing between the Allied Forces closer still, and to making provision for the fullest information to be furnished mutually by the Allies.

5. In order to be prepared for such a coalition as is mentioned in paragraph 2, it is necessary that each ally should make its own arrangements for supply of coal, war material and stores independently of the other, but every facility and assistance should be mutually rendered in this respect as in others.

6. The arrangements in the 1902 agreement as to allied signal and cipher codes should hold good; suitable officers should be appointed by the allies to meet at Tokyo and confer with a view to their improvement.

The mutual interchange of Intelligence including all information on Look Out and Wireless Telegraph Stations should be continued.

To further this interchange, in the event of the Allied Fleets operating in the same locality, an officer, with sufficient men to act as signallers, should be appointed by each of the Allies to the staff of the other.

It is also considered desirable that a Japanese officer should, as heretofore, be attached to the Staff of the British Commander-in-Chief in China, with headquarters at Hong Kong; his duty being to keep the Japanese Naval Department fully informed of the movements of the British ships, &c., particularly during a period of strained relations.

The corresponding work on the part of the British will be performed by their Naval Attaché, Toto, who will keep the British Commander-in-Chief China informed of the movements of the Japanese ships, &c.

Every facility should be afforded these officers to obtain the necessary information.

7. In order to further the close relations existing between the two Navies, the Conference recommend that facilities be given for officers of the Allied Navies to be borne in their respective ships during manoeuvres, and at other times should it be considered desirable.

8. The British and Japanese Governments should exchange full information in advance as to their intended Building Programmes each year. The mutual facilities as regards docking and repairing should be continued, and each of the Constructive Departments should be kept informed of the repairing capabilities of the various Naval establishments of the other.

9. The Transport Departments of the two Navies should exchange full information as to the suitable vessels on their respective lists, and keep this information always up to date. Any detailed arrangements which the military representatives of the Allies may mutually desire to make regarding the over-sea transport of troops are outside the scope of the purely Naval questions dealt with in this Memorandum.

10. It is proposed that, should the necessity arise, Great Britain should connect Hong Kong with the Pescadores by cable, thus establishing direct communication with Japan, and that Japan should connect wai-hai-wei with their system. In every case the Allied Powers should give preference to each other in the transmission of official reports and messages over their national and private telegraphic systems.

11. With reference to the question of command in combined naval operations, the Conference agree with the principles enunciated in the following remarks:—

Subject to a sufficiency of force being maintained in each theatre of war, the rule may be safely insisted on that, for the most part, efficiency will best be attained by permitting the naval forces of each of the Allies to operate in separate fields, the fleets of Great Britain in European waters (and in the Indian and Atlantic oceans), those of Japan in the Far East.

It is recognised, however, that, more particularly in the Far East, cases are likely to occur in which it may be necessary for the fleets of the two Allies to take concerted action at the same time against separate objectives or even to act in combination.

In all such cases the Commanders-in-Chief of the Allied Forces should, as far as is possible, confer together, and should the necessity arise of appointing an officer to command an Allied Force, operating apart from their respective Commanders-in-Chief, it is considered that such officer should be selected by mutual agreement according to the circumstances existing at the time.

12. But the fundamental principle would apply equally in peace and war, that any considerable transference of the naval strength of a foreign Power from one quarter of the globe to another should forthwith be met by a similar redistribution of the naval strength of the Allies, so as to ensure that wherever and whenever a war might break out the fleet of one or the other of the Allies would be present in adequate strength to cope with the situation.

13. Questions of detail arising out of this Agreement will be settled by an exchange of views between the Japanese Naval Department at Tokio and the British Admiralty in London through the medium of their respective naval attachés.

(1) 第二回日英協約（明治四十四年）

(1) 英米仲裁裁判條約締結問題ト日英協約——第二回日英協約ノ發端

抑々第二回日英協約ノ發端ハ英米仲裁裁判條約ト日英同盟条約ト抵觸問題ニアリ。即チ一八九七年一月十一日調印セラントル英米仲裁裁判條約（ボーンズフォート・オルニー條約）ハ米國上院ノ否認ノタメ不成立ニ終リタルモ、明治四十三年ニ至リ、兩國間ニ再び右ノ如キ條約締結ノ氣運ヲ生ジタル處、若シ英米間ニ斯ル仲裁條約ヲ締結スルニ於テハ第二回日英協約ニ抵觸スル處アルニ鑑ミ、英國政府ハ右仲裁條約中ニ現在ノ日英同盟條約ト抵觸セザル限リト云フ條件ヲ附スルコトトシ而シテ將來日英同盟ノ期限到来後ニ之ヲ繼續スルコトアルベキ場合ニハ何等本仲裁條約ニ抵觸スル處ナキ様同盟條約ヲ改更スルコトトナスカ、或ハ此際日本モ該仲裁條約ニ加盟セシメテハ如何ト米國ニ提議スルカ何レカニ決セント思考スル旨明治四十三年九月二十六日在英帝國加藤大使ガ外務大臣「サー・エドワード・グレー」ト會談ノ際同大臣ヨリ内話トシテ申入レアリタリ。

(2) 帝國政府案ノ提示  
帝國政府ハ英國外務大臣第二案即チ日米間ニ無制限仲裁裁判條約ヲ締結スルコトニ付テハ仲裁裁判ソノモノニ對シテ危惧ヲ有スルヲ以テ賛成シ得ズ、第一案ノ如ク英米仲裁裁判締結ノ際に於テハ先づ同盟條約有效期間内ハ右仲裁條約中ニ同盟條約ト抵觸セザル限リノ主旨ヲ加フルコトナシ置キ

100

追テ同盟條約更新ノ際ニ至ラバ同條約ニ適當ノ更正ヲ加ヘ米國一國ヲ對手トスル場合ニ於テ同條約ヲ適用セザルノ意義ヲ明ニシ以テ日米ノ葛藤ニ引入レラルコトナキヤノ英國側ノ危懼ヲ除却シ同盟ノ更新ニ便ナラシムルコトヲ適當ナリト認メヨノ旨在英加藤公使ヲ通シヨノ趣旨ヲ英國外務大臣ニ回答セシメタリ。一方我方ニ於テモ第二回協約締結以來東洋ノ形勢ニ多大ノ變轉ヲ來シ、韓國併合ノ如キ事實ヲモ生ジタルヲ以テ同盟條約ノ正文ニ多少ノ修正ヲ加フルヲ適當ト認メタリ。

三月二十日在英帝國大使ガ英國外務大臣ト會議ノ際右改訂ノ根本方針ニ關シ兩者ノ意見合致シタルヲ以テ、帝國政府ハ大體左記ノ方針ニ依リ英國政府トノ間ニ改訂談判ヲ開始スルニ決シタリ。

一、新同盟協約ノ期限ヲ調印ノ日ヨリ十ヶ年トナスコト

今回協約改訂ノ大目的ハ期限ノ延長ニ在ルヲ以テ新協約ノ期限ハ調印ノ日ヨリ起算シ改メテ十ヶ年トナスコトヲ必要トス

二、同盟協約ガ締盟國ノ一方トノ間ニ一般仲裁裁判條約ヲ有スル國ニ對シ適用ナキ旨ノ規定ヲ追加スルコト

本條項ノ目的ハ米國ヲ協約適用範圍外ニ置クノ主旨ナルコト勿論ナリト雖協約文中ニ於テ特ニ米國ヲ指定スルハ形式上穩カナラズノミナラズ同盟協約ノ改訂ハ或ハ英米仲裁裁判條約ノ成立ヲ豫期シ其締結前ニ之ヲ行フコトトナルヤモ料リ難キヲ以テ行文上一般的ノ規定トナシ置クコトヲ得策トス

三、現行協約第三條及第六條ヲ削除スルコト

現行協約第三條ハ韓國ニ關スル規定ニシテ併合終了ノ日ニ於テ最早其必要ナク第六條ハ日露戰爭ニ關スル規定ニシテ是亦必要ナキニ付之ヲ削除スルヲ當然トス

四、英國ニ於テ帝國ガ其國境附近ニ於テ有スル特殊利益ヲ承認スル旨ノ規定ヲ追加スルコト

現行協約第四條ニ掲ゲタル印度國境附近ノ特殊利益ニ關スル規定ハ本來英國ガ帝國ノ韓國ニ於ケル特殊ノ地位ヲ承認スルノ代價トシテ設ケラレタルモノナル處韓國併合ノ爲最早韓國ニ關スル規定ヲ要セザル同時ニ併合ノ結果帝國ハ亞細亞大陸ニ於テ領土ヲ有シ英國ノ印度ニ於テ有スル地位ニ酷似スル關係ヲ生ジタル次第ナルヲ以テ印度國境ニ關スル規定ノ對照トシテ出來得ル限り英國ヲシテ我國境地方ニ於ケル特殊利益ヲ承認セシムルヲ努ムルコトヲ適當トス然レドモ本件ハ英國政府ニ於テ或ハ之ヲ因難トズル事情アルヤモ計り難キノミナラズ今回同盟協約ヲ改訂セントスル大目的ノ期限ノ延長ニ在ルコト前記ノ如クナルヲ以テ英國政府ニ於テ到底本件ニ同意スルコト能ハザルコト明白ナルニ至ルトキハ我ニ於テ之ヲ固執セザルコトヲ得策ナリトス

右ノ方針ニ基キテ起草シタル帝國側協約案左ノ如シ。

日英協約案

日本國政府及大不列顛國政府ハ「一千九百五年八月十二日」英協約ニ掲ケタル地域ニ於テ近時起生シタル所ノ重大ナル變遷ニ鑑ミ右變遷ニ伴ヒ該協約ヲ改訂スルハ全局ノ靜寧安固ニ資スヘキコトヲ確信シ並重ネテ兩國政府ノ平和的意志ヲ表明セムコトヲ希望シ前記協約ニ代ヘ之ト同シク

(イ) 東亞及印度ノ地域ニ於ケル全局ノ平和ヲ確保スルコト

(ロ) 清帝國ノ獨立及領土保全並清國ニ於ケル列國ノ商工業ニ對スル機會均等主義ヲ確實ニシ

以テ清國ニ於ケル列國ノ共通利益ヲ維持スルコト

(ハ) 東亞及印度ノ地域ニ於ケル兩締盟國ノ領土權ヲ保持シ並該地域ニ於ケル兩締盟國ノ特殊利益ヲ防護スルコト

ヲ目的トスル左ノ條款ヲ約定セリ

第一條（現行ニ同ジ）

日本國又ハ大不列顛國ニ於テ本協約前文ニ記述セル權利及利益ノ中何レカ危殆ニ迫ルモノアルヲ認ムルトキハ兩國政府ハ相互ニ充分ニ且隨意ナク通告シ其ノ侵迫セラレタル權利又ハ利益ヲ擁護セムカ爲ニ執ルヘキ措置ヲ協同ニ考量スヘシ

第二條（現行ニ同ジ）

兩締盟國ノ一方カ挑發スルコトナクシテ一國若ハ數國ヨリ攻撃ヲ受ケタルニ因リ又ハ一國若ハ數國ノ侵略的行動ニ因リ該締盟國ニ於テ本協約前文ニ記述セル其ノ領土權又ハ特殊利益ヲ防護セムカ爲交戰スルニ至リタルトキハ前記ノ攻撃又ハ侵略的行動カ何レノ地ニ於テ發生スルヲ問ハス他ノ一方ノ締盟國ハ直ニ來リテ其ノ同盟國ニ援助ヲ與ヘ協同戦闘ニ當リ講和モ亦双方合意ノ上ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第三條（前段ハ大要現行第四條ニ同ジ）

大不列顛國ハ印度國境ノ安全ニ繫ル一切ノ事項ニ關シ特殊利益ヲ有スルヲ以テ日本國ハ前記國境ノ附近ニ於テ大不列顛國カ其ノ印度領地ヲ擁護セムカ爲必要ト認ムル措置ヲ執ルノ權利ヲ承認ス之ト同シク日本國ハ其ノ國境ノ安全ニ繫ル一切ノ事項ニ關シ特殊利益ヲ有スルヲ以テ大不列顛國ハ前記國境ノ附近ニ於テ日本國カ其ノ領土ヲ擁護セムカ爲必要ト認ムル措置ヲ執ルノ權利ヲ承認ス

第四條（大要現行第五條ニ同ジ）

兩締盟國ハ孰レモ他ノ一方ト協議ヲ經シテ他國ト本協定ニ害アルヘキ別約ヲ爲サナルヘキコトヲ約定ス

第五條（新條）

本協約ハ兩締盟國ノ一方カ他ノ一方ト一般仲裁裁判條約ヲ有スル第三國ト交戰スル場合ニ之ヲ適用セサルモノトス但シ他ノ一國若ハ數國カ該第三國ノ爲交戰ニ加ハリ又ハ該第三國カ同盟國ノ一方ト交戰中ノ他ノ一國若ハ數國ニ加盟スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第六條（現行第七條ニ同ジ）

本協約ハ前記一千九百五年八月十二日ノ協約ニ代ルモノニシテ調印ノ日ヨリ直ニ實施シ十ヶ年間效力ヲ有ス右十ヶ年ノ終ニ至ル十二ヶ月前ニ兩締盟國ノ孰レヨリモ本協約ヲ廢棄スルノ意思ヲ通告セサルトキハ本協約ハ兩締盟國ノ一方カ廢棄ノ意志ヲ表示シタル當日ヨリ一ヶ年ノ終ニ至ルマテ引續キ效力ヲ有ス然レモ若右終了期日ニ至リ同盟國ノ一方カ現ニ交戰中ナルトキハ本同

盟ハ講和ノ成立ニ至ルマテ當然繼續スヘシ

右帝國案中第五條末段、即チ、一般仲裁裁判條約ヲ有スル第三國トノ交戰ニ際シ他ノ國ガ該國ト加盟スルカ又ハ該第三國ガ他國トノ交戰ニ加盟スル場合ヲ例外トスルノ規定ニ對シ在英加藤大使ハスカル例外規定ヲ設クルニ於テハ、今回ノ改訂ノ動機トナリタル仲裁裁判ヲ絕對的無制限ノモノタラシメントスル目的ニ反ス、トノ理由ニテ削除方ヲ請訓シ來レルモ、外務大臣ハ第五條末段ノ場合ハ何レモ當然仲裁裁判條約ノ實行ヲ見ル能ハザル場合ニ屬シ之ガ爲特ニ仲裁裁判條約中ニ條件ヲ付シ置クコトヲ要セザルヤニ思考セラル。即チ今假リニ日米兩國ノ場合ヲ想像シ日本ト他國トノ戰爭ニ際シ米國ガ右他國ト加盟セシトゼンカ同盟協約ノ結果英國ハ日本ト共ニ當然右他國ヲ敵トシテ交戰ニ從事スペキモノナルヲ以テ米國ニ於テ自ラ進シテ日英兩國ノ敵ト加盟スルハ英國ニ對シ英米仲裁裁判條約違反ノ行爲ヲ實行スルモノニ外ナラズ。日米兩國交戰ノ場合ニ於テ他國ガ米國ト加盟スルキモ亦之ニ同シク右他國ガ日本ノ敵トナルニ依リ當然英國ノ敵トナルハ當初ヨリ明カナル事實タルニ拘ラズ米國ニ於テ進シテ該國ノ加盟ヲ受諾スルトキハ自ラ英米仲裁裁判條約ノ違反ヲナスモノナリトス。斯クノ如ク第五條末段ノ場合ハ何レモ仲裁裁判條約ノ違反ヲ構成スルモノナルヲ以テ固ヨリ同條約ニ於テ之ヲ豫見シテ何等ノ規定ヲ設クベキモノニアラズト思考ス。之ト同時ニ第五條末段ノ規定ヲ削除スルモ同盟協約ノ解釋上結局該規定ノ趣旨ト同一ナル結果ニ達スベキ次第ナリト雖前記ノ如ク本件ハ我ニ取り頗ル重大ナル問題ニ屬シ未定又ハ不明ノ儘ニ之ヲ放置スルヲ得ザルモノナルニ依リ特ニ明文ヲ以ア之ヲ決定セントスル義ナリト訓令セリ。

右ニ關シ在英加藤大使ハ英国外務大臣ノ注意ヲ促シ置クヲ至當ナリト認メ、四月十三日外務大臣ニ面會シ大使一已ノ意見トシテ話シ私案トシテ第五條案文ヲ示シタルニ同大臣モ私案トシテ左記案文ヲ示シ、「仲裁裁判條約ヲ有スル第三國ト開戦ノ場合ニ於テ同盟條約ノ效力ヲ全ク停止スル貴案ヨリハ拙案ノ方優レリ思フ其ノ故ハ假令戰爭ニハ加ハラザルモ外交上等種々ノ援助ヲ與ヘ得ル場合モ専カラザルベケレバナリ又該第三國ニ他國ガ加ハルトキハ其ノ國ハ同盟双方ノ敵ナリ又第三國ガ他國ニ加ハルハ既ニ同盟双方ト戰爭中ノ國ニ加ハル譯ニテ事實有リ得ベカラザルコトナリ自分ノ案ニ依レバ大抵夫レ等ノ事モ包含セラルカト思フモ尙相當ノ時機ニ於テ御相談致スベシ」ト述べタリ。

Should either of the High Contracting Parties conclude Treaty of Unlimited Arbitration with another Power, it is agreed that nothing in this Agreement (the Alliance) shall entail upon either of them an obligation to go to war with the Power with whom such treaty of arbitration has been concluded.

右英國外務大臣ノ考案ニ對シ帝國政府ハ「仲裁裁判條約ヲ有スル第三國トノ戰爭ニ際シ全然同盟協約ノ效力ヲ停止セズ單ニ締盟國ノ一方ニ對シ交戰ニ參加スルノ義務ヲ解除スルコトトナスベシトノ意見ハ至極尤ノ義認メラル之ハ同時ニ締盟國ノ一方ガ第三國トノ間ニ締結セル仲裁裁判條約ハ對手ノ違背等ノ爲一時其效力ヲ有セザルコトアルベキヲ以テ該條約ノ現ニ效力ヲ有シ居ル場合ナルコトヲ明ニスル爲ニ適當ノ文字ヲ用ユルコト必要ナリト認」此意旨ニ我方改訂案第五條末段ノ意味ヲ加ヘテ左ノ如キ甲案ヲ作り、更ニ英國外務大臣ノ私案ヲ基礎トシテ同一主旨ヲ以テ乙案ヲ作り、

之ヲ在英加藤大使ニ送附シタリ。

甲 案

It is agreed that nothing in this Agreement (the Alliance) shall entail upon either High Contracting Party an obligation to go to war with any third Power with which it has in force a Treaty of Unlimited Arbitration unless such third Power joins or is joined by one or more other Powers in war against the other High Contracting Party.

乙 案

Should either High Contracting Party conclude a Treaty of Unlimited Arbitration with a third Power, it is agreed that nothing in this Agreement (the Alliance) shall entail upon such Contracting Party an obligation to go to war with the Power with whom such Treaty of Arbitration is in force, unless such third Power joins or is joined by one or more other Powers in war against the other Contracting Party.

五月八日在英加藤大使ガ英國外務大臣ト西會ハ既前出英國外務大臣起案(在英加藤大使來電)ヲ「エクスベーネ」ニ於テ吟味シタルモノナリトテ同大臣ガ示シタルモノハ其内容ハ毫モ變化ナク只之ヲ現行同盟條約ノ追加條約トシテ其ノ形式ニ改メ居ルニ過ギザルニ付帝國大使ハ貴我双方ノ考ハ新條約ヲ締結スルニアリ、且現行條約中修正ヲ要シ又ハ不要ニ歸シタルモノアルヲ指摘シタリ。尙右談話中過日帝國大使ガ一個ノ意見トシテ述べタル第三國ガ米國ニ加盟シテ戰ヒ若ハ米國ガ第三國ニ加盟スル場合ヲ例外トスルコトハ帝國政府ニ於テモ同意ナルコトヲ確メタルガ右ニ關スル外務大臣ノ意見如何ト問ヒタルニ第三國ガ加盟スル場合ハ該國ハ英國ノ敵ナルガ故英國ハ之ト戰フベタ

米國ガ第三國ニ加盟スルガ如キコトハ到底アル間敷コトナリト答ヘタルニ付帝國大使ハ第一ノ場合ニ於テ英國ガ第三國ト戰フコトハ宜キモ帝國政府ノ意見ニテハ米國トモ戰フコトヲ要スル趣意ニテ且實際上第三國ト米國ト分ケテ戰闘スルコト能ハザル場合モアルベク第二ノ場合ニ於テハ米國ハ英國ニ對シテハ戰闘フナサザルベキモ日本軍ノミヲ攻擊シ得ル場合ナシト限ラズ。斯ル場合ニ於テハ如何ト問ヒタルニ外務大臣ハ若我意見ノ如ク例外ヲ設クルトキハ英米仲裁々判條約中ニモ同ク例外ヲ設ケザレバ得ザルコトナリ甚ダ好マシカラザルノミナラズ其ノ書現シ方モ亦極メテ困難ナリ。乍去帝國政府ニ於テ強ヒテ希望セラルニ於テハ尙何分ノ考量ヲ加フベシト言ヘリ。

在英加藤大使ハ右報告ノ後帝國政府草案ニ對シ左ノ如ク修正スルコトヲ適當ト認ムル旨請訓シ來レリ。

第一 前文ハ東亞ノ事態ノ變化ノミヲ述べテ今回改訂ノ他ノ理由タル仲裁々判條約ノ件ニ何等言及スル所ナシ而カモ之ニ言及スルコトハ好マンカラザルニ付之ヲ現行條約ノ前文ト同様ノ形式ニ改ムアコト

第二 草案第三條ハ其ノ儘提出シ成ルベク英國政府ヲシテ承諾セシムル様努ムベシ乍去若英國政府ニ於テ之ガ全廢ヲ主張スルトキハ我ニ於テ之ガ存置ヲ強フルノ理由ナキガ故ニ已ムヲ得ス廢止ニ同意スルコト尤草案第三條 special interests ナル文字ハ或ハ滿洲ニ於ケル特殊利益ヲ包含セラル趣意カト察スルモノ本來國境ノ安全ニ關スルコトナルニ付滿洲ニ於ケル特殊利益其モノヲモ亦意味スルコトハ相成間敷却テ現行條約ノ通 a special interest (單數) ヲ用キラル方文法上適當ナラント存ズ就テハ右ノ如ク修正スルコト

第三 草案第五條ハ貴電ノ通ニ改メ unless 以下ハ削除スルコト蓋外務大臣ノ語氣ニ察シ且仲裁々判條約ノ主眼トシテ英米兩國間ニハ將來絶對的ニ戰爭ヲ爲サザルコトヲ規定スル同大臣ノ意見ナルノミナラズ米國駐劄英國大使ト國務長官トノ間ニハ前記ノ如キ問答モアリテ要スルニ同盟條約ヲ以テ聊タリトモ仲裁々判條約ニ抵觸セシメズ英米關係ヲシテ絶對的ニ平和ナラシムル趣意ナルニ付テハ之ニ例外ノ場合ヲ置クコトハ到底英國政府ノ同意ヲ得ル望ナケレバナリ就テハ unless 以下ハ是非削除ニ御同意アリタク若強テ提出ヲ希望セラルニ於テハ左様致スベキモ先方ニ於テ同意セズバ結局撤回スルコトニ御決心アリタシ

第四 前文ヲ前陳ノ通改ムニ付テハ草案第七條冒頭ノ規定ヲ要セズ同條ヲ現行條約第八條ト全然同一ニシ唯 subject to provisions of Article VIヲ削除スルコト  
右在英加藤大使ノ請訓ニ對シ帝國政府ハ講究ノ結果左記ノ通決定シタル旨訓令ヲ發シタリ。

(第一) 今回協約ヲ改訂スルコトトナリタル事由ハ成ルベク之ヲ協約前文中ニ記述シ置ク方適當思考スル處草案文中ノ Pacific Aims 云々ノ文字ハ暗ニ仲裁裁判條約ノ件ニ言及スルノ主旨ナリシト雖御來示ノ次第モアリシニ依リ更ニ考究ヲ遂グ前文ハ別電ノ通之ヲ修正スルコトナシタリ。

(第二) 草案第三條ハ英國政府ニ於テ之ガ削除ヲ主張スルトキハ我ニ於テ其存置ヲ強ユルヲ得ザルハ御來示ノ通ナリト雖帝國政府ノ希望ガ該條ヲ存置スルニ在ルハ申ス迄モナキ義ニ付成ルベク右存置ノ目的ヲ達スル様致シタク special interests の文字ガ満洲ニ於ケル特殊利益其モノヲ意味セザクハ御來示ノ通ニ有之ヲ複數トナセバ何等特別ノ意味ヲ有セザル次第ニ付右ハ御意見ノ通現行協約ノ文字ヲ製ヒ a special interest トナスベシ尤モ frontiers の文字ハ草案ノ通之ヲ複數トナシ置ク様致シタシ

(第三) 草案第五條ニ關シ縷々御來示ノ次第ハ當方ニ於テ十分御主意ヲ諒セリト雖曩キニ申進シタル通同條末段ノ場合ニ於ケル同盟ノ效力問題ハ帝國政府ニ於テ最モ重要トスル事項ニ有之之ヲ不明ノ儘ニ措シ置クコト能ハザル義ニ付右ニ關スル帝國政府ノ所見ハ是非共之ヲ英國政府ニ披瀝シテ其考慮ヲ侃ガシ併セテ之ニ對スル同政府ノ意見ヲ確メ置クコトヲ必要トスル次第ナリ而シテ英國外務大臣ノ所說ヲ見ルニ本件ニ關スル同大臣ノ考究ハ尙未ダ盡ナザル所アルヤニ認メラルニ付我ニ於テハ今一應前來ノ電報ニ記載セル帝國政府ノ所見ヲ同大臣ニ説明シ第三國ガ米國ニ加盟スル場合ト米國ガ第三國ニ加盟スル場合トノ二者ニ區別シ明確ニ英國政府ノ意見ヲ承知スル様致シタク右ノ結果帝國政府ニ於テ更ニ本件ニ考慮ヲ加フルノ必要アルヲ認メタルトキハ改メテ議ヲ定メ申進スルコトアルベシ第五條ノ案文ハ往電ノ分ヲ我提案致シタキ考ナレドモ若シ往電ノ分ヲ以テ之ニ代ユルヲ得策ト認メラルトキハ右様致スモ差支ナシ

(第四) 草案第七條冒頭ノ規定ハ念ノ爲之ヲ設ケタルモノニシテ強テ其必要アル義ニアラザルヲ以テ該條ハ御意見ノ通之ヲ修正スルコト致スベシ

之ト同時ニ五月十六日ノ閣議ニテ決定シタル帝國政府協約案ヲ在英加藤大使ニ送附シ、之ヲ英國政

府ニ交付スベキコトヲ命シ、同大使ハ五月十七日英國外務大臣ニ交付セリ(第五條ハ前出乙案ヲ取

レリ)。右協約案ノ前出帝國政府案ト異ルトコロ左ノ如シ。

一一〇

日本國政府及大不列顛國政府ハ一千九百五年八月十二日ノ日英協約締結以來事態ニ重大ナル變遷アリタルニ顧ミ其ノ變遷ニ伴ヒ該協約ヲ改訂スルハ全局ノ靜寧安固ニ資スベキコトヲ確信シ前記協約ニ代ヘ之ト同シク

第一條 前案ニ同ジ

第二條 前案ニ同ジ

第三條 前案ニ同ジ

第四條 前案「本協約ニ害アルヘキ別約」ヲ「本協約前文ニ記述セタル目的ヲ害スヘキ別約」ニ改ム

第五條 前案「本協約ハ兩締盟國ノ一方カ他ノ一方ト一般仲裁裁判條約ヲ有スル第三國ト交戦スル場合ニ之ヲ適用セナルモノトス但シ他ノ一國若ハ數國カ該第三國ノ爲交戦ニ加ハリ又ハ該第三國カ同盟國ノ一方ト交戦中ノ他ノ一國若ハ數國ニ加盟スル場合ハ此ノ限ニ在ラス」ヲ「本協約ハ締盟國ノ一方ト第三國トノ間ニ無制限仲裁裁判條約ノ有效ニ存續スル場合ニ於テ該締盟國ニ對シ右第三國ト交戦スルノ義務ヲ生セシムルコトナカルヘシ但シ右第三國カ締盟國ノ他ノ一方ト別國トノ交戦ニ加ハリ又ハ別國カ締盟國ノ他ノ一方ト右第三國トノ交戦ニ加ハル場合ハ此ノ限ニ在ラズ」ニ改ム

第六條 前案ニ同ジ

第七條 前案「本協約ハ前記一千九百五年八月十二日ノ協約ニ代ルモノニシテ調印ノ日ヨリ」ヲ「本協約ハ調印ノ日ヨリ」ニ改ム

(3) 英國政府ノ修正案及ニ對スル帝國政府ノ意見提示並ニ條約ノ調印

六月二十六日在英加藤大使ト英國外務大臣ト會談セル際、英國外務大臣ハ我方對案ニ對シテ左ノ如キニ二箇ノ修正ヲ加ベタキ旨ヲ述べタリ。

第三條 元來印度國境ノ事ハ現行條約ニ韓國ノ事ヲ入レタル爲之ニ對シテ設ケタルモノナルガ若シ之ヲ存シ同時ニ日本國境云々ノ規定ヲ設ケルトキハ一般ニ滿洲ヲ意味スルモノト解釋シ現行條約ハ韓國ヲ日本ニ與ヘ新條約ハ更ニ之ヲ滿洲ニ進ムルモノナリト猜シ甚ダ不良ナル結果ヲ生ズベシ一方印度ノ事ハ露國トノ關係今日ノ如クナリタル以上當初此ノ規定ヲ設ケタル理由ハ最早存セザルモ涅槃<sup>ネバーン</sup>不丹等清國ノ關係上英國ニ取り尙必要ナキニアラズ然レドモ右ハ同盟條約前文中ニ盡キ居リ日本ノ方ノ事モ同様ト考フルニ付本條ハ全然削除シタシ

第五條 unless 以下ハ或ル場合ニハ尙米國ト戰フコトヲ約スルモノニシテ帝國政府斷テノ御希望ニ付篤ト詮議ヲ遂ゲタルモ遺憾ナガラ同意シ難シ蓋實際ニ就キテ謂ヘバ若シ日米兩國間ノ戰争ニ獨逸等ガ參加セントスル場合ニハ英國ハ海軍ヲ以テ之ヲ防グコト困難ニアラズ然レドモ右ハ同盟條約前文中ニ盡キ居リ日本ノ方ノ事モ同様ト考フルニ付本條ハ全然削除シタシ

自ラ「イニシアチーヴ」ヲ取ルモノニシテ其ノ結果ニ對シテハ責ニ任ゼザルベカラズ斯ル場合ハ實際ノ解決ニ任ス外ナク從テ unless 以下ハ是非削除ヲ希望ス尤 unlimited ト改メタキ意見ナルガ日本ハ單ニ東洋ニノミ利益ヲ有スルモ英國ハ其ノ關係廣キガ故ニ若シ他ノ諸國ト

種々仲裁裁判條約ヲ結ビ日英同盟ガ悉ク此等諸國ニ對シテ效力ヲ有セザルコトナルノ恐ラ日本ニ於テ抱カルニ於テハ或ハ本條ヲ左ノ通り修正シテ米國丈ヲ除外スルモ差支ナシ。

As Great Britain is engaged in negotiating a treaty of general arbitration with the United States, it is argued that nothing in this Agreement shall entail upon Great Britain an obligation to go to war with the United States.

右英國政府ノ修正ニ對シ帝國政府ハ第三條全部ノ削除ニ同意シ、又第五條但書ノ事項ニ關シテモ英國外務大臣ノ説明ニ依リ同國政府ノ意志明瞭トナリ此上該但書ノ主旨ニ付是非共明文ヲ設ケルノ必要ナシト認メ右但書ノ削除ニ同意スルモ、英國外務大臣ノ説明ハ成ルベク之ヲ文書ニ残シ置キ度キコトヲ希望シ、在英加藤大使ヲシテ前記修正同意ノ旨ヲ回答セシムアルト共ニ左ノ如キ覺書ヲ同大臣ニ交付シ、成ルベク先方ヨリ文書ヲ以テ了承ノ旨ノ回答ヲ得ベキ旨ヲ訓令シタリ。又同條中「無制限」ノ文字ヲ「一般的」ニ改ムコトニモ異存ナキヨト、又英國外務大臣ハ帝國政府ニ於テ英國ガ米國以外ノ諸國ト仲裁裁判條約ヲ締結スルコトニ付疑惧ヲ懷クベキヤフ懸念スルモ、一般的仲裁裁判條約ノ締結ノ如ク同盟ノ效力ニ影響ヲ及ボスベキ事項ニ付テハ明文ノ有無ニ拘ラズ兩締約國間ニ於テ互ニ打合セラヌベキコト勿論ナリト思考スルヲ以テ帝國政府ハ此了解ノ下ニ英國政府ノ誠意ニ信頼シ右ニ關シ何等ノ疑惧ヲモ有セザルコトヲ英國外務大臣ニ言明スベキコトヲ命ジタリ。

### 覺書案

同盟國ノ一方カ第三國ト一般仲裁裁判條約ヲ締結シ其ノ有效ニ存續スル場合ヲ日英同盟協約ノ適用ヨリ除外セムトスルニ當リ帝國政府ハ本件ヲ規定スル條項ニ但書ヲ設ケ右第三國ニ於テ同盟國ノ他ノ一方ト交戦スル別國ニ加擔スルトキ又ハ別國ニ於テ同盟國ノ他ノ一方ト交戦スル右第三國ニ加擔スルトキハ前記除外例ニ準據スベキ限ニ在ラザルコト（即チ此ノ場合ニハ同盟協約ノ原則ニ依リ同盟國互ニ相助クテ共同交戦ニ從事スベキコト）トナスノ必要ヲ認メタリ然レドモ帝國政府ハ協約中何等無用ノ規定ヲ設ケムコトヲ希望スルモノニ非ルガ故ニ左ノ二點ニ付爾同盟國ノ意思相互ニ疏通シ右ノ但書ヲ設ケズモ實際問題ノ發生スル場合ニ能ク之ニ處スルニ足ルベシトノ英國政府ノ所見ナルニ於テハ帝國政府ハ該但書ノ全部削除ニ同意スルニ躊躇セズ

一、同盟國ノ一方タル甲國ト一般仲裁裁判條約ノ關係ヲ有ゼル別國ガ右條約ノ關係ヲ有スル第一國ト連合シテ同盟國ノ他ノ一方タル乙國ニ對スル交戦ニ加ハラムトスルトキハ甲國ハ右ノ連合ヲ防止セムガ爲必要ナラバ海軍力ヲモ用ヒテ極力其ノ目的ノ貫徹ニ盡クスノ義務ヲ有スルコト

二、同盟國ノ一方タル甲國ト一般仲裁裁判條約ノ關係ヲ有スル第三國ガ別國ト連合シテ同盟國ノ他ノ一方タル乙國ニ對スル交戦ニ加ハル場合ニ其ノ戰争ニシテ甲國ガ乙國ヲ援助スベキ義務アルモノナルトキハ右第三國ノ行動ハ同盟國双方ニ對スル攻擊ト看做スノ外ナク從テ右第三國ハ斯ノ如キ行動ニ付其ノ必然ノ結果ヲ自ラ負擔スベギコト

右英文

### MEMORANDUM.

In excluding from the operation of the Alliance Agreement, any third Power with which

either of the Allies has in force a Treaty of General Arbitration, the Imperial Government had considered that it would be necessary to insert in the clause bearing on the subject, a proviso to the effect that such exclusion should be inoperative in case such third Power joined or was joined by one or more other Powers, in hostilities against the other Ally. But the Imperial Government have no wish to introduce into the Agreement any unnecessary stipulations.

Accordingly they are quite prepared to agree to the entire suppression of the proviso in question, if His Britannic Majesty's Government are well satisfied that the eventualities which it was intended to guard against, are already foreseen and fully met, without such proviso, it being the understanding of the two Allies, that (1) in case a third Power, not having in force a Treaty of General Arbitration with one of the Allies, should contemplate joining with a Power having in force such a Treaty in war against the other Ally, it would be incumbent on the Ally having such Treaty, to exhaust its best efforts, to the extent of using its Naval Forces, to prevent such contemplated coalition, and (2) in case a third Power, having in force a Treaty of General Arbitration with one of the Allies, should join with another Power, against the other Ally, in war in which the Ally having such Treaty is under obligation to take part, the action of such third Power could only be construed as an attack against both Allies and such third Power would naturally have to take necessary consequences of such action.

右訓令ニ基キ在英加藤大使ハ七月四日英國外務大臣ニ面會、覺書ヲ手交シタルニ、英國外務大臣ハ七月七日ノ會談ニ於テ左ノ如ク述べタリ。

「ハセモノニシテ當國國民ノ感情ニ一致セズ就テハ右ハ止メラントク閣僚一同同意見ナリ蓋第三國ガ加ハル場合ニハ英國ハ無論之ヲ防グベク第三國ニ加ハルコトハ實際ニハアルシト思考セズ就テハ覺書交換ヲ廢シ單ニ原案ヨリ但書ヲ削除スルカ又ハ修正案ノ冒頭ヲshould Great Britain conclude メンタルヲ採用スルカ若ハ左ノ案即チ It is agreed that nothing in this Treaty shall entail upon either Great Britain or Japan an obligation to go to war with the United States.

トマルカ其ノ一ヲ採ラレタシ蓋第三案ハ第二案ヲ雙務的ニ改メタルモノニシテ最簡明ニ日本ニ取リテモ最良案ナランカト考ヘ居レリ何ナレバ英國ハ佛國其ノ他トモ追々仲裁裁判條約ヲ結ブコト或ハ可有之其ノ都度日本國ハ同盟ノ效果ヲ及ボス範圍縮少スルカノ如ク感セラルベキガ故ニ第三案ノ通り米國ノミヲ除外シ置ク方好都合ニアラザルカ尤他國ト仲裁裁判條約ヲ結ブモ歐洲強國ハ何レモ或國際團體ニ屬スルガ故ニ米國ノ場合ト異レリ」

茲ニ於テ帝國政府ハ覺書ノ交換ヲ見合セ、右第三案即チ我原案第五條ヨリ其但書ヲ削除シタルモノヲ採用スルコトニ決定シ、右ヲ以テ彼我ノ間ニ條約案ノ最後の確定ヲ見ルニ至リ、一一重要ナラザル字句ヲ修正ノ上七月十二日調印ヲ了セリ。協約全文左ノ如シ。

日本國政府及大不列顛國政府ハ千九百五年八月十二日ノ日英協約締結以來事態ニ重大ナル變遷アリタルニ顧ミ該協約ヲ改訂シ以テ其ノ變遷ニ適應セシムルハ全局ノ靜寧安固ニ資スヘキコトヲ信シ前記協約ニ代リ之ト同シク

一一六

(イ) 東亞及印度ノ地域ニ於ケル全局ノ平和ヲ確保スルコト  
清帝國ノ獨立及領土保全並清國ニ於ケル列國ノ商工業ニ對スル機會均等主義ヲ確實ニシ以テ清

(ロ) 國ニ於ケル列國ノ共通利益ヲ維持スルコト  
(ハ) 東亞及印度ノ地域ニ於ケル兩締盟國ノ領土權ヲ保持シ並該地域ニ於ケル兩締盟國ノ特殊利益ヲ  
防護スルコト

ヲ目的トスル左ノ條款ヲ約定セリ

第一條 日本國又ハ大不列顛國ニ於テ本協約前文ニ記述セル權利及利益ノ中何レカ危殆ニ迫ルモノアルヲ認  
ムルトキハ兩國政府ハ相互ニ充分ニ且隔意ナク通告シ其ノ侵迫セラレタル權利又ハ利益ヲ擁護セム  
カ爲ニ執ルヘキ措置ヲ協同ニ考量スヘシ

第二條

兩締盟國ノ一方カ挑發スルコトナクシテ一國若ハ數國ヨリ攻撃ヲ受ケタルニ依リ又ハ一國若ハ數國  
ノ侵略的行動ニヨリ該締盟國ニ於テ本協約前文ニ記述セル其ノ領土權又ハ特殊利益ヲ防護セムカ爲  
交戰スルニ至リタル時ハ前記ノ攻撃又ハ侵略的行動カ何レノ地ニ於テ發生スルヲ問ハス他ノ一方ノ  
締盟國ハ直ニ來リテ其ノ同盟國ニ援助ヲ與ヘ協同戰闘ニ當リ講和モ亦雙方合意ノ上ニ於テ之ヲ爲ス  
ヘシ

第三條

兩締盟國ハ既レモ他ノ一方ト協議ヲ經シテ他國ト本協約前文ニ記述セタ目的ヲ害スヘキ別約ヲ爲  
サナルヘキコトヲ約定ス

第四條

兩締盟國ノ一方カ第三國ト總括的仲裁裁判條約ヲ締結シタル場合ニハ本協約ハ該仲裁裁判條約ノ有  
效ニ存續スル限り右第三國ト交戰スルノ義務ヲ前記締盟國ニ負ハシムルコトナカルヘシ

第五條

兩締盟國ノ一方カ本協約中ニ規定スル場合ニ際シ他ノ一方ニ兵力の援助ヲ與フヘキ條件及該援助ノ  
實行方法ハ兩締盟國陸海軍當局者ニ於テ協定スヘク又該當局者ハ相互通報ノ問題ニ關シ相互ニ充分  
ニ且隔意ナク隨時協議スヘシ

第六條

本協約ハ調印ノ日ヨリ直ニ實施シ十年間效力ヲ有ス

右十年ノ終了ニ至ル十二月前ニ兩締盟國ノ孰レヨリモ本協約ヲ廢棄スルノ意思ヲ通告セサルトキハ  
本協約ハ兩締盟國ノ一方カ廢棄ノ意思ヲ表示シタル當日ヨリ一年ノ終了ニ至ル迄引續キ效力ヲ有ス  
然レドモ若シ右終了期日ニ至リ同盟國ノ一方カ現ニ交戰中ナルトキハ本同盟ハ講和ノ成立ニ至ル迄  
當然繼續スヘシ

(四) 日英協約ド帝國ノ世界大戰參戰

一一八

(1) 帝國政府ノ英國政府ニ對スル援助申出

大正三年八月四日在本邦佛國大使ハ加藤外務大臣ニ對シ、歐洲戰爭ニ對スル日本ノ態度ヲ尋ねタルニ付大臣ハ「戰爭區域ガ歐洲ニ限局セラルル限り日本ハ何等今回ノ戰爭ノ原因ト關係ナキコト故自然局外中立ノ態度ヲ守ルベキハ勿論ナルガ、若シ同盟國タル英國モ戰爭ニ加ハリ、而モ戰局東洋ニ迄波及シ且日英同盟條約ノ目的ガ危殆ニ瀕スル場合ニハ日本モ同盟條約ノ規定ニ從ヒ必要ナル措置ヲ執ルノ已ムヲ得ザルニ至ルベキモ英國自身ノ態度スラ未定ナル今日故我態度モ從ツテ未ダ決定スル所ナシ」ト答ヘタリ。

尙獨逸ニ對シテモ右帝國ノ方針ヲ明示スル處アリタリ。即チ八月三日在本邦獨逸大使來省加藤外務大臣ニ面會ノ上歐洲時局ニ對スル日本ノ態度ニ付會議セル際、加藤外務大臣ハ「戰爭ガ歐洲内ニノミ極限セラルル限り帝國政府ニ於テ嚴正中立ノ態度ヲ守ルベキハ勿論ナリ」ト述べ、戰爭ガ東洋ニ迄波及スル時ハ如何トノ質問ニ對シ「強イテ時局ノ最不幸ナル發展ヲ想像シ譬ヘバ貴國ノ艦隊ガ香港ヲ攻撃スルガ如キコトアリトセンカ日本ハ日英同盟條約ノ規定ニ準據シ同盟國トシテ當然ノ責務ヲ果ナザルヲ得ザルハ素ヨリ其所ナリ」ト答ヘタリ。

八月三日在本邦英國大使加藤外務大臣ヲ訪問シ、八月二日夜同大使ガ本國政府ヨリ接受セル趣ヲ以テ別紙第一號電報寫ヲ大臣ニ手交シタルニ付大臣ハ右ニ對シ關係各國ハ目下實際交戰狀態ニアルモノナルベシト思考セラルモ帝國政府ハ英國政府ノ態度確定スルヲ待テ其態度ヲ定メントスルモノニシテ從テ未ダ何等ノ中立等ノ宣言ヲ爲サザル次第ナルガ「グレイ」氏ノ言ハル如ク日英同盟ニシテ途ニ其適用ヲ見ル必要生ゼザレバ幸ナルモ萬一其適用ヲ要スル場合アラバ英國政府ノ請求ヲ待テ帝國政府ハ必要ナル手段ヲ執ルニ躊躇セザルベキニ付英國政府ノ態度定リ次第成ルベク速力ニ之ヲ承知致度旨申述べ置カレタル處翌四日朝閣議開催中同大使ヨリ別紙第二號寫ノ通リナル同朝接到ノ本國政府來電ヲ大臣ニ送付シ來リ右ニ據レバ英獨或ハ開戰スルニ至ルヤモ測ラレズ。而シテ右戰爭ガ極東ニモ波及シ從ツテ香港及威海衛ガ襲撃ヲ受クルコトアル場合ニハ英國政府ハ帝國政府ノ援助ニ信賴ストノコトニシテ右電報ハ同大使ヨリ前記加藤大臣トノ會議ヲ上申セル電報ト行達ヒタルモノナリ。次デ同日午後英國大使來省シタルニ付大臣ハ同大使ニ對シ「昨夜御話致シタル次第ハ今朝恰モ例ヘバ公海ニテ英國船ガ拿捕セラレタリト云フガ如キ種々ノ場合アルベシト思考セラルガカカル場合ニハ前記ノ香港、威海衛云々ノ場合ノ如ク必ズ直チニ同盟條約ノ適用アリト断ズルヲ得ザル」ト述べラレタル處同大使ハ前日同大臣トノ談話ニ關シ聊カ誤解又ハ聞誤リアリテ同盟條約ヲ適用スル時期及手段ニ付テハ帝國政府ハニニ英國政府ノ決定ニ待ツモノノ如ク了解セル模様ナリシニ付大臣ハ「昨日ノ本大臣談話ニ付テハ少シク貴大使ニ誤解アルモノノ如シ。今日御送付アリタル電文ノ通り香港又ハ威海衛ノ攻擊若クハ類似ノ場合ト云フガ如キ極メテ明確ナル問題ナレバ直チニ且殆ド自動的ニ同盟條約ノ適用ヲ見ルニ至ルベキハ申ス迄モナキコトナルモ其他ニモ例ヘバ公海ニテ英國船ガ拿捕セラレタリト云フガ如キ種々ノ場合アルベシト思考セラルガカカル場合ニハ前記ノ香港、威海衛云々ノ場合ノ如ク必ズ直チニ同盟條約ノ適用アリト断ズルヲ得ザル」ベク從ツテ此種ノ場合ニ於ケル同盟條約ノ適用問題ニ付テハ英國政府ヨリ帝國政府ニ協議セラル

一一九

110

様致度シ」ト述べラレタルニ大使ハ其意ヲ諒シタリ。

一方右ト同時ニ行ハレタル在英井上大使ト英國外務大臣トノ八月四日ノ會談ニ於テ、同大臣ハ加藤外務大臣ヨリ在日本英國大使ニ對シ香港ガ攻撃セラレタル場合ニハ帝國ハ直ニ英國ニ援助ヲ與フベク其程度方法ハ英國政府ノ考慮ニ任ズベキヲ告グラレタル旨ノ同大使發電報ヲ讀聞カセタル上英國政府ハ帝國政府ノ寛厚ナル申出ニハ深ク感動スル所ナリトテ同政府ノ深厚ノ謝意ヲ帝國政府ニ申述ベラレタキ旨並英國ハ日本國ノ援助ヲ求ムル必要ニ迫ラルコトハ多分之レナカルベク又日本國ヲ

今回ノ戰爭ニ引入ルコトハ英國政府ノ避ケントスル所ナリ。往年日露戰爭中同大臣ハ現職ニアラザリシモ其記憶スル所ニテハ當時佛國ハ露國艦隊ニ援助ヲ與ヘ居リタルニ付日本國ハ右ニ關シ英國ノ援助ヲ求ムルコトヲ得タルニ拘ラズ其之ヲ爲サザリシ寛大ナル精神ヲ酌ミ英國政府モ亦努メテ日本國ニ累ヲ及ボストヲ避クル考ナル旨ヲ語レリ。

八月五日英國大使來省 War Germany トノ四日夜十時四十分倫敦發電報ニ接セル旨公然トナク通告シ、公然ノ通告ハ何レ本國政府ノ訓令ニ據り爲ベシト述べタス。

八月六日英國大使ハ本國外務大臣ヨリノ電訓ニ依リ左記電報ヲ通報シ越セリ。

“The First Lord of the Admiralty has expressed the warmest appreciation of the

readiness of the Japanese Government to help us and we shall certainly appeal to them

with confidence and gratitude directly need arises”。

右譯文

英國海軍大臣ハ何時タリトモ英國政府ニ援助ヲ與ヘムレスタル日本政府ノ好情ニ對シ最モ深厚ナキ謝意ヲ表セリ而シテ英國政府ハ必要ノ生ズルニ於テハ固ヨリ直チニ信頼ト感謝トヲ以テ日本政府ノ援助ニ訴フルニ躊躇セザルベシ

(別紙第一號)

Sir Edward Grey told the Japanese Ambassador in London on August 1st that the situation in Europe was a very grave one.

Under certain conditions it might be necessary for Great Britain to intervene, though His Majesty's Government had not yet decided what their action should be. If His Majesty's Government did intervene it would be on the side of France and Russia. Sir Edward Grey did not think that the interests dealt with by the Anglo-Japanese Alliance would be involved; nor did he think it likely that His Majesty's Government would have to apply to the Imperial Japanese Government under the terms of that alliance.

(別紙第一號)

Telegram from Sir E. Grey.

London, D. 4.50 p.m. Aug. 3.

R. 9.30 a.m. " 4.

Since war with Germany is now a possibility, it might be well for you to inform the Japanese Government that, if the fighting should extend to the far East, and an assault on Hong-Kong and Wei-Hai-Wei were to occur, His Majesty's Government would rely on the support of the Imperial Government.

111

(2) 英國ノ日本海軍ノ出動方要請

1111

大正三年八月七日在本邦英國大使來省、別紙覺書（別紙第一號）ヲ差出し、日本海軍ニ於テ獨逸假裝巡洋艦搜索及破壊ノ爲英國ヲ援助セントヲ求ム旨述べタルニ付大臣ハ帝國政府ガ日英同盟ノ趣旨ニ基キ必要ノ場合ニ英國ニ援助ヲ與フルヲ辭セザルハ先日モ申述べタル通ナレバ只今ノ御申出ニ對シテハ十分考慮ノ上英國政府ノ満足ヲ得ル様精々盡力致スベキモ只日本ノ援助ヲ獨逸假裝巡洋艦ニ對スル場合ノミニ限ルコトハ如何アランカト思ハルガ専ニ角研究ノ上御返事致スベシト答ヘラレタルニ英國大使ハ最モ至急ニ返答ヲ得度シト申述べテ辭去セリ。

又右談話中大臣ハ現ニ英商船ガ脅迫ヲ受ケツツアル事實アリヤト尋ねラレタルニ英大使ハ自分ハ其事實ヲ聞知セザレドモ此ノ如キ訓電アル位ナレバ必ズ其事實アルコトナラント答ヘタリ。

前題同一覺書ハ英國外務大臣ヨリモ八月六日附ヲ以テ在英井上大使ニ手交セラレタリ。

尙八月六日英國外務大臣ハ別紙「ノート」（別紙第二號）ヲ在英井上大使ニ手交、更ニ八月七日別紙「ノート」（別紙第三號）ヲ手交シタリ。

（別紙第一號）

Most urgent.

As some time will be needed in order that our ships of war may find and destroy German ships in Chinese waters, it is most important that the Japanese fleet should, if possible, hunt out and destroy the armed German Merchant Cruisers, who are now attacking our commerce.

If the Japanese Government would be good enough to employ some of their man-of-war thus, it would be of the greatest advantage to His Majesty's Government. This, of course, means an act of war against Germany, but this is, in our opinion, unavoidable.

August 7th, 1914.

右譯文

支那海ニ於テ英國戰艦ガ獨逸國船艦ヲ發見シ且之ヲ擊破スルニハ尙多少ノ時日ヲ要スベキニヨリ若シ出來得ベクンバ日本艦隊ニ於テ現ニ英國ノ貿易ヲ襲撃シツツアル獨逸武裝巡洋商船ヲ搜索シ且之ヲ擊破スルコト必要トベ

若シ日本國政府ニシテ其所屬戰艦ノ或ルモノヲ敍上ノ目的ノ爲ニ使用セラルルコトヲ得バ英國政府ノ利益ニ過ぐルモノアラザルベシ右ハ勿論獨逸國ニ對スル交戦ヲ意味スルモノナリト雖モ英國政府ノ所見ニヨレバ之レ實ニ避ケ難キモノナリトス

一九一四年八月七日

（別紙第一號）

With reference to my conversation with your Excellency August 4th, I beg to inform you that communication has also passed between His Majesty's Ambassador in Tokio and Baron Takaaki Kato on the subject of Anglo-Japanese Alliance in conjunction with the present state of affairs of I have the honour to state that announcement made by Baron T. Kato August 4th to the effect that in certain contingencies such as attack on Hongkong and Weihaiwei, Imperial Japanese Government should proceed at once to support this country if called upon, has given liveliest satisfaction to His Majesty's Government. I have requested His Majesty's

1111

調—0443

0207

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp>

Ambassador to convey to Baron Kato warmest appreciation of the First Lord of the Admiralty of readiness of Japanese Government to afford help if desired and to inform His Excellency that His Majesty's Government will certainly appeal to them with confidence and gratitude directly need arises. I should add that His Majesty's Government also welcome the desire expressed by His Excellency's to have opportunity of considering hypothetic cases such as capture of British merchant ship or case involving perhaps question of Chinese or Russian waters and of consulting His Majesty's Government before taking any definite action.

(別紙第11號)

With reference to my note of yesterday's date and to your interview with Sir Langley yesterday afternoon, I have the honour to inform your Excellency that as a result of communication which has been passing with the Admiralty, it has been decided that His Majesty's Government would gladly avail themselves of proffered assistance of Japanese Government in the direction of protecting British trading vessels from German armed merchant cruisers which are now attacking British Commerce in various quarters, while British war ships are locating and engaging German war ships in Chinese waters. As this task will require sometime, His Majesty's Ambassador in Tokio has been instructed to inform Japanese Government that it would be of the very greatest assistance to His Majesty's Government if they would be good enough to employ some of this war ships in hunting out and destroying German armed merchant men in China. British Government realize that such action on the part of Japan will constitute declaration of war with Germany, but it is difficult to see how such a step is to be avoided.

(3) 英國ノ援助要請ニ基ク軍事行爲ノ範囲ニ關スル日英折衝

右八月七日在本邦英國大使ノ申出ニ對シ、帝國政府ハ協議ノ結果八月八日松井外務次官ハ英國大使ニ對シ「日本ニシテ一ト度英國ヲ援ケテ軍事的行爲ヲ執ルニ於テハ之ヲ假裝巡洋艦ノ搜索及破壊ニノミ止ムルコトヲ得ザルベク時局ノ發展ニ伴ヒ凡テノ必要ナル手段ヲ取ルニ至ルハ已ムヲ得ザル所ナルベキ」旨説示シ、同大使ハ右帝國政府ノ意見ハ早速同國政府ニ報告スベキ旨答ヘタリ。加藤外務大臣ハ右英國大使トノ會談ニ關シ在英井上大使ニ對シ「政府ニ於テハ熟議ノ末英國政府ノ要求ヲ容レ獨逸國ニ對シ開戦スルコトニ内定シタリ尤モ英國政府申出ノ如キ事由ハ開戦ノ理由トシテ充分ナリト認メ難キニ付開戦ノ理由ハ別電ノ通リ日英協約ノ規定ニ基キ英國政府ノ請求ニ應シ戰闘ニ參加スルコトト爲ス方可然ト思考シ右ノ通り聲明スルニ對シ異議ナキヤ否ヤ目下在本邦英國大使ヲ通ジテ英國政府ニ問合中ナリ前記廟議内定ノ次第ハ本日上奏ニ及ビ置キタルモ尙英國政府ノ確答ヲ得タル上ニテ正式ニ政府ノ議ヲ定メ上奏裁可ヲ乞ヒ改メテ政府最後ノ決定ヲ在本邦英國大使ニ回答シ同時ニ在本邦獨逸大使ニハ別電ノ趣旨ヲ通告スル筈ナリ右ノ趣英國政府ニ内報アリテ差支ナシ」ト訓令セリ。

別 電

獨逸國ノ歐洲ニ於ケル行動ノ結果英國ガ獨逸國ト開戦スルニ至リシヨリ戰亂ノ餘波ハ東亞ニ及ビ日英同盟協約ノ目的危殆ノ狀ニ瀕スルニ至レリ此ニ於テ英國政府ハ該協約ニ基キ日本政府ノ援助ヲ求タルニヨリ帝國政府ハ熟慮ノ末右請求ニ應シ獨逸國ニ對シ開戦スルコトニ決定シタリ

111B

114

更ニ翌九日、加藤外務大臣ハ別紙覺書（別紙第一號）ヲ英國大使ニ手交シ、七日受領ノ覺書ニテハ英國政府ノ申出ニハ十分了解シ得ザル點アリシガ本件ニ關シ井上大使ヨリ電報シ來リタル英國外務大臣ノ書翰ニ依リ大ニ疑問ヲ釋クコトヲ得タルノミナラズ。昨日松井次官ヨリ申述ベタル所ニテ帝國政府ノ意向ハ御分リノコト存ズルモ尙爲念別紙ノ通覺書ニ認メ御足勞ヲ煩シタル次第ナリト申添エラレタル。大使ハ一讀ノ上自分ガ帝國政府ノ御意見トシテ、本國政府ニ報告シタル所ハ全ク之ト同主意ニテ、本國政府ニテモ何等誤解ナキコトト信ズルト答ヘタルニ付加藤外務大臣ハ然シ若シ差支ナクバ重複ニ成リテモ宜シキ故此覺書ノ趣旨ヲ電報セラル様希望スト述べラレタルニ大使ハ之ヲ了セリ。依テ加藤外務大臣ハ尙覺書所載ノ趣旨ヲ敷衍説明セラレ苟モ日本ガ出デテ英國ヲ援クトセバ、日英同盟適用ノ結果トシテ一般的ニ總チノ必要ナル軍事上ノ措置ヲ取ラザルベカラズルベク從テ開戦ニ關スル海牙條約第一條ノ規定ニ遵ヒ開戦宣言又ハ最後通牒ノ形式ヲ執ラザルベカラズト思考ス。若シ然ラズシテ日本ノ行動ヲ只一部的ニ獨逸ノ假裝巡洋艦ヲ搜索破壊スルコトト限ルニ於テハ萬一不幸ニシテ獨逸側ノ勝利ニ歸スル如キ場合ニハ日本ノ立場ハ頗ル困難トナルベキヲ以テ日英同盟ナル廣汎ナル根據ニ基キ行動スルコト可然トノ考ナリト述べラレタルニ大使ハ結局ハ左様ノコトニ相成ルベシ。本使申出ノ趣旨モ決シテ他ノ關係ニ於テ日本ノ援助ヲ排除セシムベシニ在ルニ非ズ。現ニ昨日松井次官ニ面會ノ節モ膠州灣占領ノ場合ニ關スル詰出テタルヲ以テ本使ハ其場合ニハ英國兵モ亦參加シ可然旨述ベタル様ノ次第ニテ日本ガ結局膠州灣攻撃ト云フ如キ一般的軍事行動ヲ取ルニ至ルベキコトヲ當然ノコトシテ之ヲ前提トシテ右ノ如ク述ベタル位ナリト辯明セリ。

AIDE-MEMOIRE.

With reference to the Aide-Memoire which His Excellency the British Ambassador left with the Minister for Foreign Affairs on August 7th, Baron Kato begs to make the following observations:

The employment by the Imperial Government of some of their men-of-war for the purpose of hunting out and destroying the armed German merchant cruisers in the Chinese waters is no doubt an act of war as stated in the Ambassador's Memoire, and necessitates a declaration of war against Germany. Once belligerent Power, Japan cannot restrict her action only to the destruction of hostile armed merchant cruisers, but it will become necessary for her to resort to all and every possible means for the attainment of the object common to the two allied Powers as far as the Chinese waters are concerned, namely the destruction of the power of Germany to inflict damage upon the interests of Japan and Great Britain in Eastern Asia. Besides, as the employment of some of the Japanese warships for the destruction of German armed merchants may be regarded as an act limited in scope and dictated by the temporary convenience of Great Britain, the Imperial Government are of opinion that they should base their participation in the war on the broad grounds stated in the Agreement of Alliance, and they should take such action as the development of events may necessitate. In the Declaration of War, therefore, the Imperial Government will state that as the consequence of the aggressive action on the part of Germany, Great Britain, finding that the general peace in the regions of Eastern Asia is threatened and that her special interests jeopardized, has requested the support

of Japan, to which request Japan has acceded.

In order to avoid possible misapprehension, the Japanese Government wish to know as soon as possible if the British Government concur in the aforesaid statement of the grounds upon which the Declaration of War will be based. If they have no objection to this, the Imperial Government also wish that the British Government will, when they make public announcement on the present question, make statement which will not conflict with that of the Imperial Government.

Foreign Office, Tokio.

August 9, 1914.

116

大正三年八月九日加藤外務大臣ヨリ在本邦英國大使ニ手交シタル覺書譯文

八月七日英國大使閣下ガ外務大臣ニ手交セラレタル覺書ニ關シ加藤男爵ハ次ノ如ク説述スル所アラントス  
支那海ニ於テ獨逸假裝巡洋艦ヲ搜索シ且之ヲ擊破スル目的ノ爲ニ帝國政府ガ其所屬軍艦ノ或ルモノヲ使用スルコトハ大使閣下ノ覺書中ニ記述セラレタル通リ疑モナク交戰行爲ニシテ獨逸國ニ對スル開戰ノ宣言ヲ必要トスルモノナリ一旦交戰國トナリタル以上ハ日本ノ行動ハ單ニ敵國假裝巡洋艦ノ擊破ノミニ局限スルコト能ハズシテ必ズヤ日本ハ支那海ニ關スル限り兩同盟國ニ共通ナル目的ヲ遂行スルガ爲即チ東亞ニ於ケル日本及英國ノ利益ニ損害ヲ被ラシムベキ獨逸國ノ勢力ヲ破滅センガ爲成シ得ベキ一切ノ手段方法ヲ執ルコトヲ必要トスルニ至ルベシ將又獨逸國假裝巡洋艦  
擊破ノ爲帝國軍艦ノ或ルモノヲ使用スルコトハ特ニ範圍ヲ限定セラレ且英國ノ一時ノ便宜ノ爲ニ求メラレタル行爲ト視ラレ得ベキガ故ニ帝國政府ハ現戰爭ニ參加スルノ根據ヲ日英同盟協約ニ記載セル廣汎ナル基礎ノ上ニ置キ時局ノ進展ニ隨ツテ帝國政府ハ必要ナル手段ヲ執ルベキモノトナ  
スノ見解ヲ有ス依テ帝國政府ハ開戰ノ宣言中ニ聲明スルニ獨逸國ノ侵略的行動ノ結果トシテ東亞ノ方面ニ於ケル一般ノ平和侵迫セラレ且其特殊利益ガ危殆ニ瀕スルニ至リト認メ之ガ爲英國ハ日本ニ援助ヲ求メ而シテ日本ハ其請求ニ應ジタルコトヲ以テセント欲ス  
帝國政府ハ萬一ノ誤解ヲ避ケシガ爲開戰ノ宣言ノ根據ト爲ルベキ前記基礎ノ記述ニ對シ英國政府ニ於テ同意セラルベキカラ成ルベク速ニ承知センコトヲ望ム將又英國政府ニ於テ右ニ對シ何等異議ヲ有セラレザルニ於テハ同政府ガ本件ニ關スル公表ヲ爲スニ當リ帝國政府ノ説明ト齟齬セザル  
説明ヲ爲サンコトヲ希望ス

一方八月九日在英井上大使ト英國外務大臣トノ會談ニ於テ英國外務大臣ノ語ル處ニ依レバ同大臣ノ最モ憂フル所ハ東亞ノ戰爭ハ支那内部ノ擾亂ヲ誘ヒ延イテハ東亞全般ノ騷動トナリ英國貿易ニ大打撃ヲ及ボナザルカニ在リ依テ政府ハ目下駐支英國公使及英國支那艦隊司令長官ノ意見ヲ徵シ居ルニ付英國政府ノ確答アル迄帝國政府ニ於テ軍事行動ヲ見合ハセラレ度尤モ日獨開戰ノ曉日本國ガ膠州灣ヲ陷シ戰後之ヲ領有スルトモ英國政府ニ於テハ毫モ異議アル次第ニ非ザルニ付此點ニ付帝國政府ニ於テ何等誤解ナキコトヲ希望スト云ヘリ、依リテ井上大使ハ英國政府過日ノ申出ハ單ニ獨逸假裝巡洋艦擊滅ノ請求ナリシモ一旦獨逸國ト開戰ノ場合ニハ日本國ハ一切ノ軍事行動ニ出ヅベキハ勿論

一二九

調-0443

0213

110

ナル旨ヲ述べタルニ同大臣ハ故ニ本件ハ最モ考慮ヲ要シ從テ前述ノ通り意見問合中ノ次第ナリト云ヘリ。

八月十日在本邦英國大使來省八月十日附井上大使來電所載大體同趣旨ノ英國外務大臣來電（別紙第一號）ヲ送付シ來リタルニ付、同日同大使ノ來省ヲ求メ、別紙ノ如キ覺書（別紙第二號）ヲ交付シ、帝國政府ニ於テハ最早其所決ニ對シ重大ナル變更ヲ加フルコト能ハザル立場ニ至リタルニ付英國政府ニ於テモ是非同意アリタキ旨申出置キタリ。

八月十日在英井上大使ハ英國外務大臣ト面會、前顯九日附加藤外務大臣覺書ノ「バラフレーズ」ヲ手交シ、加藤外務大臣ヨリノ訓令ノ趣ヲ篤ト申入レタルガ、英國外務大臣ハ在日本英國大使ニ對シ英國政府ヨリ希望アラバ日本國ハ日英同盟協約ニ依リ英國ニ援助ヲ與フルニ躊躇セザルベシト帝國外務大臣ニ於テ曩キニ述べラレタルニ付武裝獨逸船擊破ヲ依頼シタル次第ナレバ此點ニ付英國政府ニ於テ何等誤解ナキ旨并ニ同政府ハ日本ノ行動ヲ右行爲ニ制限セラレンコトヲ望ミ見タルモノナルモ一旦開戦ノ場合ニハ日本側ニ於テ右制限ノ不可能ナルコトハ明ニシテ帝國政府ノ所見バ英國政府ノ克ク諒解スル所ナル旨述ベラレタル後先刻握手ノ電報ナリトテ井上大使ニ讀聞カセタル所ニ依レバ駐支英國公使ハ揚子江ニ在ル英獨兩國砲艦乗組員ハ既ニ引揚ゲタルヲ以テ同地方ニ於テ戰闘ノ起ル虞ナキモ若シ支那ニ於テ陸上戰闘起ラバ支那側ノ擾亂ヲ來シ英國ノ貿易ハ破壞セラルベキ旨又英國支那艦隊司令長官ヨリハ英國商船ガ武裝獨逸船ニ襲ハレ居レリトハ事實無根ニシテ支那印度間ノ航路ハ目下ノ處安全ナル旨回答シタリ就テハ誤解ナキ様トテ井上大使ノ面前ニ於テ同大臣自ラ認メタク文書ヲ英國政府ノ蔭答トシテ井上大使ニ手交シタリ。（別紙第二號）

依テ井上大使ハ右一讀ノ上、然ラバ武裝獨逸船ニ關スル英國政府ノ依頼ハ取消サレタムモノナムカ

ヲ確メタルニ、同大臣ハ然リト答ヘタリ。

茲ニ於テ、加藤外務大臣ハ「右英國外務大臣ノ所決ハ帝國政府ノ極メテ意外トスル所ナリ、初メ政府ハ英國ヨリ獨逸船擊破ノ依頼アリタルニ當リ、右ハ「グレー」氏ノ言フ如ク交戰行爲ナリト雖モ而カモ其到底避ケ難キモノナルコトハ之ヲ覺悟シ廟議ヲ盡シテ英國ノ依頼ニ應ズルコトニ決シ、政府ニ於テハ爾來直チニ軍事行動ニ關スル諸般ノ準備ニ着手シ今ハ殆ド宣戰ノ手續ヲ殘スノミナル迄ニ運ビ居ル」ヲ以テ、諸般ノ事情ヨリ英國政府ニ於テ其所決ヲ翻サシムル様努力スベキコトヲ井上大使ニ命ジタリ。

（別紙第一號）

PRIVATE

British Embassy, Tokio.

August 10, 1914.

Dear Excellency

I have the honour to send you a telegram which I have received from Sir Edward Grey this morning, and which crossed the telegram which I sent him last night conveying the *Aide-Mémoire* which you handed to me yesterday evening.

As you will see from the enclosed message, Sir Edward desires me to ask that the Imperial Government should defer the declaration of war until he has had time to consult the

111

1111  
Commander in Chief on the China Station and His Majesty's Minister at Peking, and until he has had time to answer the question on limiting warlike operations on the China Station to the protection of Commerce at Sea, in concert with the Imperial Government after the consultations with the British Admiral and British Minister referred to above. This decision appears to me all the more opportune as Sir Edward will by now be in possession of the *Aide-Mémoire* of the Imperial Government which I sent to him last night, and so in a position to arrive at an early and definite decision in the whole question.

Yours Sincerely,

Coryngham Greene

London, August 9th.

Teleggram from Sir E. Grey  
The British Minister at Peking is apprehensive lest a declaration of war on the part of Japan may give rise to the impression that extensive operations affecting China may take place, which would have a serious effect on the stability of that country. In view of this opinion, I am at present anxious to limit the operations of war in the China Seas to the protection of Commerce at sea, and I should like to have time for the further consideration of this matter in conjunction with the Imperial Government after consultation with the British Minister at Peking and the Commander-in-Chief on the China Station. You should therefore ask the Japanese Government to defer declaration of war until I have had time to do so.

(*Enc. No. 1152*)  
The Imperial Government fail to understand why the British Minister at Peking is apprehensive lest a declaration of war on the part of Japan may give rise to the impression that extensive operations affecting China may take place, which would have a serious effect on the stability of that country. It is far from the intention of Japan to carry out an extensive operation. In fact her action will be restricted only to the protection of commerce in the Chinese waters which is nothing more than an operation requested by Great Britain and also to the ultimate destruction of German power in these regions for which no extensive operations are required. Japan's action will strictly be limited to the measures which are absolutely indispensable for the attainment of these aims. The object of the Japanese action is to maintain the general peace in Eastern Asia and to safeguard the stability of China. The British Government may rest assured that the Imperial Government in deciding her present attitude has not been prompted by any desire for territorial aggrandizement or by any motive to promote her selfish end. If the British Minister at Peking is really apprehensive that the stability of that country may be seriously injured as the result of the present situation, Japan and Great Britain might give joint warning to the Chinese Government to rely on our influence for the maintenance and protection of peace and order in that country. Japan is quite prepared to do her best for that end in conjunction with Great Britain if China, relying solely on us, does not look for assistance elsewhere.

The British request that Japan should employ her men-of-war for hunting out and destroying German merchant cruisers has been fully considered at the recent Cabinet meeting and the Imperial Government having decided to accede to it the matter has already been laid before

1111

1月

the Emperor. Somehow the news is gradually transpiring and as His Excellency the British Ambassador is no doubt well aware the public sentiment in this country against Germany inflamed by the awakened memory of German intervention in 1895 is growing daily. The German Ambassador called at the Foreign Office on Aug. 9th and used the language of a threatening nature. Thus the international relation between Japan and Germany which is now critically strained and is almost at the breaking point, is in a hostile state even without a declaration of war.

Under these circumstances the only course which the Imperial Government can take is to proceed on the line as already decided upon and declare war forthwith against Germany. If they fail to take this step Baron Kato fears that it may result in serious political crisis. Baron Kato therefore earnestly hopes that the British Government will take these matters into serious consideration and agree to the decision arrived at by the Imperial Government and communicated to Sir Conyngham Greene on August 9th. He wishes to add that a prompt reply is of utmost importance as much further delay may entail serious consequences.

Regarding the form of declaration of war by Japan the Imperial Government have no objection, if the British Government so prefer, to frame it as to mean that after full communication between the two Governments on the situation they have come to the conclusion that their special interests in these regions are in jeopardy and that their joint action contemplated in the Agreement of Alliance in order to consolidate and maintain general peace in Eastern Asia, has become necessary.

(要旨)

To avoid internal trouble and disturbance of trade in China, we are anxious to limit acts of war to operations at sea and more particularly protection of British merchant vessels. Sir John N. Jordan considers that fighting in Yantze-Kiang can be avoided. I understand from Baron Kato's communication that if Japan declared war upon Germany she could not restrict warlike operations to sea alone. I understand this view, but for the present His Majesty's Government believes that acts of war in the Far East will be restricted as described above, and they think it desirable to maintain this attitude as long as possible. His Majesty's Government will, therefore, refrain for the present from invoking action under the Treaty, but should further development of serious nature or one such as attack upon Hongkong, His Majesty's Government will reconsider this decision.

右譯文

支那ニ於ケル内政上ノ紛擾及商業上ノ擾亂ヲ避クルガ爲吾人ハ戰闘行爲ヲ海上作戰詳言ベシバ英國商船ノ保護ノミニ局限セシコトヲ切望スルモノナリ「サー・ジョン・エドワード・ジョンソン」ノ意見ニ據レバ揚子江ニ於ケル戰闘ハアラ避クルヲ得ベシトノコトナリ余ハ加藤男爵ノ書面ニ依リ若シ日本ガ獨逸ニ對シ開戦ノ宣言ヲ爲スニ於テハ日本ハ其ノ作戰行動ヲ海上ノミニ限定スルコト不可能ナルコトヲ了解セリ余ハ此ノ見解ヲ諒トスルモノ由下英國政府ハ極東ニ於ケル戰闘行爲ガ上記ノ如ク局限セラルベキコトヲ信シ且成ルベク長ク此ノ態度ヲ維持スルヲ願ハシキコトナリト思料スルモノナリ仍テ英國政府ハ目下不處協約ニ基キ行動ヲ求ムルコトベシ尤モ此上重大ナル時局ノ發展例ヘバ香港ガ攻撃セラルルガ如キコトアル場合ニ於テハ英國政府ハ更ニ本件交

1月

涉ヲ再考スベシ

一三六

井上大使ハ八月十一日午後英國外務大臣ニ面會シタルガ右ニ關スル井上大使ノ加藤外務大臣宛報告左ノ如シ。

本使ヨリ八月十日閣下ニ於テ在日本英國大使ニ手交セラレタル覺書ノ「バラフレーズ」ヲ手交シ其一讀ヲ求メ本使ヨリ今回英國政府ノ依頼ニ應シ帝國政府ニ於テ軍事行動ニ出ヅベキ件ニ付テハ既ニ上奏裁可ヲ得諸般ノ準備ヲ爲シタル次第ナレバ今日ニ至リ英國政府ニ於テ右依頼ヲ取消サレ從テ帝國政府ニ於テ今ニ至リ軍事行動ヲ止ムル如キ場合ニ至ラバ帝國政府ハ非常ニ困難ナル地位ニ陥ルベキニ付英國政府ノ所決ヲ聽サレ帝國政府宣言書案ニ同意セラレタキ旨篤ト申述ベタルニ同大臣ハ八月十日ノ會議ノ際意見ヲ繰返シ始メ加藤男ハ英國政府ノ依頼アラバ帝國政府ニ於テ英國政府ハ帝國政府ヨリ磅助ノ一方法トシテ獨逸武裝船擊破ヲ依頼シタルニ付艦隊司令官ノ回答ニ接シ支那海ニ於テ敢テ危險ナキコトヲ知リ援助ヲ請フ必要消滅シ從テ右請求ヲ取消シタル次第ナルガ在日本英國大使ヨリノ報告ニ依レバ（不明）在日本獨逸大使ニ述ベラレタルニ付府ニ對スル脅嚇的言辭ヲ弄シタル趣ナリ左スレバ日本利益ガ迫害セラレ居ル譯ナレバ日本國ガ之ヲ防禦センガ爲開戰スルハ已ムヲ得ザルハ同大臣ノ諒トスル所ニシテ日本國ガ日英同盟協約ニ依リ開戰スルコトニ異議ヲ入レザルベシ但シ開戰宣言ノ形式ハ過日ノ帝國政府案ニ依ラズ日英兩國政府ハ其東洋ニ於ケル特殊利益ニ危殆ニ瀕スルニ付熟議ヲ遂ゲタル上日英同盟協約ニ依リ各其ノ利益ヲ保護セムガ爲必要ノ措置ヲ執ルニ決シタルトノ意味ニセラレタキ旨答ヘタルニ付本使ヨリ之ト殆ド同様ノ閣下案ヲ右「バラフレーズ」ニ付指摘シタルモ同大臣ハ前記自己ノ案ヲ主張シ此ノ意味ニテ閣下ヘ通告方ノ日本英國大使ハ直ニ訓令ヲ發スベキ旨語レリ次ニ同大臣ハ自分ハ日本ノ真意ハ毫モ疑ハザルモ世間ニ於テ或ハ日本國ハ此際領土侵略野野心アリト誤解スル者鮮カラザレバ戰闘區域ヲ局限シ日本國ハ支那海ノ西及南並ニ太平洋ニ於テ戰闘ニ出デザルコトヲ聲明セラレタキ希望ヲ述ベラレタルニ付本使ハ日本國ガ領土侵略ノ意志ナキコト及其ノ軍事行動ヲ支那海ニ於ケル防衛保護ニ制限スベキコトハ既ニ加藤男爵ノ覺書ニテ明白ノ次第ナリ併シ太平洋ニハ獨逸國軍艦ノ遊弋セルアリ南米北米ノ航路ニ從事スル日本商船ニシテ危險アラバ日本國ハ必要ノ措置ニ出デザルベカラザルニ付強チ戰闘區域ヲ局限スルコト或ハ不可能ナル旨ヲ答ヘタルニ同大臣ハ右ハ至極尤ノ次第ニ付考量ノ上日本英國大使ニ訓令スル所アルベシト語ラレタリ次ニ貴電ノ趣同大臣ニ爲ト申入タルニ同大臣ハ支那ノ領土保全及中立維持ハ帝國政府同様英國政府ニ於テモ此際極メテ必要ナルコト思考セラルニ付帝國政府御希望ノ處置ヲ執ルコトニ付テハ一應支那駐劄英國公使ノ意見ヲ徵シタル上決定スベキ旨答ヘタリキニ付尙篤ト考量ヲ加フベキ旨答ヘラレタリ

八月十二日在本邦英國大使ハ八月三日附帝國政府覺書ニ對スル英國政府ノ回答覺書（別紙第一號）  
ヲ加藤外務大臣ニ手交セリ。右ニ對シ加藤外務大臣ハ「兩國協議ノ上同盟ノ豫期セル全般ノ利益ヲ  
防護スルガ爲メニ各自手段ヲ執ルコトヲ必要ト認ムル旨ハ宣戰布告中ニ聲明ベキモ」「戰地局限  
ノコトヲ布告中ニ聲明スルコトハ斷ジテ不可能ナリ若シ英國政府ニテ希望スルナレバ右様ノ趣旨ノ

138

證言ヲ同國政府ニ與へ又他ノ關係國ニ與フルコトハ閣議ノ同意ヲ得ルコトヲ條件トシ大臣ニ於テ何等異議ナシ就テハ戰地局限ノコトヲ記載セザル宣言布告ノ形式ニ對シ英國政府ニ於テ是非共同同意アリ度」旨ヲ述べタリ。

一方東亞ニ於ケル軍事行動ニ關スル協議ニ就テベ、八月十二日ノ井上大使ト英國外務大臣トノ會談及ビ八月十三日附在本邦英國大使來翰（別紙第一號）及ビ八月十四日附同來翰（別紙第三號）ニ依リ、之ヲ進ムルコトトシ、英國外務大臣ハ同時ニ在北京英國公使ニ對シ別電ノ如キ訓令ヲ發シタリ。（別紙第四號）

八月十二日ノ井上大使ト英國外務大臣ノ會談ノ際モ、英國外務大臣ハ蘭國、英國自治領等ガ日本ノ行動ニ對シ危惧ノ念ヲ懷キ居ルコトヲ説明シ、日本國ガ獨逸國南洋領地ヲ占領スルガ如キ軍事行動ニ出デザランコトヲ欲スル旨ヲ述べタルガ、八月十三日ノ兩者會談ニ於テハ、英國外務大臣ハ「英國政府ニ於テハ強イテ宣戰布告中ニ戰地局限ヲ記載セラルヲ必要トスルモノニ非ズ、要ハ如何ナル形式ヲ問ハズ戰地局限ニ關スル帝國政府ノ保障ヲ得バ足レリ」と語レリ。右ノ趣旨ニ基ク在本邦英國大使ニ對スル英國外務大臣ノ訓電寫ハ八月十五日英國大使ヨリ加藤外務大臣ニ手交セラレタリ。（別紙第五號）

八月十五日在本邦英國大使來訪ノ際同大使ニ對シ加藤外務大臣ハ英國政府ニ於テ去十二日持來セラレタル覺書末段 In addition 以下地理的制限ノ點父ハ之ヲ支持セラル趣旨ナル趣ハ一昨日接受ノ書面ニ依リ了解シタルガ右ノ内日本ノ行動ヲ獨逸ノ占領セル以外ノ東亞ニ於ケル外國領土ニ及サズトノ點ニ付テハ其ノ節モ申シタルニ通リニテ全然軍隊通過ノ如キ戰闘行為其ノモノニ非デタコト迄ラモ制限セントノ趣旨ナリトセバ頗ル困難ナリト思ハアルガ之ニ付未ダ何等英國政府ヨリ申越ノ次第ナキヤト尋ねタルニ大使ハ本國政府ヨリハ未ダ何等申越ニ接セザルモ自分ハ最初ヨリ夫レハ勿論差支ナキモノト思考シ居レリ。只今御尋ネノ次第モアルニ付自分ノ責任ヲ以テ只今述べラレタル如キ行動ハ英國政府ノ提議セル制限中ニ之ヲ含マザル旨ヲ言明シ差支ナシト答ヘタリ。

（別紙第一號）

#### AIDE-MMOIRE

The Japanese Government made a statement on August 3 "leaving it entirely to His Majesty's Government to formulate the reason for (and) the nature of the assistance required".

Sir Edward Grey subsequently made a request which was limited to the hunting down of German armed merchantmen which were preying on British commerce.

In the Aide Memoire handed to Sir E. Grey by the Japanese Ambassador in London on August 10, the Japanese Government replied that Japan could not limit her action to, thus,

Sir E. Grey deprecated their taking unlimited action as their doing so might give rise to serious disturbances in China, and said that he would not in the circumstances at present ask Japan to take action under the Treaty.

On August 10th Sir E. Grey received news that the British Commander in Chief of the China squadron had declared that the trade route from Singapore to Shanghai was clear, as also that from Shanghai here to Japan if a certain route were followed.

Sir E. Grey cannot, in view of these circumstances and of the absence at present of any apparent danger to Hong-Kong or British concessions, say that the special interests of Great

111-R

110

Britain in Eastern Asia are menaced to such a serious extent as would make it essential for him to appeal, on that ground alone, to the Alliance. He recognizes, however, that Japan has also interests to be considered and that she alone has the right to judge what action is required in view of the menacing language which the German Ambassador has used.

He therefore agrees to a statement that the two Governments, after having been in communication with each other, consider that it is necessary for each to take action for the protection of the general interests contemplated by the Alliance. In addition it should be stated that the Japanese action will not extend beyond the China Seas to the Pacific Ocean, nor beyond Asiatic waters westward of the China Seas, nor to any foreign territory with the exception of territory on the Continent in Eastern Asia which is in the occupation of Germany. It is important that this statement should be made in order that unfounded misapprehension abroad may be avoided.

(原稿第11號)

Instructions are being sent to the British naval and military authorities on the China Station to concert cooperation with the Japanese forces whenever the Japanese Government is ready for it.

Russia and France being also at war with Germany, their naval and military authorities will have to be informed when an agreement as to concerted action has been come to by the British and Japanese authorities. Sir Edward Grey hopes that the Japanese authorities will be ready to join with us in inviting the co-operation of the French and Russians wherever such may be possible.

No limits are now suggested to the action to be taken except the geographical limits described in Sir Edward Grey's telegram of August 11th which was communicated to Your Excellency yesterday.

British Embassy, Tokyo.

August 13, 1914.

(原稿第11號)

No. 88.

British Embassy, Tokio.

August 14, 1914.

Monsieur le Ministre,

It is with the warmest pleasure that I communicate to Your Excellency the following messages received through His Britannic Majesty's Secretary of State for Foreign Affairs from the British First Lord of the Admiralty, for the Imperial Minister for Marine, and from the British Secretary of State for War to the Imperial Minister for War:

From the First Lord of the Admiralty to the Minister of Marine Tokyo:

"On behalf of the Board of Admiralty I take an early opportunity of expressing the warm feelings of comradeship and pleasure with which the officers and men of the British Navy will find themselves allied in common cause and against a common foe with

調—0443

0216

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp>

the gallant and seamanlike navy of Japan."

(Signed) Churchill.

From the Secretary of State for War to the Minister of War Tokyo:

"It is with feelings of great pleasure that I learn that the gallant Japanese army of whose excellence I have such a vivid recollection will be associated with our troops in this war. Please convey to Field-Marshal and Officers with whom I was associated in Japan my best wishes and cordial greetings."

The Naval and Military Attachés of this Embassy will hand the above messages to the Imperial Minister of Marine and Minister for War respectively.

I avail myself of this opportunity, Monsieur le Ministre, to renew to Your Excellency the assurance of my highest consideration.

(Signed) Cunningham Greene.  
British Ambassador.

His Excellency

Baron Takeaki Kato, G.C.M.G.

H.I.M. Minister of State for Foreign Affairs.

(元総理回讐)

Sir Edward Grey has given to His Majesty's Minister at Peking full discretion to arrange with his Japanese colleague in the most suitable terms a declaration in the following sense at Peking:

China may look to Great Britain and Japan especially with confidence for support in maintaining her independence and integrity with all the means at their disposal during the war and in negotiating terms of peace after the war, one of the objects of the Anglo-Japanese Alliance being the maintenance of the independence and integrity of China. Great Britain and Japan will also endeavor to ensure for China that her neutrality during the war should be respected.

British Embassy, Tokyo.

August 13, 1914.

(原稿紙印記)

D. 3.5. P.M. August 13.

R. 9.30. P.M. August 14.

Teleggram from Sir E. Grey

It will be clear to you from my telegram of the 12th instant that we contemplate co-operating with Japan in military and naval matters, and contemplate arranging it with Japan before we arrange anything with France and Russia. I had intended to make this clear in my telegram of the 11th instant. The two Governments considered that it was necessary to take action in the general interests of the Alliance, and by action I meant combined action.

1回目

With regard to an assurance respecting geographical limits of action, I do not consider the question of form to be important. All that is required is a public assurance in any form that our two Governments can make public, and that will make it clear that Japan has no intention of seizing German islands in the Pacific, which have a special interest for the Self-Governing Dominions, and also that she does not propose to take advantage of the situation to interfere with the Pacific coast of America or seize the Dutch East Indies. I have constantly explained that these fears about Japan are ridiculous, but they exist, and I only ask for some declaration about geographical limits. This I have done in order to give the Japanese Government an opportunity of dispelling these fears themselves. I hope that Japan will clearly understand that, as soon as the statement has been issued that the two Governments are agreed to take action in the general interests of the Alliance, co-operation on our part will be thorough and cordial.

更ニ八月十七日在本邦英國大使來省加藤外務大臣ト會議シタル、其ノ際、戰爭區域制限問題ニ關ス  
ノ談話ノ要領左ノ如シ。

大使（別紙第一號英國外務大臣來電寫ヲ示シ）獨逸ハ五十「キロメートル」ヲ限リ其軍隊ヲシテ支那領内ヲ通過セシムルノ權利アルヲ以テ此區域内丈ナラバ日本モ同様ノコトヲ爲シ差支ナシト存ズ  
大臣 夫レ丈ノコトニテハ日本ノ行動上未ダ大ニ不十分ナリト思考ス我軍ヲシテ租借地ヲ距ル僅々五十「キロメートル」ノ所ニ上陸セシムルニ於テハ恰モ敵前上陸ト云ヒテモ可ナル位ニテ面白カラズ右地域外ニ於テ軍隊ヲ上陸セシメ且該地域外ヲ通過セシムルコトニ付支那政府ノ承諾ヲ求ムルコトハ出來得ベキコトト信ヌアノミナラズ支那ニ於テ其中立國トシテノ權利ヲ事實上十分ニ行使シ得ルコトハ豫期シ難ク從テ支那ニ向テ此關係ニ於テ國際法ノ規則ヲ其ノ處（in its entirety）適用スルコトハ不可能ニシテ且ハ其要ナシト思考ス勿論英獨開戦直接ノ原因ハ獨逸ガ白耳義ノ中立ヲ侵シタルニ在ル譯ナレバ英國ニ於テハ之ニ對スル手前モアルベキガ然レドモ白耳義ト支那トハ其ノ國情ヲ異ニシ到底同様ニ論ズルコトハ出來ザルベシ兎ニ角此點ハ十分ノ熟考スベシ幸本日陸海軍大臣トモ面會ノ筈ナレバ兩大臣トモ相談スベシ

大使（別紙第一號ノ一、二、三、英國大使ト英國外務大臣トノ往復電報寫ヲ提出シ）此内自分

發電ノ分ハ先日閣下ヨリ御約束ノ次第ヲ電報シタル譯ナルガ英國外務大臣ハ若シ帝國政府ニ於テ未ダ其行動ノ地理的範圍ヲ公表セラレザルニ於テハ斯クノ如キ（別紙第一號ノ一）意味ニテ日本ノ方針ニ關スル宣言ヲ公表シタントノコトナリ

大臣 抑自分ハ左様ノ約束ヲ爲シタル覺ナク又公開ノ席ニテ演説スルノ機會モ未ダ之ナカリシガ今後最近ニ其ノ機會或ハアリストルモ英國外務大臣ノ爲サントスル如キ聲明ハ之ヲ爲スコト能ハザルベシ第二ニ支那海以西ノ亞細亞海面トハ何ゾヤ

大使 新嘉坡邊ノ海面ノ事ナラン

大臣 此文句ニテハ意味不明瞭ナリ又或ハ之ガ爲却テ蘭領等ヲシテ危惧ノ念ヲ抱カシムルモ計リ

ガタシ 次ニ亞細亞東部大陸トハ何ゾヤ所謂東亞細亞ノ謂ナリヤ果シテ然ラバ其地方中何所ニ獨逸ノ領地アリヤ又太平洋中ノ島嶼若クハ領地トソコトモ明ナラズ先以テ日本自體ハ如何

大使 マサカ、自分ニテ自分ノ國ヲ攻メル者モナカルベシ

一四六

**大臣 攻メハセザルベキモ防ギハスベシ獨逸ガ若シ日本本土ニ攻メ來ラバ如何**

何セヨ斯クノ如ク具體的ニ地域ヲ列舉スルコトハ害アリトモ益ナキヲ以テ帝國政府ニ於テ公然聲明ヲ爲ス場合ニハ一般的ニ他國ノ領土ヲ侵略シ割取スルノ意圖毫モ之ナキコトヲ宣言スルニ止ムルコト然ルベシ現ニ昨日重ナル貴衆兩院議員、新聞記者、重ナル實業家等ニ對シ本大臣ガ

言明シタル所モ右ノ趣旨ニ外ナラザリキ

又十五日蘭國公使支那公使等ニ對シ言明シタル所モ全ク同趣意ナリキ

**大使 蘭國公使ヤ支那公使ニ言明セラレタルコトヲ本使ニ御洩シナカリシハ遺憾ナリ**

大臣、成程十五日ノ會見ニ於テハ改メテ事々シク之ニ言及セザリシヤモ知レザレドモ之ヨリ以前數次ノ會見ニ於テ又英國政府ニ對スル帝國政府ヨリノ文書ニ於テ最早特ニ警言ヲ費スマデモナク明瞭ニ成リ居ル事柄ニテ閣下ト自分トノ間ニ今更斯ル保障ヲ與フルハ餘リニ白々シケレバ之ヲ述べザリシナリ然シ若シ御希望トアラバ只今改メテ之ヲ閣下ニ向テ言明致スベシ免ニ角外部ニ向テハ御提議ノ如キ聲明ハ今後ニ於テモ差控ヘ度ク一層一般的ノ言明ヲ爲スコトニ致スベシ又去十三日御持參ノ覺書中ノ露佛陸海軍ヲシテ日英ノ協同動作ニ加ラシムルノ件ハ戰爭終了ノ後善後ノ商議ニ際シ餘リ多數ノ者ガ發言權ヲ有スルコトハ好マシカラズ彼等ノ參加ハ可成止メタシト思考ス

大使、セメテ海軍丈ニテモ參加セシムルコトシタシ又日英兩國間ニ付テハ英艦二隻ヲ日本司令官ノ指揮ノ下ニ又日本艦二隻ヲ英國司令官ノ指揮ノ下ニ置クコトニ致シ度シ

大臣、夫レ等ハ附レ海軍省局トモ打合スベキガ貴方ハ一隻ヲ日本ノ指揮ノ下ニ置カレドモ可ナラソカ大使、露佛兩國ガ一隻ヅ出スコレト成レバ英國ハ矢張二隻ハ出ナザル可ラズ東ニ角是等協同動作ノ細目ニ關シテハ本來ナラバ一々自分ヨリ閣下ニ御協議致スベキ筈ナレドモ事專門ニ瓦ル點モアルヲ以テ若シ御承諾ヲ得バ大使館附陸海軍武官ヲシテ帝國陸海軍官憲ニ對シ直接協議セシムルコト致シタシ貴見如何

大臣、事ノ大局ニ關係スルガ如キモノハ別トシ細目ニ關シテハ夫レニテ可然ト思考スルモ是亦陸海軍大臣ト相談ノ上御答致スベシ

右ニテ會談ヲ了リ英國大使ハト先退出シタルガ大臣ハ次デ陸海軍大臣ト本省ニ於テ會見セラレタル上午後五時英國大使ノ再來ヲ求メラレタリ談話ノ要領左ノ如シ

大臣、御足勞ヲ煩シタルハ先刻御話ノ貴大使館附陸海軍武官ヨリ直接陸海軍省官憲へ協議ノ件兩大臣ト相談ノ結果ヲ御話センガ爲ナリ兩大臣トモ右ニテ異存ナキニ付左様御取計相成タシ先刻ノ協同艦數ノコトモ同様御取計アリタシ（因ニ後海軍大臣ヨリ英國武官ノ協議ニ依リ日英各二隻交換ニ同意シタル旨大臣ニ語アリタリ）

大使、拜承セリ、序ニ英國外務大臣ヨリ此電報ニ接シ居レリ（別紙第二號ヲ提出ス）訓令ニ據ル譯ニハ非ザレドモ御内覽ニ供ス

大臣、支那ノ中立尊敬ノコトハ英國外務大臣ニ於テ餘リ重キヲ置カレザル様希望ス。且ツ膠州灣還附ノコトモ獨逸ガ最後通牒ノ條件ヲ其儘承諾スレバ免ニ角若シ兵力ニ訴ヘ之ヲ取りタル場合ニハ自ラ事態異リ來ルベキヲ以テ爾カク簡單ニ論ズルコトヲ得ズ故ニ本問題ヲ支那政府ニ對シニヨリ明言スルハ甚ダ好マシカラズ次ニ此電報ノ第二項ニ關聯シ先刻ノ五十「キロメートル」

地帶ノ件モ陸海軍大臣ニ詰シタルニ何レモ自分ノ意見ト同感ナリキ尤モ右範圍内ニ上陸點ヲ發見シ得ナルヤ爲念尙取調中ナリ

英國大使ハ右ニテ此日第11回ノ會見ヲ丁ソ提出セヨ。

(別紙第1號)

AIDE MEMOIRE.

Telegrom from Sir Edward Grey.

August 15th.

By Article 1 of the Treaty between Germany and China of 1898 Germany has the right to move troops at any time through a 50 Kilometer zone of Chinese territory. It is this territory only which the Imperial Government proposes to utilize I see no objection to their doing so without asking the consent of China, or at any rate with a simple notification that, as German troops have the right to cross it, the troops of Powers at war with Germany must do likewise.

(司紙第1號ヘ1)

Telegrom to Sir Edward Grey.

August 15th.

The Minister for Foreign Affairs will make a general reference as to the geographical limits of action in a formal statement, and an early opportunity of supplementing this will be taken either by the Prime Minister or Baron Kato in a public utterance which will be intended to dispel the special apprehensions mentioned by Sir Edward Grey.

(司紙第1號ヘ1)

Telegrom from Sir Edward Grey.

August 15, 1914.

I presume that whenever Japan declares war I am at liberty to make a public statement as to the geographical limits of Japanese action, unless this has already been done by the Japanese Government themselves. The form which I would propose is as follows:

"His Majesty's Government have received a statement from the Japanese Government that their intention is to operate in China Seas (and Asiatic Waters west thereof and against German territory or occupied territory on the eastern continent of Asia) but not to extend these operations to Islands or territory in the Pacific Ocean."

It is essential that some such statement should be made public, although it is not necessary that it should be in the declaration of war issued by Japan.

(司紙第1號ヘ11)

Telegrom from Sir Edward Grey.

August 16th.

As soon as the Prime Minister or Minister for Foreign Affairs has made the promised statement you should inform me, immediately.

If the statement is made sufficiently soon and is explicit we shall simply quote it, but if such is not the case it will be essential that we should be able to give assurance on the lines already indicated, to the self governing Dominions.

British Embassy, Tokyo.

1回目

(別紙第三號)

AIDE MEMOIRE.

Telegram from Sir Edward Grey.

August 15th.

A joint communication might be made at Peking pointing out that the object of the proposed operations would be to restore Kiaochow eventually to China and the restoration of China's full sovereignty over Shantung, and asking China to consent to foreign troops crossing her territory for the above purpose, or at any rate not to protest against it.

If the Chinese resist we can hardly be a party to a violation of Chinese territory and to overcoming their opposition by force. This is the very thing which the Germans are now doing in Belgium and which is the principal cause of our war with Germany. It is true that we have no treaty with China as we have with Belgium, but we should never-the-less be open to reproach.

大正三年八月十九日在本邦英國大使加藤外務大臣ノ求ニ應シ來省シタルガ其ノ會議ノ要領左ノ如シ。  
大臣（別紙第一號）ノ通十七日總理大臣ノ實業家招待席上ニ於ケル演説中軍事行動制限ニ關スル部分ノ英譯ヲ示シ。一昨日モ御話シタル通ニテ日本ノ軍事行動ノ範圍ヲ具體的ニ言明スルコトハ面白カラズ現ニ貴國艦隊司令官ヨリノ貴大使館付武官宛ノ通報トシテ海軍省ヨリ接受セル報告ニ依レバ獨逸軍隊ハ「ジエルト」島ニ在リトノコドナルガ果シテ然ラバ同島ハ日本汽船ノ  
船底船水等ノ支那港ニ至ケンベシ其者既ノ安否ヲ取リ當該ノ行駛ヲ取ラズレテ再び之ヲ起  
ルハ既ニ已ムラ得ザル所ナルベシ當又昨日モ朝鮮シタク通日本ノ軍艦ニ隻ヲ貴國司令官ノ指揮ノ下ニ置クコトトモナラバ夫等二隻ガ何レノ海面ニ使用セラルモ自由ナルコトトナルベク尙日本ノ東海岸ニ對スル危險ニモ備フルノ必要アルベク從テ日本ノ行動ヲ太平洋上ノ領土島嶼ニ及ボサズトノ制限ヲ其儘ニ實行シ得ザルコト昨日現ニ述べタル所ノ如シ要スルニ英國外務大臣ノ希望ハ深淵、「リージーランド」等ニ於テ日本ノ眞意ヲ疑ヒ或ハ其近海ニ於ケル平和ヲモ害スルガ如キコトアランカトノ心配アルベシトノ懸念出ツルコトナルベケレバ之ニ備フル爲ニハ昨日モ御話シタル如キ一般的ノ言明ニテ十分ナリト思考セラレタルヲ以テ總理大臣ニ於テモ其意味ニテ此聲明ヲ制限シタル次第ナレバ左様御諒承アリタシ  
大使 委細拜承セリ自分一己ノ意見シテハ是ニテ十分ト存ズ次ニ（別紙第二號英國外務大臣來電寫ヲ提出シ）此ノ通電報ニ接シタリ御一覽ニ供ス  
大臣（一晩後）此第二項中膠州灣還附ノ件ハ事實斯クノ如キ事態ハ萬々發生セザルベシト思考ス支那ガ若シ獨逸ニ據リ何等カノ計畫ニ出ヅルニ於テハ重大ナル結果ヲ生ズベキ旨夙ニ支那政府ニ申入アル次第モアルニ付支那ガ獨逸ノ提唱ニ基キ是等獨逸ノ處置ヲ甘受スルガ如キコトハナカルベシ又其後段獨逸艦隊散ノ件ハ篤ト我海軍當局ニモ申傳ヘ置クベシ  
大使 斯様ノコトハヨモヤ生ズマジトハ存ズルモ尙萬一ヲ慮リ英國外務大臣ヨリ申來リタル次第ナルベキニ付一應御考量相成置カレタシ  
英國大使ハ右ニテ會談ヲ了リ退出シタリ。

（別紙第一號）

一五

1411

At the invitation of Count Okuma, prominent businessmen from different parts of the country assembled at his official residence this afternoon to hear him speak. After brief dwell-

"Japan's object is to eliminate from the Continent of China the root of the German influence, which forms a constant menace to the peace of the Far East and thus to secure the aim of the alliance with Great Britain. She harbours no design for territorial aggrandizement or entertain no desire to promote any other selfish end. Japan's warlike operations will not, therefore, extend beyond the limits necessary for the attainment of that object and for the defence of her own legitimate interests. Accordingly the Imperial Government have no hesitation in announcing to the world that the Imperial Government will take no such action as to give to third Powers any cause of anxiety or uneasiness regarding the safety of their territories and possessions."

(別紙第1號)

Telegogram from Sir Edward Grey.

August 17th.

Yesterday when the Japanese Ambassador gave me an Ade Memoire containing the Japanese ultimatum which has been sent to Germany I told His Excellency that it would now be necessary for us to await developments as I understood that the ultimatum has been handed to the German Ambassador at Tokyo and had also been communicated to the Chinese Government.

I drew His Excellency's attention to the possibility that Germany might deal with the ultimatum by handing back Kiaow-chow to China direct and by sending her ships away to sea.

You should consult Minister for Foreign Affairs and say that I hope the Japanese Government are prepared to deal with the contingencies indicated above.

British Embassy, Tokyo.

August 19th, 1914.

更ニ八月二十日在本邦英國大使來省日英兩國政府ニ於テ支那政府ニ警告ヲ與ヘントスル件ニ關スル別紙英國政府ノ電報二通各寫(別紙第一號及第二號)ヲ差出シタルヲ以テ大臣ハ曩ニ支那政府ニ對スル日英兩國政府ノ共同警告ニ關スル帝國政府ノ提案ニ付テハ英國政府ニ於テ稍々誤解アル様思考セラル處右提案ハ支那政府ノ財政上ノ困難ガ歐洲ヨリ資金ヲ得ルノ道絶エタルニ依リ漸次增加シ其結果國內各地方ニ内亂動搖ノ發生スルコトモアルベキカト懸念セラレ且支那政府ニシテ領土保全ニ關シ援ヲ日英兩國以外ノ第三國ニ求ムルガ如キコトアルニ於テハ事態收拾スベカラザルニ至ラントヲ恐レタルヲ以テ日英兩國ハ共同シテ支那ニ援助ヲ與フベキニ付日英兩國ニ依頼スルノ得策ナルコトヲ支那政府ニ對シ日英兩國政府ニ於テ警告ヲ與ヘントスルニ在リタリ。然ルニ其後局ノ發展ト共ニ支那政府ガ日英兩國以外ノ第三國ニ援助ヲ求メントスルガ如キ懸念ハ今日ニテハ先づ之レナキニ至リタルヲ以テ帝國政府ニ於テバ此際尙日英兩國政府ニ於テ支那政府ニ共同警告ヲ與フルノ必要ハ最早之ヲ見ザルニ至リタルモノト思考スト述ベラレタリ。

尙其節大臣ヨリ「ジョルダン」氏ガ兎角日本ノ行動ヲ制時セントルノ氣味アル次第ヲ大使ノ専マデニ申添ヘラレタリ。

又英國大使ハ膠州灣攻撃ニ付三種ノ方法アル處何レニ依ルベキヤ本國政府ニ電稟スル筈ナリトテ左

三案ヲ示シタリ。

一、兩國軍ガ支那領土ヲ通行ベルニ付兩國共同ニテ支那政府ノ同意ヲ求ムルコト。

二、日本兵ハ膠州灣ノ周圍五十「キロメートル」ノ地域内ニ上陸スルコト。  
トバノ地域内ヨリ上陸スルコト。

大臣ハ右ニ對シ第三ノ如ク英國兵ガ右地域内ニ上陸シ得ルハ日本兵ガ膠州灣ヲ包囲シタル後ニ於テ始メテ行ハレ得ベキコトナルベシト述べラレタルガ英國大使ハ兎ニ角右三案ヲ本國政府ニ電稟スル積ナリト述べタリ。

(別紙第1號)

#### DRAFT JOINT DECLARATION.

The Treaty of Alliance signed in London on July 13th, 1911, between our two Governments has for one of its principal objects the independence and integrity of China. China can therefore at the present juncture look with special confidence to Great Britain and Japan for assistance in the maintenance of her independence and integrity. The two Powers will use their utmost strength to secure this end during the present War.

(別紙第1號)

Teleg. from Sir E. Grey.

August 18, 1914.

I author that the intention of the Minister for Foreign Affairs, as reported by you on August 10th, was that we should give notice to the Chinese Government to rely solely on our advice not only during the progress of the war but also in future. This view coincides absolutely with mine and in order to secure this object I should like to add at the end of the draft declaration proposed by the Japanese Charge d'Affaires at Peking the phrase "and in settlement of the terms of peace".

As Kiaochow is mentioned in the Japanese ultimatum to Germany it is unnecessary to mention it in our declaration at Peking, and the assurance to the Chinese Government may be general in character.

Please inform Minister for Foreign Affairs of above.

British Embassy, Tokyo.

August 20, 1914.

八月二十日 在本邦英國大使來省別紙交戰地域局限及其他ノ件ニ關スル本國政府ノ電報寫三通(別紙第一、二、三號)ヲ加藤外務大臣ニ手交シタルヲ以テ大臣ハ帝國政府ニ於テハ交戰地域局限ニ關スル英國政府ノ聲明ガ單ニ同政府ノversionタル旨ノ説明ヲ送ラレタル以上ハ本件ハ之ニテ打切りトスベシ。尤モ帝國政府ハ必要ノ場合ニハ日英兩國政府間ニハ交戰地域局限ニ關シ何等約束ナキコト及英國政府ノ發表シタルモノハ帝國政府ノ意志ヲ推察シタル同政府自身ノ解釋ニ過ギザル旨ヲ明言スル場合モアルベキニ付此ノ義含ミ置カントシト陳ベラレタリ。

又大臣ハ前記英國政府ノ電報寫ニ依レバ「グレー」氏ハ佛國ガ已ニ其豫後備兵ヲ天津ニ集メタルヲ

以テ佛軍ノ參加ヲ招請セザルコトハ甚ダ困難ナリト思考セラレ居ル趣ノ處右佛兵ノ天津集中ハ佛國

五四

一五六

側任意ノ行動ナルヤ其トモ英國側ヨリ何等注意セラレタルニ基ク次第ナルヤ其ノ邊ノ事情ハ承知セズト雖モ日本陸軍官憲ニ於テハ膠州灣攻撃ノ爲一ヶ師團ノ陸兵ヲ出動セシムル豫定ニテ若又必要ナルニ於テハ幾何ニテモ増兵シ得ル準備整ヒ居ルヲ以テ微々タル膠州灣ノ占領ニハ聊カモ困難ヲ感ゼザル處ナリ。況ヤ佛露兩國軍ノ參加ハ後日善後問題ニ複雜ナル紛糾ノ種子ヲ殘スニ均シキモノナルヲ以テ右兩國軍ノ參加ヲ必要トスル理由ハ之ヲ見ルヲ得ズ。就テハ英國政府ニ於テハ何故ニ佛露兩國軍ノ參加ヲ以テ特ニ利益アリトセラル次第ナルヤ親シク「グレー」氏ノ所信ヲ叩キタキモソハ叶ハザル義ナル付大使ヨリ本件ニ關スル「グレー」氏ノ腹藏ナキ眞意ヲ承知シタキ旨ヲ述ベラレタリ。

又其ノ節大臣ハ曩ニ英大使ノ提示シタル膠州灣攻撃ノ三方法ニ關シテハ早速海軍當局ニ申送リ置キタルニ今朝其回答ニ接シタルガ右回答ハ所謂五十「キロメートル」ノ地域内ヨリ上陸スルコトハ到底不可能ニシテ是非トモ大部隊ハ右地域外ノ北方海岸ヨリ上陸セシメザルベカラズ。尤モ膠州灣ヲ包圍シタル曉ハ重砲等ノ陸揚ハ膠州灣附近ノ某地點ヨリスルコト可能ナルベシト云フニ在リ。要スルニ膠州灣攻撃ノ爲メニハ勢ヒ支那ノ中立ヲ尊重シ得ザルハ誠ニ已ムヲ得ザル次第ナルヲ以テ目下帝國政府ニ於テ支那政府ノ意向ヲ「サウンド」シツアリト述ベラレタル處英大使ハ然ラバ英國モ亦共同シテ支那ノ同意ヲ得ルコトニ爲シテハ如何ト申出デタルヲ以テ大臣ハ其義ハ暫ク差控ヘラレタシト述ベラレタリ。

更ニ八月二十四日在本邦英國大使來省紙英國外務大臣來電ニ通フ示シ其一(別紙第四號)ハ既ニ陸軍ヘ交付済ナアガ其二(別紙第五號)ハ大臣ノ一覽ニ供スル次第ナリト邊ベタクニ付大臣ハ右別紙第一號前段井上大使會談ノ次第ハ同大使ヨリモ既ニ報告ニ接セリ次ニ問題ト爲リ居ル膠州灣攻撃ニ佛露軍隊參加ノ件ハ英國政府ヨリ公然ノ相談アルニ於テハ適當ノ考慮ヲ加フベシト答ヘラレタリ。

(別紙第一號)

*Telegram from Sir Edward Grey.*

August 21, 1914.

It was essential that something should be published and the statement as to geographical limits of action did not purport to represent the text of formula which the two Governments had agreed upon, but our own version of what we understood to be the intentions of the Japanese Government. It was accordingly prefaced by the words "it is understood".

If we had not made some such publication unfounded apprehensions would have given rise done.

We have now published a speech made by the Japanese prime Minister so that equal publicity has been given to the Japanese version of their own view.

British Embassy, Tokyo.

August 22, 1914.

(別紙第一號)

*Telegram from Sir Edward Grey.*

Sir Edward Grey considers it very difficult not to offer participation in the operations to France as she has collected all her reservists at Tientsin. As Russia has no troops in North

JAP

1月6

China, no doubt she will be glad to limit her action to participation on sea.  
British Embassy, Tokyo.

August 22nd, 1914.

(別紙第一號)

Teleggram from Sir Edward Grey.

The statement made by the Prime Minister is much appreciated by His Majesty's Government and will be issued to the Press Bureau.

British Embassy, Tokyo.

August 22nd 1914.

(別紙第三號)

Teleggram from Sir Edward Grey.

In deference to the wishes of the Imperial Japanese Government, His Majesty's Government will drop the question of French and Russian participation. Sir Edward Grey considers that it would be most unfair for any of the allied Powers to put claims in China which would in any way prejudice the terms of peace to be made by Japan. This has been explained to the Imperial Japanese Ambassador in London. The sole reason of Sir E. Grey in suggesting participation was to avoid giving offence.

Teleggram from Sir Edward Grey.

August 22nd.

In a conversation which I have had with the Japanese Ambassador, His Excellency told me that in the operation for the capture of Kiao-chow, the troops will have to pass over a piece of Chinese territory other than the fifty kilometre zone over which Germany possesses certain rights and that the Chinese Government may be approached by the Japanese Government on the subject.

In replying to His Excellency I stated that we should raise no objection provided that China consented to grant this facility for an operation which would be for her own benefit in the long run. All we objected to was to becoming a party to the unprovoked violation of Chinese neutrality if China opposed it. No Treaty rights were involved.

(4) 對獨最後通牒ト日英協約

斯くて日英兩國政府間ニハ戰地局限問題ニ關シ折衝ヲ重ネツアル一方、八月十五日帝國ハ獨逸國對シ最後通牒ヲ發スルコトトナリ、之ヲ在獨船越代理大使宛電送スルト共ニ、在本邦獨逸國大使ニモ覺書ヲ手交シタリ。右最後通牒(別紙第一號)ニハ日英同盟協約ノ豫期セル全般ノ利益ヲ防護ベルガ爲必要ナル措置ヲ講ズル旨ヲ明カニセリ。

一五九

要ノ事タルヲ思ヒ茲ニ誠意ヲ以テ獨逸帝國政府ニ勸告スルニ同政府ニ於テ左記二項ヲ實行セラレム

ハトヲ以テス

第一

日本及支那海洋方面ヨリ獨逸國艦艇ノ即時ニ退去スルコト退去スルコト能ハザルモノハ直ニ其武裝ヲ解除スルコト

第11

獨逸帝國政府ハ膠州灣租借地全部ヲ支那國ニ還付スルノ目的ヲ以テ一千九百十四年九月十五日ヲ限リ無償無條件ニテ日本帝國官憲ニ交付スルコト  
日本帝國政府ニ於テ般上ノ勸告ニ對シ一千九百十四年八月三十三日正午迄ニ無條件ニ應諾ノ旨獨逸帝國政府ヨリノ回答ヲ受領セザルニ於テハ帝國政府ハ其必要ト認ムル行動ヲ執ルベキコトヲ聲明ス

右譯文

Considering it highly important and necessary in the present situation, to take measures to remove all causes of disturbance to the peace of the Far East and to safeguard the general interests contemplated by the Agreement of Alliance between Japan and Great Britain, in order to secure a firm and enduring peace in Eastern Asia, establishment of which is the aim of the said Agreement, the Imperial Japanese Government sincerely believe it their duty to give advice to the Imperial German Government to carry out the following two propositions:—

1st. To withdraw immediately from the Japanese and Chinese waters German man-of-war and armed vessels of all kinds, and to disarm at once those which cannot be so withdrawn.

2nd. To deliver on a date not later than September 15th 1914, to the Imperial Japanese Authorities, without condition or compensation, the entire leased territory of Kiaochow with a view to eventual restoration of the same to China.

The Imperial Japanese Government announce, at the same time, that, in the event of their not receiving by noon August 23, 1914 the answer of the Imperial German Government signifying an unconditional acceptance of the above advice offered by the Imperial Japanese Government, they will be compelled to take such action as they may deem necessary to meet the situation.

(五) 國際聯盟ノ設立ト日英協約改訂問題

第三回日英協約ノ效力ハ千九百二十二年七月ヲ以テ終了スル旨規定シアリ、右終了ノ時期接近スルニ及  
ビ英國政府ハ大正九年五月着任セル在本邦英國大使ニ對シ條約更新ノ件ニ關シ意見具申方ヲ訓令シ、  
同大使ハ五月十九日内田外務大臣ト會見ノ際本件ニ關スル帝國政府ノ意向ヲ尋ねタルヲ以テ政府ハ開  
議ノ決定ヲ經テ二十二日同大使ニ對シ帝國政府ハ更新ニ賛成ナル旨ヲ内告セリ。右五月十九日ノ會談  
ニ於テ英國大使ハ國際聯盟ノ將來ハ兎ニ角、現ニ存立スル以上同盟モ現形ノ儘存續シ難ク從ツテ單純  
ナル繼續トセズ之ヲ改訂スルコト必要ナル旨ヲ述べタルニ對シ外務大臣モ同感ナル旨ヲ答へタリ。  
六月七日在本邦英國大使來訪シ本國政府ヨリ電訓ニ接シタリトテ「同政府ノ意見ニテハ日英同盟改訂  
問題ニ關シテハ國際聯盟トノ關係モアリ兩國政府ハ此儘何等措置ヲ執ルコトナクシテ本年七月十三日  
ヲ經過シ難ク傍々來年七月十三日以後同盟ヲ繼續スルコトトナルニ於テハ國際聯盟規約ト矛盾セザル  
形式ニ於テ繼續スベキ旨ノ通告ヲ此際日英兩國ヨリ聯盟ニ發送スルゴトトスル方可然尙同盟改訂ニ關  
スル英國政府最後ノ決定ハ今秋殖民地側トノ協議終了ヲ俟テ決セラルベキモノナル旨」述べタルニ付  
帝國外務大臣ハ之ニ對シ右英國側最後ノ決定ヲ見サル以前ニ於テ聯盟ニ通告ヲ發スルコト差支ナキヤ  
ト尋ねタル處同大使ハ殖民地側ニ於テ別段故障ナカルベキ旨ヲ答ヘ尙外務大臣ノ請求ニ應ジ六月八日  
同大使一己ノ私案トシテ左ノ如キ通告案ヲ送附シ帝國外務大臣ニ於テ右ニ異存ナクバ該案ヲ本國政府  
ニ呈示シテ其若監督督査ノ件外務大臣ノ關スル限り右案文ニ異存ナク當審定ノ機會  
ニ於テ開催トセキ旨告白シタル。

The Governments of Japan and Great Britain have come to the conclusion that the  
treaty of alliance now existing between their two countries, though in harmony with the  
spirit of the Covenant of the League of Nations, is not entirely consistent with the letter  
of that Covenant, which both Governments earnestly desire to respect.  
They accordingly have the honour jointly to inform the League that they recognise  
the principle that the said Treaty can only be continued after July, 1921, in a form which  
is not inconsistent with that Covenant.

右譯文

日本及ビ大不列顛國政府ハ兩國間ニ現存セル同盟條約ガ其精神ニ於テ國際聯盟規約ト一致スト雖  
モ兩國政府ノ熱心ニ尊重セムト欲スル該規約トハ文字ニ於テ全然兩立スルモノニ非ズトノ結論ニ  
到達シタリ  
依而兩國政府ハ該條約ガ千九百二十二年七月以後該規約ト矛盾セザル形體ニ於テノミ繼續セラル  
ベキモノナル旨ノ主義ヲ承認スルコトヲ共同シテ聯盟ニ通告スルノ光榮ヲ有ス  
其後在本邦英國大使ハ六月十七日附書翰ヲ以テ「カーデン」卿ヨリ右聯盟ニ對スル通告ニ付キ共  
同措置ヲ執ル様珍田子爵ニ交渉中ナル趣ノ電報アリタル旨ヲ通報シ來レリ（別紙第一號）  
(別紙第一號ノ一)

144

British Embassy, Tokyo.

June 17th 1920

My dear Minister,

You will remember that in your private letter to me of the 8th instant you expressed agreement with the wording of the proposed draft communication to the League of Nations, which I sent you.

I am happy to inform you that I have just received a telegram from Lord Curzon in which he says that he also agrees, and that he is communicating with Viscount Chinda so that joint action may be taken without delay in the matter of informing the League of Nations.

Believe me,

My dear Minister,

Yours sincerely,

(Signed) Eliot.

In my telegram to the Foreign Office I did not fail to make it plain that though you approved of the draft personally you had not yet submitted it to the Cabinet.

(別紙第一號ハ1)

在本邦英國大使來翰（必親展）

拜啓陳者豫テ本使ヨリ及御送付候國際聯盟免通告案文ノ辭句ニ對シ御同意ノ旨本月八日附貴翰ヲ以テ照申送ル次第該署總ノコト存候然ニ既以今「カーラン」卿ヨリ照應ニ於テモ右通告文ニ關意セラ

ラン總領く通告ノ義ニ付キ送リ共同居留ヲ執ル様珍田子爵ニ交渉中ナ々捷電報有之候右御領事上

度此段得實意候 敬具

千九百二十年六月十七日

チャールズ・エリオット

内 田 外 務 大 臣 殿  
追伸外務省ヘノ拙電ニ於テ閣下自身ニ於テハ右案文ニ賛成セラレタルモ未だ閣議ニ附議セラレタ

ル次第ニハ無之旨特ニ明瞭ニ致實候

（別紙第一號ハ11）

STRICTLY CONFIDENTIAL.

My Dear Ambassador,

With reference to my letter of Friday last, I am happy to inform you that my Government have also agreed to the proposed draft communication to the League of Nations. As to the alteration of wording of the communication in question, I have just given the instructions to Viscount Chinda in the sense of our conversation of this afternoon.

Believe me,

My Dear Ambassador,

Yours sincerely,

(Signed) Uchida.

June 22nd, 1920.

144

(別紙第一號ノ四)

一六六

在本邦英國大使宛回答文(必親展)

拜啓陳者昨日附貴翰拜誦承リ候得バ「カーブン」卿ハ聯盟宛通告案文ニ同意セラレ本件ニ關シ珍田子爵ト御交渉中ノ趣敬承致候前記報道ヲ供給セラレ候御好意ニ對シ深ク感謝致度且ツ本件ハ來週火曜日閣議ニ附議スルコトニ相成居候旨不取敢御通報申上度此段回答申進候 敬具

千九百二十一年六月十八日

在本邦英國大使殿

内 田 康 哉

我方ニ於テハ六月二十二日ノ閣議ヲ以テ右通告案文ヲ決定、帝國外務大臣ハコノ旨同日附書翰ヲ以テ在本邦英國大使ニ通報セリ。(別紙第一號)  
在英國珍田大使ハ六月二十四日英國外務大臣ニ面會シ、帝國政府ガ通告ニ關スル提案ニ同意ナル旨ヲ述べ、本案文ニ日英兩國ガ主義上同盟繼續ノ希望ヲ有シ居ルコトヲ表明スルニ於テハ我政府ニトリ誠ニ満足ナルベキ旨ヲ述べタルニ英國外務大臣ハ之ヲ承シテ recognize the principle 以下ヲ that if the said Agreement be continued after July 1921, it must be in a form which is not in consistent with that Covenant. ハ變ヘバキコトヲ提案シタルバ以テ珍田大使ハ右ニ對シ同意ヲ表シタス。

其後兩國政府協議ノ結果(別紙第三號)七月八日聯署ニ通告ベシコトメナシ(別紙第四號)

(別紙第一號)

SIRIETLY CONFIDENTIAL.

My Dear Ambassador,

With reference to my letter of Friday last, I am happy to inform you that my Government have also agreed to the proposed draft communication to the League of Nations. As to the alteration of wording of the communication in question, I have just given the instructions to Viscount Chinda in the sense of our conversation of this afternoon.

Believe me,

My Dear Ambassador,

Yours sincerely,

(Signed) Uchida.

British Embassy Tokyo.

July, 1st 1920.

(別紙第一號)

CONFIDENTIAL.

Monsieur le Ministre,

With reference to our conversation of June 22nd about the renewal of the Anglo-Japanese Alliance, I have the honour to inform Your Excellency, under instructions from His Majesty's

1 K-2

調—0443

0229

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp>

Secretary of State for Foreign Affairs, that, as desired by Your Excellency, the text of the proposed communication to the League of Nations has been altered by the substitution of the words "Anglo-Japanese Agreement of July 13th, 1911," for the words "Treaty of Alliance" in the first paragraph, and that the second paragraph has been altered to read as follows:—

"They accordingly have the honour jointly to inform the League that they recognise the principle that if the said Agreement be continued after July 1921 it must be in a form not inconsistent with that Covenant."

Lord Curzon states that this latter change was made in order to meet the views of the Japanese Ambassador in London.

I avail myself of this opportunity, Monsieur le Ministre, to renew to Your Excellency the assurance of my highest consideration.

Excellency  
Viscount Yasuya Uchida,  
etc., etc., etc.  
H. I. J. M. Minister for Foreign Affairs.

(同紙第11号)

CONFIDENTIAL.

Dear Viscount Uchida,

You told me on June 29th that Viscount Chinda had telegraphed to you that the note

which we are addressing to the League of Nations would not be presented until the autumn, because our authorities wished to communicate it to the representatives of the Dominions who meet in London at that time. I telegraphed this at once to London and have just received a reply saying that Viscount Chinda is partly under a misapprehension. It is true that our Colonial Office expressed a desire to communicate the text of the note to the Governments of the Dominions, but this has already been done and it is proposed that joint communication by Japan and England should be made to the League on July 8th.

Our Foreign Office think it would be better to make no official statement about the joint note until the League of Nations has itself had an opportunity to make it public.

Believe me,

Dear Viscount Uchida,

Your sincerely,

Eliot.

(同紙第11号)

CONFIDENTIAL.

My Dear Ambassador,

I am in receipt of your letter of yesterday's date for which I must ask you to accept my best thanks. It appears that you understood Viscount Chinda had reported to me that the note to the League would not be presented until the autumn. I only meant to say that, according

to the telegram from London, the British Government were unable to concur in our proposal to present the note to the League by the end of last month, because they had to communicate its text to the Governments of the Dominions before proceeding to that step. At all events, I am glad to learn from your letter that it is now proposed to make the joint communication by England and Japan to the League of Nations on the 8th instant, to which I have no objection whatever.

Believe me,

My Dear Ambassador,

Yours sincerely,

(signed) Y. Uchida.

July 4, 1920.

(東京開川橋へ)

**CONFIDENTIAL.**

**TRANSLATION.**

Department of Foreign Affairs,

Tokio, July 5th, 1920.

Monsieur l'Amassador,

I have the honour to acknowledge the receipt of the note of the 1st instant in which your Excellency was good enough to inform me, under instructions from His Britannic Majesty's

Secretary of State for Foreign Affairs, that, as desired by me, the text of the proposed communication to the League of Nations regarding the renewal of the Anglo-Japanese Alliance has been altered by the substitution of the words "Anglo-Japanese Agreement of July 13th, 1911," for the words "Treaty of Alliance" in the first paragraph, and that, in order to meet the views of the Japanese Ambassador in London, the second paragraph has been altered to read as follows:—

"They accordingly have the honour jointly to inform the League that they recognise the principle that if the said Agreement be continued after July 1921 it must be in a form not inconsistent with that Covenant."

I avail myself of this opportunity, Monsieur l'Amassador, to renew to Your Excellency the assurance of my highest consideration.

H. I. J. M. Minister for Foreign Affairs.

His Excellency

Sir Charles Norton Edgecumbe Eliot,

etc. etc. etc.,

H. B. M. Ambassador.

(原紙第三號ノ四)

大正九年七月廿日

外務省大臣

[印]

調—0443

023:

在本邦

英國大使

一七二

以書翰致啓上候陳者本月一日附貴翰ヲ以テ日英同盟更新ニ關シ國際聯盟ニ對スル通告案ハ曩ニ本大臣ノ希望シタル如ク之ヲ變更シ其第一段中ノ「同盟條約」ナル辭句ニ代フルニ「千九百十一年七月十三日ノ日英協約」ナル辭句ヲ以テシタル旨並駐英日本大使ノ意見ニ合致セシムル爲右通告案第二段ヲ「仍テ兩國ハ若シ前顯協約ガ千九百二十一年七月以後ニ繼續セラルベキ場合ニ於テハ該規約ト矛盾セザル形式ニ於テセラレザルベカラズトノ主義ヲ承認スルモノナルコトヲ兩國共同ニテ聯盟ニ通告スルノ光榮ヲ有ス」ト改メタル旨英國外務大臣ノ訓令ニ基キ御申越相成リ敬致候右回答申進  
(別紙第四號)

The Governments of Japan and Great Britain have come to the conclusion that the Anglo-Japanese Agreement of July 13th, 1911 now existing between their two countries, though in harmony with the spirit of the Covenant of the League of Nations, is not entirely consistent with the letter of that Covenant, which both Governments earnestly desire to respect. They accordingly have the honour jointly to inform the League that they recognise the principle that if the said Agreement be continued after July 1921 it must be in a form not inconsistent with that Covenant.

July 8th, 1920.

参考一

日英協約改訂問題ニ對スル中華民國ノ態度

大正九年六月十六日中華民國熊外交部祕書總理代理ノ使トシテ小幡公使ヲ來訪左ノ如キ六月十六日附

口上書ヲ手交セリ尙在支英國大使宛手交セルロ上書モ略々同様ナリ

口述節略

迭據報告日英兩國政府因日英同盟明年七月期滿照約如欲展期須一年前商定現英國政府已在倫敦與日本政府非正式交換意見並稱此項同盟倘經商定展期條款恐尚須修改各等語此事於遠東及中國關係頗鉅本國國民對此深抱疑慮良以按照國際慣例兩友邦訂約祇能保護彼此主權以內之利權況歐戰告終各民族均提倡國際平等若如前約載有中國名稱及土地字樣中國並未參與其事實於國體及民族榮譽有妨倘續訂同盟仍有此等情形本國政府及人民殊有難於容忍之處茲特密爲奉告即希

轉達

貴國政府於修改條約時如以注意至細謹註

民國九年六月十六日附支那外交部上書譯文

數次ノ報告ニ據レバ日英兩國政府ハ日英同盟ガ明年七月ヲ以テ滿期トナリ約三照シテ延期セムトセバ須ラク一年前ニ商定ヲ要スルニ因リ目下英國政府ハ已ニ倫敦ニ於テ日本政府ト非公式ニ意見ヲ交換シツツアリ且該同盟ガ若シ延期ヲ商定スレバ條款ハ恐ラク改修セラルベシ云タトノコトナルガ此ノ事タ

一七三

ル遠東及支那トノ關係頗ル大ナルヲ以テ本國國民ハ右ニ對シ深ク疑慮ヲ抱ケリ  
蓋シ國際慣例ニ按照スルニ兩友邦ノ訂約ハ只相互ノ主權以内ノ利權ヲ保護シ得ルニ止ル況シヤ歐戰終  
リヲ告グ各民族ハ均シク國際平等ヲ提倡セリ然ルニ若シ前約ノ如ク中國ナル名稱及土地ノ文字ヲ記載  
シ中國ガ全ク其ノ事ニ參與セザルニ於テハ實ニ國體及民族ノ榮譽ニ妨ゲアリ若シ續訂同盟ニシテ依然  
此等ノ事情アラバ本國政府及人民ハ特ニ忍容シ難キ處アルナリ茲ニ内密ニ奉告スルニ付希クハ直チニ  
貴國政府ニ轉達セラレ條約改修ノ時之ニ注意セラルニ於テハ深ク睦誼ニ感佩スル次第ナリ

一七四

参考二

日英同盟ト國際聯盟

(ペーチー博士意見要略)

(一) 日英同盟協約第四條ニ就テ

(1) 國際聯盟規約第十三條ハ一切ノ紛争ヲ仲裁々判ニ付スベシト爲スモノニアラザルモ他紛争ノ解決  
ニ關スル聯盟規約第十五條ノ作用ハ事實ニ於テ仲裁々判ナリト謂フベク尠クトモ所謂調停ヨリ更ニ  
數歩ヲ進メタルモノナリ

(2) 要スルニ聯盟規約ノ條章ハ仲裁々判ノ實質ヲ具備シ從テ總括的仲裁々判條約ヲ有スル第三國ニ抗  
シテ赴援ノ義務無シトスル規定ハ寧ロ削除セラルベキモノナルベシ

(二) 聯盟規約ノ制限

(1) 聯盟規約第二十條ハ同規約ノ條項ト兩立セザル一切ノ約定ヲ締結セザルベク且同規約ノ條項ト兩  
立セザル在來ノ約定ヲ解除スベキ旨ヲ規定シタルモ右ノ規定ハ同盟協約ノ締結ヲ妨グルモノニアラ  
ズ

聯盟規約ハ戰爭ノ開始ヲ全然禁止スルモノニ非ズ  
自ラ挑發セズシテ攻撃又ハ侵略的行動ヲ受ケタル場合ニ於テ戰爭ニ訴フルコトヲ禁止セズ聯盟規約  
第十二條ハ單ニ「紛争」ヲ解決スルノ手段トシテ戰爭ヲ禁ズルニ過ギザルナリ

況ムヤ聯盟規約第二十一條ハ平和ノ維持ヲ確保スル國際約定ノ有效ナルコトヲ明ニ認容セリ而シテ  
之レ實ニ日英同盟協約ノ主要目的ニ外ナラズ(英米ノ援佛條約參照)

(2) 攻擊國ニ對スル對抗侵略ハ聯盟規約第十條ニ所謂外部ノ侵略ト謂フヲ得ズ

(三) 實際問題

(1) 波斯印度

印度ニ於ケル英國ノ權利保護ノ爲メ波斯トノ開戰ヲ豫想シ得ベシ而シテ其ノ自衛ノ爲メ行ハルベキ  
場合ニ於テハ日本ノ赴援ヲ要請シ得ベキナリ

(2) 印度ニ於ケル英國ノ權利保護ノ爲メ波斯トノ開戰ヲ豫想シ得ベシ而シテ其ノ自衛ノ爲メ行ハルベキ  
場合ニ於テハ日本ノ赴援ヲ要請シ得ベキナリ

(3) 埃及

及

一七五

一七六

英國及日本ノ世界通商ノ中権タル蘇士運河ニ關スル戰爭ガ印度支那及極東ニ於ケル英國ノ權利擁護ノ爲開戰セラレタルモノト認ムルコトヲ得ル場合アルベシ

(4) 歐羅巴

(イ) 英國ガ極東ニ於ケル敵國ノ領土ヲ攻撃シ又ハ(ロ)敵國ガ東洋ニ於ケル英國ノ領土ヲ攻撃スル場合ニ於テ日本トノ關係如何ノ問題ヲ生ズ只兩者ノ場合ニ於テモ協約ノ所定ニ合致スル場合ニ於テノミ考慮セラルベシ

(5) 米國

巴奈馬運河ノ封鎖ハ恐ラクハ東洋及印度ニ於ケル利益擁護ノ爲メ日本又ハ英國ヲシテ戰爭ニ訴ヘシムルコトアルベキ侵略的行動ヲ構成スルコトアルベシ

巴奈馬運河又ハ墨西哥灣ニ於ケル海軍ノ集中ノ如キモ聯盟ノ精神ニ反スルモノトシテ論護スルコトヲ得ベシ

(6) 蘭國

巴奈馬運河ノ封鎖ハ恐ラクハ東洋及印度ニ於ケル各政團ノ攻擊ハ之ヲ同盟協約ノ所謂「一國ノ攻擊又ハ侵略的行動」トシテ認ムルコトヲ得ベシ

(7) 支那

廣東軍政府ノ地位ハ之ヲ前項露國ニ於ケル各政團ト同一視スルコトヲ得ベシ

(8) 淮海洲

聯盟ハ執行機關ト謂ハムヨリモ寧ロ協議機關ト謂フベシ

同盟協約第四條ハ已ニ其ノ必要ヲ失ヒ且ツ協約ノ價値ヲ損傷スルノ嫌アリ

元來同盟協約ハ單ニ挑發スルコト無クシテ攻擊又ハ侵略行動ヲ被ル場合ニ於テノミ活用セラルモノナルガ故ニ例外若クハ制限ヲ設定スルノ要ヲ見ズ

勿論英國ハ斷ジテ米國ト戰フコト無カルベシトノ趣旨ナルベキモ果シテ然リトセバ現行協約第四條ニ規定セラレタル制限ヲ保留セムガ爲メニハ別ニ「聯盟規約ハ總括的仲裁裁判條約トシテ認メラレザルベシ」トノ明確ナル規定ヲ設クルコト然ルベシ

(所謂米英協調ハ極メテ不自然ナル現象ニシテ特ニ事態ヲ緊張セシムモノト認メラレズ)

(六) 日英協約ノ效力問題—附、對聯盟通告文ノ效力問題

一七六

大正十年五月九日在英林公使ガ英國外務大臣(「カーボン」卿)ニ會見ノ際、同大臣ハ日英同盟改訂問題ハ本年七月商議決定セラルベキ順序ナル處海外領土首相會議六月開催ノ旨ニテ英國政府ノ態度決定ニ時日ヲ要スルニ付三ヶ月ヲ猶豫シ日英兩國政府間ニ商議決定ヲ爲シ度意向ナルニ付テハ日本政府ニ於テモ右猶豫ニ同意アリ度キ旨ヲ申出タリ右ニ對シ林大使ハ直ニ政府ニ電報スベク日本政府ニ於テ多分異議無カルベキヲ信ズト答へ且ソ右ハ聯盟ニ對シ何等通知ノ必要アルベキヤト附言シタルニ英國外務大臣ハ右ハ兩國政府ノ談合ニテ聯盟ニ通知ノ必要無カルベシト述べタリ。

次イデ五月十九日在本邦英國大使帝國外務大臣ヲ來訪シ同盟問題ニ關スル提言ヲ爲シタル處其ノ内容ハ前記英國外務大臣ノ趣旨ト差異甚シキニ付爲念本國政府ノ訓令寫ノ送付ヲ得度旨申入レタルニ五月三十日附ヲ以テ左ノ通リ申越シタリ。

(別紙第一號)

一千九百二十二年五月二十日付本邦駐劄英國大使來翰(譯文)

拜啓諸君昨日御面談ノ件ニ關シ本使ノ所見ニ據レバ客年七月國際聯盟ニ對スル通告ハ

「日本及大不列顛國政府ハ、  
云々」

ト有之該通告中ニハ「[一]日英協約ハ現狀ノ儘ニテハ國際聯盟ト一致セラルコト及[二]若本年七月以後ニ經續セラルル場合ニハ國際聯盟ト一致スル形式ニ於テセラルベク換言スレバ現在ノ形式ニ於テハセラレザルコトノ二箇ノ陳述ヲ含ムモノニ有之候

般上ノ見地ヨリ本年七月十三日以前ニ何レノ當事國モ何等ノ措置ヲ執ラザルトキハ現行協約第六條ノ規定ニ拘ラズ協約ハ消滅スベシトノ結論ニ達スルモノト思考セラレ候

其ノ故ハ國際聯盟ニ對スル通告ハ協約ヨリ後ニ行ハレ從テ明ニ該協約ヲ修正スルノ意圖ニ出デタルモノナルガ故ニ有之候

以上ハ單ニ本使一箇ノ私見ニ有之候得共英國政府今回ノ提議ハ同政府ニ於テモ亦此ノ儘何等ノ措置ヲモ執ラザルニ於テハ協約ハ消滅スベシト思考シ居レルコトヲ表明セル(様認メラレ候)

英國會議ガ倫敦ニ於テ六月迄ニ開會セラレズ又同盟更新ニ關スル何等ノ決定モ七月十三日迄ニ行ハルルコト殆ド豫期シ難シト認メラルニ鑑ミ英國政府ハ左ノ通提言致候即チ

(第二) 協約ヲ三箇月間延期スルコト

(第二) 前記期間中協約ト國際聯盟規約トヲ調和セシムル爲メ左ノ趣旨ノ一條項ヲ加フルコト  
「三箇月ノ延期期間ニ於テ本協約條項ニ規定セラレタル手續ト國際聯盟規約ニ規定セラレタル手續ト相抵觸スル事態ヲ生ジタルトキハ本協約所定手續ニ據ラズシテ該規約所定ノ手續ニ遵據スベキモノトス」

本使ハ以上ノ提議ヲ差當リ祕密ニ付スベキ旨訓令ニ接シ居候又「カーボン」卿ハ國際聯盟ニ對シ更ニ第二ア通告ヲ發スベキヤ否ヤニ就テハ何等言及致居ラズ候尤モ本使ハ貴國政府ニ於テ幸ニシテ本提議ヲ受諾セラルコトトナルニ於テハ結局上記通告ヲ爲スコトナルベクト推想致候

一七九

1<O

此段得貴意候 敬具  
中原文

PRIVATE AND CONFIDENTIAL.

British Embassy, Tokyo.

May 20, 1921.

My dear Minister,

With reference to our conversation of yesterday, the following observations occur to me

The communication made to the League of Nations in June last states that:

"The Governments of Japan and Great Britain ..... not inconsistent with that covenant".

This communication contains two statements:—

(1) that the Agreement as it stands is not consistent with the League of Nations; (2) that if it is continued after July next, it must be continued in a form consistent with the League of Nations, that is to say not in its present form.

It appears to me to follow from the above that if neither party takes any step before July 13th the Agreement will lapse, in spite of the provision in Article VI, because the communication to the League of Nations is posterior to the Agreement and deliberately modifies it.

The above is merely my personal opinion, but the proposal now made by my Government seems to imply that they too think that the Agreement may lapse if nothing is done. Socinx that the Imperial Conference does not meet in London till June, and seeing that

it is most improbable that any decision respecting the renewal of the Alliance can be taken before July 13, my Government suggest:—

First that the Agreement should be prolonged for three months; Secondly that in order to bring it into harmony with the Covenant of the League of Nations during this period, proviso to the following effect should be added:

*If during the three months of prolongation any situation arises in which the procedure prescribed by the terms of the Agreement is inconsistent with the procedure prescribed by the Covenant of the League of Nations, then the procedure prescribed by the said Covenant shall be adopted and shall prevail over that prescribed by the Agreement.*

For the present I am instructed to regard these proposals as confidential, and Lord Curzon says nothing about making a second communication to the League of Nations. I imagine however that if your Government accepts the proposals, as I hope it will, such a communication will ultimately be made.

Yours sincerely

(Signed) Eliot

H. E.

Count Ueda

The full text of the joint Note sent to the League of Nations is as follows:

"The Governments of Japan and Great Britain have come to the conclusion that the

1<1

Anglo-Japanese Agreement of July 13th 1911 now existing between their two countries, though in harmony with the spirit of the Covenant of the League of Nations, is not entirely consistent with the letter of that Covenant, which both Governments earnestly desire to respect.

The accordingly have the honour jointly to inform the League that they recognise the principle that if the said Agreement be continued after July 1921, it must be in a form not inconsistent with that Covenant.

右ニ關スル帝國外務大臣ノ在英林大使宛訓令（五月二十日附）左ノ如シ。

右ニ依レバ（五月二十日附在本邦英國大使書翰）客年七月聯盟ニ對スル日英共同通告ハ畢竟現行協約第六條ノ規定ヲ改修セルモノト解スベク從テ本年七月十三日迄ニ新協約ノ成立ヲ見ズムバ現行協約ハ一旦消滅ニ歸スベシトノ見解ヲ有スルヤニ認メラル處右ハ本國政府ノ電訓ヲ「バラフレーズ」セルモノナルノミナラズ英國大使自身ノ意見ト稱スルモノヲモ合ミ居リテ此部分ハ帝國外務大臣ト會見ノ節帝國外務大臣ノ提起シタル質問等ニ應酬シタルモノナルヤモ難計旁々強チ之ヲ以テ英國政府ノ動カスベカラザル解釋トモ看做シ難キモ若シ果シテ右ニシテ全然英國政府ノ意見ナルニ於テハ之ニ對シ我方ノ執ルベキ措置如何ニ就テハ極メテ慎重ナル考慮ヲ要スルモノアリ就テハ本件延長問題ニ關シテハ追テ當方ヨリ何分申進スル迄貴官ニ於テ何等ノ措置ニ出デラレザル様致度シ

客年七月日英共同通告ノ效力ニ關シ當方ノ見解ニ依レバ右共同通告ハ之ヲ嚴正ニ解釋セバ畢竟兩國ニ於テ聯盟規約ヲ尊重スルノ誠意ヲ表示シ日英協約ヲ將來ニ存續スルニ當ラハ聯盟規約ノ枚章ニ頤應シテ本年七月迄ニ相當條文ノ修補方ヲ約シ且其ノ旨内外ニ宣明セラモノニ外ナラズ創チ該通告ノ結果兩國ハ同盟修補ニ關スル Moral obligation ヲ負フニ至レント雖右共同通告ヲ以テ直ニ現行協約第六條ニ規定セラレタル協約廢棄ノ意思表示ト看做シ難キハ勿論ニシテ從ツラ該通告ニ豫定セル商議期間即チ本年七月迄ニ商議完了セズ新協約ノ成立ヲ期シ難シトスルモ之ガ爲メ現行協約ノ效力ニ影響ヲ及ボスコト無ク即チ現行協約ハ第六條第二項ノ明文ニ遵ヒ兩締盟國ノ一方ヨリ廢棄ノ意思ヲ通告セザル限り依然有效ニ繼續セラルベク只七月迄ニ商議完了セザル場合ニ於テハ客年七月ノ公約ニ顧ミ更ニ協約修補ニ關スル商議期間ノ延長ヲ表明シテ事態ヲ明カナラシメ置ク方穩當ナルベシト思惟セラルニ過ギズ右全然貴官限リ御含迄ニ申添ユ

茲ニ於テ帝國政府ハ慎重協議ノ結果、五月三十日帝國外務大臣ハ在本邦英國大使宛書翰ヲ送リ、之

（別紙第一號）

大正十年五月三十日附在本邦英國大使宛書束

拜復陳者日英同盟問題ニ關シ本月二十日附貴束ヲ以テ御申越ノ次第委曲敬致候右ノ内閣下ノ御私見トシテ開陳セラレタル現行協約ノ有效期間ニ關スル法律的解釋ニ就テハ我方専門家ノ意見ニ據レバ貴見ト根本ノ差異有之即チ右専門家ノ見解ハ閣下ノ御参考迄ニ封入セル別紙摘要通ニテ畢竟客年七月ノ共同通告ハ現行同盟協約第六條ノ規定ニ影響ヲ及ボスモノニ非ズトノコトニ有之候將又該通告案文協議當時ノ實情ニ顧ミルモ「カーブン」卿及珍田伯共ニ該通告文原案「the said Treaty can only be continued after July 1921」ハタニテハ何トナク同盟繼續ノ意思無キガ如キ印象ヲ與ブ

一八四

ルノ處アリトノコトニ意見合致シ結局 "If the said agreement be continued....." ト修正スル  
コトトナレル次第ニテ從テ當時ノ意思ガ客年七月共同通告中日本年七月迄ニ商議完了ヲ期シ難キ場  
合ニハ同盟ヲ廢棄スペシトノ意味合ヲモ含メタルモノニ非ザリシハ明白ナル事實ト被認候  
只貴國 Imperial Conference 等ノ關係ニ依リ客年ノ共同通告ニ豫約セル期間内ニ協約修補ニ關スル  
商議ヲ完了シ難キ處アルハ事情不得已次第二付此際ハ右商議延期ニ關スル實際上ノ辦法ヲ攻究スル  
コトト致度而シテ之ガ實行ニ當リ

第一案トシテハ

貴國政府提言中（第一）ハ「協約ニ關スル商議」ヲ延期スルノ趣旨ト致度又（第二）同盟協約ト聯  
盟規約ト手續上抵觸スル場合ニ於ケル關係ニ就テハ事理極メテ明白ニシテ全ク貴國政府見解ノ通ニ  
有之候得其右ハ聯盟規約ノ效力發生ト同時ニ御來示ノ通解釋スベキ從來既定ノ主義ニ有之從テ今更  
之ヲ特別ノ條項トシテ掲記スルノ要無シトハ思考スルモ貴國政府ノ意嚮ニ依テハ我方トシテ強テ異  
存無之候尤モ右ノ場合ニハ上記ノ事由ニ依リ御來示ノ案文中「三箇月延期中」ノ字句ハ其ノ必要無  
キモノト致思料候

第二案トシテハ

客年ノ共同通告所載ノ期限ヲ延長スルコトシ右延長期間ヲ第一案ノ如ク「三箇月」トセズシテ「相  
當期間」トスルコトニ有之候

將又前記兩案ノ何レニ依ルコトナルモ元來今回ノ了解ハ客年七月ノ共同通告ニ胚胎スルモノナル  
ハ村貢信末段御所見ノ通照回同様國務帶圖ニ通告シ且之ヲ内外ニ宣明スル方委實ナムベシト致思料  
候

就テハ右貴國政府ニ御傳致ノ上何分ノ儀御回示相成度此段得貴意候 敬具  
右譯文

PRIVATE AND CONFIDENTIAL.

May 30th, 1921.

My dear Ambassador:

I have given careful consideration to the contents of your note of the 20th instant con-

cerning the Anglo-Japanese Agreement of Alliance.

In regard to the legal interpretation of the duration of the existing agreement, as to  
which you are good enough to express your personal opinion in your note, I find on consulting  
expert opinion that it differs widely from yours. According to this expert opinion, an outline  
of which is herewith enclosed for your information, the joint communication of last July in no  
way affects Article VI of the existing Agreement. Moreover it would seem clear that the  
joint communication was not intended to mean that the Agreement should lapse in case the  
negotiations were not completed by July of this year, if it be remembered that both Lord  
Curzon and Count Chinda were of opinion that the clause in the original draft of the joint  
communication reading "The said treaty can only be continued after July 1921, etc." gave the  
impression that there was no intention of renewing the Alliance,—and so the clause was by  
common consent made to read "If the said agreement be continued, etc."

Since it is to be apprehended that, owing to the pendency of the British Imperial Con-

1KH

1 KK

ference and other circumstances, the negotiations for the modification of the existing Agreement would not be completed within the period specified in the joint communication, it is desirable that some practical way be found for the prolongation of those negotiations. For that purpose my government desire to adopt either of the two following methods.

(1) The first part of the proposal of your government to be changed so as to prolong the negotiations concerning the Agreement instead of the Agreement itself. As to the second part of your proposal, there does not seem to be any necessity for a special proviso, seeing that although the understanding of your government embodied therein is quite correct it merely reiterates a principle which was recognized as soon as the Covenant of the League of Nations took effect. My government, however, have no intention to sustain their objection in this respect, though it must be observed that at any rate for the reason just mentioned the phrase "during the three months of prolongation" may well be dropped.

(2) To enter into an agreement to prolong the time limit provided in the joint communication of last July for a reasonable period instead of three months as suggested by your government.

Whichever of the above methods be adopted, my government deem it proper, in view of the fact that the new arrangement must be regarded as being based on the joint communication of last year, to communicate it to the League of Nations and give it publicity at the same time.

I beg to request you will be so good as the communicate the above to your government and let me know their views in this matter.

英國 大臣文書室 陸軍司馬

客年七月八日附國際聯盟<sup>1</sup>對スル日英共同通告ハ之ヲ以テ日英同盟協約第六條ノ同盟ノ有效期間ニ

關スル規定ヲ變更シタルモノト了解スルコト困難ナリ

右通告ハ日英兩國ガ適當ノ時期ニ於テ現存同盟協約ノ形式ヲ國際聯盟規約ソ規定ト調和セシムル措置ヲ執ルベキヨトニ一致シ之ヲ國際聯盟ニ通告シタルモノト解スルノ外ナク日英兩國ガ右通告ヲ爲スニ當リ同盟協約ヲ破棄セシムルガ如キ重大ナル結果ヲ生ゼシムル意思ヲ有シ之ガ爲同盟協約第六條ノ規定ヲ變更セントシ之ニ相當スル手續ヲ履行シ其ノ合意ヲ爲シタルモノト認メ難ク又同盟協約ガ國際聯盟規約ノ精神ト合致スルハ前記通告中ニ於テ兩國ノ明ニ認ムル所ニシテ同協約ノ形式不完全ナルガ爲本年七月以後ニ於テ其ノ全體ニ亘リ同盟其ノ物ガ消滅ストノ主義ヲ認メタルモノニアラズ

畢竟日英兩國ハ前記通告ニ依リ本年七月迄ニ同盟協約ノ形式ノ修正ヲナスベキコトヲ國際聯盟ニ聲明シ從テ之ヲ遂行スベキ道徳上ノ義務ヲ負フモ前記ノ事實ニ鑑ニ相當ノ理由アルニ於テハ右ノ形式修正期日ヲ更ニ相當期間延期スルヲ妨げザルベシ乍去何等カノ理由ニ依リ本年七月十二日迄ニ前頭ノ修正ガ實現セランザリシ場合ト雖同盟協約ノ依然有效ナルヲ妨グルコトナシ

右譯文

The communication which Japan and Great Britain jointly made to the League of Nations on the 8th of July last year can hardly be regarded as affecting in any way the provision of the Article VI of the Anglo-Japanese Agreement of Alliance.

That communication merely states that the two governments agreed to take such steps at a proper moment as might be necessary in order to harmonize the form of the Agreement with the provisions of the Covenant of the League of Nations. It cannot be said that in making the communication to the League the two governments had the intention to let it have such an important effect as to make the Agreement lapse, or that in doing so they agreed that they had performed the necessary procedure to invalidate the provision of the Article VI of the Agreement. Furthermore the two governments clearly recognize that the Agreement is in harmony with the spirit of the Covenant of the League and the principle is in no way recognized that the Agreement, being imperfect in form, shall in its entirety lapse after July of this year.

Japan and Great Britain having made a declaration to the League of Nations that they would modify the form of the Agreement, they must be said to be under moral obligation so to do. But for the reasons given above it may also be held that the two governments are at liberty to prolong if necessary the term within which that express modification of the Agreement is to be made. Even if, however, the said modification should not be effected within that term, there is nothing to prevent the Agreement's remaining in force.

翌五月三十一日在本邦英國大使、帝國外務大臣ヲ來訪シタル際、帝國外務大臣ハ同盟協約ノ效力に關シ左々如キ所見ヲ述べタリ。

大正十年六月二日在英林大臣ハ英國外務大臣ヲ往訪シ右帝國政府ノ見解ヲ傳ヘタルモ充分説明ノ暇ナカリシト、同大臣ノ所説曖昧ノ點アリシヲ以テ更ニ本三日館員ヲ外務省ニ遣ハシ極東部長ニ對シ本件ニ關シ閣下及ビ在本邦英國大使間ニ往復ノ次第ヲ篤ト説明セシメタル處同部長ハ英國外務省ノ見解ハ全ク「サード・チャーレス」所述ノ通りニシテ客年七月八日ノ聯盟ニ對スル通告ハ同盟協約第八條ニ所謂「デナンシエーション」ト見ルベク而シテ右通告ヲナシタル以上聯盟ニ對シ日英兩國ハ來月十三日以後ニハ同協約ヲ規約ニ合致セシムルノ確約ヲナシタルモノト言ハザルベカラズ。然ルニ海外領土ノ首相會議ノ後商議ヲ開始スルニ於テハ右期間迄ニ本件商議ヲ完了スルノ時日無キニ至ル虞アルヲ以テ此ノ際同ノ必要アリ。右ハ外務省法律顧問ノ意見ニ基クモノニシテ實ハ既ニ聯盟ニ對スル日英共同通告文案ノ

1

調—0443

0249

起草ヲ終リ近日中ニ英國外務大臣ニ確認ヲ得林大使ニ之ヲ送付セント考ヘ居ル次第ナリト内話セリ。館員ハ右御話ノ筋ハ良ク諒解セルガ右ハ先日來英國外務大臣ソ林大使ニ語ラレタル處ト少シク符合セザルガ如ク考ヘラル。英國外務大臣ハ協約ノ效力自體ニ付テハ何等言及セラレズ。只改訂交渉ヲ三ヶ月延長シ右期間内ニ交渉ヲ取纏メタキ趣旨ヲ林大使ニ御話アリタル様認知スル處英國外務大臣ニ於テモ本件ニ關シ今貴下ノ陳べラレタルガ如キ法律的見解ヲ有セラルル儀ナリヤト質シタルニ極東部長ハ英國外務大臣ガ果シテ法律論ノ微細ニ亘リ能ク事態ヲ會得シ居ラルヤ否ヤ少シク疑問ナリ。英國外務大臣ハ寧ロ本件ノ政治的方面ヲノミ注目シ居ラルモノト考ヘラル。要之右法律關係ハ全然「アカデミック」ノコトニシテ將ニ我方ヨリ日本政府ニ提出セントスル前記通告文ヲ聯盟ニ送付スレバ事ハ總テ圓滿ニ疎通スルコトト信ズ。右通告文案ハ多分其儘英國外務大臣ノ承認ヲ得ベキ見込ナリ。又若シ三月ノ期間内ニ交渉纏マラザル場合ニハ同ジ手續ヲ繰返シ然ルベシト語レルニ付館員ハ然ラバ右法律的解釋ハ最近決定シタルモノナリヤ即チ客月初旬英國外務大臣ト林男トノ本件ニ關スル政治的會議以後ニ考究セラレタル次第ナリヤト尋ネタル處極東部長ハ其以後ニ考究セラレタルモノナルコトヲ肯定セリ。同館員ハ假ニ右英國案ノ如キ共同通告ヲナス以上同盟協約ハ聯盟規約ノ效力發生ト同時ニ之ニ矛盾スル個所ハ無効ニ歸シタルモノナルベキヲ以テ前顯但書ハ之ヲ附スルノ要ナキヤニ思考スト述べタル處極東部長ハ右ニ關スル規約成文上ノ根據ヲ問ヒ質シタル上右ノ所論ハ New light ヲ與フルモノニシテ今日迄想到シタルコトナシト答フルト共ニ右ノ解釋ニシテ成立スルニ於テハ右但書ハ特ニ之ヲ固執セザル様ノ感想ヲ館員ニ與ヘタリト云フ。

茲ニ於テ帝國外務大臣ハ在英林大使ニ對シ、我方ニ於テ法律論ヲ固執セムトスルニ無事ナム過半ノ誤解ヲ道ナザル爲メ、次ノ如キ趣旨ノ書面ヲ英國外務大臣ニ手交シ、實際的辦法トシテ前場在本邦英國大使ニ提示セル修正折衷案ニ依ルコトシタキ旨懇談スベキコトヲ命ジタリ。

「六月八日附貴翰ニ對スル帝國政府ノ所見ハ六月二日本使ヨリ聞下ニ手交セル「エリオット」大使宛五月三十日附内田伯書翰及同附屬別紙ニ網羅シアルヲ以テ委曲右ニテ御承知アランコトヲ希望スル次第ナルガ翻テ考フルニ此種ノ論議ヲ重ヌルコトハ可成之ヲ避クル方得策ナルベキヤニ思考セラルヲ以テ法律的解釋ニ關スル相互ノ主張ヲ留保ストノ了解ノ下ニ（往電英國大使宛書柬參照）別ニ實際的解決ノ辦法ヲ講ズルコトシタク而シテ右ニ就テハ此ノ際公文公換ノ如キ手續ヲ執ルノ要無カルベク只客年共同通告ノ行懸ニ顧ミ聯盟ニ對シ一應兩國政府ノ態度ヲ表明シ置ク方妥當ナルベキニ付右ニ關シテハ曩ニ内田伯爵ト「エリオット」大使トノ間ニ一應ノ談合ヲ經タル國際聯盟宛通告案ヲ採用實行スルヲ以テ最モ好都合ト認メラルニ付右ニ對シ好意的考慮ヲ加ヘラレムコトヲ希望ス」

在英林大使ハ六月二十四日館員ヲシテ英國外務省極東部長ニ面會セシメ右ノ趣旨ヲ認メタル英國外務大臣宛書翰草案ヲ内示シタリ。

尙コノ間英國大使ノ依頼ニ應シ「ペーチ」博士ヲシテ同大使ニ會見セシメタルニハ同博士ハ左ノ如キ報告ヲ提出シタリ（六月十日）。

Foreign Office,  
June 10th 1921.

Dear Excellency—

The British Ambassador gave me an interview of three quarters of an hour this morning.

九一

1-211

by appointment, when we discussed at length the grammatical meaning of the Joint Declaration of July 8, 1920.

His Excellency wished me to say that his views remained unchanged: I think, nevertheless, he was a little impressed by some of the considerations I had to adduce. What weighs with him principally is the phrase "if it should be continued". This in his view implies lapse in the absence of express renewal. I pointed out that there are various ways in which an agreement may come to an end during its currency—e.g. by mutual consent: and I said that the conditional phrase in question was a perfectly proper one to use in view of such contingencies. It could not be pressed in order to imply what the parties had carefully refrained from stating—namely that the agreement was intended to be terminated.\*

\* In other words, I invited him to read "if" as equivalent to "if, as is now tolerably certain to be the case, at least for one year further". That is a perfectly sensible reading.

I rather gathered from him that Count Chinda had not explained last year to the British negotiators the reason for his desiring an altered wording. But this remained uncertain.

I beg to remain,

Very faithfully yours,

(signed) T. Baty.

大正十年六月八日附テ以テ英國外務大臣ノ代理トシテ樺東総領ノ署名タニ左記書翰ヲ在英林大使

In our recent conversation on the subject of the prolongation of the Anglo-Japanese Agreement, I mentioned that I did not think that the proposed prolongation for three months would necessitate any modification of the terms of the Agreement or any further communication at the present stage to the League of Nations.

2. A point of a somewhat technical character has, however, arisen and I am advised that as a matter of correct legal procedure it should be necessary, in accordance with Article 20 of the Covenant of the League of Nations, and in fulfilment of the promise contained in our joint communication to the League last year, that there should be a proviso to the effect that if anything should arise during the period of prolongation, which under the Alliance might involve action inconsistent with the procedure laid down in the Covenant of the League of Nations, the principles and procedure of the latter should prevail over those of the Agreement, and should be adopted. From telegram just received from His Majesty's Ambassador at Tokyo, I understand that your Government, although inclined to doubt whether such a proviso is necessary, would have no objection to its adoption.

3. I would propose therefore that notes should be exchanged effecting the prolongation, and containing the above-mentioned proviso and that a joint notification should then be made to the League of Nations either by communication to the Secretariate of the text of the notes or by making some joint proviso.

4. Sir C. Elliot has reported that the Japanese Government had not regarded the joint communication made to the League of Nations, dated July 8th, 1920, as meaning that the Agreement would terminate on July 8th next unless renewed. The Minister for Foreign Affairs

has asked Sir C. Eliot to obtain expression of my views on this point and I am informing His Excellency in reply that as the present Agreement was admitted, in our joint communication of the last year, to be inconsistent with the Covenant of the League, and as it was then stated that if the Agreement be continued after July 1921, it must be in a form which is not inconsistent with the Covenant, His Majesty's Government are advised that the communication of last year must be held to constitute the notification of the termination of the Agreement required under Article 6.

次ニ六月九日在本邦英國大使、帝國外務大臣ヲ來訪シ、同大使ガ其後本國政府ヨリ接受セル電訓ニ據ニ、Crown lawyerノ見解ハ客年七月ノ日英共同通告ハ日英協約第六條ニ所謂廢棄ノ通告ト看做スベク從テ若シ本年七月以後協約ノ效力ヲ存續セシムトセバ別ニ公文ノ交換又ハ其他ノ手續ニ依リ之ヲ明確ナラシムルノ要アリトノコトナル旨述ベタル上進ムデ本問題ニ關シ種々交談スル所アリ、帝國外務大臣ハ我法律的見解ニ就キ反覆説示シタル上遂ニ】ノ折衷案ヲ作ルコトニ協定ヲ遂グ右協定ノ趣旨ニ基キ翌十日別紙第一號ノ如キ九日附書翰ニ別紙第二號ノ如キ國際聯盟宛通告案文ヲ添エ帝國外務大臣ノ意見ヲ需メ來レリ。

仍テ右通告案文ヲ篤ト查覈スルニ該通告案文中第一節末段“to extend this period”<sup>ハ</sup>我方主張ノ「商議ノ延期」ト英國側ノ「協約ノ延長」ト<sup>ハ</sup>調節スル爲商議又ハ協約共ニ言及スルコトヲ避クルノ趣旨ニ出デタルモノナル<sup>ハ</sup>キモ辭句頗ル曖昧ニテ寧ロ協約ハ本年七月ニテ一旦失效スベキモ更ニ之ヲ延長スルノ意義ニ解シ得ベキ處アリ又第二節冒頭“during the three months of prolongation”<sup>ハ</sup>キモ亦依然協約自體<sup>ハ</sup>“prolongation”ナリトノ度想ヲ外給<sup>ハ</sup>既<sup>ト</sup>ノ事<sup>ハ</sup>然<sup>ニ</sup>此<sup>ハ</sup>右等ノ趣義ヲ體ク<sup>ハ</sup>爲<sup>ハ</sup>通告案文中第一節末段“to extend this period to”<sup>ハ</sup>“to substitute for this date that of”<sup>ハ</sup>改メ又第一節冒頭“during the three months of prolongation”<sup>ハ</sup>“before October 13, 1921”<sup>ハ</sup>改ムル方然ハク<sup>ト</sup>認メ通告案文ヲ右ノ通リ修正シタル上之ニ別紙第三號書面ヲ添エ六月十日英國大使ニ送付シ置キタル處同大使ヨリ直ニ本國政府ニ電報シタル旨通告シ來レリ。別紙第三號ハ英國大使限リニテハ異存ナキモ本國政府ノ承認スル所ナルベキヤ否ヤ<sup>ハ</sup>保シ難キ旨附言セリ。

## (別紙第1號)

I understand the result of our conversation this afternoon to be that you are willing to join in making the communication herewith enclosed to the League of Nations.

This communication leaves open the question whether the agreement expires on July 13 or not, if no steps are taken to prolong it. Lord Curzon proposes that we should exchange notes definitely effecting prolongation but I understand that you do not wish this.

I am leaving Tokyo on Saturday morning to fulfil an engagement at Kobe. I should therefore be greatly obliged for a reply to-morrow morning and on receiving it I will communicate your wishes to my Government.

## (別紙第1號(譯文))

大正十年六月九日附英國大使來翰(譯文)

拜啓陳者本日午後御會談ノ結果ハ要スルニ國際聯盟ニ別紙ノ如キ通告ヲ發スルニ對シ閣下ニ於テ御同意ノ儀ト了解致候本通告ハ若シ延期ニ關シ何等ノ措置ヲモ執ラザル場合ニ於テ協約ガ七月十三日

「一九六  
ヲ以テ終了スベキヤ否ヤニ關スル問題ヲ依然留保スルモノニ有之候「カーラン」卿ハ該延期ヲ確定

スル公文ヲ交換スベシト提言セラレ候得共右ハ閣下ノ欲セラレザル所ト存候  
本使ハ神戸ニ於ケル先約ノ爲メ土曜午前離京可致ニ付テハ明朝何分ノ御返書ヲ得バ幸甚ノ至ニ有之

右御返書接受次第本國政府ニ閣下ノ御所見ヲ通達可仕候此段照會得貴意候 敬具

(別紙第二號)

Whereas the Governments of Japan and Great Britain informed the League of Nations that they recognised the principle that if the Anglo-Japanese Agreement of July 13, 1911, is continued after July 1921, it must be in a form which is not inconsistent with the Covenant of the League, they now propose to extend this period to October 13, 1921.

If during the three months of prolongation any situation arises in which the procedure prescribed by the terms of Agreement is inconsistent with the procedure prescribed by the Covenant of the League of Nations, then the procedure proscribed by the said Covenant shall be adopted and shall prevail over that prescribed by the Agreement.

(別紙第一號(譯文))

國際聯盟ニ對バル共同通告案(英國大使案)

日本國及大不列顛國政府ハ一千九百十一年七月十三日ノ日英協約ガ一千九百二十二年七月以後ニ繼續セラル場合ニ於テハ聯盟規約ト矛盾セザル形式ニ於テセラレザルベカラズトノ主義ヲ承認セん而テ  
國際聯盟ニ通告シタルニ依リ兩國政府ハ該期間ヲ更ニ一千九百二十二年十月十三日迄延長スベキヤト  
ア爰ニ表明ス

(別紙第二號)

I beg to acknowledge the receipt of your note of yesterday's date and of the enclosed draft of the proposed communication to the League of Nations.

I hasten to state in reply that the proposed form of communication is acceptable to me with the enclosed. I may be permitted to add that, as you remark, this communication is understood to leave open the question whether the Agreement expires on July 13 or not if no steps are taken to prolong it.

(別紙第三號(譯文))

大正十年六月十日附英國大使宛書翰(譯文)

拜復陳者昨日附貴翰並同封國際聯盟宛通告案正三領收候  
御提示ノ通告案文ハ別添案文ノ通些少ノ修正ヲ加ヘ度外本大臣ニ於テ異存無之候尙ホ本通告ハ閣下  
御所見ノ通若シ延期ニ關シ何等ノ措置ヲモ執ラザル場合ニ於テ協約ガ七月十三日ヲ以テ終了スベキ  
ヤ否ヤニ關スル問題ヲ依然留保スルモノト了解致候此段不取敢照覆得貴意候 敬具  
六月二十八日ニ至リ英國外務省ハ別紙第一號ノ如キ英國外務大臣發在英林大使宛書翰及聯盟宛協同通  
告案(別紙第二號)ヲ手交セリ。然ルニ七月二日英國外務大臣ハ自署ノ書面ヲ在英林大使ニ寄セ(別

紙第三號)客年七月七日兩國政府ヨリ國際聯盟ニ對シ爲シタル通告書ノ解釋ニ關シ英國政府ハ更ニ考慮ヲ加ヘタルコトヲ告グ同盟條約ノ消滅ニ對スル帝國政府ノ意見ヲ充分ニ攻交シ英國政府當初ノ主張ヲ固執セザルコトヲ聲明シ、更ニ新時局ニ應シ國際聯盟ニ對スル通告新案ヲ提出シ來レリ(別紙第四號)。

(別紙第一號ノ1)

I have the honour to acknowledge the receipt of Your Note of June 24th, in which you inform me that the Japanese Government adhere to the view that the communication made by the governments of Japan and Great Britain to the League of Nations on July 8th, 1920, can hardly be regarded as affecting in any way the provision of Article 6 of the Anglo-Japanese Alliance Agreement of July 13, 1911, as regards termination of the Agreement.

2. As Your Excellency is aware from the last Paragraph of my note of June 8th, this does not correspond with the view of His Majesty's Government. And since that date the matter has been further studied by their Legal Authorities who have definitely advised that the joint communication to the League of last year does constitute a notification within Article 6 of both the High Contracting Parties of an intention to terminate the Agreement on July 13th, 1921, unless in the meantime a new agreement should be entered into. It thus follows in the considered opinion of His Majesty's Government that the Agreement will expire automatically on the last mentioned date unless it is renewed in the interval.

3. On May 11th and 26th last, I had the honour to explain to Your Excellency the reasons which actuated His Majesty's Government of suspending that the existing agreement should be prolonged for a further three months from July 13th of this year. In view of the interpretation placed by His Majesty's Government upon the joint notification to the League of 1920, it thus becomes essential that such prolongation should be effected at an early date, and in order to overcome the difficulty that has arisen owing to the difference of interpretation placed upon the Notification of last year by our two governments, I would suggest that the object aimed at might most conveniently be achieved by a second joint notification to the League so worded as to show that the Agreement remains in force until next October in order to allow time for the necessary discussions between the governments concerned.

4. Time is already short, and I should esteem it a favour if you would submit these proposals to the Japanese Government and urge upon them their early concurrence in the procedure which I have ventured to propose. To facilitate and expedite the settlement of this question, I have the honour to enclose, for the concurrence of your Government, the draft which the suggested notification might follow.

(別紙第一號ノ1)

千九百二十二年六月二十八日附英國外務大臣發駐英林大使宛書

東要領(譯文)

(一)日本國政府ニ於テハ客年七月八日日英兩國政府ノ國際聯盟ニ對スル通告ハ何等千九百二十二年七月十三日ノ日英同盟協約第六條ノ同盟協約終了ニ關スル規定ニ影響ヲ與フルモノトハ認メ難シトノ見解ヲ支持セラル旨六月二十四日附貴東ヲ以テ御開示ノ次第閱悉セリ

(二)六月八日附拙翰末段ニ依リ御承知ノ通り右ハ英國政府ノ所見ト一致セザルモノ有ニ而シテ爾來

一九九

本件ハ英國政府ノ法律専門家ノ調査ニ付セラレタルニ同専門家ハ客年ノ國際聯盟ニ對スル通告ハ

千九百二十一年七月十三日迄ニ新クナル協約ノ締結アルニ非ラザレバ協約第六條ニ據リ右期日ヲ

以テ協約ヲ終セシムベキ兩締盟國ノ意思ノ通告ヲ構成スル旨ノ確定的意見ヲ復申セリ仍テ英國

政府ノ熟慮セル所見ニ據レバ同盟協約ハ前顯期間内ニ之ヲ更新スルニ非ラザレバ該期日ヲ以テ自

然消滅ニ歸スベキモノトス

(三) 五月十一日及去ル二十六日本大臣ハ閣下ニ對シ英國政府ガ現行同盟協約ヲ本年七月十三日以後三ヶ月間延長スベキコトヲ提案スルニ至リタル理由ヲ説明シタルガ國際聯盟ニ對スル客年ノ共同

通告ニ關スル英國政府ノ解釋ニ鑑ミ前顯ノ如キ協約ノ延長ヲ速ニ成立セシムルコト緊要トナレリ

而シテ兩國政府ガ客年ノ通告ニ與ヘタル解釋ノ相違ニ因リ生ジタル困難ヲ除去スル爲本大臣ハ前顯ノ目的ハ同盟協約ハ關係政府間ニ必要ノ商議ヲ行フノ時ヲ借ス爲來ル十月迄效力ヲ持続スベキ

コトヲ表示スル辭句ヲ用ヒタル第二回共同通告ヲ國際聯盟ニ發スルコトニ依リテ最都合ヨク達成

セラルベキコトヲ提案セントス

(四) 時日モ既ニ切迫セルヲ以テ本大臣ハ閣下ガ此等ノ提議ヲ日本國政府ニ具報セラレ且本大臣ガ茲ニ提議シタル手續ニ對シ速ニ同意ヲ與ヘラレムコトヲ切望ス本件ノ處理ヲ敏

速且容易ナラシムル目的ヲ以テ日本國政府ノ同意ヲ得ムガ爲前顯通告案文ヲ爰ニ同封ス

國際聯盟ニ對スル共同通告案(譯文)(英國外務大臣修正案)

日本國及大不列顛國政府ハ客年七月八日附共同通告ヲ以テ千九百二十一年七月十三日ノ日英協約ガ千九百二十二年七月以後ニ繼續セラルゝ場合ニ於テ「聯盟規約ト矛盾セサル形式ニ於テセラレザムベカラズ」トノ主義ヲ承認セラムヲ通告シタルニ依リ兩國政府ハ關係國各政府ノ間ニ必要ナル商量ノ時日ヲ得ムガ爲メ前記ノ宣言ハ千九百二十一年七月ヲ十月ト改メラ繼續適用セラルベキコトニ同意シタリ

若シ千九百二十一年十月迄ニ本協約條項ニ規定セラレタル手續ト國際聯盟規約ニ規定セラレタル手續ト相抵觸スル事態ヲ生ジタルトキハ本協約所定ノ手續ニ據ラズシテ該規約所定ノ手續ニ遵據スベキモノトス

(別紙第1號)

Whereas the Governments of Japan and Great Britain informed the League of Nations in their joint notification of July 8, 1921 that they recognised the principle that if the Anglo-Japanese Agreement of July 13, 1911, is continued after July 1921, it must be in a form which is not inconsistent with the Covenant of the League, they are agreed that in order to give time for the necessary discussions between the Governments concerned, the aforesaid declaration shall continue to apply with the substitution of October for July, 1921.

If before October, 1921 any situation arises in which the procedure prescribed by the terms of the Agreement is inconsistent with the procedure prescribed by the Covenant of the League of Nations, then the procedure prescribed by the said Covenant shall be adopted and shall prevail over that prescribed by the Agreement.

(別紙第1號)

(林大使宛七月一日 曲ソル卿書簡)

JIOI

11011

Since the despatch of my Note to Your Excellency of June 27th respecting the date of termination of the Anglo-Japanes Agreement of July 13th, 1911, His Majesty's Government have been giving renewed consideration to the question of the interpretation to be placed on the joint notification addressed to the League of Nations by our two Governments on July 8th, 1920.

2. His Majesty's Government recognise that the matters referred to are by no means, free from difficulty. They have given full consideration to the view expressed by the Japanese Government in the opposite sense to that held by His Majesty's Government, and are no longer prepared to insist upon their original interpretation when made so clearly aware what the Japanese Government, in agreeing to the joint notification to the League of Nations of July 8th, 1920, had no intention of denouncing the Agreement under the terms of Article 6 thereof.

3. I therefore have to enclose a revised draft of the further notification to the League of Nations, recast so as to meet the altered circumstances of the case.

(別紙第四號)

(Joint Notification)

Whereas the Governments of Great Britain and Japan informed the League of Nations in their joint notification of July 8th, 1920, that they recognised the principle that if the Anglo-Japanese Alliance Agreement of July 13th, 1901, is continued after July 13th, 1921, it must be in a form which is not inconsistent with the Covenant of the League, they hereby notify the League, pending further action, that they are agreed that if any situation arises whilst the Agreement remains in force in which the procedure prescribed by the terms of the Agreement is inconsistent with the procedure prescribed by the Covenant of the League of Nations, then the procedure prescribed by the said Covenant shall be adopted and shall prevail over that prescribed by the Agreement.

於テ帝國政府ハ考究ノ結果、七月四日ニ至リ右七月一日附英國外務大臣翰添附ノ共通通告案（前掲別紙第四號）「異存ナキ旨英國政府ニ正式申入ル」<sup>ヨウジシムル</sup>在英國大使ニ訓令ヲ發シ同大使ハ即日英國外務省ニヨノ旨回答シタリ。（別紙第一號）

右ノ如ク英國政府ガ帝國政府ノ意見ニ同意セキ經路ニ付考究スルニ初メ客年七月ノ對聯盟通告ヲ以テ廢棄通告ナリトベル英國政府法律部員（Law office of the Crown）ニ對シ英國外務大臣ハ同意セザリシモ此ノ見解ヲ日本政府ニ一應通告シテ、日本政府ノ反對ニ遭フヤ、時恰モ自治領首相會議ニ於テ同盟繼續ニ關シ全會一致ノ結論ニ達シ兼ネタルヲ以テ、幸ヒ英國政府ノ大法官（Lord Chancellor）ヲシテ條約ノ自動的繼續論ヲ發表シ、以テ他ノ法官ノ意見ヲ排斥シタルモノノ如シ。事實七月四日英國外務大臣ハ林大使ニ對シ、右ノ事情ヲ明カニシタリ。

（別紙第一號）

在英國大使が英國外務省ニ送リタル七月四日付回答左ノ如シ。

I have the honour to acknowledge the receipt of Your Lordship's note of the 2nd instant regarding the interpretation of the joint notification addressed to the League of Nations by

11011

our two Governments on July 8th 1928, and to state that I have communicated its contents to my Government.

I am glad to note that the view of our Governments on the question are now quite similar, and I am sure that my Government will approve my agreeing in their name to the proposed form of further notification to the League of Nations a copy of which Your Lordship was good enough to enclose with the above note. I am therefore ready to sign the joint notification with you at your convenience.

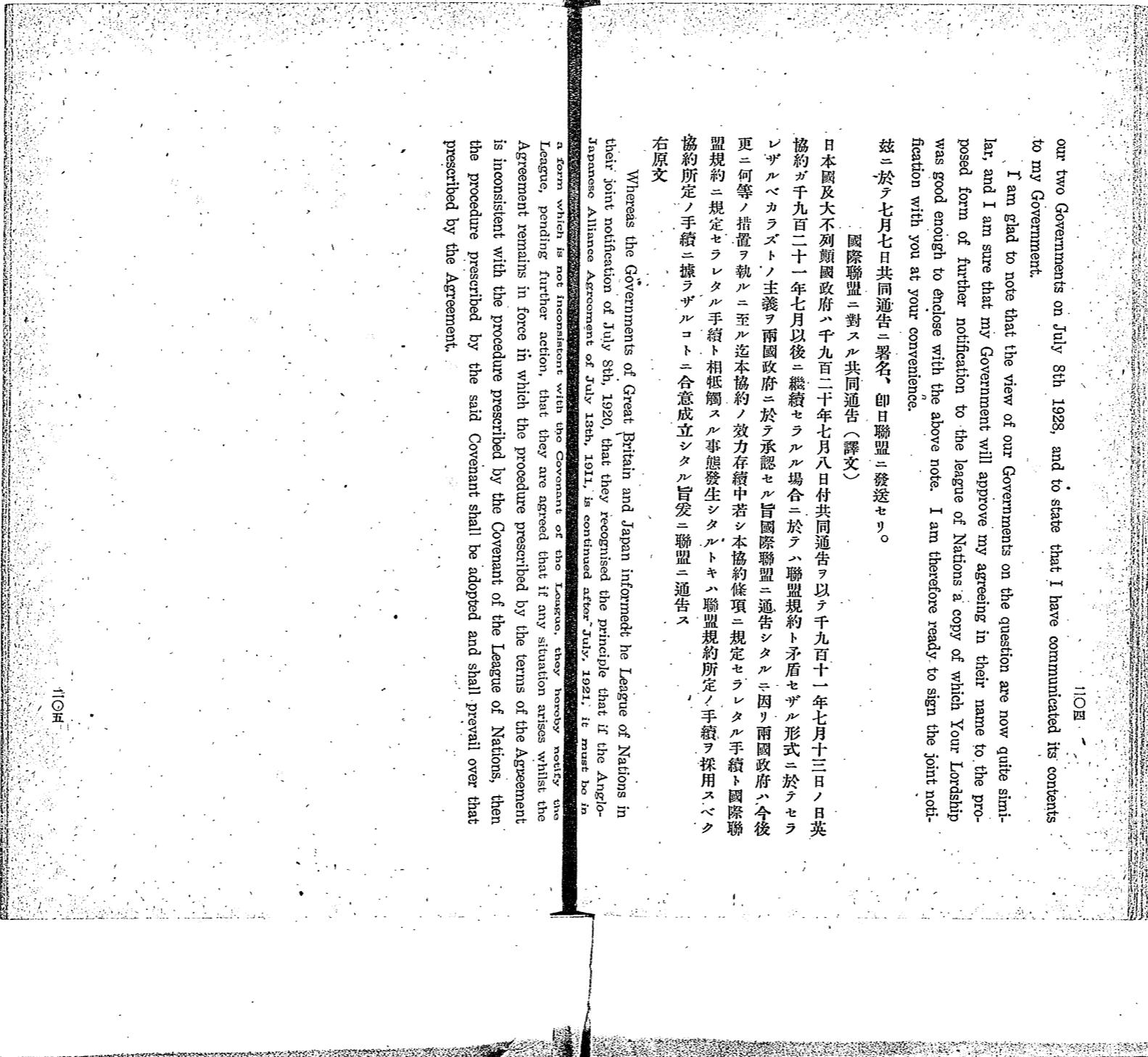
茲リ於テ七月七日共同通告ニ署名 即日聯盟ニ發送ヤ。

國際聯盟ニ對スル共同通告（譯文）

日本國及大不列顛國政府ハ千九百二十一年七月八日付共同通告ヲ以テ千九百十一年七月十三日ノ日英協約ガ千九百二十一年七月以後ニ繼續セラル場合ニ於テハ聯盟規約ト矛盾セザル形式ニ於テセラルベカラズトノ主義ヲ兩國政府ニ於テ承認セル眞國際聯盟ニ通告シタルニ因リ兩國政府ハ今後更ニ何等ノ措置ヲ執ルニ至ル迄本協約ノ效力存續中若シ本協約條項ニ規定セラレタル手續ト國際聯盟規約ニ規定セラレタル手續ト相抵觸スル事態發生シタルトキハ聯盟規約所定ノ手續ヲ採用スベク協約所定ノ手續ニ據ラザルコトニ合意成立シタル旨爰ニ聯盟ニ通告ス

右原文

Whereas the Governments of Great Britain and Japan informed the League of Nations in their joint notification of July 8th, 1920, that they recognised the principle that if the Anglo-Japanese Alliance Agreement of July 13th, 1911, is continued after July, 1921, it must be in a form which is not inconsistent with the Covenant of the League, they hereby notify the League, pending further action, that they are agreed that if any situation arises whilst the Agreement remains in force in which the procedure prescribed by the terms of the Agreement is inconsistent with the procedure prescribed by the Covenant of the League of Nations, then the procedure prescribed by the said Covenant shall be adopted and shall prevail over that prescribed by the Agreement.



(七) 「ワシントン」會議ト日英協約——日英協約ノ終了

大正十年（一九二一年）十二月十三日「ワシントン」ニ於テ署名セラレタル「太平洋方面ニ於ケル島嶼タル屬地及島嶼タル領地ニ關スル四國條約」第四條ハ、其ノ第一段ニ於テ「本條約ハ締約國ノ憲法上ノ手續ニ從ヒ成ルヘク速ニ批准セラルヘク且華盛頓ニ於テ行ハルヘキ批准書寄託ノ時ヨリ實施セラルヘシ」ト規定シタル後、第二段ニ於テ「千九百十一年七月十三日倫敦ニ於テ締結セラレタル大不列顛國及日本國間ノ協約ハ之ト同時ニ終了スルモノトス」ト定メタリ。茲ニ於テ日英協約ハ四國條約ノ批准書寄託ノ日、即チ大正十二年（一九二三年）八月十七日ヲ以テ終了スルニ至レリ。

前顯四國條約署名ニ際シ日英兩國政府間ニ左ノ如キ文書交換セラレタリ。

在本邦英國大使來翰譯文

以書翰致啓上候陳者華盛頓ニ於テ四國條約調印ノ機會ニ際シ英國政府ハ日英同盟ガ始ド二十年ニ亘ル間ニ爲シ遂グタル多大ノ功績ニ對シ英國政府ノ心情ヲ銘記セムコトヲ希望致候英國政府ハ本同盟ノ創設シタル緊密ナル結合ト責務トニ對シ貴國政府ノ示サレタル信誼ヲ深ク多トシ尙又既往ニ於テ斯クモ能ク運用セラレタル同盟ガ今ヤ發展シテ範圍更ニ廣汎ニシテ且大ナル器トナリ兩國傳來ノ友誼ヲ永續セシメ以テ太平洋ニ重大ナル利害ヲ有スル四大國附ノ親善關係ヲ増進セムトスルヲ見テ欣懐措ク能ハザルモノニ有之候  
閣下ニ於テモ必ズヤ此ノ感情ヲ分タルベキヲ信シ右申達奉本官ハ茲ニ重ネテ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

千九百二十一年十二月十七日

日本外務大臣 伯爵内田康哉 閣下

右原文

英國大使 ハリス

The British Embassy.  
Tokio  
December 17 1921.

Monseigneur le Ministre.

On the occasion of the signature of the quadruple Treaty at Washington, His Majesty's Government desire to record their sense of the valuable service which the Anglo-Japanese Alliance has rendered during nearly twenty years. They highly appreciate the loyalty shown by your Excellency's Government to the close ties and obligations created by this Alliance and they are profoundly gratified to see an agreement which has worked so well in the past develop into a larger instrument of wider scope which will perpetuate the traditional friendship of our two countries and in doing so improve the good relations existing between all the four powers whose interests are predominant in the pacific.

Trusting that Your Excellency will share these sentiments, I avail myself of this opportunity to renew to you the assurance of my highest consideration.

1104

調—0443

0249

110K

His Excellency  
Count Ueda

H.I.J. Majesty's Minister H.B.M. Ambassador  
for Foreign Affairs  
Tokyo.

大正十年十一月二十六日

在本邦  
英  
國  
大  
使

内  
田  
大  
臣

(四國條約調印、日英同盟終了ニ關スル件)

以書翰致啓上候陳者今般華盛頓ニ於テ四國條約ノ調印成リ日英同盟將ニ終了セムトスルニ當リ貴國政府ガ過去二十年間ニ於ケル該同盟ノ顯著ナル功績ヲ回想シ懇篤眞率ナル挨拶ノ辭ヲ帝國政府ニ寄セラレタルハ同政府ノ名ニ於テ本大臣ノ深ク感謝スル所ニ有之候  
日英同盟ガ久シク貴我兩國親交ノ連鎖ト爲リテ世界平和ノ維持ニ寄與スル所甚大ナリシコトハ帝國政府ノ永久ニ忘ル能ハザル所ニ有之殊ニ本同盟ガ過去ノ二大戰役ニ於ケル試練ニ際シ垂ニ其ノ文字ニ於テノミナラズ其ノ精神ニ於テモ忠實ニ嚴守セラレ其ノ結果正義人道ノ爲多大ノ貢獻ヲ爲シ兩國ノ信義ト威望トヲ普ク中外ニ宣揚スルヲ骨タムハ帝國政府及國民ノ特ニ滿足トスル所ニ有之候  
帝國政府ハ茲ニ改メテ日英同盟ノ最善タリヲ兩國國民ノ萬國ナク精誠ヲ追憶タ此ノ精神ヲ常來永保ニ  
世界平和ノ基調トナリ殊ニ四國協商ノ指針タラムコトヲ衷心冀望致候  
此段回答申進旁本大臣ハ茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

右譯文

No. 163.

Monsieur L'Ambeadeur,

In the name of the Japanese Government, I have the honour to express the most profound gratitude to His Britannic Majesty's Government for the cordial and sincere words of appreciation transmitted through Your Excellency, in recollection of the valuable service rendered by the Anglo-Japanese Alliance which is approaching its termination as a consequence of the signature of the Quadruple Treaty at Washington.

The Japanese Government will always remember that the Alliance has constantly served as a bond of cordial relationship between the two countries and has played an important role in the preservation of the peace of the world. It is especially gratifying to the Government and the whole Nation of Japan, the through trying moments of two great wars in the past, the Alliance has been loyalty and scrupulously observed, not only in its letter, but also in its spirit, thus making invaluable contributions to the cause of justice and humanity, and has secured to both Nations the general recognition of their sincerity and fidelity with the consequent enhancement of their prestige throughout the world.

(Signed) C. Eliot

1110

It is most sincerely hoped that the magnanimous spirit which has, to our proud recollection, been maintained by the two Nations as the foundation of the Alliance will remain as the basis of the permanent peace of the world and especially as the guiding principle of the Quadruple Treaty.

I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurance of my highest esteem and consideration.

四、日佛同盟、日露同盟及日英露佛四國同盟條約

締結交渉（大正三年）

（一）佛國ノ同盟提議

大正三年（一九一四年）八月四日在本邦佛國大使ハ加藤外務大臣ニ對シ、大使一個ノ意見トシテ此際日佛兩國間ニ同盟條約ノ成立ヲ見ルコトヲ得バ大慶ナリト申出デ、更ニ八月七日本國政府ヨリ本問題ニ關シ交渉ヲ進ムベキ旨ノ命令ヲ受ケタリトテ再度提議ヲナシタルヲ以テ加藤外務大臣ハ右提案ヲ文書ニ認メテ送付スル様希望シタル處佛國大使ハ翌八月八日附私信ノ形式ヲ以テ左記提案及ビ日佛同盟條約案ヲ送付シ來レリ。

La France a le désir de nouer avec le Japon des liens plus étroits. Elle serait disposée à adhérer aux dispositions du Traité d'Alliance de 1911 entre l'Angleterre et le Japon. Elle considère qu'elle garantirait ainsi d'une manière encore plus effective ses possessions d'Extrême-Orient et le respect de ses droits.

Dans la lutte qu'elles soutiennent actuellement contre l'Allemagne, la France, l'Angleterre et la Russie ont un intérêt de premier ordre à ce que chacun des trois Pays unis puisse disposer de l'ensemble de ses forces. Un Traité d'Alliance Franco-Japonais, conclu dans les circonstances présentes, paraît devoir donner à la Russie des garanties que tout danger sera écarté.

1111

1111

en Extrême-Orient et que ses intérêts n'y seront pas menacés ; cette Puissance se trouverait, dès lors, en mesure d'utiliser les forces militaires importantes, stationnées en Sibérie, et de les faire participer à la guerre contre l'Allemagne.

La Triple Entente, soucieuse des droits des peuples, respectueuse des Traité, est animée de la volonté sincère et clairement manifestée par les derniers événements, de faire régner la paix afin de réduire le poids des armements qui pèsent sur toutes les Nations.

Un Traité d'Alliance entre la France et le Japon contribuerait, d'une manière efficace et particulièrement significative, aux succès des armes des Trois Puissances et à leurs vues politiques communes.

De son côté, le Japon, en adhérant de cette manière au système de la Triple Entente, ferait un pas en avant qui, dans les circonstances présentes, aurait pour ses intérêts et son avenir une importance considérable. On doit se rappeler que l'arrangement Franco-Japonais de 1907 a améné la conclusion d'accords généraux et spéciaux entre le Japon et la Russie, et il n'est pas ténuaire de penser qu'un nouveau Traité avec la France pourrait faire naître des rapports encore plus étroits avec la Russie.

Si ce résultat si désirable était atteint, une sorte de garantie réciproque serait donnée aux relations établies entre le Japon et les Grandes Puissances Occidentales, qui assurerait la paix en Extrême-Orient.

Un Traité avec la France semble répondre aux aspirations de l'opinion publique au Japon aussi bien que la France ; conclu dans un moment de danger, il renoncerait chez les deux peuples des sympathies préexistantes qui établissent leurs rapports d'amitié sur des bases indépendantes.

Rien ne s'opposerait à ce que le Japon trouvât désormais en France l'aide financière si précieuse que la Russie, depuis son alliance, y a rencontrée pour le développement de son expansion économique, aujourd'hui si remarquable.

La France, l'Angleterre et la Russie ont un égal intérêt à ce que l'Allemagne ne puisse conserver en Chine des possessions territoriales qui servent de base à ses ambitions et qui constituent un foyer d'intrigues et d'entreprises menaçantes pour leur intérêts communs et pour la paix du Monde.

Dans le cas où, d'accord avec l'Angleterre, le Japon déciderait de procéder à l'occupation de Chingtao, la France s'y montrerait favorable.

Si ces idées étaient partagées par le Gouvernement Japonais, comme elles le sont par le Gouvernement de la République, il y aurait un intérêt primordial à les préciser rapidement ; le projet de Traité, communiqué ci-après, semble répondre aux vues qui viennent d'être exposées. Ce projet pourrait être, aussitôt après la réponse du Gouvernement Japonais sur le principe, transmis à Paris et soumis à l'agrément du Gouvernement Français.

Projet.

Désireux de resserrer les liens d'amitié qui existent entre la France et le Japon, et également attachés aux principes inscrits dans l'accord de 1907, le Gouvernement de la République Française et le Gouvernement de Sa Majesté l'Empereur du Japon ont décidé d'éendre leurs engagements réciproques, en prenant pour base de leur accord le traité d'Alliance, conclu le 13

1111

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp>

0253

調—0443

Juillet 1911, entre le Japon et l'Angleterre, ils ont convenu d'adopter les dispositions suivantes et spécifient qu'en aucun cas, elles ne sauraient être invoquées par l'une ou l'autre des deux Hautes Parties Contractantes contre la Grande Bretagne et la Russie.

Article I. L'arrangement Franco-Japonais du 10 Juin 1907 est expressément maintenu ainsi que tous les Traités et Accords conclus entre les deux Pays.

Article II et suivants (Traduction des Articles I à VI inclus, du Traité Anglo-Japonais de 1911)./  
右譯文

佛國ハ日本ト更ニ密接ナル關係ヲ結バムコトヲ希望シ千九百十一年日英兩國間ニ締結セラレタル同盟條約ノ規定ニ加盟セムト欲ス  
佛國ハ之ニ依リテ其ノ極東領地其ノ權利ノ尊重ヲ一層確實ニ擔保スルコトト思考ス  
現時獨國ニ對シテ爲シツタル戰爭ニ於テ佛英露聯合三國ハ各其ノ兵力ノ全部ヲ使用シ得ルコトニ關シ最モ大ナル利害ヲ生ズルモノナリ現時ノ狀況ノ下ニ締結セラレタル佛日同盟條約ハ露國ニ對シ一切ノ危險ガ極東ヨリ除去セラレ且其ノ利益ハ極東ニ於テ迫害セラレズトノ擔保ヲ同國ニ與フベシト考察セラル露國ハ之ニ依リテ西比利亞ニ駐屯スル重要ナル兵力ヲ使用シ獨國ニ對スル戰爭ニ之ヲ參加セシムルヲ得ベシ  
人民ノ權利ヲ憂念シ條約ヲ敬重スル協商三國ハ各國民ノ負擔スル軍備ノ重荷ヲ輕減セムガ爲ニ平和ヲ保持セムトスア眞摯ナク意図ヲ即シ最近ノ事件ニ依リテ明ニ之ヲ表彰シタリ  
佛日兩國間ノ同盟條約ハ有效ニ且特ニ有意義ニ三國軍ノ成效ト其ノ共同政見トニ貢獻スベシ  
斯ノ如クシテ三國協商制「加盟スルニ於テハ日本ハ現時ノ狀況ノ下ニ其ノ利益並其ノ將來ノ爲ニ非常ナル重要ヲ構成スベキ」新地歩ヲ作ルニ至ルベシ千九百七年ノ日佛協約ガ日露間ノ一般及特別協定ノ締結ヲ誘導シタルコトニ想到セバ佛國トノ新條約ガ露國ト一層密接ナル關係ヲ生ゼシメ能フベキコトヲ思考スルモ敢テ疎妄ニ非ザルニ似タリ  
斯ノ如キ望マシキ結果ニシテ若實現セラルニ於テハ極東ノ平和ヲ確立スベキ一種ノ相互的擔保ハ日本ト泰西大國トノ間ニ成立シタル關係ニ加ヘラルベシ  
佛國トノ條約ハ日本並佛國ニ於ケル輿論ノ希望ニ應呼スルガ如ク思考セラルル危險ノ際ニ締結セラレタル該條約ハ兩國人民ニ依リテ貴重ナル同情ヲ以テ迎ヘラルベク此ノ同情ハ不動ノ基礎ノ上ニ兩國人民ノ友好關係ヲ樹立スベシ  
露國ガ其ノ經濟的發展ノ進捗ニ付其ノ同盟以來佛國ヨリ享受シ依テ以テ今日ノ盛ヲ致セル貴重ナル財政上ノ援助ハ爾後日本亦佛國ヨリ之ヲ享受スベキコトニ關シ何等異議アル所ナカルベシ  
佛英露三國ハ獨逸ガ其ノ非望ノ根據ニ供シ且三國ノ共同利益並世界ノ平和ノ爲ニ陰謀ト脅害の企業トノ源地ヲ構成スル領地ヲ支那ニ於テ保有シ能ハザルベキコトニ關シ同一ノ利害ヲ有ス  
若日本ガ英國ト合意ノ上青島ノ占領ヲ爲スニ決シタル場合ニハ佛國ハ好意ヲ以テ之ヲ迎フベシ  
以上ノ考案ガ共和國政府ニ於ケルガ如ク亦日本國政府ニ於テ嘉納セラルルニ於テハ速ニ之ヲ明確ニスルハ最モ必要ノコトナルベク以下記載スル條約案ハ前掲ノ見解ニ應ズルモノト思考セラルル該案ハ其ノ主義ニ關シ日本國政府ノ回答アルヤ否ヤ巴里ニ之ヲ轉達シ佛國政府ノ承認ヲ經ベシ

序言

二六

佛國ト日本國トノ間ニ存在スル友好關係ヲ鞏固ナラシムコトヲ希望シ且千九百七年ノ協約ニ規定セラレタル主義ニ確從シ佛蘭西共和國政府及日本皇帝陛下ノ政府ハ千九百十一年七月十三日日英兩國間ニ締結セラレタル同盟條約ヲ佛日兩國協定ノ基礎ト爲シ之ニ依リテ兩國間ノ互約ヲ擴張セムト決シ左記諸條ヲ採納スルニ一致スルト同時ニ如何ナル場合ニ於テモ左記諸條ハ英國又ハ露國ニ反抗スルカ爲ニ兩締約國ノ一方又ハ他方ニ依リテ援用セラレ能ハサルモノタルコトヲ特記ス

第一條 千九百七年六月十日ノ佛日協約並兩國間ニ締結セラレタルノ一切ノ條約及協定ハ明カニ維持セラルベシ

茲ニ於テ加藤外務大臣ハ在佛石井大使ニ對シ、右佛國ノ提議ガ果シテ如何ナル動機ニ出デタルヤ、又莫露兩國トハ協議済ナルヤヲ佛國政府ニ聞質スベキコトヲ命ジタリ。石井大使ハ翌十三日佛國政務局長ト面會シタル處、右對日同盟發議ハ寧ロ在本邦佛國大使ニ在ルコト、條約案ハ目下立案中ナルコト判明セリ。

(二) 露國人同盟提議

右ハ豫テ期待シ居リタル所ナリシモ日本人ガ斯ク迄多大ノ同情ヲ露國三對シ有スルヲ見テハ露國朝野ハ真ニ感激ニ堪ヘザル次第ナリ實ハ日本國政府ノ意嚮ハ豫測スルコト困難ナリシヲ以テ今日迄之ヲ貴下ニ話サザリシモ今回ノ事變發生前約二週間本大臣ハ駐英密國大使ニ訓令シ露國ハ日英同盟ニ加入シタキ希望ヲ有ス之ニ對スル英國政府ノ意嚮如何ヲ尋ネシメタルニ英國外務大臣ハ大ニ此考案ヲ歎迎シ其節「グレイ」氏ハ左ノ如キ言ヲ用ヒタリト云「I am very much taken by this idea」然ルニ偶々今回ノ事變發生ノ爲本問題ハ遂ニ其儘トナリ居ルガ極東平和ノ爲並日露兩國永久ノ利益ノ爲本大臣ハ此際是非共此問題ヲ纏メタキ考ナリ本問題ニ就テハ素ヨリ皇帝陛下ニモ上奏シ皇帝陛下ニ於カセラレテモ全然御同見ニ在ラセラレ露國極東方面ニ於ケル平和ノ永遠ノ維持ニ日本國ト同盟ヲ締結スルニアリトノ御意アリタリ又八月九日在日本露國大使ヨリノ電報ニ依レバ佛國政府ハ日本國政府ニ對シ今回ノ戰爭ニ日本國ノ參加ノ件ニ付何カ提議スル所アリタル所日本國政府ヨリハ未ダ確答ヲ得ザル趣ナリ今更申迄モナク日本國ガ英露佛三國ト協同シ今回ノ戰争ニ加入セラレントコトハ本大臣ノ切望スル所ナリ云々」

Telegram from Sir E. Grey to Sir C. Greene dated July 28.

elect that Great Britain, Russia and France have concluded an agreement in virtue of which

三  
七

調-0443

0254

any demands which each of the three Governments may present at a Peace Conference and in which one of the Governments concerned has a special interest, will not be opposed by the other Governments.

I told the Japanese Ambassador that, with the exception of the agreement of September 5th which was made public at the time of Signature, we have not entered into any agreement of a general character. It is true that from time to time a variety of questions has been discussed between Great Britain, France and Russia, and certain promises have been made by the 3 Powers to each other affecting those questions; but these promises have not been embodied in any formal agreement which the respective parties have signed. Besides this, when Italy entered the war, a signed agreement was concluded, with certain conditions, but these conditions only concern the demands of Italy. Nothing, however, east of Asia Minor, or which touches the sphere of the Anglo-Japanese Alliance is affected in any way whatever by any of these transactions. As regards Persia, we have come to a verbal understanding with Russia as to the necessity of revising the Anglo-Russian agreement concerning that country, but we have not concluded any new engagement or agreement on the subject, nor have we begun to discuss what form the revision should take. Without consulting Japan and inviting Japan's participation I should never have thought of entering into a general agreement of the kind reported to Baron Kato.

(表紙(1枚))

PRIVATE AND VERY CONFIDENTIAL.

British Embassy, Tokyo, 30 July, 1915.

May dear Minister,

After the departure of the Ambassador for Chuzenji this morning, a further telegram reached the Embassy from Sir Edward Grey, which had been despatched before the receipt of Sir Conyngham's reply to the former telegram, which I communicated to Mr. Matsui on July 24, relative to the question of a Russo-Japanese alliance.

In this second telegram Sir Edward expresses the opinion that, if Your Excellency does not wish at once to take up the question of a new permanent alliance (which he now knows from Sir Conyngham's telegram of yesterday to be the case), the formal adhesion of Japan to the Tripartite Convention of September 5, 1914, would have some advantages and give satisfaction to M. Sazonov. Sir Edward adds that he has explained the importance of the matter to Mr. Inouye.

I was very sorry to hear of Your Excellency's illness. I hope that you are better by now and will soon be completely restored.

I am,

My dear Minister,  
Yours very truly  
Norman.

1112

調—0443

0255

(原紙第11號)

1110

VERY CONFIDENTIAL.

In the opinion of His Majesty's Principal Secretary of State for Foreign Affairs, the most important object to be kept in view in present circumstances is the material and political support of Russia.

Material support can be given by the supply of arms and Sir Edward Grey therefore trusts that the Imperial Japanese Government will do their utmost to further the negotiations now in progress with this object.

As regards political support, this may be afforded by any measures which, while maintaining intact the Anglo-Japanese Alliance, tend to place Russo-Japanese relations on a firmer footing. Thus, Sir Edward Grey points out that the formal adhesion of Japan to the Tripartite Agreement of September 1914 would have the effect of connecting Japan directly with Russia, though it is of course true that Japan is already connected with that Agreement by the Anglo-Japanese Alliance.

Sir Edward Grey, while indisposed to combat any form of new alliance which, without sacrificing any of the objects of that already existing between Great Britain and Japan, would ensure close relations between Japan and Russia, does not wish to encourage at Petrograd any proposal to which the Japanese Minister for Foreign Affairs sees objections.

Sir Edward Grey accordingly suggests that unless Baron Kato prefers to discuss the question with the Russian Ambassador here His Excellency should instruct the Japanese Ambassador at Petrograd to treat it with the Russian Minister for Foreign Affairs.

Sir Edward Grey, in conclusion, expresses his great regret at Baron Kato's indisposition and his hopes for His Excellency's prompt recovery.

2 August, 1915.

MEMORANDUM.

〔1〕 英國政府トノ協議  
右佛國及ビ露國ノ同盟提議ニ對シ加藤外務大臣ハ「日英同盟ハ之ト共同ノ敵タル一定ノ目標ヲ有シタルモノナルモ、今露佛兩國ノ加入ヲ容スニ於テハ該同盟ハ事實目標ナキモノトナリテ、攻守同盟タルノ特色ヲ失ヒ、一種ノ「アンタント」ニ過ギザルモノトナリ、他方ニ於テ日英同盟ノ效力ヲ薄弱ナラシムルニ至ルノ虞ナキヤ」トノ懸念ヲ以テ、在英井上大使ヲシテ英國外務大臣「グレー」ノ意見ヲ聽セシメタルニ、英國外務大臣モ右加藤外務大臣ノ意見ヲ諒トシ、「戰爭進行中殊ニ時局發展ノ成行モ逆睹シ兼ネタル此際此ノ種ノ問題ヲ處理スルハ何分好マシカラズ宜シク適當ノ時機ニ讓リタキ希望ナル」旨ヲ述べタリ、更ニ十一月二十七日英國外務大臣ハ在英井上大使ニ對シ「此種露國外務大臣ヨリ露國英國大使ニ對シ英佛露三國同盟ハ戰爭繼續中ノミナラズ平和恢復後ニ於テモ之ヲ維持スルコトトシタシトテ戰後ニ於ケル同盟綿結ノ希望ヲ申入レタル」旨ヲ述べ、英國政府ニ於テ何等措置ヲ執ル場合ニハ豫メ日本政府ニモ協議スベキ積ナリト語リタリ。

1111

調—0443

8256

(四) 露國ノ日英佛露四國同盟提議

大正四年一月二日在露本野大使ハ露國外務大臣ノ需メニ應ジ往訪シタルニ豫テ同大臣ヨリ提案アリシ  
日露同盟條約締結ノ件ニ付内談アリタルガ、右ニ依レバ、（一）英國外務大臣ハ日露同盟條約締結ノ件  
ニ付テハ主義ニ於テ贊成ナルモ戰爭終結ノ後トスル方可然トノ意見ナリシガ、一月一日駐英露國大使  
ノ電報ニ依レバ同大臣ノ意見變更シタルモノト見エ、戰爭終結ヲ待タズシテ同盟條約締結ヲ實行スル  
方得策ナルベシトノ意見ヲ述べタルコト。（二）露國ハ専ラ英國ノ意向ヲ尊重シテ、日露同盟條約ノ締  
結交渉ヲ停止シ居リタルガ、英國ノ反對ナキコト明白トナリタル以上、速カニ條約締結ヲ實現セシメ  
タキコト等明カトナレリ。本野大使ハ最初露國外務大臣ノ申込ハ日英同盟ニ對スル露國ノ加入ニ在ツ  
シガ今日ニ於テモ其考ナリヤト問ヒタルニ、露國外務大臣ハ其ノ希望ハ單ニ日英同盟ヘノ露國ノ加入  
ノミニアラズシテ日英露佛四國同盟ノ形成ニ在リ、若シ四國共通問題ニアラズシテ特ニ日露兩國間ニ  
關係スル問題ナラバ四國同盟條約以外ニ日露兩國間ニ特殊條約トシタキ希望ナリト述べタリ。  
セントスル同盟條約ハ戰後迄繼續スベキ性質ノ條約トシタキ希望ナリト述べタリ。  
一月十一日在英井上大使ハ英國外務大臣ノ需メニ應ジ往訪シタルニ同大臣ハ次ノ如キ談話ヲナセリ。

一月九日露佛兩國大使相携ヘテ本大臣ヲ訪問シ各自本國政府ノ内訓ニ依リ該兩國政府ニ於テ此密年九月ノ協約ニ依リ戰爭繼續中ハ同盟關係ニ在ルコト故是非共此ノ場合日本國ヲ該協約ニ加盟シムレコト致シタキ希望ナリト述べ本大臣ノ意見ヲ求メタクニ付本大臣ハ右ニ對シ現ニ其公報ニ  
ニ當ツツアニア四強國ノ結合ヲ實後ニ於テモ確實ニセシムコトハ素ヨリ望マシキニ付本件露佛ノ經商議ニ讓ルヲ妥當ト思考ス惟フニ日本國ノ意嚮モ亦之ト同様ナルベシト述べ次ニ英佛露ノ協約ニ  
ズ (It would not be opportune to discuss such questions while war is going on) 宜シク戰後ノ

日本ヲ加盟セシムル義ニ付テハ成程日本國ハ該協約ニハ直接ノ關係ナキモ已ニ事實上英佛露三國ト共同戦闘共同講和ノ關係ニ在ルニ付今更日本ヲ該協約ニ加盟セシムルノ必要ナキモノノ如シトテ日英協約第二條ノ規定ヲ兩大使ニ示シ篤ト説明シタリ  
更ニ同大臣ハ右露佛ノ提言ハ實際問題トシテハ戰後ノ處理ニ委スルコト可然トノ持論ヲ繰返シ、將來トモ此種問題ニ付何等措置スル場合ハ必ズ豫メ日本國ノ意向ヲ聞質スベキヲ述べ、加藤外務大臣ノ意見ヲ來示サレ度シト希望セリ。之ニ對シ加藤外務大臣ハ、英國外務大臣ノ所言ト同一ノ意見ナルコト、「日本政府ハ日英協約ニヨリ英國ヲ介シテ（英佛露）協約加盟國同様ノ位置ニ在ルモノナルニ付日本ト英佛露三國トノ間ニ新ニ約束ヲ締結セズトモ日本ハ當然三國同等ノ關係ニ在ルモノナリトノ意味シタリ。英國外務大臣ノ説明ニ因リ露佛政府ニ於テ了解シタルコト信ズルモ若シ尙ホ必要アルト同大臣ニ付テハ英佛側ニ於テ誤解ノ餘地ナキ様通報シ置クベシト承認シタリ。其後暫く本問題ハ發展ヲ見ザリシ處、七月六日在本邦英國大使外務大臣ヲ來訪日露同盟條約ニ言及シタルル所以テ、加藤外務大臣ハ英國外務大臣ノ意見ノ變更ヲ聞カザル故、自分モ依然最初通ノ意見ヲ有シ居ル旨、並將來本問題ヲ議

100

スルニ先チ日英間ニ協議ヲ要スト思考スル旨ヲ述べ、右二點ハ念ノ爲在本邦英國大使ヨリ英國外務大臣ニ電報シタルニ、七月九日附ヲ以テ、在本邦英國大使ヨリ別紙ノ如キ書翰（別紙第一號）ヲ送附シ來レリ。右ニ對シテハ加藤外務大臣ハ七月九日附ヲ以テ了承ノ意味ノ返翰ヲ送附シ置キタル處、更ニ七月二十四日、在本邦英國大使ハ加藤外務大臣ヲ來訪シ、「在英露國大使ハ本國政府ノ訓令ニ基キ英國外務大臣ヘ日英露又ハ日英佛露ノ三國若クハ四國同盟又ハ協調問題ニ關スル露國政府ノ意嚮ヲ通シ越シタル趣ニテ」別紙ノ如キ覺書（別紙第一號）ヲ手交シタリ。右ニ對シ加藤外務大臣ハ七月二十八日附在本邦英國大使ニ對スル私信ニ添ヘテ、別紙ノ如キ覺書（別紙第三號）ヲ送附シ帝國政府ノ所信ヲ明カニセリ。

（別紙第一號）

PRIVATE AND SECRET.

British Embassy, Tokyo, July 9th 1915.

My dear Minister,

The Ambassador reported by telegraph to Sir Edward Grey the observations made by Your Excellency, in the course of conversation on July 6th, on the subject of the project of alliance between Japan and Russia.

Your Excellency said, on that occasion, that you had no information to the effect that Sir Edward had changed his views on this question and that you yourself shared them. You added that, if in the future—for instance, before the end of the war,—anything should occur to render desirable a reconsideration of those views, you felt sure that Sir Edward would agree to on the advisability or a preliminary private consultation between the Japanese and British Governments on the subject.

A reply to the Ambassador's telegram has now reached the Embassy, stating that Your Excellency is correct in assuming that Sir Edward has not changed his views; and that he shares your opinion that, if anything seems to suggest their reconsideration, each side should consult the other privately.

Sir Edward instructs the Ambassador to convey this information to Your Excellency and in the latter's absence I take leave to carry out these instructions without the delay which would be necessitated by a reference to Chuzenji.

I have the honour to be,

My dear Minister,

\*Yours very truly

(signed) Norman.

His Excellency  
Baron Takaaki Kato G.C.M.G.,

etc., etc., etc.

（別紙第一號）

VERY CONFIDENTIAL.

MEMORANDUM.

The Russian Ambassador in London has made to His Majesty's Principal Secretary of State

11114

for Foreign Affairs by the instruction of the Russian Minister for Foreign affairs, a statement to the following effect:—

Conversations with the Japanese Ambassador at Petrograd and reports received from the Russian Ambassador at Tokyo have left on M. Sazonov's mind the impression that the Japanese Government are seriously discussing the question of a closer *rapprochement* with Russia and that they even contemplate a regular alliance. M. Sazonov himself seems to favour this idea and to believe that, if he does not encourage it, the Japanese Government may conclude that he wishes actively to discourage it and put it aside, which is far from his intention.

M. Sazonov appears to favour a triple alliance or *entente* between these three Powers with the addition of France. In His Excellency's opinion the adherence of the Japanese Government to the tripartite convention of September 5th last might constitute the first step towards such an arrangement.

Sir Edward Grey reminded Count Benckendorff that this question had been raised at the beginning of the war and that at that time he (Sir Edward Grey) had expressed himself as favourable to it in principle, but had pointed out the difficulty of discussing the terms of a permanent alliance at a moment when all the Powers concerned were engaged in war. This view, which the Japanese Minister for Foreign Affairs had shared at the time, and, as Sir Edward Grey believed, still held, had been that the proposal for a separate alliance would arise more naturally at the end of the war in which all the parties had cooperated.

Sir Edward Grey accordingly told Count Benckendorff that he could not proceed further with the matter without previous consultation with Baron Kao.

July 24th 1915.

右譯文

### 覺書

在倫敦露國大使ハ露國外務大臣ノ訓令ニ基キ英國外務大臣ニ對シ左ノ通陳述セリ  
在露日本國大使トノ會議及在東京露國大使ノ報告ニ依リ「サゾーノフ」氏ハ日本國政府ガ露國トノ關係ヲ一層親密ナラシムル問題ヲ熱心ニ講究中ニシテ正式ニ同盟條約ヲ締結スルノ議スラモ熟考中ナリトノ印象ヲ得ルニ至リタリ而シテ「サゾーノフ」氏自ラモ此考案ニ賛成ナルモノノ如ク且同氏シテ若シ之ヲ獎勵セザルトキハ日本國政府ハ同氏ノ眞意ニ反シ同氏ヲ以テ進ムデ之ヲ阻止閑却セムト欲スルモノト速斷スルニ至ルベキヤモ料リ難シト信ズルモノノ如シ  
「サゾーノフ」氏ハ英、露、日三國間ノ同盟又ハ協調若クハ右三國ニ佛國ヲ加ヘタル四國間ノ同盟又ハ協調ヲ贊成スルモノノ如ク同氏ノ意見ニ依レバ客年九月五日ノ三國協約ニ日本國ノ加入スルコトニ依リテ右ノ如キ結合ノ端緒ヲ開クニ至ルベシ  
依テ「サーエドワード・グレー」ハ本問題ガ戰爭ノ初ニ起リタルコト及當時同氏（「サーエドワード・グレー」）ハ自ラ主義上之ニ贊成ナルコトヲ言明シタルモ關係諸國ガ戰爭ニ從事セル時ニ方リテ永久ニ亘ル同盟ノ條件ヲ討議スルノ困難ヲ指摘シタルコトヲ「ベンケンドルフ」伯ニ注意シタリ此見解ハ當時日本國外務大臣モ同感ナリシ處ニシテ同大臣ニ於テ今尙ホ同意見ヲ懷カルモノト「サ

一一八

「エドワード・グレー」ニ於テ信ズル處ナルガ別個ノ同盟ニ對スル提議ハ總テノ當事諸國ガ協力セル現戰爭ノ終局ニ於テ起ル方一層自然ナルベシト云フニ在リタリ  
依テ「サー、エドワード・グレー」ハ加藤男爵ト豫メ打合ハセタル上ニ非ラザレバ此上本件ニ立入ルコト能ハザル旨ヲ「ミンケンビルフ」伯ニ告ゲタリ

千九百十五年七月二十四日

英 国 大 使 馆

(別紙第三號)

覺 書

帝國外務省ハ千九百十五年七月二十四日附英國大使館ノ覺書ヲ受領セリ加藤男爵ハ在「ペトログラード」帝國大使ガ如何ナル會談ヲ爲セシヤ未ダ其報告ニ接セズ又在東京露國大使ガ如何ナル情報ヲ本國政府ニ送リタルヤ之ヲ承知セズト雖モ目下帝國政府ニ於テハ日露兩國間ノ關係ヲ更ニ密接ナラシムルノ方法ニ關シ特ニ講究シ居レルガ如キコトナシ日露同盟ノ締結ニ關スル加藤男爵ノ見解ハ既ニ累次英國外務大臣ニ内々申入レタル通ニシテ「サー、エドワード・グレー」ノ信ゼラルルガ如ク同男爵ノ意見ハ今日ニ於テモ何等變更スル處ナシ  
帝國外務大臣ハ「サー、エドワード・グレー」ガ英國駐劄露國大使ニ開示セラレタル見解ニ全然同意スルト同時ニ其末段ニ所謂「別個ノ同盟ニ對スル提議」云々ノ意義關シ承知スルヲ得ベ幸ナリ  
帝國政府ハ客年九月五日ノ三國協約ニ加入セザルモ日英同盟協約第二條ニ依リ戰爭ノ遂行及共同講和ニ關シ哈モ右三國協約ニ加入シ居シテガ如ク英國ト同一ノ地位ニ在セモノト了解ス從テ帝國政府  
「於テ右三國協約ニ加入スルヨリニ關シ特ニ異議ヲ有スアモノニアラザリシモ而モ之ニ加入スルノ必要ヲモ認メザリシ次第ナリ

大正四年七月二十八日

帝 国 外 务 省

Memorandum

The Imperial Department of Foreign Affairs has the honour to acknowledge the receipt of the Memorandum of the British Embassy dated July 24th 1915.

Baron Kato has yet received no report from the Japanese Ambassador in Petrograd in regard to his conversation with the Russian Minister for Foreign Affairs, nor is he informed of whatever report the Russian Ambassador in Tokyo might have sent to his Government. As a matter of fact the Imperial Government is not at present specially considering the question of a closer rapprochement with Russia. Baron Kato's view regarding the conclusion of an alliance between Japan and Russia, which had on several occasions been confidentially communicated to Sir Edward Grey, still remains the same as His Excellency rightly believes.

While entirely concurring in Sir Edward Grey's view which he expressed to Count Benckendorf, Baron Kato would like to have the meaning of "the proposal for a separate alliance" in the latter part of the British Embassy's Memorandum elucidated for his information.

It may be added that the understanding of the Imperial Government has been that Japan

一一九

1110

is, by virtue of Article 2 of the Anglo-Japanese Alliance, in the same position as Great Britain with regard to the conduct of war and the joint conclusion of peace as if she had adhered to the tripartite convention of September 5th last. They have not, therefore, considered it necessary to adhere to the said convention, although there was no particular objection on their part to their formally adhering to it.

Department of Foreign Affairs,

Tokyo,

July 28th, 1915.

七月二十九日ニ到リ、在英井上大使ハ英國外務大臣「グレー」ト會談シタルニ同大臣ハ露國外務大臣ヨリ最近復モヤ日露同盟ノ件ニ付照會アリタルコトヲ傳ヘ、本問題ニ付テ自分ノ意見ハ不變ナルモ、露國外務大臣ニ於テ日本國外務大臣モ贊成ナリトノ印象ノ下ニ提議シ來レル故、一應日本國外務大臣ノ意見ヲ問合ス様在日本國英國大使ニ訓令シタル旨ヲ告ゲタリ。一方七月三十日、在本邦英國大使ハ右英國外務大臣ノ訓令ニ從ヒ、別紙ノ如キ同大臣ヨリノ電報ヲ私信ニ添ヘテ通告シ來リタルガ、同日更ニ在本邦英國大使館ハ英國外務大臣ヨリ「日本國外務大臣ガ新シキ恒久的同盟問題ヲ直チニ取上げルコトヲ欲セザル場合ハ、一九一四年九月五日ノ三國協約ニ日本國ガ正式ニ加入スルコトハ或ル利益ヲ齎フシ、且露國外務大臣ニモ満足ヲ與フベシ」トノ電報ヲ受取リタル旨ヲ通告シ來リ（別紙第二號）尙八月一日附書翰ヲ以テ、在本邦英國大使館ハ英國外務大臣ノ用ヒタル「the proposal for a separate alliance」ノ意味ニ對スル去七月二十八日附帝國政府覺書中ノ質疑ニ付テハ、英國外務大臣ヨリ separate ナ削除シ「the proposal for an alliance.」ト爲スベキ旨ノ電報アリタル旨ヲ通告シ來リ。次テ八月二日在本邦英國大使ハ同日開列紙費會（別紙第三號）ヲ以テ日本ノ三國協約加入ノ件並ニ日露同盟ノ件ニ關スル英國外務大臣ノ意見ヲ提示シ來レリ。茲ニ於テ帝國政府ハ在英井上大使及び英國外務大臣ト會見ヲ遂ゲタル在佛石井大使ノ意見ヲ徵シタル後、協議ノ結果大隈外務大臣ハ八月二十六日附發電ヲ以テ石井大使ニ對シ帝國政府ハ宣言加入ニ反對ナラザルヲ信セラル旨同大臣一個ノ意見トシテ申述ブルモ差支ナキ旨訓令シタリ。右訓令中ニ於テ、露國ヲ日英同盟ニ加入セシムル件ハ帝國政府ニ於テ慎重考慮中ナルヲ以テ英國外務大臣ト會見ノ節ハ何等「コムミット」セザル様注意スベキコト、聯合軍側ニテハ日露ノ關係ヲ一層親密ニシテ日本ノ聯合軍側、殊ニ露國ニ對スル有形的援助ヲ一層増シメントスル底意アルニ非ザルカトモ察セラル處、帝國政府ニ於テハ已ニ力ノ及ブ限り援助ヲ與ヘツツアリ此上有效迅速ナル援助ヲ爲スノ見込ナキコトヲ含置クベキコトヲ附加シタリ。斯くて日露同盟問題ハ殆ド終熄ヲ告ゲ、三國宣言ニ對スル加入問題ノミ殘ルコトトナレリ。

調—0443

026:

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp>

五、英佛露三國ノ單獨不講和宣言(所謂宣言)ニ對スル加盟(大正四年)

英佛露三國ノ單獨不講和宣言ニ對スル帝國ノ加盟問題ニ付テハ既ニ前節中日露同盟條約締結交渉中ニ併行的ニ現ハレタルヲ以テ、之ニ觸レ置キタルモ、本節ニ於テハ成ル可ク重複ヲ避ケテ記述スルニ努メタリ。

(一) 英佛露ノ單獨不講和宣言ト日英同盟條約第二條ノ解釋ニ關スル交渉

大正三年(一九一四年)九月五日英佛露三國政府ハ共同ノ敵ニ對シテ交戦ヲ爲シツツアルモ右三國間ニハ戰後講和ノ事ニ關シ何等協約ノ存スルモノナカリシヲ以テ三國政府ハ左ノ如ク各別ニ講和ヲ締結セザルベキコト等ノ約束ヲ爲シタリ。

The undersigned duly authorized thereto by their respective Governments hereby declare as follows:—

The British French and Russian Government, mutually engage not to conclude peace separately during the present war. The three Governments agree that when terms of peace come to be discussed no one of the allies will demand conditions of peace without previous agreement of each of the other allies.

In faith thereof the undersigned have signed this declaration and have affixed their seals.

Done at London in triplicate this Fifth day of September 1914.

GREY.  
CAMBON.  
BENCKENDORFF.

右譯文

下名ハ各其ノ本國政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ茲ニ左ノ通宣言ス  
英國佛國及露國政府ハ現戰爭中ハ單獨ニ講和セザル可キコトヲ相互ニ約ス右三國政府ハ講和條件

ヲ議スル聯合ニ於テ孰レハ同盟國モ豫メ他ノ各同盟國ノ同意ヲ經ズシテ講和條件ヲ要求セザル可キコトヲ約ス

右證據トシテ下名ハ本宣言ニ記名調印ス

千九百十四年五月倫敦ニ於テ本書三通ヲ作ル

グ  
カ  
ム  
ボ  
ン  
ベンケン  
ドルフ

茲ニ於テ帝國政府ハ在英非上大使ニ訓電シ英國外務大臣ニ面會ノ上英佛露三國政府ガ各別ニ講和ヲ締結セザルベキコト等ノ約束ヲ爲シタルニ付英國政府ヨリ豫メ何等ノ通報ニ接セザリシハ日英同盟協約第二條ニヨリ當然日英兩國ハ雙方合意ノ上媾和ヲ爲ストノ見解ニ基ケルコトト帝國政府ニ於テ了解スル旨申入レシメタリ。

右訓電ニヨリ井上大使ハ九月八日英國外務大臣ニ面會シタルニ、同大臣ハ先づ右宣言調印ノ當時歐洲時局ノミヲ考量シ居リタルニ付豫メ日本政府ニ通告スル暇ナカリシコトヲ遺憾ナリト附シタル後右宣言寫ヲ井上大使ニ手交シタリ。

而シテ井上大使ヨリ帝國政府訓電ノ趣ヲ申入レタルニ英國外務大臣ハ帝國政府ノ見解ハ正確ナリト答ヘ本件ニ關スル英國政府ノ見解ナリトシテ左ノ如キ覺書ヲ即坐ニ自ラ起草ノ上手交シタリ。

His Majesty's Government, having no previous agreement with French and Russian Governments, have now made an agreement with those Governments as regards war now being carried on in common. Article II, Anglo-Japanese Alliance, renders any such agreement unnecessary. His Majesty's Government has informed French and Russian Governments that agreement with them as to making peace and terms of peace must not be regarded as modifying in any way provisions of Anglo-Japanese Alliance which is prior obligation upon His Majesty's Government, and French and Russian Governments have been informed that His Majesty's Government must of course act in common and in mutual agreement with Japan as regards the conduct of war and making peace.

## 右譯文

英國政府ト佛露兩國政府トノ間ニハ從來何等ノ取極無カリシニ依リ今次協同ニ從事スル戰爭ニ關シ右二國政府ト協約ヲ締結シタリ日英兩國政府間ニハ同盟協約第二條ノ規定アルガ故ニ今更メテ斯ノ如キ協約ヲ爲スノ必要ナシ英國政府ハ講和締結及講和條件ニ關シ佛露兩國政府ト取結ビタル。協約ハ英國政府ガ既ニ負擔スル義務タル日英同盟協約ノ規定ヲ毫モ變更スルモノト看做ス可カラザルコト。英國政府ガ戰闘及講和ニ關シ日本ト協同シ且雙方合意ノ上ニ於テ之ヲ爲スハ言ヲ俟タルモノナルコトヲ佛露兩國政府ニ通告シタリ。

帝國政府ハ、右三國ノ倫敦宣言ニ關シ帝國ハ當然三國ト同等ノ地位ニ在ルモノナルコトニ付テハ、英國政府モ帝國政府ト其見解ヲ同フシ萬一ノ誤解ヲ防グガ爲メニ同國政府ヨリ露佛兩國政府ニ通報スル所アリタル筈ナルモ、爾來右ニ關シ何レノ政府ヨリモ何等申出ナキヲ以テ見レバ帝國政府ノ所見ニ對シ佛露兩國政府ニ於テ異議ナキコト信ジ居レル處、在佛石井大使ヨリ加藤外務大臣宛大正四年一月二十九日附來電ヲ以テ意見ノ申出アリ（別紙第號）茲ニ於テ加藤外務大臣ハ在英井上大使ニ對シ適當ノ機會ニ於テ英國外務大臣ニ日英兩國政府ノ見解ニ對シ露佛兩國政府ハ全然右ニ同意シタルヤ否ヤ尋ヌベキコトヲ訓電セリ。右訓令ニ基キ井上大使ハ（病氣ノ爲）本多參事官ヲシテ「ランクレー」ニ面會問合セシメタルトヨロ、二月六日附ヲ以テ左ノ如キ内報ヲ「ランクレー」ヨリ本多參事官宛送附シ來レリ。

We made confidential communication to the French and Russian Ambassadors January 18th, and we had telegraphed Paris and Petrograd for the information of the French and Russian Governments. We received no comment from any quarter.

一方在露本野大使、在佛石井大使ニ對シテモ同様各國ノ見解ヲ確ムベキ旨訓令セリ、右ニ對シ本野大使ノ來電ニヨレバ、二月十日露國議會ニ於テ爲サルベキ露國外務大臣ノ演說中本邦ニ關スル事項ニ付テハ豫メ内示ノ約アリテ二月八日右寫ヲ送付越シタルモ、ソノ内同盟關係ニ關シテハ左ノ如キ

文句アリ。

111K

「一九〇七年及一九一〇年ノ日露協商ハ今日ニ至リテ特ニ顯著ナル效果ヲ現セリ今ヤ日本國ハ此戰役ニ際シ全然我味方トナリ兩國ハ事實上同盟關係ニ立ツニ至ソリ日本國ガ獨逸國ト開戦シタル結果獨逸國ハ太平洋上ヨリ驅逐セラレ其ノ支那ニ於ケル根據地ハ日本人ノ手ニ歸シタリ日英同盟條約ハ兩締盟國ノ單獨ニ講和ヲ締結セザルベキ規約存スルヲ以テ獨逸國政府ハ英國ト講和スル以前從ツテ又露佛ト講和スル以前ニ單獨ニ日本國ト講和スルヲ得ズ」  
又露國外務當局者ヨリ内示ヲ得タル露國政府宛劄記英國大使ノ公文ニ通左ノ如シ（乙號公文ニ對スル露國ノ回答ハ單ニ prendre Acte =止メアル由ナリ、後右ハ英國政府ノ見解ニ同意シタルコトヲ意味スル旨ヲ露國當局者言明セリ）

1st. His Majesty's Ambassador has the honour to inform his Excellency Minister for foreign Affairs under instructions of Sir Edward Grey that as the Anglo-Japanese alliance is a prior obligation binding his Majesty's Government, the latter consider that agreements concluded with the Russian Government and with French Government respecting the making of peace and its conditions must not be regarded as in any way modifying provisions of that alliance: His Majesty's Government must of course concert their action both in the conduct of war and the eventual conclusion of peace in common with Japan. (一九一四年九月八日)  
2nd. Now that Great Britain was a party to the alliance of Sept., 5th (原文ノ儘) last Japan was by Article II of the Anglo-Japanese alliance in the same position as England with regard to the conduct of war and the joint conclusion of peace as if she had: adhered to...

September treaty. (一九一四年一月十七日)

又一月十三日附在佛石井大使來電ニ依レバ佛國外務大臣ヨリノ通告ハ回答ヲ要スル性質ノモノニ非ズト認メ殊ニ佛國側ニ於テ異議ナキ所ナルニ付其儘承知シ置ギタリト言ヒ「グレー」氏ノ解釋即チ日本國ハ日英同盟條約第二條ニ因リ倫敦宣言ニ加盟シタルト同一ノ地位ニ在ルモノト認ムルコトニ異議ナシト答ヘタリ

依ツテ石井大使ハ右ヲ書面ニ遺サシタメ外務大臣宛半公信ヲ送リタルニ對シ（別紙第二號甲號）佛國外務大臣ハ二月二十三日附公文ヲ以テ回答シ來レリ（別紙第二號乙號）

（別紙第一號）  
本使ノ卑見ニ依レバ帝國政府ハ此ノ際千九百十四年九月四日倫敦宣言ニ加盟スル必要アリ英國外務大臣ノ云ハルル如ク帝國政府ハ日英同盟條約第二條ノ結果英佛露共同講和ノ關係ニアルニ相違ナシト雖講和條件提出ニ關スル規定ハ獨リ倫敦宣言ニ依テ確定セラレ日英同盟條約ニ於テ言及セラレザル所ナレバ宣言ニ加入セザル限リ帝國政府ハ講和談判ニ當リ二國政府ト當然同一ノ地位ニ在リト云フ能ハザル可シ惟ニ帝國政府ハ曩ニ露佛同盟提議ニ應セズ英國ノ出兵希望ヲ謝絶シタル行懸アリテ此ノ儘ニ押シ行カバ講和談判ニ際シ自然阻隔ヲ來スノ虞ナシトセズ即チ一千八百五十六年巴里會議ノ當初伊國ノ發言權ノ範圍ニ關シ起リタル爭議ガ來ルベキ講和會議ニ於テ帝國政府ニ對シ繰返セラズモ限ラズ而カモ講和會議ニ於ケル帝國委員ハ各般ノ談判事項ニ於テ英佛露ト全然同一ノ發言權ヲ有セザルベカラズ  
何トナレバ専ラ歐洲問題タル觀アル問題ト雖間接ニ極東ニ及ス影響ノ計ルベカラザルモノアレバナ

111七

此種ノ問題ヨリ除外セラルヲ豫防センガ爲メニハ倫敦宣言加入ヲ以テ最モ簡便有效ナル方法ト  
ス何トナレバ其ノ第三項ハ各加盟國ノ豫諾ナクシテ講和條件ヲ提出スル能ハザルコトヲ規定シアレ  
ベナリ且又倫敦宣言ハ勿論戰時中ノ約束ナレバ帝國政府之レニ加盟スルモ露佛同盟ノ如ク戰後ノ將  
來ヲ拘束セラルノ不利益ナシ露佛政府ハ切メテ日本ヲシテ倫敦宣言ニ加盟セシメタシトノ希望ヲ有  
スル由ナレバ何ヨリ幸ナリ因ニ云フ「クレマンソー」氏初メ當國民間ノ論者ハ倫敦宣言締結ニ際シ  
日本ヲ招カザリシハ外交上ノ失態ナリトテ政府ヲ攻擊シツツアル此際加盟問題ヲ連結スルニ絶好ノ  
機會ナリト存ズ。

(別紙第1號(甲號))

Mon cher Ministre,

Au sujet de l'entretien que j'ai eu l'honneur d'avoir avec Votre Excellence hier, je me propose de télégraphier au Baron Kato ce qui suit :

"La Communication faite par Sir Edward Grey au Gouvernement de la République en ce qui concerne la situation du Japon résultant de la Déclaration de Londres et du traité d'Alliance anglo-japonais n'était pas de nature à provoquer une réponse. S. Exc. M. Delcassé m'autorise à vous télégraphier qu'il partage entièrement votre manière de voir sur cette question c'est-à-dire — Le Japon, étant donné l'article II du traité d'Alliance anglo-japonais du 13 juillet 1911, serait mis vis-à-vis de la France et de la Russie, exactement dans la même situation que s'il était lui-même signataire de la Déclaration de Londres du 4 septembre 1914."

Pour éviter tout malentendu, je tiendrais à vous soumettre la teneur de la dépêche et serais heureux d'avoir votre approbation avant de l'expédier.

Veuillez agréer etc. ....

(別紙第1號(乙號))  
Monsieur l'Amiral,  
Monsieur l'Amiral,  
Vous avez bien voulu, le 12 février courant, à la suite de l'entretien que j'avais eu l'honneur d'avoir avec vous, me faire connaître le texte du télégramme que vous vous proposez d'adresser à Monsieur le Ministre des Affaires étrangères du Japon:  
Je suis heureux, en vous remerciant d'avoir bien voulu me communiquer votre télégramme, de vous faire connaître qu'il reproduit les assurances que je vous ai adressées et répond entièrement au sentiment du Gouvernement de la République.  
Veuillez agréer etc. .... etc. ....

Signé : Delcassé

Paris, le 23 février 1915.

〔〕 伊國ノ倫敦宣言加入  
伊國ハ四月二十六日倫敦宣言ニ加入セル處在本邦英國大使ハ左ノ如キ英國外務大臣來電要領ヲ提出シタリ。

1150

PARAPHRASE of a Telegram from Sir E. Grey of April 29th.

On the afternoon of April 26th Italy adhered to the agreement of September 5th last between France, Great Britain and Russia. None of the conditions attached to the agreement with Italy apply to the region with which the Anglo-Japanese Alliance is concerned. Until the Naval and Military Forces are ready to co-operate, the fact of the agreement having been concluded is to be kept strictly secret, and it will take three or four weeks before their arrangements are complete. When it becomes possible for the adhesion of Italy to be disclosed and to become effective, a great and favourable influence will be exercised on the course of the war.

Please inform the Minister for Foreign Affairs of the above in the strictest confidence.

British Embassy, Tokyo.

April 28th, 1915.

右伊國ノ倫敦宣言加入ニ際シ講和談判ノ際ニ各自ガ特殊利益ヲ有スル事項ニ關シ提出スル要求ハ互ニ之ヲ妨害セザルベキコトニ關スル決議アリトノ情報アリ、在露本野大使ハ講和談判ノ際ノ帝國ノ立場ヲ強固ナラシムルガ爲メニモ極力帝國ガ倫敦宣言ニ加入スベキコトヲ進言シ來レリ。加藤外務大臣ハ直チニ在英井上大使ニ命ジ右協定ノ存否ヲ確メシタル處英國外務大臣ハ之ヲ否認シ日本國政府ト協議セズシテ此種協定ヲ結ブコトハ斷然英國政府ノ爲サザル所ナリト明示セリ。

(三) 帝國政府ノ倫敦宣言加盟

大正四年八月在露英國大使ハ英國外務大臣ノ口上書ヲ露國外務大臣ニ交付シタル處、右ニ依レバ英國外務大臣ノ意見ニテハ日本國政府ハ倫敦宣言加入ニサシテ不同意ナラザル様子ナルヲ以テ露國政府ニ於テ日本政府ニ對シ直接ニ交渉スル方可然トテ日露兩國ノ直接談判ヲ勧誘シ來レリ。同年九月十八日在本邦露國大使大隈外務大臣ヲ來訪シ露國外務大臣ノ訓令ニ從ヒ左記(別紙第一號)ヲ朗讀シ、倫敦宣言ニ對スル帝國政府ノ加入ヲ切ニ勸誘セリ。(別紙ハ露國大使ガ本國外務大臣ノ訓令ヲ自己ノ覺ノ爲メニ記載セバモニニシテ何等公ノ文書ニ非ズ)。之ヨリ先在本邦英國大使モ帝國外務大臣ヲ來訪、日英同盟第二條ノ適用ニ依リ共同講和ノ關スル限り日本ハ倫敦宣言ニ加入スルコトナクモ三國ト同一ノ地歩ニ在ルヲ以テ故ラニ右加入ノ必要ナシトノ帝國政府ノ意見ニハ同意ナルモ、英國政府トシテハ、此際出來得ル丈ヶ露國ニ満足ヲ與ヘムコトヲ欲スルモノニシテ、日本ノ倫敦協約加入ハ露國ノ喜ブ所ナルノミナラズ戰局ニ好影響ヲ及ス可キヲ疑ハズトノ「グレー」氏ノ見解ヲ述べ帝國政府ノ加入方ヲ勸誘シタリ、又在本邦佛國大使モ來訪シ同様勸誘スル處アリタリ、在本邦英國大使ハ更ニ九月十八日附書翰ヲ以テ右ノ趣ヲ申越シタリ(別紙第二號)。茲ニ於テ帝國政府ハ協議ノ結果開議ニ於テ加入スルコトニ異議ナク之ヲ可決シ、上奏裁可ヲ經タルヲ以テ、九月二十三日帝國外務大臣ハ在本邦英、露、佛、三國大使ヲ招致シ、此ノ旨ヲ聲明シタリ。尙帝國外務大臣ハ九月二十三日附書翰ヲ以テ在本邦英國大使ニ對シ、前頭九月十八日來翰ニ對シ回答スル處アリタリ(別紙第三號)。

更ニ同日帝國外務大臣ハ在英井上大使ニ對シ帝國政府ガ加盟ヲ正式ニ決定シタルヲ以テ、英國外務大臣ト加盟ノ形式ヲ協議スベキコトヲ訓令シ、三國側ヨリ帝國政府ニ對シ正式ニ誘引シ、我方ヨリ右ニ



二四四

以書翰致啓上候陳者英國外務大臣「ザー、エドワード、グレー」ハ在倫敦井上大使並石井男爵ヨリ日本帝國政府ニ於テハ若シ英露佛三國ヨリ加盟方勸誘アルニ於テハ一九一四年九月五日右三國政府間ニ調印セラレタル協約ニ加盟スベキ意図アル旨承知シタルニ依リ本使ニ對シ右協約ニ加盟方正式ニ日本政府ニ申入ルル様訓令致越候  
「ザー、エドワード、グレー」ハ右訓令ヲ本官ニ送越スニ當リ右加盟ノ形式ハ倫敦ニ於テ日本大使ト協議スペク且原宣言ノ例ニ倣ヒ同大使閣下ノ調印ヲ求ムルコト致度旨申添越候  
本使ハ茲ニ重ネテ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具  
一九一五年九月十八日

大隈外務大臣閣下

東京英國大使館ニ於テ

コニンガム、グリーン

(別紙第三號)

以書翰致啓上候陳者一九一四年九月五日倫敦ニ於テ英佛露三國政府間ニ調印セラレタル宣言ニ帝國政府ノ加盟方正式ニ申入ルル様貴國政府ノ訓令ニ基キ本月十八日附貴翰ヲ以テ御申越ノ趣致敬承候  
帝國政府ニ於テハ右宣言ニ加盟セザルモ日英同盟協約第二條ノ規定存スルニ依リ戰爭ノ遂行及共同  
講和ニ關シ恰カモ右三國宣言ニ加盟シ居レルガ如ク貴國ト同一ノ地位ニ在ルモノト解釋シ而シテ此ニ加入スルノ必要ヲモ認メザリシ次第ハ本年七月二十八日閣下ニ送付セラレタル帝國外務省覺書中ニモ記載セラレアル通ニ有之候

仍テ前記貴翰ヲ以テ御申越ノ正式加盟方ノ儀ニ關シ帝國政府ニ於テハ更ニ一應審議シタル上今般前記貴翰ニ對シ帝國政府ノ承諾ノ意ヲ茲ニ閣下ニ通告スルハ本大臣ノ甚ダ光榮トスル所ニ有之候  
帝國政府ノ正式加盟ノ形式ニ付テハ前記貴翰末段ニ御記載有之右ニ關シテハ帝國政府ニ於テモ別ニ異存無之候ニ付在英帝國大使ヲシテ貴國外務大臣ト協議セシムル爲メ既ニ必要ナル訓令ヲ同大使ニ發送致置候

本大臣ハ茲ニ重ネテ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具  
大正四年九月二十三日  
大隈外務大臣  
在本邦  
英國大使宛

二四五

帝國政府ハ本件ハ既定ノ關係ヲ明確ニ定ムルノ外何等新シキ約束ヲ包含セザルニ付権密院ニ附スル必  
要ナシト決定シ、其ノ結果公文交換ノ形式ヲ最モ都合ヨシト認メ宣言案ニ依ラザル様在英井上大使ニ

二四六

訓令シタリ(九月二十五日附)。

英國外務大臣ガ九月二十九日井上大使ニ提示シタル公文案ハ右帝國政府ノ希望ニ合致セルヲ以テ帝國外務大臣ハ右公文案ニ異議ナキヲ以テ交換スベキコトヲ井上大使ニ訓令シ(十月一日附)茲ニ於テ十一月十九日附ヲ以テ左記公文ノ交換ヲ了シタリ。

英國駐劄佛露兩國大使及英國外務大臣ヨリ英國駐劄帝國大使宛公文

以書翰致啓上候陳者ハ各其ノ本國政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ千九百十四年九月五日倫敦ニ於テ佛露英三國政府間ニ調印セラレタル宣言ニ日本帝國政府ノ加盟スルコトヲ閣下ヲ經テ表明相成候様勸誘方同政府ニ申入ルノ光榮ヲ有シ候。

該宣言ノ文言ハ次ノ通ニ有之候

(略)

下名等ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

千九百十五年十月十九日倫敦ニ於テ

ボーグ、カムポン  
イー、グレー

日本國特命全權大使 閣下

英國駐劄帝國大使ヨリ英國駐劄佛露兩國大使及英國外務大臣宛公文

以書翰致啓上候陳者千九百十四年九月五日倫敦ニ於テ調印セラレタル佛露英三國政府間ノ宣言ニ日本帝國政府ノ加盟表明方ニ向シ閣下等ガ各本國政府ノ名ニ於テ且其ノ委任ヲ受ケ本日附書翰ヲ以テ

日本帝國政府ニ勸誘方御申入ノ趣致敬承候

該宣言ノ文言ハ次ノ通ニ有之候

右回答トシテ日本帝國政府ハ本宣言ノ各條項ニ充分且完全ニ加盟スベキ旨閣下等ニ通報方本使ハ本國政府ヨリ委任ヲ受ケタルコトヲ茲ニ申進ムルノ光榮ヲ有シ候

本使ハ茲ニ閣下等ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

千九百十五年十月十九日倫敦ニ於テ

井 上 勝 之 助

英國駐劄佛露兩國特命全權大使閣下

英國 外 務 大 臣 閣 下

右原文

M. l'Ambeassadeur

Londres, le 19 octobre, 1915.

Nous soussignés, dûment autorisées par nos Gouvernements respectifs, avons l'honneur d'inviter le Gouvernement Impérial Japonais à signer, par l'intermédiaire de votre Excellence, son adhésion à la Déclaration signée à Londres le 5 septembre, 1914, entre les Gouvernements français, russe et britannique, et dont le texte est comme suit:

(英佛露語)依々宣誓ヲ插入)

Veuillez agréer, &amp;c.

11回七

日本  
October 19, 1915.  
Japanese Embassy, London.

PAUL CAMBON,  
BENCKENDORFF,  
E. GREY.

Your Excellencies,

I have the honour to acknowledge the receipt of your note of this day's date, in which, in the name and with the authority of your respective Governments, you invite the Imperial Japanese Government to signify their adherence to the Declaration between the French, Russian, and British Governments, signed at London on the 5th September, 1914, the text of which reads as follows:—

(英佛兩語に依々眞語ヲ挿入)

In reply, I have the honour to acquaint your Excellencies that the Imperial Japanese Government have authorised me to inform you of their full and complete adherence to the terms of this Declaration.

I have, &c.

K. INOUYE.

(四) 五國宣言ノ調印

大正四年十一月二十四日在英井上大使ハ英國外務大臣ノ雷ニ依リ往訪シタルル。同大臣曰ク伊國議會ハ十一月一日開會ノ豫定ナルガ伊國政府ハ其ノ前ニ客年九月五日ノ英露佛宣言ニ加盟シ之ヲ公表スルニ決シ十一月二十三日伊國大使ヨリ宣言案ヲ提出ノ上右申入アリタルニ付早速關係各國ヘ協議ノ上何分ノ處置ニ出ズベント答へ置ケルガ無論日本ニ於テモ異議ナキコトト存ズル所加盟ノ形式ハ曩ニ日本自身加盟ノ場合ノ例モアリ是レヲ公文交換ノ形式トナス方日本ニ都合宜シカルベク、十一月三十日迄ニ必要ノ委任ヲ受ケ記名セラル様致シタシト。

尙井上大使ノ質問ニ對シ、英國外務大臣ハ、伊國ハ戰爭參加ノ決定ト同時ニ本件三國宣言ニ加盟シ居ルコトナレドモ、右ハ當時ノ事情祕密協定トナリ居リ其儘公表ハ工合惡シキニ付今回改メテ公然加盟ノ取極ヲ爲サントスル次第ナリト云々。

帝國政府モ初メ公文交換ヲ希望セルモ、後、伊國政府ガ重大ナル事項ナルヲ以テ共同宣言ノ形式ヲ採用シタシトノ希望ヲ容ニ、十一月二十九日左記宣言ニ署名調印セリ。

DÉCLARATION SELON LAQUELLE LA FRANCE, LA GRANDE BRETAGNE,  
L'ITALIE, LE JAPON ET LA RUSSIE S'ENGAGENT À NE PAS  
CONCOURIR DE PAIX SÉPARÉE AU COURS DE  
LA PRÉSENTE GUERRE.

Le Gouvernement italien ayant décidé d'adhérer à la Déclaration faite à Londres le 5 septembre 1914 par les Gouvernements français, britannique et russe, Déclaration à laquelle a adhéré également le Gouvernement japonais en date du 19 octobre 1915, les soussignés, dûment autorisés par leurs Gouvernements respectifs, font la déclaration suivante:

1140

Les Gouvernements français, britannique, italien, japonais et russe s'engagent mutuellement

à ne pas conclure de paix séparée au cours de la présente guerre.

Les cinq Gouvernements conviennent que lorsqu'il y aura lieu de discuter les termes de la paix, aucune des Puissances alliées ne pourra poser des conditions de paix sans accord préalable avec chacun des autres alliés.

En foi de quoi, les sousignés ont signé la présente Déclaration et y ont apposé leurs cachets.

Fait à Londres, en quintuple original; le 30 novembre 1915.

(L.S.) K. INOUYE.

(L.S.) BENCKENDORFF.

(L.S.) PAUL CAMBON.

(L.S.) E. GREY.

(L.S.) IMPERIALI.

右譯文

現戦争中單獨ニ媾和セザルベキコトヲ約セル佛、英、伊、日、露五國宣言

伊太利國政府ハ千九百十四年九月五日倫敦ニ於テ佛、英、露三國政府間ニ締結セラレ千九百十五年

十月十九日日本國政府ノ均シタル加盟シタル宣言ニ加盟スルコトニ決シタルニ付下名等ハ各其ノ本國

政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ茲ニ左ノ通宣言ス

佛、英、伊、日、露五國政府ハ現戦争中ハ單獨ニ講和セザルベキコトヲ相互ニ約ス

右五國政府ハ講和條件ヲ議スル場合ニ於テ何れノ同盟國モ豫メ他ノ各同盟國ノ同意ヲ經ズシテ講和

條件ヲ要求セザルベキコトヲ約ス

右證據トシテ下名等ハ本宣言ニ署名調印ス

千九百十五年十一月三十日倫敦ニ於テ本書五通ヲ作ル

井 上 勝 之 助 印  
ベ ン ケ ン ド ル フ 印  
ボ ー ル カ ム ボ ン 印  
イ ム ベ リ ア リ 印

尙大正五年七月十日在本邦英國大使ハ帝國外務大臣宛書翰ヲ以テ葡國政府ノ單獨不講和宣言ニ加入方  
申出タルニ付帝國政府ノ意見問合セ來リタルヲ以テ石井外務大臣ハ七月二十二日附書翰ヲ以テ右ニ關  
シテハ專ラ聯合國側ノ決定ニ任カセ度意向ナル旨回答セリ。

又同年十一月一日在本邦英、佛、伊、露大使、帝國外務大臣ヲ來訪シ、羅馬尼ノ聯合側加入ニ關シ面

談スル所アリタリ、即チ英國大使ハ先任ノ關係上、佛、伊、露三國ノ爲同時ニ通告スルコトヲ依頼サ

レタリストテ、左記ノ覺書ヲ朗讀シ羅馬尼國ト英佛伊露四國トノ間ニ聯合加入ニ關スル條約ノ締結サレ

タルコトヲ通告セリ。

Les Gouvernements Russe, Français, Britannique et Italien ayant conclu une convention

avec le Gouvernement Roumain au sujet de son accession à l'Alliance, ont reconnu que la Rou-

1141

manie jouera des mêmes droits que ses Alliés en tout ce qui a trait aux préliminaires aux négociations de la paix, ainsi qu'à la discussion des questions qui seront soumises aux décisions de la Conférence de la Paix.

Le Gouvernement Impérial Japonais n'étant pas signataire de la Convention conclue par la Russie, la France, l'Angleterre et l'Italie avec la Roumanie, l'Ambrassadeur de la Grande Bretagne a été chargé de donner connaissance, à titre amical, au Cabinet de Tokyo d'un accord dont les conditions sont d'ailleurs d'un caractère et d'une portée purement locaux. (第一節 aux ハセトス トアリシテ、後在本邦大使館ヨリ訂正シ來ハセマエナツ)

## 六、第四回日露協商及祕密同盟條約（大正五年）

### （一）露國政府ノ對日提議

第一回日露協商（明治四十三年）ノ當時ヨリ日露兩國間ニ同盟ヲ締結スベシトノ意見我國ニ行ハレ居タルガ、大正五年一月、御即位式ノ無事結了ニ對シ祝意ヲ表シ、且開戦以來日本ヨリ受ケタル援助ニ對スル謝意ヲ表スル爲露國皇帝ハ御名代トシテ太公「ジョールジ・ミハエロヴィチ」殿下ヲ我國ニ派遣セラレタル際、其ノ隨員中ニ加ヘラレタル露國外務省極東局長「コザコフ」ガ露國外務大臣「ザザノフ」ヨリノ傳言トシテ石井外務大臣ニ對シテ述べタル意見ノ最後ニ左ノ如キ一句アリタリ。露國ノ希望スルトコロハ從前日本ガ露國ニ表彰シタル厚意即兵器供給ノ件ヲ從來ヨリ一層満足ナル程度ニ於テ斷行セラレンコト是ナリ。此點ニ於テ日本政府ガ我希望スル程度ノ供給ヲ惜マザルニ於テハ露國モ亦其厚意ヲ空シウセザルノ覺悟アルハ勿論ナリ。例之昨年兵器問題ノ起リシ際露國側ニ於テハ長春以北松花江ニ至ル鐵道ヲ割テ日本ノ好意ニ報イントスルノ議御前會議ニ於テ現ハレタル位ナリトス。乍併今回露國ノ武器要求ニ對スル希望條件等ハ貴國ヨリ之ヲ設定シテ提出セラルベキ順序ナルガ故ニ我ヨリ進シテ之ヲ申述ズベキニアラズ。要之日露提携シテ支那ニ對スルノ政略ヲ一定スルノ件及提携ノ結果トシテ厚意ヲ表示スルノ手段即貴國ニアリテハ武器供給露國ニアリテハ之ガ報酬提供皆之レ相關聯スル一個ノ問題タルニ遇ギズ。

右ニ對シ石井外務大臣ハ先以テ確メ置キタギコトシテ「露國外相閣下ノ意見ハ日露間ノ接近ヲ期ス

ルニアリヤ、或ハ之三英國又ハ英佛兩國ヲモ加ヘテ三國若ハ四國ノ接近ヲ企ツルニアリヤ」ト問ヒタルニ「コザコフ」ハ「サザノフ」氏ノ意見ニテハ日露ノ協商ニアリト思考ス」ト答ヘタリ。茲ニ於テ帝國政府ハ協議ノ結果、同年二月十四日議會ニ於ケル臨時閣議ニ於テ左ノ如キ方針ヲ確定シタリ。

第一 日露兩國ノ親善ヲ鞏固ニシ接近ヲ促進スルハ東洋ノ平和ヲ維持スル所以タルコト

第二 日露講和條約成立後滿蒙ニ關スル三回ノ協約ヲ重ネタルハ方ニ此方針ニ出デ歐洲大戰勃發以降帝國政府ガ露國ニ對シ多量ノ軍需品ヲ供給シタルハ之亦第一項ノ趣旨ニ一致スルモノニシテ今後ト雖事情ノ許スリ此方針ヲ持續ズベキコト

第三 情シヤ露國政府ニ於テ帝國ガ開戦以來表示シタル厚意ヲ認識シ東清鐵道支線ヲ我ニ割讓シテ以テ帝國ニ向セ有形的應酬ノ態度ヲ表明スルニ於テハ帝國政府ハ宜シク國際關係ノ現状ニ鑑ミ國防ノ要議ニ反セザル限ツ兵器ニ關スル露國政府ノ要望ニ應ズルヲ辭セザルベキコト

第四 第三ノ場合ニ於テ長春哈爾賓間ノ鐵道ハ相當ノ價格ヲ以テ譲受ケ兵器モ亦相當ノ價格ヲ以テ之ヲ賣渡スコトトスルコト

第五 日露兩國ノ親善關係茲ニ至テハ更ニ一步ヲ進メテ寧ロ兩國間ニ同盟關係ヲ設定シ戰後露國ヲシテ獨逸其他侵略的政策ニ驅ラル邦國トノ接近ヲ豫防スルハ現下ノ急務タルベキコト

第六 第五項ノ同盟關係ハ凡ソ左ノ標準ニ據ルベキコト

甲 日露兩國ハ其ノ領土權及特殊利益ヲ擁護セムガ爲必要ニ應シ相互ニ平和手段ニ依ル友好的援助ヲ與フルコト

乙 日露兩國ノ一方ハ他方ニ敵對スルノ目的傾向ヲ有スル條約若ハ協定ニ加入シ又ハ之ヲ締結セザルベキコトヲ相互通約スルコト

丙 日露兩國ハ支那ガ第三國ノ政治的掌握ニ歸スルコトヲ以テ兩國各自ノ主要利益ニ對スル侵迫ト互認シスル情態ノ發現ヲ豫防スルノ方法ニツキ隨時協議ヲナシ右協議ニ基キ一方ガ執リタル措置ノ結果トシテ第三國ト戰争ヲ爲スノ已ムヲ得ザルニ至リタル場合ニ於テハ他方ハ來テ其ノ同盟國ニ援助（兵力援助ヲ含ム）ヲ與フベキコトヲ相互通約スルコト

（二）帝國政府案及ビ露國政府對案ノ提示ヨリ調印マデ  
右ノ方針ニ基キ、帝國政府ハ左ノ如キ公示協約案及祕密協約案ヲ起草シ、在露本野大使ヲシテ帝國政府ノ一應ノ容認ヲ得タル同大使ノ私案トシテ露國外務大臣ニ之ヲ示シ、右ヲ基礎トシテ意見ノ交換ヲ行フベキコトヲ訓令シタリ。

第一條

兩締約國ハ極東ノ地域ニ於ケル兩締約國ノ領土權及特殊利益ヲ保全セムカ爲何時ニテモ必要ノ場合ニハ其ノ權内ニ於ケル一切ノ平和手段ヲ盡シテ相互ニ友好的ノ援助及協力ヲ爲スベキコトヲ聲明ス

第二條

兩締約國ハ孰レモ他ノ一方ニ對シ侵略的目的ヲ有スル何等ノ協定又ハ聯合ノ當事國トナラサルコトヲ約ス

兩締盟國ハ支那國カ締盟國ノ一方又ハ双方ニ對シテ侵略ノ趨向ヲ有スル第三國ノ政事的掌握ニ歸スルカ如キ事態ヲ以テ締盟國各自ノ緊切ナル利益ニ對スル侵迫ト認ム

第二條

兩締盟國ハ支那ニ於テ前條ニ記述セル事態ノ發生スルコトヲ防止セムカ爲必要ニ應シテ隨時隨意ナキ意見ノ交換ヲ行ヒ双方ノ執ルヘキ措置ヲ共同ニ考量スヘシ

第三條

締盟國ノ一方カ第二條ノ規定ニ依リ双方合意ノ上ニテ執リタル措置ノ結果第一條ニ記述セル第三國ト交戦スルニ至リタルトキハ他ノ一方ハ請求ニ基キ其ノ同盟國ニ援助ヲ與ブベク此ノ場合ニ於テハ講和ハ双方合意ノ上ニ非シハ之ヲ爲サス

第四條

兩締盟國ノ一方カ第三條ノ規定ニ依リ他ノ一方ニ兵力的援助ヲ與フヘキ條件及其ノ援助實行ノ方法ハ兩締盟國當該官憲間ニ於テ協定スヘシ

第五條

本協約ハ調印ノ當日ヨリ直ニ實施シ一年間效力ヲ有バ

第六條

兩締盟國ハ本協約ヲ嚴ニ祕密ニ附スヘシ

右譯文

Article I.

The High Contracting Parties declare that they will extend to each other friendly support and cooperation, whenever required, with all pacific means at their disposal, for the preservation of their territorial rights and special interests in the regions of the Extreme East.

Article II.

It is agreed that neither of the High Contracting Parties will become a party to any arrangement or combination directed against the other for purposes of aggression.

Article I.

The High Contracting Parties recognize it to be a menace to their vital interests that China should be placed under the political domination of any third Power given to aggressive tendencies towards either or both of them.

Article II.

The High Contracting Parties, with a view to averting the possible development of the situation in China mentioned in the preceding Article, will frankly communicate with each other from time to time as circumstances may require, and will consider in common the measures to be taken by them.

Article III.

If, in consequence of the measures taken in common accord between the High Contracting Parties under the provisions of the preceding Article, either Party should be involved in war with any third Power mentioned in Article I of this Agreement, the other Party will, when so requested, come to the assistance of its ally, and, in that case, neither Party will make peace except in mutual agreement with the other.

Article IV.

The present Agreement shall come into effect immediately after the date of its signature, and remain in force for ..... years from that date.

Article V.

It is understood between the High Contracting Parties that this Agreement will be kept strictly confidential.

Article VI.

在露本野大使ハ一月十八日露國外務大臣ニ面會、右訓令ノ趣旨ヲ詳細ニ認メタル書面ヲ手交シタリ。別紙第一號)右ニ對シ露國外務省ヨリ別紙ノ如キ回答アリタリ(別紙第二號)(ノ)間本野大使ハ日露協約私案ヲ送附シ來レルモ、其ノ内容餘ソニモ我國ノ義務ヲ加重セシムルヲ以テ外務大臣ノ容アル所トナラズ)

右意見ノ交換ノ結果判明シタルコトハ、獨逸國ニ對抗スル爲日露兩國同盟ヲ締結スル點ニ付テハ兩國ノ意見一致スルモ、帝國政府ニ於テハ専ラ將來ニ於テ支那ガ獨逸國ノ掌握ニ歸スルガ如キ危險ヲ豫防スルコトヲ條約ノ基礎トスルニ反シ、露國政府ハ條約締結同時ニ支那ニ於テ效力ヲ發生セシメントスル如ク、ヨノ點ニ於ケル兩國ノ意見大ニ相違シ居ルコトナリ。斯くて支那引入問題、武器供給問題、松花江長春間鐵道讓渡問題等ニ付接衝ノ後、三月十三日本野大使ハ同盟協約談判ノ基礎トシテ我案文ヲ露國外務大臣ニ手交セリ。右ニ對シ、三月二十三日露國外務大臣ハ左ノ趣旨ノ覺書及ビ右ノ覺書ノ趣旨ニ依リ作成シタル露國政府對案(別紙第三號)ヲ我本野大使ニ手交シタリ。

日露兩國ハ其同盟國ノ加勢ナクシテハ獨逸ト開戦スルコト困難ナルベシ故ニ日露同盟締結ニ付テバ現存條約ニ基ク système politique 及今回ノ戰争ヨリ生ズベキ列強間ノ離合ヲ參酌スルヲ要ス

第三國ガ支那ヲ其政事的支配ノ下ニ置カントスル野心ニ對スル件ハ露佛條約日英條約ニモ之ヲ casus foederis トナシ居ラザルヲ以テ日露兩國ハ其同盟國ガ戰争參加ヲ承認スル場合ニ於テノミ相互ニ兵力の援助ヲ約スル方一層安全ナルベシ同一ノ理由ニヨリ日露條約ノ期限ハ日英同盟協約ノ期限ト同一タラシメ日英同盟協約ノ修正又ハ廢止ノ場合ニハ日露條約モ之ヲ修正シ得ルコトトシタシ日露兩國ガ其領土權及特殊ノ利益ヲ保護スル爲相互ニ援助スルニ當リ取ルベキ手段ハ平和

的性質ノモイタベキ旨公表協約ニ明記スルトキハ諸外國ハ兵力的援助ニ關スル協定ノ存在ヲ知  
ラザルヲ以テ日露兩國ニ反對スル國ヲシテ支那ニ於ケル兩國ノ利益ヲ度ニセシメ秘密條約ニ依リ  
達セントスル目的ノ平和的遂行ニ危害ヲ及スベシ故ニ公表條約中 tous les moyens pacifiques à  
leur disposition ノ文字ヲ削除ペルコトヲ可トス

極東ニ於ケル平和維持ノ爲ニハ支那政府ガ外國ノ政事の支配ノ下ニ立タザルコト必要ナリト思考  
ス而シテ公表條約前文中ニ明ニ此主義ヲ宣言スルトキハ日露同盟ガ支那及歐米諸國ニ惹起スバキ  
疑惧ヲ鎮靜スルヲ得ベシ  
日露兩國ハ支那ニ於ケル其特殊ノ利益ニ關シ締セントスル國際協定ヲ互ニ通告シ其支那ニ關ス  
ルモノハ兩國合意ノ上ニアラザレバ之ヲ爲ナザルコトレバ専ニ要ス  
兩國間現存秘密條約ハ勿論繼續スベキモ誤解ヲ避クルタゞ其旨秘密條約中ニ記入スベシ  
(別紙第一號)

Confidentiel.

le 5/18 février 1916.

## PROMEMORIA.

Depuis le commencement de la conflagration générale en Europe, le Gouvernement Impérial  
a donné maintes preuves des sentiments de la plus sincère sympathie qui l'animent à l'égard  
de la Russie; notamment: 1) en garantissant la sécurité des territoires russes en Extrême  
Orient, il lui a permis de dégarnir ses frontières asiatiques et de concentrer toutes ses forces  
en Europe; 2) il a cédé à la Russie des armes et des munitions au dépens même de la défense  
nationale; 3) il a consenti à l'émission des bons du Trésor russe, sans précédent dans le monde  
financier du Japon, contrairement à ses propres convenances.

Etant données ces circonstances, le Gouvernement japonais pouvait à juste titre s'attendre  
à un traitement sincèrement amical de la part du Gouvernement russe. Or certaines mesures  
prises par la Russie concernant les droits de douane en Extrême-Orient et certaines innovations  
dans le sens restrictif apportées au régime concernant le droit de pêche des japonais dans les  
eaux russes ont porté des préjudices très graves aux commerçants et aux pêcheurs japonais.  
Ces dispositions de la Russie qui ne répondent pas aux sentiments du Japon commençaient à  
faire nature des inquiétudes très sérieuses dans le sein du Gouvernement Impérial et de la  
confiance dans le public japonais.

La visite de Son Altesse Impériale le Grand-Duc Georges Mikhaïlovitch, représentant de  
Sa Majesté l'Empereur de Russie à la Famille Impériale du Japon, a été un très heureux événement  
qui a eu notamment l'effet de faire renaitre de la confiance et de l'espoir dans l'espérance  
de tous les japonais en ce qui concerne les relations future du Japon et de la Russie. Mais le  
rafraîchissement des bonnes relations entre deux pays devant avoir pour fondement les senti-  
ments de sincère amitié de part et d'autre, le Gouvernement Impérial aime à espérer vivement  
que le Gouvernement russe voudra bien faire un pas en avant dans le manifestation de ses  
bonnes dispositions à l'égard du Japon.

En conséquence, l'Ambassadeur du Japon est chargé d'exposer franchement à Son Excel-  
lence Monsieur le Ministre des Affaires Etrangères de Russie la manière de voir du Gouverne-

IIK-1

1141

ment Impérial, en réponse aux sentiments si amicaux que Monsieur Kozakoff a bien voulu communiquer au Baron Ishii de la part de Son Excellence Monsieur Sazonow.

Le Gouvernement Impérial croit donc devoir tout d'abord demander au Gouvernement russe de vouloir bien accorder certaines satisfactions aux intérêts japonais en ce qui concerne les deux questions du tarif douanier et du droit de pêche dans les eaux russes.

Monsieur Kozakoff, dans sa conversation avec le Baron Ishii, fait espérer que la question de la cession de l'embranchement Kharbin-Changchun pourrait être examinée dans certaines éventualités. L'embranchement susmentionné, laisse à la Compagnie du chemin de fer Chinois de l'Est, lors des négociations concernant la cession du chemin de fer sud-mandchouien, est certainement une anomalie, qui tôt ou tard devra disparaître, cette ligne se trouvant en majeure partie dans la sphère d'influence japonais. Si donc le Gouvernement russe pouvait céder au Japon cet embranchement dans des conditions convenables, le Gouvernement Impérial y verrait le signe manifeste de la reconnaissance par le Gouvernement russe des sentiments d'amitié que le Gouvernement Impérial a témoigné et de l'aide qu'il n'a cessé de donner jusqu'à présent à la Russie. Le Ministre des Affaires Etrangères du Japon est persuadé que si cette question pourrait être réglée d'une manière satisfaisante, les craintes du peuple japonais à l'égard de la Russie seront complètement dissipées et les reproches du Parlement sur l'attitude du Gouvernement japonais à l'égard de la Russie n'ayant plus leur raison d'être, l'autorité militaire pourra trouver le moyen de satisfaire au désir de la Russie jusqu'à certain point pour ce qui concerne la question de la fourniture des armes à la Russie, posée à nouveau lors de la visite de Son Altesse Impériale le Grand Duc Georges Mikhaïlovitch.

Dans le cas où le Gouvernement russe pouvait accéder aux demandes ci-dessus exposées, le Gouvernement Impérial du Japon est tout disposé à discuter et à conclure un traité d'alliance avec la Russie et dont l'idée a été souvent suggérée par le Gouvernement russe.

L'Ambassadeur du Japon étant autorisé par son Gouvernement à entrer en négociation avec le Gouvernement russe sur les questions susmentionnées, le Baron Motono serait très renommant à Son Excellence le Ministre des Affaires Etrangères s'il voulait bien lui faire connaître les vues du Gouvernement russe sur ce sujet.

(司政第1號)

Pétrograd, le 12 février 1916.

Le Ministre des Affaires Etrangères de Russie n'a pas manqué d'étudier la communication que Son Excellence l'Ambassadeur du Japon a bien voulu lui faire à la date du 5/18 courant, avec toute l'attention que mérite ce document et tient à exprimer sa vive reconnaissance pour cet exposé amical des vues du Gouvernement Japonais.

Monsieur Sazonow croit nécessaire tout d'abord d'observer que le Gouvernement Japonais commettait une erreur s'il interpréta comme dirigées contre les intérêts de ses sujets l'introduction d'un nouveau tarif douanier sur la frontière russe en Extrême Orient et la publication d'un nouveau règlement des pêcheries du Pacifique. Ces mesures ont été dictées, d'une part, par des considérations fiscales, le Gouvernement russe se voyant obligé à profiter de chaque source de revenu pour couvrir les énormes dépenses de la guerre actuelle, et d'autre part, par la nécessité de régler en détail les conditions de l'exploitation des pêcheries du Pacifique, l'intensité excessive

1141.

NIKE  
de cette exploitation étant devenue dangereuse pour la conservation des poissons. Les relations les plus intimes entre deux nations devraient laisser à leurs Gouvernements la liberté d'action dans des questions semblables qui sont tout-à-fait d'ordre intérieur, sans que l'amitié de ces nations en ait à souffrir. Pourtant si dans le cas actuel il s'agit d'un service à rendre au Japon en échange des sacrifices que ce dernier aurait faits pour venir en l'aide à la Russie, le Gouvernement Russe n'hésitera pas à revoir sa législation sur ces deux questions en prenant en une les intérêts japonais.

Mr Sazonow saisit cette occasion pour assurer de nouveau le Gouvernement japonais que les services que ce dernier a rendus à la Russie, sont vivement appréciés par le Gouvernement et la nation russe. La mission de Son Altesse Impériale le Grand Duc George Mikhaïlovitch en est le témoignage.

Le Gouvernement russe a appris avec une satisfaction particulière par les paroles de Son Excellence le Baron Ishii adressées à Mr Kozakow et par la communication de Son Excellence le Baron Motono du 5/18 courant, que le Gouvernement Japonais partageait l'opinion du Gouvernement Russe quant au danger de l'activité en Chine du Gouvernement allemand et de sa tendance de s'attribuer un rôle prépondérant dans ce pays. C'est dans le but de combattre ce danger que le Gouvernement Russe cherche à unir ses forces à ceux du Japon. Aussi l'alliance une fois conclue, elle devrait produire sans retard ses effets. Le moment actuel où l'Allemagne est isolée en Europe et privée de toute communication avec l'Extrême Orient, paraît particulièrement favorable pour lui porter sur le terrain Chinois un coup qui l'empêcherait d'en faire une base d'intrigues pendant la guerre et d'y établir son influence après la conclusion de la paix.

Le Gouvernement Chinois devrait être à rompre avec les Puissances Allemandes et à se ranger définitivement du côté des Alliés. Le Gouvernement Russe peut assurer le Gouvernement Japonais que, en préconisant une telle action, il n'a nullement l'intention d'encourager les chinois à réclamer les droits d'un belligérant dans la guerre actuelle, ni voix aux négociations de paix. Le Gouvernement Russe est conscient des désavantages que de pareilles réclamations pourraient entraîner tant pour lui-même que pour le Gouvernement Japonais. En allié loyal du Japon, la Russie ne cherchera pas à nuire aux intérêts japonais en Chine ni à empêcher le Gouvernement Japonais de consolider sa situation dans les parties de ce pays reconnues par le Gouvernement Russe comme sphère des intérêts spéciaux du Japon.

D'autre part, en faisant avec le Japon une alliance destinée à tenir en échec l'Allemagne, le Gouvernement Impérial espère pouvoir compter sur un appui plus efficace du Japon dans les opérations militaires contre cette Puissance. Dans ce but le Gouvernement Japonais pourrait céder à la Russie des armes et des munitions en quantités correspondant à celles que l'armée japonaise devrait dépenser si elle prenait une part active aux combats contre nos ennemis communs.

De son côté, le Gouvernement russe pourrait rendre un service correspondant au Gouvernement Japonais en lui céant, par exemple, à un prix à établir, la partie du tronçon sud du chemin de fer de l'Est Chinois qui se trouve dans la sphère japonaise de la Mandchourie, et notamment entre la ville de Kouanchantsze et le Sungari. Les différentes difficultés causées par la présence de ce chemin de fer russe dans la zone japonaise, seraient ainsi écartées, et le Japon aurait fait une acquisition qui lui compenserait la perte des armes qu'il aurait cédées à

la Russie.

En exposant ainsi les idées de son Gouvernement, Mr Sazonow désire surtout écarter toute possibilité de malentendus dans des questions aussi graves, et savoir si le Gouvernement Japonais est disposé à les envisager sous le même jour.

(露威密川驥)

俄國政府密報

Convention Ostensible.

Le Gouvernement de Russie et le Gouvernement du Japon résolu de unir leurs efforts pour le maintien d'une paix constante en Extrême Orient reconnaissent que dans ce but l'indépendance de la Chine doit être respecté et que aucune puissance ne doit chercher à y jouir d'une influence politique prépondérant et s'entendent sur ce qui suit.

Article I. La Russie ne fera partie d'aucun arrangement ou combinaison politique dirigée contre le Japon.

(露) 原文 俄文 本件は上記の如き)

Article II. Dans le cas où les droits territoriaux ou les intérêts spéciaux en Extrême-Orient de l'une des Parties Contractantes reconnu par l'autre Partie Contractante viendraient à être menacés, la Russie et le Japon se concerteront sur les mesures à prendre en vue de l'appui ou du concours à se prêter pour la sauvegarde et la défense de ces droits et intérêts.

Article III. Chacune des Parties Contractantes s'engage ne faire avec des tierces puissances aucun arrangement ayant trait aux questions visées à l'article précédent sans en avoir averti l'autre Partie Contractante.

Convention Secrète.

Le Gouvernement de Russie et le Gouvernement du Japon s'entendent sur ce qui suit.

Article I. Les deux Parties Contractantes reconnaissant que leurs intérêts vitaux exigent que la Chine ne tombe sous la domination politique d'aucune tierce puissance ayant des vues agressives contre la Russie ou le Japon ce qui ne manquerait pas de se produire si une telle puissance obtenait une situation prépondérant dans l'organisation militaire, administratif ou financier de ce pays se mettrent franchement et loyalement en communication chaque fois que les circonstances le exigeront et s'entendent sur les mesures à prendre pour empêcher du développement de la situation en Chine dans le sens susindiqué.

Article II. Dans le cas où par suite des mesures prises de commun accord comme s'il est prévu à l'article précédent la guerre serait déclaré entre l'un des Parties Contractantes et une des tierce Puissance visée par l'article précédent l'autre partie contractant sur la demande de l'allié? (triple alliance) lui viendra en aide, et dans ce cas chacune des Parties Contractantes s'engage ne pas faire la paix sans un accord préalable avec l'autre Partie.

Article III. Les conditions dans lesquelles chacune des Parties Contractantes prêtera son concours armé à l'autre Partie Contractant comme il est (stipulé) à l'article précédent et les moyens par lesquels ce concours sera effectué seront établi par les autorités compétentes des

deux Parties Contractantes

**Article IV.** Il est bien entendu toutefois que aucun des Parties Contractantes ne sera tenue à prêter, à sa allié l'aide armée prévu par l'article II de la présente Convention sans être assuré de la part de ses alliés un concours répondant à la gravité de la conflit imminent.

sances aucun traité, convention ou arrangement politique concernant la Chine Intérieur sans un accord préalable avec l'autre Partie Contracquante.

et du 25 Juin/s Junier, 1912, resteront en vigueur.

Article VIII. La présente Convention restera strictement Confidentiel entre les deux Parties à partir du jour où l'une ou l'autre des Parties Contractantes l'aura dénoncée.

本野大使ハ右露國外務大臣覺書中、公表條約中ヨリ平和的手段ナル文句削除ノ件ニ關シ第一回日  
協約中ニハ右ノ文句ヲ使用シタルモ第二回協約締結ノ際ハ一步ヲ進メテ該文句ヲ削除シタル次第

府ニ於テ右削除ニ關スル露國外務大臣ノ提議ニ同意シテ然ルベシト思考スト申越セリ。

帝國政府、右ニ對シ算定考量天加ヘタル後、四月十八日附テ以テ左ノ如キ訓令ヲ本野大使ニ與ヘリ。

ケル和衷互信ノ關係ヲ規定スルニ止メ支那ニ關スル政策ノ問題ノ如キハ成ルベタ之ニ言及セザ  
ヲ得策ト認メタル次第ナルガ露國外務大臣ニ於テ其覺書ニ記述セル如ク日露同盟ノ爲支那及歐  
諸國ニ惹起スベキ懼惧ヲ鎮靜スルノ趣意ニ依リ何等カノ明文ヲ條約前文中ニ設クルヲ適當ナリ  
(可國タレヲ用ヒ)  
(辰認ノ)  
(該二國丸ノ合意モ全般各内閣同ニ制)

ラルニ ナキヤ 説明シ uninfluenced by any aggressive tendencies in such region (第一回日英同盟協約第一條參照) ナ 趣意ニ修正スルコトトシタシ (日露兩國ガ支那ノ獨立ヲ尊重スルノ主義ヲ尊重スルコトハ既ニ

次ニ協約本文第三條ニ於テ日露兩國ガ各自ノ領土權及特殊利益ヲ防護スルノ問題ニ關シ第三國  
協定セムトスルニ當リ豫メ兩國間ニ知照スルコトヲ要スルモノト定ムルハ事實上不必要ニシテア  
特殊利益範圍劃定ノ趣旨ニモ適應セザルコトト思考スルニ付本條ヲ削除スルコトトシタシ  
祕密協約第一條ニ於テ (此事態ハ) ce qui ne manquerait pas 以下 (至ルベキヲ以テ)迄ノ一句ハ其ノ前  
一句ノ説明ニシテ特ニ必要ノ條文ニハ非ルベシ且英國ノ如キハ其ノ現ニ支那ノ關稅行政組織ニシテ  
シテ有スル地位ハ固ヨリ (政事的掌握) domination politique ト稱スベキモノニ非ルモ或ハ (優越ノ地位)  
situation prépond-

dérente レモ解セラルベク勿論英國ハ日露兩國ニ對シ所謂侵略的傾向ヲ有スルモノニ非ルガ故ニ本條文ノ場合ニ該當セザルハ云フ俟タズト雖前述ノ如ク別段ノ必要ナキ限り此ノ煩雜ナル説明的規定ハ之ヲ削除スルコトトシタシ

第五條ノ目的ハ日露兩國互ニ他ノ一方ノ権利利益ニ消長ヲ來タスガ如キ條約ヲ第三國ト締結セザルヲ保障スルニ在ルベシト雖第三國トノ條約締結前一々兩國間ニ協議ノ成立ヲ要スルコトトナスハ事實上煩雜ニシテ爲ニ機宜ヲ失スルコトモアルベク又本條ノ適用上之ニ該當スベキ條約ノ範圍ニ付幾多疑惑ノ生ズルヲ免レザルベシ要スルニ本件ノ如キハ之ヲ條約上ノ義務トスルヨリハ寧ロ兩國相互ノ善意ニ信賴シ具體的問題ノ生ズル毎ニ各自ノ判断ニ依リ豫メ兩國ノ協議ニ附スルト否トヲ決スルコトシテ實際ニ差支ナカルベシト思考スルニ付帝國政府ハ本條ノ削除ヲ希望ス祕密協約第六條ハ明文ノ有無ニ拘ラズ現存各祕密協約ノ繼續スベキコトニ付何等誤解ヲ生ズルノ虞ナカルベク從テ特ニ此ノ明文ヲ設タルノ必要ナキコト思考スルモ露國外務大臣ニ於テ強テ之ヲ主張スルトキハ貴官ニ於テ同意ヲ表セラレ差支ナシ尤モ鐵道讓與問題協定ヲ丁ルニ至ラバ千九百七年ノ祕密協約第一條末項ハ當然消滅スベキト自明ノ理ナレドモ此ノ點ハ右第六條ノ明文ヲ設タル上ハ其ノ除外例トシテ規定シ置キタシ

以上諸點ヲ除クノ外露國政府ノ對案各條ハ帝國政府ニ於テ異議ナキニ付右ノ趣旨ヲ以テ露國外務大臣ト商議ヲ繼續セラレタシ

(二) 同第三條削除  
公表協約前文 reconnaissent 以て prépondérant, et 之ヲ削除シ別ニ文句ヲ加ヘズ

(三) 祕密協約第一條 ce qui 以て ce pays 迄削除 ayant des vues aggressive contre la Russie ou le Japon à hostile à la Russie ou au Japon に改め le développement 以て que une pareille situation se produise. ニ改ムルコト

(四) 同第五條削除ニ付テハ本使ハ極力我主張ヲ固持シタルモ外務大臣ハ打明ケテ申サバ日本國ガ支那ニ於テ situation prépondérante ヲ有スルコトハ露國政府ノ認ムル所ニシテ殊ニ福建山東等ニ付テハ露國ハ毫モ利害關係ヲ有セザルニ付之ニ關シ日本國ガ如何ナル協約ヲ結ぶルトモ露國政府ニ於テ何等異議アルベキ次第ハアラザルモ支那中央政府所在地タル中部支那及露國國境ニ近キ地方ニ關シ露國政府ノ知ラザル間ニ政事的協約ノ締結セラルルガ如キコトハ露國政府ノ忍ブ能ハザル所カルヲ以テ露國政府ハ是非トモ本條ノ主旨ヲ協約中ニ残シタント主張シ右意味ヲ正確ニ表明スル爲條文ヲ Chacune des Parties Contractantes s'engage à ne faire avec des tierces Puissances aucun traité, convention ou arrangement concernant le régime politique ou l'organisation administrative ou militaire de la Chine Centrale, sans un accord préalable avec l'autre Partie Contractante レモハコトナ提議シ「中部支那」ノ意味ニ關シ當方々送付シタル覺書中ニ左ノ通申越タリ

Le régions désignées par le terme Chine Central seraient celles qui sont situées entre la Grand Muraille au nord et le Yang-tsi-kiang au sud. Province du Chaotong ne serait pas compris dans ce terme.

卑見ニ依レバ支那中央政府ノ關係スル限り、露國ニ協議スルコトナクシテ何等政事的協約ヲ締結スルコトハ甚ダ困難ナルベク又新疆等ニ付露國ガ政事協約ヲ締結スル場合ニ豫メ之ヲ帝國政府ニ通知セシムルバ益アリテ害ナキコトニ付帝國政府ハ露國政府ノ提議ヲ承諾セラレ差支ナカルベシト思考ス

(五) 第六條ヲ存スルトキハ之ニ依リ兩國對支政策ノ根本ヲ明確ナラシメ得ベキヲ以テ露國政府ハ本條ヲ保存シタキモ協約前文中ニ於テ現存秘密協約ニ言及スルニ於テハ同條ヲ削除スルモ可ナリトノ外務大臣ノ意見付本使ハ前文ヲ Le Gouvernement du Japon et le Gouvernement de Russie, désireux de consolider leurs relations sincèrement amicales établies par leurs conventions secrètes du 30/17 Juillet 1907, du 4 Juillet/21 Juin 1910 et du 8 Juillet/25 Juin 1912, se sont mis d'accord sur les clauses suivantes destinées à compléter les accords ci-dessus mentionnés トナスコトヲ試ミタルニ外務大臣ハ之ニ同意シタリ鐵道問題決定ノ曉千九百七年秘密協約第一條末項消滅ノ件ハ條約中ニ記入スルノ必要ナカルベキモ強テ何等ノ形式ニテ之ヲ表示スルヲ要セラル義ナラバ公文書交換ニテ足ルモノト思考ス

右本野大使ノ諒訓ニ對シ五月十日附ヲ以テ石井外務大臣ノ與ヘタル訓令左ノ如シ。

ニ關シ露國政府ノ知ラザル間ニ政事的協約ノ締結セラルガ如キハ忍ブ能ハザル所ナル旨ヲ説明セル趣ノ處

第一 何等露國ノ権利又ハ利益ニ消長ラ來タスノ處ナキ協約ト雖露國政府ニ於テ一々之ヲ點検シ其ノ同意ヲ經ベキコトナスハ明ニ不必要ニシテ又露國政府ノ本意ニモ非ルベシト信ズ唯露國外務大臣ハ日本ガ直接間接ニ露國ノ権利利益ヲ毀傷スルノ結果ヲ伴フベキ協約ヲ第三國ト締結スルコトアルベキヲ危懼スルモノノ如ク察セラルモ帝國政府ハ其ノ同盟國ヲ犠牲トシテ自國利益ノ増進ヲ圖ルガ如キ背信ノ行爲ナカルベキハ勿論如何ナル協約ヲ締結スルニ付テモ同盟國ノ正當ナル權利利益ニ及ボスベキ結果ニ對シ注意ヲ怠ルガ如キコトナカルベキハ露國政府ニ於テ十分信頼セラレ可能ト思考ス

第二 今回ノ秘密協約案ハ曩ニ露國外務大臣ニ於テ支那ガ獨逸ノ政事の權威ニ服スルニ至ルベキコトヲ顧慮シ「コザコフ」ヲ經テ此ノ所見ヲ本大臣ニ通ジタルニ基クモノニシテ帝國政府ガ本協約ヲ提議セル目的モ亦全ク右露國外務大臣ノ所見ニ重キヲ措キ支那ニ於ケル前記事態ノ發生ヲ共同防止セムガ爲ニ外ナラズ此ノ目的ニ關係ナキ事項ニ付兩國相互ノ行動ヲ禦束セムトスルハ本來ノ趣旨ニ副ハズ帝國政府ハ從來ノ同盟及協定ニ反シテ野心ヲ抱クガ如キコト毫モ無之ハ勿論ナルト同時ニ現下ノ時局ニ際シ好ンデ斯ル自衛的協定ヲ結ブ能ハズ貴官ハ以上ノ趣旨ヲ露國外務大臣ニ繰返シ飽ク迄本條ノ削除ヲ主張セラレタシ

本野大使ハ五月十一日露國外務大臣ニ面會シ、右訓令ノ佛譯ヲ手交シ極力第五條ノ削除ヲ主張シタル處同大臣ハ帝國ガ其同盟國ヲ犠牲トシテ自國ノ利益ヲ計ルガ如キコト並ニ如何ナ

ル協約ヲ締結スルニ付テモ同盟國ノ正當ナル権利利益ニ及ボベキ結果ニ對シ注意ヲ怠ラザルベキコトヲ聲明セラレタルハ露國政府ノ満足スル處ナリ。就テハ右ノ趣旨ヲ第五條トシテ協約中ニ記載シタシト云ヘルニ付本使ハ其點ハ帝國政府ノ誠意ニ信賴シ然ルベキ旨再三繰返シ其不必要ヲ主張シタルモ同大臣ハ同僚中ニハ此點ニ關シ懸念シ居ルモノモアルニ付何等カノ形ニ於テ右ノ趣旨ヲ表示シ置キタシ免ニ角熟考ノ時ヲ與ヘラレタシトノコトナリシガ五月十三日同大臣ハ本使ノ來訪ヲ求メ前日ノ處見ヲ認メタル後第五條ヲ左ノ通提議シタル覺書ヲ本使ニ手交シタリ。

En faisant un traité, une Convention ou un arrangement quelconque avec une puissance puissante ayant trait à la Chine Centrale, Chacune des Parties Contractantes veillera aux conséquences qu'un pareil accord pourra avoir pour les droits et intérêts de l'autre Partie Contractante.

「サゾノフ」氏ハ右提議ヲ爲スニ方リ露國政府ハ日本以外ノ政府ト同盟條約ヲ締結スル場合ニハ本案ノ如キ條文ニテハ安心スルコトヲ得ザルモ日本國政府ノ誠意ニハ全然信用ヲ置クニ付本條文ニテ満足スベキニ付是レ丈ハ是非共日本國政府ニ於テ承認セラル様致シタシト附言シタリ。

右ニ對シ石井外務大臣ハ六月一日附往電ヲ以テ左ノ如ク本野大使ニ訓令シタリ。

密約第五條ニ關シ露國新提案ハ解釋ノ仕様ニ依テハ何等差支ナキガ如キモ露國外務大臣ガ閣下説明ノ一節ヲ捕ヘテ之ヲ條文ニ書下サントスル仕打面白カラズ斯クテ我方ニ於テモ同大臣ガ閣下ニ與ヘタル説明中露國政府ハ支那ニ於ケル日本ノ situation prépondéranteヲ認ム云々該條文ニ加ヘ度シト申出テ双方質言ノ捕ヘ合ヲ爲スニ至ルガ如キハ折角日露接近ニ苦心スル本志ト背馳スル

コトトナルベシ況シヤ露國新提案ハ日露親交ニ顧ミ勿論ノ義ニシテ之ヲ條文ニ存スルノ理由無ク斯ル不必要ニシテ兩國相互ノ眞意ヲ疑ノ觀アル條文ハ是非共削除シタキニ付キ此趣意ニテ先方ヲシテ同案ヲ撤回セシムル様御盡力ヲ請フ

右第五條削除問題ニ關シテハ其後、露國外務大臣ヨリ露國皇帝陛下ニ上奏ノ結果、同陛下ハ日本政府ノ説明ニ信頼シテ可ナリト思フ故同條ヲ削除スベシト仰セラレタル由ニテ、茲ニ兩國間ニ意見ノ一致ヲ見ルニ至リ、帝國政府ニ於テモ閣議ヲ經テ勅裁ヲ受ケ七月三日調印ヲ了シタリ。協約全文左ノ如シ。

#### 公開條約

Le Gouvernement Imperial du Japon et le Gouvernement Imperial de Russie, résous d'unir leurs efforts pour le maintien d'une paix constante en Extrême Orient, s'entendent sur ce qui suit:

##### Article I.

Le Japan ne fera partie d'aucun arrangement ou combinaison politique dirigés contre la Russie.

La Russie ne fera partie d'aucun arrangement ou combinaison politique dirigés contre le Japon.

##### Article II.

Dans le cas où les droits territoriaux ou les intérêts spéciaux en Extrême Orient de l'une

des Parties Contractantes reconnus par l'autre Partie Contractante, viendraient à être menacés, le Japon et la Russie se concerteraient sur les mesures à prendre en vue de l'appui ou du cours à se prêter pour la sauvegarde et la défense de ces droits et intérêts.

En foi de quoi, les soussignées, étant autorisées par leurs Gouvernements respectifs, ont signé cette Convention et y ont apposé leurs sceaux.

Fait à Pétrrogard, le troisième jour du septième mois de la cinquième année de Taisho, correspondant au trois juillet/vingt juin mil neuf cent seize.

(Signé) I. MOTONO. (Signé) SAZONOW.

(L. S.) (L. S.)

#### 右譯文

日本帝國政府及露西亞帝國政府ハ極東ニ於ケル恒久ノ平和ヲ維持セムカ爲協力ベシコトニ決シ左ノ如ク約定セリ

#### 第一條

日本國ハ露西亞國ニ對抗スル何等政事上ノ協定又ハ聯合ノ當事國トナラサルヘシ  
露西亞國ハ日本國ニ對抗スル何等政事上ノ協定又ハ聯合ノ當事國トナラサルヘシ

#### 第二條

兩締約國ノ一方ニ依リ承認セラレタル他ノ一方ノ極東ニ於ケル領土權又ハ特殊利益ガ侵迫セラルル  
ニ至リタルニキハ日本國及露西亞國ハ其ノ權利及利益ノ擁護防衛ノ爲相互ノ支持又ハ協力ヲ目的ト  
シテ執ルヘキ措置ニ付協議スヘシ

右證據トシテ下名ハ各其ノ政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ本協約ニ署名調印ス  
大正五年七月三日即露曆千九百十六年六月二十日

(七月三日)「ミナムクラード」ニ於テ本書ヲ作ル

本野一郎

#### 秘密條約

Le Gouvernement Impérial du Japon et le Gouvernement Impérial de Russie, désireux de consolider leurs relations sincèrement amicales établies par leurs Conventions secrètes du 30/16 juillet 1907, du 4 juillet/21 juin 1910 et du 8 juillet/25 juin 1912, se sont mis d'accord sur les clauses suivantes destinées à compléter les accords ci-dessus mentionnés:

#### Article I.

Les deux Hautes Parties Contractantes, reconnaissant que leurs intérêts vitaux exigent que la Chine ne tombe sous la domination politique d'aucune tierce Puissance hostile au Japon ou à la Russie, se mettront franchement et loyalement en communication chaque fois que les circonstances l'exigeront, et s'entendront sur les mesures à prendre pour empêcher qu'une pareille situation se produise.

#### Article II.

Dans le cas où, par suite des mesures prises de commun accord comme il est prévu à

1142  
l'article précédent, la guerre serait déclarée entre l'une des Parties Contractantes et une des tierces Puissances visées par l'article précédent, l'autre Partie Contractante, sur la demande de son allié, lui viendra en aide, et dans ce cas chacune des Hautes Parties Contractantes s'engage à ne pas faire la paix sans un accord préalable avec l'autre Partie Contractante.

Article III.

Les conditions dans lesquelles chacune des Hautes Parties Contractantes prétera son concours armé à l'autre Partie Contractante, comme il est stipulé à l'article précédent, et les moyens par lesquels ce concours sera effectué, seront établis par les autorités compétentes des deux Hautes Parties Contractantes.

Article IV.

Il est bien entendu toutefois qu'aucune des Hautes Parties Contractantes ne sera tenue à prêter à son allié l'aide armée prévue par l'article II de la présente Convention sans s'être assurée, de la part de ses alliés, un concours répondant à la gravité du conflit imminent.

Article V.

La présente Convention entrera en vigueur aussitôt après la date de sa signature et restera exécutoire jusqu'au 14/1 juillet 1921.

Dans le cas où aucune des Hautes Parties Contractantes n'aurait notifié douze mois avant l'échéance de terms son intention de faire cesser les effets de la Convention, celle-ci continuera à être obligatoire jusqu'à l'expiration d'une année à partir du jour où l'une ou l'autre des Hautes Parties Contractantes l'aura dénoncée.

Article VI.

La présente Convention restera strictement confidentielle entre les deux Hautes Parties Contractantes.

En foi de quoi, les soussignés, dûment autorisés par leurs Gouvernements respectifs, ont signé cette Convention et y ont apposé leurs sceaux.

Fait à Petrograd, le troisième jour du septième mois de la cinquième année de Taisho, correspondant au trois juillet/vingt juin mil neuf cent seize.

(Signé) I. MOTONO. (Signé) SAZONOW.

(L. S.) (L. S.)

右證文

日本帝國政府及露西亞帝國政府ハ一千九百七年七月二十日(十七日)千九百十年七月四日(六月二十日)一千九百十二年七月八日(六月十五日)ノ日露祕密協定ニ依リ定メラレタル兩國間ノ眞摯ナル友好關係ヲ一層鞏固ナラシムコトヲ希望シ前記協定ヲ完成セシム爲左ノ條款ヲ協定セリ  
第一條 両締盟國ハ其ノ緊切ナル利益ニ顧ミ支那國カ日本又ハ露西亞國ニ對シテ敬意ヲ有スル第三國ノ政治的支配ニ歸セナルコトヲ緊要ナリト認メ必要ニ應シテ隔意ナク且誠實ニ意見ノ交換ヲ行ヒ前記事態ノ發生ヲ防止セムカ爲執ルヘキ措置ニ付協議スヘン

二八〇

第二條 前條ノ規定ニ依リ双方合意ノ上ニテ執リタル措置ノ結果兩締盟國ノ一方ト前條ニ記述セル  
第三國トノ間ニ戰爭ノ發生シタル場合ニハ締盟國ノ他ノ一方ハ請求ニ基キ其ノ同盟國ニ援助ヲ與  
フヘク此ノ場合ニ於テ兩締盟國ハ孰レモ豫メ他ノ一方ノ同意アルニ非サレハ講和セサルコトヲ約  
ス

第三條 兩締盟國ノ一方カ前條ノ規定ニ依リ他ノ一方ニ兵力的援助ヲ與フヘキ條件及該援助ノ實行  
方法ハ兩締盟國當該官憲ニ依リテ協定セラルヘシ

第四條 然レトモ兩締盟國ノ一方ハ切迫セル戰爭ノ重大ナル程度ニ適應スヘキ援助ヲ其ノ同盟諸國  
ヨリ保障セラルニ非サレハ本條約第二條ニ規定スル兵力的援助ヲ他ノ一方ニ與フルノ義務ナキ  
コトハ充分諒解セラレタルモノトス（註四）

第五條 本協約ハ調印ノ日ヨリ直ニ實施シ千九百二十一年七月十四日（一日）迄效力ヲ有ス

前記期間ノ終了ニ至ル十二箇月前ニ兩締盟國ノ孰レヨリモ本協約ヲ廢棄スルノ意思ヲ通告セサル  
トキハ本協約ハ兩締盟國ノ孰レカニ於テ廢棄ノ意思ヲ表示シタル當日ヨリ一箇年ノ終了ニ至ル迄  
引續キ效力ヲ有ス（註五）

第六條 本協約ハ兩締盟國ニ於テ嚴ニ祕密ニ附スヘシ  
右證據トシテ下名ハ各其ノ政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ本協約ニ署名調印ス

大正五年七月三日即露曆千九百十六年六月二十四日

「ペトログラード」ニ於テ本書ヲ作ル

本野一郎

サザノフ

（三）英佛兩國ニ對スル内示

之ヨリ先、帝國外務大臣ハ在英佛帝國大使ニ對シ、日露協約案ノ寫ヲ各任國外務大臣ニ手交シ、左ノ

如ク申添ヘルベキコトヲ電訓シタリ。

（英國外務大臣ニ對シ）

豫テ我外務大臣ヨリ在本邦英國大使ニ内話シタル通り曩ニ露國大公來朝ニ際シ日露ノ接近ヲ更ニ親  
密ナラシムトノ議アリ爾來兩國政府ハ交渉ヲ重ネ今回本協約ヲ議スルニ至レリ本協約ハ日英同盟  
ト其ノ目的及終了期限ヲニシ本協約ト相俟テ日英同盟ハ愈強固トナルベキ次第ナレバ英國政府  
ガ本協約ノ成立ヲ歎迎セラルベキハ帝國政府ノ堅ク信ズルトコロナリ茲ニ本協約調印ニ先チ同盟國  
政府ニ之ヲ内示スルノ光榮ヲ有ス

（佛國外務大臣ニ對シ）

曩ニ露國大公來朝ニ際シ日露ノ接近ヲ更ニ親密ナラシムトノ議アリタルニ基キ爾來兩國政府ハ交  
渉ヲ重ネ今回本協約ノ締結ヲ見ムトスルニ至レリ本協約ハ日佛協約ノ精神及び日佛兩國政府間ニ了  
解セラレ居ルトコロニ符合シ日佛ノ良好關係ヲ一層鞏固ナラシムモノナルガ故ニ佛國政府ニ於テ  
モ本協約ノ成立ヲ歎迎セラルコト確信シ茲ニ調印ニ先チ之ヲ内示スルノ光榮ヲ有ス

右訓電ニ接シタル在英井上大使及在佛松井大使ハ六月二十六日各任國外務大臣ニ面會、協約案ヲ手交

シ、口頭ニテ電訓ノ趣旨ノ通告ヲ爲シタリ。之ニ對シ英佛兩國トモ満足ノ意ヲ表シタリ。尙英國外務

二八一

大臣ハ密約第四條 sans être assuré de la part de ses alliés. ノ意味ニ付質問セラレタルニ付本使ハ

右ハ締盟國ノ一方ガ他方ヨリ第二條規定ノ武力的援助ヲ求メラレタル場合ニハ先づ其ノ同盟國即チ日本ナラバ英國又露國ノ場合ニハ佛國ヨリ事態相當ノ協力ヲ得ベキヤ否ヤ確タル上ノコトニスベシトノ意味ト了解スル旨ヲ答ヘタルニ同大臣ハ此ノ説明ヲ諒トシタリ。

(四) 支那政府ノ質疑及右ニ對スル回答

七月三十一日支那外交部參事伍朝樞在支小幡代理公使ヲ來訪シ外交總ノ命ニ依リ最近調印セラレタル日露協商ニ關シ非公式ニ左記ノ點ニ付日本政府ノ見解承知シタキ旨申出デタリ。

(一) 協約第二條ニ兩締約國ノ一方ニ依リ承認セラレタル他ノ一方ニ極東ニ於ケル領土權又ハ特殊利益ガ侵迫セラルニ至リタルトキ云々トアル處極東ノ文字中ニハ支那モ合マレ居ルコト無論ナルニ就テハ兩締約國ノ一方ニ依リ承認セラレタル他ノ一方ノ支那ニ於ケル領土權又ハ特殊利益トハ如何ナル權利及利益ヲ指次第ナルヤ

同條後段ニ於テ日本國及露西亞國ハ其ノ權利及利益ノ擁護防衛ノ爲相互ノ支持又ハ協力ヲ目的トシテ執ルベキ措置ニ付協議スベシトアル所例ヘバ支那國內ニ於テ日露ノ有スル或ル地方ノ專管居留地ヲ假リニ本條ニ所謂兩締約國ガ互ニ相承認スル權利若ハ利益ト假定シ此ノ居留地ガ或ル他ノ外國ノ爲ニ侵迫セラルガ如キ場合ニ於テ日露兩國ガ之ニ對シテ執ラルベキ措置ヲ協議スルハ隨意タルベシト考フルモ斯ル場合ニ於テハ支那自身ニ於テモ亦自ラ他國ノ侵迫ニ對シ此等居留地ヲ擁護防衛スルノ權利ト義務アルコトト信ズ而シテ協約第二條後段ノ規定ハ右ノ如キ支那ノ權利

ト如何ニ調和セラルベキヤ換言スレバ敍上ノ如キ支那ノ權利ニ關シ第二條ハ如何ニ説明セラルベキモノナリヤ? (伍ハ支那ノ權利ト第二條トハ抵觸スル所アルガ如シト謂フ意味ヲ右ノ如ク婉曲ニ陳述セルモノト了解シタリ)

(三) 參考ノ爲支那政府ハ新協約成立後ニ於テモ千九百七年ノ日露協約ハ尙依然トシテ效力ヲ有スル次第ナルヤ否ヤヲ承知シ置キタシ(伍ハ千九百七年ノ協約第二條ニハ支那ノ獨立及領土保全並ニ機會均等主義ヲ承認シ云々トアルニ拘ラズ新協約ニハ全然同様ノ規定ナキ所若シ新協約成立ノ爲千九百七年協約自然消滅セリトセバ新協約中ニ特ニ支那ノ獨立及領土保全云々ノコトヲ規定セザリシハ如何ナル理由ニ基ク次第ナリヤト附言セリ)

(四) 大阪其他ノ日本新聞紙中ニハ松花江航行問題及東清鐵道ノ一部讓與問題其他ニ關スル祕密ノ別約アリトノ報道アル處果シテ右ノ如キ密約存在シ居ル次第ナリヤ否ヤ茲ニ於テ石井外務大臣ハ在露本野大使ニ對シ、右支那ニ對スル回答振リニ付左ノ如クニテ露國外務大臣ニ於テ異存ナキヤヲ確ムベキコトヲ訓電シタリ。

(一) 極東ノ文字ニ支那モ含マレ居ルハ勿論ナルモ第二條ニ所謂領土權又ハ特殊利益ナルモノノ内支那ニ果スルモノハ日本側ヨリ云ヘバ例ヘバ租借地、南滿鐵道又ハ專管居留地ニ對スル關係ノ如キヲ指ス意ナルモ一々之ヲ分類列舉スルコト能ハズ

(二) 日露兩國ハ支那ノ正當ニ享有スル權利ノ行使ヲ排除セントスルガ如キ意思ハ毫モ之ヲ有セズ兩國ガ自國ノ權利及利益ヲ防護スルノ手段ヲ協議スルコトハ支那ノ權利ト何等扞格スル所ナシ

(三) 第一回協約第二條ハ第二回協約及新協約ニ依リ何等影響ヲ被ルコトナク依然效力ヲ有ス加之支

二八四

那ノ獨立及領土保全並同國ニ於ケル機會均等ノ主義ハ現ニ日英協約ニモ見エ居リ是等ノ主義ニ對シ帝國政府ハ從來ノ方針ヲ變ジタルモノニ非ズ。松花江航行及東清鐵道一部讓渡等ノ問題ニ關シ祕密別約成立セリトノ新聞報道ハ全然誤聞ニ屬ス他日露兩國間ニ成立スルコトアルベキ協定ニシテ支那政府ガ之ヲ知悉スベキ必要アリト認メラルモノニ付テハ支那政府ニ通知スベキコト勿論ナリ在支代理公使ノ含迄トシテ帝國政府ニ於テハ該二件ニ關スル取極中ニハ支那政府ニ通知スレバ足ルモノモアリテ必シモ全部支那政府ノ同意ヲ要スル議トハ思考シ居ラザル旨申添ユル積ナリ。

右ニ關シ八月十二日露國外務省ヨリ接到シタル回答要領左ノ通。

露國政府ハ日本政府ノ回答ニ異議ナシ但シ在支露國公使ハ本件ニ就キ私見トシテ左ノ意味ヲ支那政府ニ言明シタリ。

- (一) 日露兩國政府ノ協約ハ支那政府ノ權利義務ト扞格スルトコロナシ畢竟支那政府ガ日露兩國ニ對シ承認セル權利義務ノ guarantee ノ補足ニ過ギズ
- (二) 千九三年ノ日露協約ハ期限ヲ定メズ故ニ此ノ協約就中支那ノ獨立及領土保全ニ關スル條項ハ特ニ新協約ニ明記セザルモ依然其效力ヲ保有スルモノトス
- (三) 日露間ニ締結セラルベキ取極ニシテ滿洲ニ於ケル支那ノ權利ニ關係スルモノハ支那政府ニ通告スベシ

露國政府ハ右在支公使ノ言明ヲ是認シ尙ホ今後重ネテ新協約ニ所謂特殊利益トハ如何ナルモノナリヤトシテ支那政府ヨリ質問セラレタルトキハ右ハ露支間ノ條約協定其他一切ノ取極ニ基クモノニシテ既

「支那政府ノ知悉スルトコロナル旨ヲ答フベキ様電訓シタリ。」

右原文

Pétrograd, le 29 Juillet 1916.

Le Gouvernement Russe n'a pas d'objection aux réponses que le Gouvernement Japonais se propose de donner aux quatre questions adressées par le Gouvernement Chinois aux Ministres de Russie et du Japon, à Pékin concernant l'interprétation de l'accord russo-japonais du 20 Juin/3 Juillet a. c.—

En répondant à ces questions, le Ministre de Russie s'est exprimé, à titre d'avis personnel, dans le sens suivant.

1. L'engagement des Gouvernements Russe et Japonais de se prêter un appui mutuel pour la défense de leurs intérêts n'est pas en contradiction avec les droits et obligations du Gouvernement Chinois, et ne forme en somme qu'une garantie supplémentaire à celles dont ces Puissances jouissent de la part du Gouvernement Chinois;
2. Aucun terme n'a été fixé pour la durée de la Convention russo-japonaise de 1907; par conséquent, cette Convention et notamment la stipulation concernant la reconnaissance de l'indépendance et de l'intégrité de la Chine restent en vigueur, sans qu'il y ait besoin d'en faire mention dans la Convention récemment signée;
3. Que le Gouvernement Chinois serait mis au courant des accords ayant trait à ses droits en Mandchourie qui surviendraient entre la Russie et le Japon, tout comme il a été fait pour les stipulations du traité de Portsmouth.—

二八五

Le Gouvernement Impérial a approuvé ce langage, et a chargé de plus le Prince Koudachef, si le Gouvernement Chinois s'adressait encore à lui pour savoir quels étaient les droits spéciaux visés par la Convention du 20 Juin/3 Juillet 1916, de répondre que ces droits étaient basés sur les traitées, conventions et autres arrangements conclus entre la Russie et la Chine, et qu'ils étaient par conséquent bien connus du Gouvernement Chinois.

Le Ministère Impérial des Affaires Etrangères a l'honneur de porter ce qui précède à la connaissance de l'Ambassade du Japon en réponse à son aide-mémoire du 28 Juillet courant.

茲ニ於テ石井外務大臣ハ八月十四日附往電ヲ以テ在支小幡代理公使ニ對シ左ノ趣旨ヲ以テ支那政府ニ回答スベキ旨ヲ訓令シタリ。

(一) 極東ノ文字ニ支那モ含マレ居ルハ勿論ナルモ第二條ニ所謂領土權又ハ特殊利益ナルモノ内支那ニ果スルモノハ日本側ヨリ云ヘバ例ヘバ租借地南滿鐵道又ハ專管居留地ニ對スル關係ノ如キヲ指ス意ナルモ一々之ヲ分類列舉スルコト能ハズ

(二) 日露兩國ハ支那ノ正當ニ享有スル權利ノ行使ヲ排除セントスルガ如キ意思ハ毫モ之ヲ有セズ兩國ガ自國ノ權利及利益ヲ防護スルノ手段ヲ協議スルコトハ支那ノ權利ト何等扞格スル所ナシ

(三) 第一回協約第二條ニ第二回協約及新協約ニ依リ何等影響ヲ被ルコトナク依然效力ヲ有ス加之支那ノ獨立及領土保全並同國ニ於ケル機會均等ノ主義ハ現ニ日英協約ニモ見エ居リ是等ノ主義ニ對シ帝國政府ハ從來ノ方針ヲ變ジタルモノニ非ズ

(四) 松花江航行及東清鐵道一部讓渡等ノ問題ニ關シ祕密別約成立セリトノ新聞報道ハ全然誤聞ニ屬ス他日露兩國間ニ成立スルコトアベキ協定ニシテ支那政府ガ之ヲ知悉スル議トハ思考シ居ラズ貴官限リ舍アリタシ

尙在露大使ヨリノ電報ニ依レバ在支露國公使ハ左ノ意味ヲ其私見トシテ支那政府ニ言明シタリトノコトナリ

「此所本野大使來電(ヨリ〔三〕ノ終迄)」

「而シテ露國政府ハ右在支公使ノ言明ヲ是認シ今後重ねテ新協約ニ所謂特殊利益トハ如何ナルモノナリヤトノ質問ヲ受ケタル場合ニハ右ハ露支間ノ條約協定其他一切ノ取極ニ基クモノニシテ現ニ支那政府ノ知悉スル所ナル旨答フベキ様在支露國公使ニ電訓セル趣ナリ御参考迄ニ申添ユ」

参考

日露協約ノ效力ニ關スル在本邦佛國大使 le Comte de Martel ハ質問ニ對スル回答(昭和七年)

松 田 條 約 局 長

昭和七年五月二十日佛國大使來談シ次ノ通り質問スル與アリタリ。即チ日露協約ハ千九百七年、千九百十年、千九百十二年及千九百十六年ニ締結セラレ當時佛國政府ニ内示セラレ居ル處「ソヴィエト」政府ハ諸國トノ以前ノ條約ヲ認メズ日本ニ關スル限りニ於テハ千九百二十五年ノ日露北京條約第二條ニ依レバ「ボーナス」條約以外ノ日露間ノ條約取極ハ追テ開カルベキ會議ニ於テ之ヲ審査シ其ノ改訂又ハ廢棄ヲ決スルコトニナリ居ル處其ノ後會議ハ開催セラレ日露協約效力問題ニ付何等カ解決シタル所アリヤ本件ハ察スルニ在「モスコワ」佛國大使ガ滿洲ニ於ケル勢力範圍問題ノ消長ニ付了知シ度キ希

二八八  
望ヲ有スル如ク最近本國政府ヨリ一回ニ亘リ書信ヲ以テ本件協約ノ存續ニ關スル日露交渉ノ有無及現在ニ於ケル本件協約ノ狀態ヲ日本政府ヨリ説明ヲ受ケラレ度旨訓令アリタル次第ナリト述べ松田條約

局長ハ日露北京條約第二條ニ豫想スル會議ハ其ノ後開催セラレズ從テ本件協約ノ效力問題ハ何等決定スル所ナク尙取調ノ上確答スペキモ兎モ角本件協約ハ存續シ居ルモノトモ既ニ消滅シタリトモ謂ヒ得ザル極メテ「オブスキール」ノ狀態ニ在ルモノナリト一應回答シ置ケリ。

同二十五日更ニ同大使館「ド・ランス」參事官松田局長ヲ來訪シ「マルナル」大使ノ質問事項ニ對シ回答ヲ求メタルニ付局長ハ取調ノ結果ニ依ルモ第一點千九百二十五年日露北京條約第二條ニ定メタル條約ノ改廢ヲ決スル會議ハ其後開催セラレズ、第二點同條ニ於テ效力ヲ認メタル「ボーツマス」條約以外ノ條約ガ存續スルヤ否ヤニ付テハ何等決定ヲ見ズ從テ千九百十六年日露協約ノ效力モ未決ノ狀態ニ在リト答ヘタリ。

然ルニ「ランス」參事官ハ佛國外務省ノ有スル千九百十六年日露祕密協約「テキスト」ニ基キ同省法律家ハ同協約ハ協約所定ノ存續期限タル千九百二十二年七月十四日ニハ失效セルモノナリト解釋シ居ル處右ニ付帝國側ノ意向ヲ聽取シ度趣ヲ申述べタルガ松田局長ハ同參事官持參ノ同協約「テキスト」第五條ニ依ルモ第一項ニ於テ同協約ハ千九百二十二年七月十四日迄存續スト規定シ第二項ニ於テハ同日ニ失效セシメントセバ十二月前即チ千九百二十二年七月十四日前ニ其ノ旨ヲ通告スルヲ要ストナスト共ニコノ通告ナキ場合ニハ千九百二十一年七月十四日以後ニ失效セシメントスルトキハ一年前ノ豫告ヲ要ストナスノミニテ何等千九百二十二年七月十四日ヲ以テ當然失效トナル旨ヲ規定シ居ラザルガ尙「オリヂナル」ト照合ノ上回答スペシト答ヘ同參事官辭去後「オリヂナル」ト照合セルニ同官持參ノ「テキスト」ニハ「三箇處ノ脱漏アリタルモ第五條存續期間ニ關スル規定ハ如何ニシテモ佛國法律家ノ主張スル如解説ヲ下シ得ザリシニ付松田局長ハ同日其ノ旨左記ノ通リ「ランス」參事官宛回答セリ。

Gaimusho—Le 25 mai 1932.

Monsieur le Conseiller,  
Comme suite de notre conversation de ce matin, je me permets de vous faire retourner

ci-jointe la copie que vous m'avez laissée, après l'avoir confrontée avec l'original.

Je n'ai qu'à confirmer l'interprétation que je vous ai donnée au cours de notre entretien.

Je vous confirme également que la Conférence visée dans l'Art. 2 de la convention du 20 janvier 1925 signée entre le Japon et les Républiques soviétiques n'a jamais eu lieu jusqu'à présent.

Veuillez croire, Monsieur le Conseiller, à mes sentiments tout dévoués.

日露協約ノ效力問題ニ關スル調

1、第一回日露協約（一九〇七年七月十七日調印）

2、公示協約及祕密協約共同年八月十四日本側ヨリ英<sup>ハ</sup>又佛<sup>ハ</sup>露國側ヨリ同日頃内告<sup>ハ</sup>

第三回日露協約（一九一〇年六月二十一日調印）

公示協約及祕密協約共七月二十八日英<sup>ハ</sup>又同二十九日佛<sup>ハ</sup>内告<sup>ハ</sup>

本協約ハ祕密協約ノミヨリ成ル處調印前同年七月三日英佛<sup>ハ</sup>内告<sup>ハ</sup>

二八九

第四回日露協約（千九百十六年六月二十日調印）

二九〇

公示協約及祕密協約共同年六月二十六日英佛へ内告濟  
右ノ内第四回日露協約ハ千九百十八年初「ボルシヴィキ」政府ニ依リ發表セラル（右英譯文同年三

月二日紐育「イグニング、ボスト」紙ニ掲載セラレ「マックマレー」條約集轉載）

然ルニ右第四回協約前文ニハ前三回ノ協約ヲ其ノ日附ト共ニ引用シ居ルヲ以テ事實上ハ協約全部公

表セラレタルト大差ナシ

二、千九百二十五年日蘇間ノ關係ヲ律タル基本的法則ニ關スル條約第二條ハ「ボーツマス」條約以外ノモノハ兩締約國ノ政府間ニ追テ開カルヘキ會議ニ於テ審査セラルヘク且變化シタル事態ノ要求スルコトアルヘキ所ニ從ヒ改訂又ハ廢棄セラレ得ヘキコトヲ約ス」ル旨規定シ居レリ其後右ニ關スル會議開催セラレザルヲ以テ舊條約ノ效力問題ハ今モ尙右基本條約締結當時ト何等變更ナキ處右條約商議中兩國全權間ニ満洲ニ於ケル鐵道接續ニ關スル取極ノ如キ技術的性質ノモノニ付テハ事實上「ボーツマス」條約ニ附隨的性質ヲ有スル次第モアリ實質上其ノ效力ヲ認ムルコトニ付了解アリ（千九百二十四年八月五日ノ會議）然レドモ其他ノ條約ニ就テハ會議中其ノ效力問題ニ觸ル所ナク今尙不確定ノ狀態ニアリ、本件日露協約ノ如キモ當然右ノ内ニ包含セラル

然ルニ本件日露協約ノ效力問題ヲ實際上ヨリ見ルトキハ露國ハ當然失效ソ立前ヲ取り居リ一方我方ニ就テハ前記千九百二十五年基本條約樞密院審議ノ際同年二月十三日有松委員ノ問ニ對シ山川局長ハ「此等政治條約ハ其ノ效力ヲ認メザル方日本ニ便宜ナリ」ト答ヘ又幣原大臣ハ「勢力範圍ニ關スル條約、同盟條約等事態變化ノ結果今日之ヲ認ムル要ナシ又列國トノ關係ニ於テモ之ヲ認メザルヲ適當トス」ト答ヘ居レリ

七、日支軍事協約（大正七年）

大正六、七年ノ頃、露獨ノ支那西北境ニ對スル策動甚ダシク日支軍事協同ノ必要感ゼラルニ至リタル處、大正七年二月二十五日錢代理國務總理ハ芳澤代理公使ヲ來訪シ西比利亞問題ニ付テハ特ニ日支兩國協同動作ニ依リ之ヲ處置スルノ必要アルヲ確信シ又之ヲ希望スル旨ヲ述べ、帝國政府ノ意見ヲ知リタキ旨表明セリ。支那政府ハ同三月二日、右ニ關シ具體的決定ノ次第ヲ在本邦支那公使ニ電訓シ、日支兩國ヨリ相互ニ委員ヲ派シ共同防衛ニ關スル一切ノ動作ニツキ協商ヲ開始セシムベキ様、日本軍當局ニ要望セシムル處アリタリ。茲ニ於テ帝國政府ハ左ノ如キ協定案文ヲ起草シ三月八日在本邦支那公使ヲ招致シテ之ヲ手交セリ。

（協 約 案）

日本國政府及支那國政府ハ最近獨逸國ノ露西亞國ニ於ケル政事上及軍事上ノ活動ガ聯合諸國ノ共同目的ヲ阻害シ爲ニ事態ノ緊迫ヲ加フルニ至リタルニ顧ミ茲ニ左ノ通協定ス

一、極東ノ地域ニ於ケル全局ノ平和及康寧ガ獨逸勢力ノ同地域ニ浸潤スル結果侵迫セラルコト

ヲ認ムルトキハ日本國政府及支那國政府ハ其ノ事態ニ適應セムガ爲ニ執ルベキ措置ヲ協同ニ考

量スベシ

二、前項ノ規定ニ依リ日本國政府及支那國政府合意ノ上決定スルコトアルベキ事項ヲ實行セムガ

爲兩國陸海軍ノ協力スベキ方法及條件ハ兩國當局官憲ニ於テ協定スベク又該當局官憲ハ相互利

二九一

二九二

害ノ問題ニ關シ互ニ充分ニ且隔意大ク隨時協議スベシ。  
(三月十三日在本邦支那公使ハ協定案ノ字句ニ付質問シタゞラ以テ 説明ノ参考上手交セシ協定  
案左ノ如シ)

右協定案ノ形式ニ關シテハ、支那政府ノ意図ニ委ネタル處、三月十八日在本邦支那公使來訪シ公文交換ノ形ニシ日本ヨリ提出セル姿ニシタキ旨ノ希望ヲ開陳セルモ、之ハ支那側ヨリ提出セシムルコトトシ、其後交換公文案ノ字句ニ付打合セラ行ヒタル結果、三月二十四日ニ至リ日支兩文ニ付テ字句ノ確定ヲ見タリ。

右公文ノ交換ハ三月二十五日東京ニ於テ行ハレ、同月三十一日公表セラレタリ(別紙第一號)。尙日英同盟協約ニ鑑ミ、在英珍田大使ヲシテ英國政府ニ對シ協定案ヲ内告セシメタリ。

右合意ノ結果、日支兩國ノ軍事當局ハ相互ニ委員ヲ派遣シ、陸軍ニ關シテハ五月十六日北京ニ於テ日支陸軍共同防敵軍事協定(別紙第二號)、又海軍ニ關シテハ五月十九日同ジク北京ニ於テ日支海軍共同防敵軍事協定(別紙第三號)セラレタリ。

帝國政府ハ陸軍軍事協定第十一條及海軍軍事協定第八條ニ基キ兩軍事協定ヲ承認シタルニ付五月三十日、在支林公使ト支那側陸外交總長トノ間ニ五月二十九日附ヲ以テ公文ノ交換ヲ丁セリ(別紙第四號)。尙支那側ノ希望ニ依リ双方ヨリ同文ノ通告ヲナシ互ニ回答スルコトトセリ。

尙右日支軍事協約締結ニ關シ。

在支林公使ハ大正七年五月二十三日在支露國公使ニ對シ左記英文「ペテートメント」ヲ手交セリ。

A military agreement has lately been concluded between Japan and China with a view to

forming a plan of joint defence against the possible menace to the general peace and security of the Far East by the hostile influence, which is now steadily penetrating into Russia both in Europe and Asia. The agreement refers exclusively to joint military and naval movements against the enemy in the course of the present war, and contains not a single clause regarding any matter which has no bearing upon that object. Reports have been circulated in certain newspapers that the Chinese forces on the North-eastern frontier will be placed under the direction of Japanese officers, that the arms of the Japanese and Chinese armies will be made uniform, that the war maps of the two countries will be made interchangeable, that the construction of fortifications and the management of railways in the War Zone will be entrusted to the Japanese hand, and what is more conspicuous, that there is a secret agreement regarding arsenals, mining and railway concessions, and poitice. It will be seen, however, from the foregoing statement about the true nature of the agreement actually signed, that such reports are all false and groundless.

歐洲戰爭終了スルヤ、支那側ハ何等カノ口實ヲ以テ速カニ軍事協定廢止ニ苦心シツアリシガ、大正九年五月支那軍ノ西比利亞撤退ハ一層本問題ヲ表面化スル結果トナレリ。茲ニ於テ帝國政府ハ「軍事協定ハ帝國ヨリ進ンデ廢止ラ提議スルコトナク支那側ノ提議ヲ得アニ承諾ヲ與フ、若シ要スレバ日支兩國合議ノ上撮廢スルノ形式ニ出ヅ」ノコトニ廟議決定シタル處、同年十一月九日、新總理ハ坂西少將ニ對シ日支軍事協定ヲ廢止シタキ旨申出タルヲ機トシ、速カニ廢止ノ手續ヲ進ヌルコトトナセリ。右廢止ノ形式ニ關シテハ左ノ如キ見解ヲ採レリ。

二九三

(一)

日支兩國政府ハ兩國共同防敵ノ爲メ大正七年三月本野外務大臣ト駐日章公使トノ間ニ公文ノ交換ヲ了シ且右「公文ノ有效期間」ハ「共同防敵戰略ノ範圍ニ付協力ヲ行フヘキ方法及條件」ト共ニ一律兩國當局官憲ヲシテ之ヲ協定セシムルコトセリ（三月二十五日付交換公文參照）

(二)

同年五月北京ニ於テ調印セラレタル共同防敵軍事協定ハ即チ右交換公文ニ基クモノニシテ且同協定第十一條（海軍協定第八條）ニ於テ「本協定及本協定ニ基キ發生スル所ノ各種細則ハ、日支兩國獨塊敵國ニ對スル戰爭狀態終了ノ時ヲ俟テ即チ其ノ效力ヲ失ス」旨規定セラレタルヲ以テ上記兩國政府間交換公文ノ有效期間モ亦當然敵國ニ對スル戰爭狀態終了ノ時ヲ以テ終了スト解セザルベカラズ

(三)

而シテ兩國陸海軍當局ハ其後大正八年二月（海軍ハ三月）前項戰爭狀態終了ノ時期ニ關シ右「戰爭狀態終了ノ時トハ歐洲戰爭ノ平和會議ニ於テ平和條約締結セラレ日支兩國之ヲ批准シ日支兩國軍ヲ支那國境外ヨリ及同地方ニ駐在スル協商國軍ノ同時ニ撤退スルニ至ル時ヲ謂フ」旨ヲ協定シタルヲ以テ右ノ事態ニ達シタルトキハ軍事協定ノ效力ハ當然終了シ從テ共同防敵三關スル兩國政府交換公文セ亦同時ニ其ノ效力ヲ喪失スベシ（軍事協定ノ存續ハ戰爭狀態ノ存在ヲ前提トス從テ戰爭狀態終了後支那ガ未ダ對獨和平條約ニ調印セザルノ一事ヲ以テ軍事協定ノ有效期限ヲ左右スルコト無シ）

(四)

從テ協定乃至交換公文ノ效力ニ關シテハ兩國政府又ハ其ノ一方ニ於テ其ノ豫定セル有效期限ノ到来ニ先づ解消又ハ廢棄ノ必要ヲ感ゼザル限り所定有效有限ノ到来ニ依リ當然期限終了スル場合ニ於テハ兩國政府乃至兩國軍事當局ニ於テ右效力喪失ノ爲メ特ニ形式上ノ手續ヲ執ラザルベカラズルコト無シ

(五)

ザルノ絕對必要ナシ只兩國軍事當局が協定ニ規定セル戰爭狀態終了ノ時期正ニ到来シタルコトヲ相互ニ確認スルコト有リ得ベキコト同時ニ一方兩國政府ニ於テモ亦同樣交換公文ニ所謂有效期間ノ終了セルコトヲ互認スルコトアリ得ベキノミトス

如上述ブル所ニ依リ本協定ノ效力ハ所定事態ノ到来ニ依リ當然終了スベキモノナルヲ以テ協定ノ廢止方法ニ關スル閣議決定中支那ヨリ廢止ヲ提議シ來ルヲ俟テ我方ニ於テ之ヲ承諾ストハ嚴格ナル意味ニ於テ廢棄ニ對スル承諾ニ非ズシテ戰爭狀態終了ニ對スル承認ノ意ニ解スベク純理上ヨリ致フルトキハ交換公文及協定ノ效力喪失ニ對シ特ニ何等形式上ノ手續ヲ要スルコト無シ然ルニ協定ノ終期ハ形式上ニ於テハ支那ガ對獨和平條約ニ調印批准セザルヲ以テ永久到来ノ期ナシ乍去精神上ニ於テハ戰爭事實終了シ其ノ終期到来スト云フモ差支ナシ此ノ故ニ現在ノ解決方法トシテハ軍事當局ハ戰爭狀態ノ終了ヲ互認スルコトシテ此ノ形式上ノ缺陷ヲ補フノ要ナリ然リ而シテ本協定ガ各本國政府ノ承認ヲ經テ效力ヲ生ジタルニ顧ミ（協定陸軍第十一條海軍第八條）效力終了ノ旨ヲ公文ヲ交換セリ（別紙第六號）

茲

ニ於テ、大正十年一月二十七日先づ軍事當局間ニ戰爭狀態終了ノ時期ニ達シタルコトヲ承認スル趣旨ノ覺書ヲ陸海軍各別ニ調印シ（別紙第五號）翌一月二十八日在支小幡公使ト支那外交總長トノ間ニ上記覺書ノ趣旨ハ事實符合ゼルモノト認メタルニ付大正七年三月ノ交換公文及之ニ基キ締結セラレタル軍事協定並一切ノ附帶文書ハ爰ニ均シク完全ニ其效力ヲ喪失セルコトヲ聲明ストノ趣旨ノ公文ヲ交換セリ（別紙第六號）

(別紙第一號)

共同防敵ニ關スル交換公文

來 翰(譯文)

以書翰致啓上候陳者支那國政府ニ於テハ現下ノ時局ニ顧ミ左記ノ綱領ニ依リ貴國政府ト協同措置スルヲ貴我兩國ノ爲必要ナリト信ジ本使ハ茲ニ本國政府ノ訓令ニ依リ貴國政府ニ提議スルノ光榮ヲ有シ候。

一、支那國政府及日本國政府ハ敵國勢力ノ日ニ露國境内ニ蔓延シ其ノ結果將ニ極東全局ノ平和及安寧ヲ侵迫スルノ危險アラムトスルニ因リ此ノ情勢ニ適應シ且兩國ガ此次ノ戰爭參加ノ義務ヲ實行セムガ爲行フベキ處置ヲ速ニ協同考慮スルモノトス

二、前項ニ依リ兩國政府ノ合意ヲ經タル後決定スルコトアルベキ事項ヲ實行セムガ爲兩國陸海軍此次ノ共同防敵戰略ノ範圍ニ付協力ヲ行フベキ方法及其ノ條件ハ兩國當局官憲ニ於テ之ヲ協定スベシ該當局官憲ハ相互ノ利害問題ニ付互ニ慎重誠實ニ隨時協議シ並ニ兩國政府ヨリ確定シテ時機ヲ俟チ實行スルモノトス

右ニ對シ何分ノ儀御回答ヲ得度右照會申進旁々本使ハ茲ニ重ねテ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具  
中華民國七年三月二十五日

中華民國特命全權公使 章 宗 祥(署名)印

外務大臣法學博士 子爵 本 野 一 郎 閣下

往 翰

以書翰致啓上候陳者貴國政府ニ於テハ現下ノ時局ニ顧ミ左記ノ綱領ニ依リ帝國政府ト協同措置スルヲ貴我兩國ノ爲必要ナリト信ジ帝國政府ニ提議セラレタル本日附貴翰茲ニ致閱悉候

一、日本國政府及支那國政府ハ敵國勢力ノ日ニ露國境内ニ蔓延シ其ノ結果將ニ極東全局ノ平和及安寧ヲ侵迫スルノ危險アラムトスルニ因リ此ノ情勢ニ適應シ且兩國ガ此次ノ戰爭參加ノ義務ヲ實行セムガ爲行フベキ處置ヲ速ニ協同考量スルモノトス

二、前項ニ依リ兩國政府ノ合意ヲ經タル後決定スルコトアルベキ事項ヲ實行セムガ爲兩國陸海軍此次ノ共同防敵戰略ノ範圍ニ付協力ヲ行フベキ方法及其ノ條件ハ兩國當局官憲ニ於テ之ヲ協定スベシ該當局官憲ハ相互ノ利害問題ニ付互ニ慎重誠實ニ隨時協議シ並ニ兩國政府ヨリ確定シテ時機ヲ俟チ實行スルモノトス

帝國政府ハ右貴國政府提議ノ趣旨ニ全然共感ヲ有スルモノニテ前記綱領ニ依リ貴國政府ト協同措置スルハ帝國政府ノ欣快トスル所ニ有之候右回答申進旁々本大臣、ハ茲ニ重ねテ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具  
大正七年三月二十五日

日本帝國外務大臣法學博士 子爵 本 野 一 郎(署名)印  
支那共和國特命全權公使 章 宗 祥(署名)印  
往 翰

以書翰致啓上候陳者三月二十五日貴我兩國政府間ニ兩國共同防敵ノ爲公文ノ交換ヲ了シ候處帝國政府ニ於テハ右公文ノ有效期間ハ兩國ノ軍事當局ニ於テ議定スルコトト致度候將又帝國政府ハ共同防

二九八

敵ノ爲ニ日本軍隊ノ支那國境內ニ在ルモノハ總ヲ戰事終了後ヲ俟チ支那國境內ヨリ一律撤退スベキ  
コトヲ特ニ茲ニ聲明致候  
右照會申進旁々本大臣ハ茲ニ重ネテ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候  
敬具

大正七年三月二十五日

日本帝國外務大臣法學博士 子爵 本野一郎(署名)印

支那共和國特命全權公使 章宗祥 閣下

來翰(譯文)

以書翰致啓上候陳者本日附貴翰ヲ以テ三月二十五日貴我兩國政府間ニ兩國共同防敵ノ爲公文ノ交換  
ヲ了シタルガ貴國政府ハ右公文ノ有效期間ハ兩國ノ軍事當局ニ於テ議定スルコト致ナレ度旨御照  
會相成候處右ハ支那國政府ニ於テモ同意ニ有之候將又右貴翰ヲ以テ貴國政府ハ共同防敵ノ爲ニ日本  
軍隊ノ支那國境內ニ在ルモノハ總ヲ戰事終了後ヲ俟チ支那國境內ヨリ一律撤退スベキ旨特ニ聲明相  
成致領承候

右本國政府ノ訓令ニ基キ回答申進旁々本使ハ茲ニ重ネテ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

中華民國七年三月二十五日

中華民國特命全權公使 章宗祥(署名)印

外務大臣法學博士 本野一郎 閣下

(別紙第二號ノ一)

日支陸軍共同防敵軍事協定

大正七年五月十六日北京ニ於テ調印(日、支文)

大正八年三月十四日陸軍省發表

日支兩國政府協商ノ結果ニ基キ兩國政府交換ノ文書ニ據リ兩國軍事當局互ニ委員ヲ派遣シ左ノコト  
ヲ協定ス

第一條

日支兩國陸軍ハ敵國勢力ノ日ニ露國境內ニ蔓延シ其結果將ニ極東全局ノ平和及安寧ヲ侵迫スルノ危  
險アラントスルニ因リ此情勢ニ適應シ且兩國カ此次ノ戰爭參加ノ義務ヲ實行ゼンカ爲共同防敵ノ行  
動ヲ執ル

第二條

協同軍事行動ニ對シ兩國ノ地位ト利害トハ平等ノ見地ニ於テ相互ニ尊重スルモノトス

第三條

日支兩國當局ハ本協定ニ基キ行動ヲ開始スルニ方リ各自本國軍隊及官民ノ軍事行動區域内ニ在ルモ  
ノニ對シ相互誠意親善同心協力シテ共同防敵ノ目的ノ達成ヲ期スヘキコトヲ命令ハ訓告ス  
凡フ軍事行動區域内ニ於ケル支那地方官吏ハ該區域内ニ在ル日本軍隊ニ對シ盡力協助シ軍事上ニ故  
障ヲ生セサラシメ又日本軍隊ハ支那ノ主權及地方ノ習慣ヲ尊重シ人民ヲシテ不便ヲ感セサラシム

第四條

共同防敵ノ爲ニ日本軍隊ノ支那國境內ニ在ルモノハ凡テ戰事終了後ヲ俟チ支那國境內ヨリ一律撤退

ス

第五條

支那國境外ニ軍隊ヲ派遣スルトキハ若シ必要アラバ兩國ハ協同シテ之ヲ派遣ス

第六條

作戦區域及作戦上ノ任務ハ共同防敵ノ目的ニ適應スル如ク兩國軍事當局ニ於テ各自本國ノ兵力ヲ量

リ別ニ之ヲ協定ス

第七條

日支兩國軍事當局ハ協同作戦期間ニ於ケル協同動作ノ便利ヲ圖ル爲左記事項ヲ行フモノトス

一、直接作戦上ニ關シ各軍事機關ハ彼此相互職員ヲ派遣シ往來聯絡ノ任ニ充ツ

二、軍事行動及運輸補充ノ敏活且確實ヲ圖ル爲陸海運輸通信諸業務ハ彼此共ニ便利ヲ謀ル

三、作戦上必要ノ建設例ヘハ軍用鐵道電信電話等ノ如キコードニ關シ如何ニ設備スヘキヤハ兩國總司令官ニ於テ臨時之ヲ協定シ戰事終了ヲ俟チ凡テ臨時建設工事ハ之ヲ撤廢ス

四、共同防敵ニ關シ要スル所ノ兵器及軍需品並其原料ハ兩國相互ニ供給ス其數量ハ各自本國ノ需用ヲ害セサル範圍ヲ以テ限りトス

五、作戦區域内ニ於ケル軍事衛生事項ニ關シテハ相互ニ輔助シテ遺憾ナカラシム

六、直接作戦上ニ關スル軍事技術人員ノ輔助ノ必要アルトキハ一方ノ請求ニ依リ他方ハ之ヲ輔助シ以テ任使ニ供ス

七、軍事行動區域内ニ諜報機關ヲ設置シ並軍事所要ノ地圖及情報ヲ相互交換ス

諜報機關ノ通信聯絡ニ關シテハ彼此輔助シテ其便利ヲ圖ル

八、共用ノ軍事暗號ヲ協定ス

本條列スル所ノ各項ニシテ豫メ計畫ヲ要スルモノ及豫メ施行スヘキモノハ作戦未實行前ニ別ニ之ヲ協定ス

第九條

軍事輸送ノ爲東清鐵道ヲ使用スルトキハ該鐵道ノ指揮保護管理等ハ本來ノ條約ヲ尊重シ其輸送方法ハ臨時之ヲ協定ス

第十條

本協定實行ニ要スル詳細事項ハ日支兩國軍事當局ノ指定スル各當事者ニ於テ之ヲ協定ス

本協定及本協定附屬ノ詳細事項ハ日支兩國ニ於テ均シク之ヲ公布スルコトナク軍事ノ祕密トシテ取扱フ

第十一條

本協定ハ日支兩國陸軍代表者記名調印シ各自本國政府ノ承認ヲ經タル上效力ヲ生ス其作戰行動ハ適當ノ時機ヲ俟チ兩國最高統帥部商定シテ之ヲ開始ス

本協定及本協定ニ基キ發生スル所ノ各種細則ハ日支兩國獨墮敵國ニ對スル戰爭狀態終了ノ時ヲ俟チ即チ其效力ヲ失フ

本協定ハ日本文及漢文各々二通ヲ作り對照シテ記名調印シ雙方各一通ヲ保有シ證據ト爲ス

中大正七年五月十六日於北京  
中華民國七年五月十六日於北京

日本帝國陸軍軍事協約委員

三〇二

委員長 陸軍少將 齋藤季治郎  
委員 陸軍步兵中佐 本庄一成  
委員 陸軍砲兵少佐 川崎吉五郎  
委員 陸軍歩兵大尉 山田健三  
中華民國陸軍軍事協商委員  
委員長 果威將軍 新雲鵬  
委員 陸軍中將 曲煥文  
委員 陸軍中將 曲同豐  
委員 陸軍少將 田壽年  
委員 陸軍少將 劉崇傑  
委員 陸軍少將 張濟元  
委員 陸軍步兵上校 陳達華  
委員 陸軍步兵上校 秦祺錦

(別紙第二號ノ二)

日支陸軍共同防敵軍事協定實施ニ要スル詳細ノ協定

大正七年九月六日北京ニ於テ調印(日、支文)

日支軍事協定第九條ニ基キ日支兩國軍事當局ノ指定スル各當事者ハ同協定第六條第七條ニ關シ左記

事項ヲ協定ス

第一條

日支兩國ハ各其軍ノ一部ヲ派遣シ後貝加爾州及黑龍州ニ對シ軍事行動ヲ執ル其任務ハ「チエクスロワック」軍ノ救援並獨撫兩國及之ニ加擔スル勢力ヲ排除スルニ在リ

指揮ノ統一協同ノ圓滿ヲ期スル爲メ該方面ニ行動スル支那軍ハ日本軍司令官ノ指揮下ニ入ルモノトス

滿州里方面ヨリ後貝加爾方面ニ行動スル軍ト策應スル爲メ支那軍ノ一部ハ庫倫方面ヨリ貝加爾湖方面ニ行動ス而シテ支那軍ノ希望アラハ日本軍モ該方面ニ一部ノ兵力ヲ派遣シ支那軍司令官ノ指揮下ニ入ラシムルモノトス

以上ノ外中部蒙古以西ノ邊境ハ支那自ラ其防備ヲ鞏固ニス

第二條

兵器及軍需品ノ供給ハ緊急已ムヲ得サルモノハ出先司令官相互ノ協定ニ依リ之ヲ行フヘキモ其他ノ

モノ及原料ノ供給ハ東京及北京ノ最高補給機關ヨリ交渉シテ之ヲ行フ

三〇三

三〇四

第三條 衛生業務ニ關シ若シ支那ニ於テ之ヲ希望スルアレバ日本軍ハ爲シ得ル範圍ニ於テ便宜ヲ提供スヘク、而シテ情況進展セハ病院及休養所ノ施設等ニ關シ日本軍モ亦支那ノ助力ヲ受クルモノトス

第四條

南滿鐵道ニ依リ輸送セラルヘキ支那軍隊及其軍需品ハ支那ヨリ大連、營口若クハ奉天ニ搬出シ爾後、長春マテノ輸送ハ日本軍之ヲ擔任ス。庫倫方面ヨリ貝加爾湖方面ニ出動スル支那軍ニ一部ノ日本軍隊ヲ參加セシムル場合ニハ該軍隊及其軍需品ハ太沽又ハ秦皇島若クハ奉天マテ日本軍ニ於テ輸送シ爾後ノ輸送ハ支那軍之ヲ擔任ス。東清鐵道輸送ハ東清鐵道當局ヲシテ之カ實施ニ當ラシム該當局トノ交渉、日支兩軍及「チエックスロフク」軍ノ輸送ノ調節按排ヲ計ル爲メ日支協同ノ機關ヲ設ク此ノ機關ニハ將來與國軍ニシテ此ノ方面ニ行動スル場合ニ於テハ其軍ヨリ所要ノ人員ヲ參加セシムルコトアルヘシ。

第五條

連絡職員ノ派遣ニ關シテハ既ニ交渉ヲ了シ或ハ交渉中ニアルモノノ外差當リ出先司令部ト將來之ヲ要スル場合東京及北京ニ於ケル最高補給機關ニ相互職員ノ派遣ヲ爲スヘク爾後必要ニ應シ隨時協議ス。

第六條

兵器其他軍需材料並其原料ノ供給及一方軍ノ爲メニ擔任シタル輸送等ノ費用ハ有償トシ其決済ハ隨時又ハ軍事行動終了後ニ於テ之ヲ行フ。

第七條

本協定ハ日本文及漢文各二通ヲ作リ對照シテ記名調印シ雙方各一通ヲ保有シ證據ト爲ス。

大正七年九月六日於北京

大日本帝國陸軍軍事當局ノ指定スル當事者

陸軍中將 齋藤季治郎

大中華民國陸軍軍事當局所指定之當事者

陸軍中將 徐樹錚

(別紙第二號ノ三)

日支陸軍共同防敵軍事協定第九條ニ基キ第十一條第二項中戰爭狀態終了ノ時期ニ關スル協定

大正八年二月五日北京ニ於テ調印(日、支文)

同 年三月十四日陸軍省發表

日支兩國最高統帥部協議ノ上日支陸軍共同防敵軍事協定第九條ニ基キ第十一條第二項中戰爭狀態終了ノ時期ニ關シ左ノ通協定ス。獨逸國ニ對スル戰爭狀態終了ノ時トハ歐洲戰爭ノ平和會議ニ於テ平和條約締結セラレ日支兩國之ヲ批准シ日支兩國軍ノ支那國境外ヨリ及同地方ニ駐在スル協商國軍ノ同時ニ撤退スルニ至ル時ヲ謂フ

三〇五

本協定ハ日本文及漢文各二通ヲ作リ對照シテ記名調印シ雙方各一通ヲ保有シ證據ト爲ス

大正八年二月五日

中華民國八年二月五日

三〇六

日本帝國陸軍代表者  
陸軍少將東乙彥  
中華民國陸軍代表者  
陸軍上將銜中將除樹錚

(別紙第三號ノ一)

日支海軍共同防敵軍事協定  
大正七年五月十九日北京ニ於テ調印(日、支文)

日支兩國政府協商ノ結果大正七年三月二十五日海軍省發表  
國海軍當局互ニ委員ヲ派シ左ノ事項ヲ協定ス

第一條

日支兩國海軍ハ敵國勢力東漸シ其ノ結果極東全局ノ和平及安寧將ニ侵迫ヲ受クルノ危險アラムトス  
ルニ因リ此ノ情勢ニ適應シ且兩國此ノ次歐洲戰爭參加ノ義務ヲ實行セムカ爲共同防敵ノ行動ヲ執ル

第二條  
協同軍事行動ニ關シ兩國ノ地位ト利害トハ平等ノ見地ニ於テ相互ニ尊重スルモノトス

第三條

日支兩國當局ハ本協定ニ基キ行動ヲ開始スルニ方リ各自本國艦船及官民ノ軍事行動區域内ニ在ルモ  
ノニ對シテ命令又ハ訓告ヲ發シ彼此誠意親善同心協力以テ共同防敵ノ目的ヲ達セシム

第四條  
作戰區域及作戰上ノ任務ハ共同防敵ノ目的ニ適應スル如ク兩國海軍當局ニ於テ各自本國ノ兵力ヲ量

リ別ニ之ヲ協定ス

第五條

日支兩國海軍當局ハ協同作戰期間ニ於テ協同動作ノ便利ヲ圖ル爲左ノ事項ヲ行フ  
一、直接作戰上ニ關シ各軍事機關ハ彼此互ニ職員ヲ派遣シ往來聯絡ノ任ニ充ツ  
二、軍事行動及運輸補充ノ敏活確實ヲ期スル爲海陸運輸通信諸業務ハ彼此共ニ便利ヲ謀ル  
三、艦艇兵器及軍事機具等ノ造修並之ニ要スル材料ニ關シテハ爲シ得ル限り相互ニ輔助スル軍需品

亦同シ

四、直接作戰上ニ關スル軍事技術人員ハ日支兩國海軍相互輔助ノ必要アルトキハ一方ノ請求ニ依リ  
他方ハ之ニ應シ派遣服務セシム  
五、日支兩國海軍ハ各自必要ナル地點ニ諜報機關ヲ設置シ又行動上必要ナル水路圖誌及情報ヲ交換  
通信聯絡ノ敏活確實ヲ期シ相互ニ輔助シテ其ノ便利ヲ圖ル爲必要ナル設備ハ兩國當事者臨時之ヲ  
協定ス

三〇七

調一0443

0299

六、共用ノ軍事暗号ヲ協同商定ス  
本條列スル所ノ各項ニシテ豫メ計画ヲ要スルモノ及豫メ施行スヘキモノハ作戦未實行前別ニ之ヲ協定ス

第六條

本協定實行上必要ナル詳細事項ハ日支兩國海軍當局各當事者ヲ指定シ之ヲ協定ス

第七條

本協定及本協定附屬ノ詳細事項ハ日支兩國ニ於テ均シク之ヲ公布スルコトナク軍事ノ祕密トシテ取扱フ

第八條

本協定ハ日支兩國海軍代表者記名調印シ各自本國政府ノ承認ヲ經テ效力ヲ生ス其ノ作戰行動ハ適當ノ時機ヲ俟チ兩國海軍最高統率部商定シテ之ヲ開始ス

本協定及本協定ニ基キ發生スル所ノ各種細則ハ日支兩國ノ獨墮敵國ニ對スル戰爭狀態終了ノ時ヲ俟チ其ノ効力ヲ失フ

第九條

本協定ハ日本文及漢文各二通ヲ作り彼此對照シテ記名調印シ雙方各一通ヲ保有シテ證據ト爲ス  
日本大正七年五月十九日於北京

中華民國七年五月十九日於北京

委員長 海軍少將 吉田增次郎

委員 海軍大佐 伊集院俊  
委員 海軍大佐 横山可也  
委員長 海軍中將 沈壽堃  
委員 海軍少將 吳振南  
委員 海軍少將 陳恩熙  
委員 海軍中校 吳光宗

(別紙第三號ノ二)

日支海軍共同防敵軍事協定説明書

大正七年五月十九日北京ニ於テ調印

大正八年三月十四日海軍省發表

一、日支兩國海軍ハ共同作戰ノ圓滿ヲ圖リ以テ軍事協定第一條ノ趣旨ニ副ハムカ爲和衷協同相互輔助シテ用兵計劃ニ遺憾ナキヲ期ス

第二項ノ職員ハ差當リ公使館附海軍武官及各處駐在海軍武官ヲ以テ之ニ充テ其ノ他ハ必要ニ應シ臨時協定派遣ス

第三項ノ材料即チ金屬物件類ノ如キ又軍需品即チ燃料糧食類及軍事上必要ナル彈丸火薬ノ如キハ兩國均シク爲シ得ル限り相互ニ輔助ス

第五項ノ水路圖誌交換ハ他方ノ請求ヲ俟テ之ヲ行フ

軍事行動區域内ニ於ケル港灣ニシテ雙方其ノ補測ノ必要ヲ認メタルトキハ該港灣所屬ノ本國海軍

自ラ之ヲ行フ

三一〇

中華民國七年五月十九日 於北京

日本大正七年五月十九日

委員長	海軍少將	吉田增次郎
委員	海軍大佐	伊集院俊
委員長	海軍大佐	樺山可也
委員	海軍中將	沈壽堃
委員	海軍少將	吳振南
委員	海軍少將	陳恩燦
委員	海軍中校	吳光宗

(別紙第三號ノ三)

日支海軍共同防敵軍事協定第六條ニ基キ第八條第二項中戰爭狀態  
終了ノ時期ニ關スル協定

大正八年三月一日北京ニ於テ調印(日、支文)

同 年三月十四日海軍省發表

日支兩國最高統率部協議ノ上日支海軍共同防敵軍事協定第六條ニ基キ第八條第二項中戰爭狀態終了  
ノ時期ニ關シ左ノ通協定ス獨逸國ニ對スル戰爭狀態終了ノ時トハ歐洲戰爭ノ平和會議ニ於テ平和  
退スルニ至ル時ヲ謂フ

本協定ハ日本文及漢文各々二通ヲ作リ對照シテ記名調印シ雙方各一通ヲ保有シ證據ト爲ス

大正八年三月一日

中華民國八年三月一日

日本帝國海軍代表者	海軍大佐	伊集院俊
海軍中佐	八角三郎	
中華民國海軍代表者	海軍少將	謝葆璋

(別紙第四號ノ二)

以書翰致啓上候陳者貴我兩國委員間ニ於テ本月十六日調印ヲ經タル日支陸軍共同防敵軍事協定第十  
一條及ビ本月十九日調印ノ日支海軍共同防敵軍事協定第八條ニ基キ今般帝國政府ニ於テ右兩軍事協  
定ヲ承認シタルニ付其旨貴國政府ニ通告スベキ旨帝國政府ノ訓令ニ接シ候間右様御承知相成度此段  
照會得貴意候 敬具

大正七年五月二十九日

三一一

調一0443

030:

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp>

調—0443

0302

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp>

日本帝國特命全權公使 男爵 林 権 助

(別紙第四號ノ二)

外交總長陸爲照會事依據本月十六日由中日兩國委員蓋印之中日陸軍共同防敵軍事協定第十一條及本月十九日蓋印之中日海軍共同防敵軍事協定第八條本國政府現已承認上述兩項軍事協定相應照會貴公使查照即希轉達貴國政府爲荷須至照會者

右照會

大日本國欽命駐華全權公使 林

中華民國七年五月二十九日

(別紙第四號ノ三)

外交總長陸爲照復事接准照稱依據本月十六日由彼此兩國委員蓋印之中日陸軍共同防敵軍事協定第十一條及本月十九日蓋印之中日海軍共同防敵軍事協定第八條帝國政府現已承認上述兩項軍事協定茲奉

帝國政府訓令將此事通知貴國政府等因業已閱悉相應照復貴公使查照即希轉達貴國政府爲荷須至照會者

右照會

大日本國欽命駐華全權公使 林

中華民國七年五月二十九日

(別紙第四號ノ四)

以書翰致啓上候陳者日支兩國委員間ニ於テ本月十六日調印ヲ經タル日支陸軍共同防敵軍事協定第十一條及本月十九日調印ノ日支海軍共同防敵軍事協定第八條ニ基キ今般貴國政府ニ於テ已ニ右兩軍事協定ヲ承認セラビタルニ付其旨本國政府ニ轉達方五月二十九日附書翰ヲ以テ御申越之趣致了承候就

テハ御來示ノ通リ直ニ本國政府ニ轉達致置候間右様御承知相成度此段回答得貴意候 敬具

大正七年五月二十九日

日本帝國特命全權公使 男爵 林 権 助

(別紙第五號ノ一)

支那共和國外交總長 陸 徵 祥 殿

軍事協定廢止ニ關スル陸軍側覺書

大正十年一月二十七日調印

日支兩國最高統率部ハ日支兩國共同防敵ノ必要消滅シタルヲ認メ茲ニ大正八年二月五日調印ノ日支軍協定有效斯限ニ關スル協定ヲ取消シ本書調印ノ日ヲ以テ軍事協定第十一條第二項戰爭狀態終了ノ時ニ達シタルコトヲ承認ス

大正十年一月二十七日

日本帝國陸軍代表者 乙 彥

中華民國陸軍代表者 陸軍少將 東

三一三

調—0443

0303

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp>

(別紙第五號ノ二)

軍事協定廢止ニ關スル海軍側覺書

大正十年一月二十七日調印

三一四

陸軍中將銜 何思溥

日支兩國最高統帥部ハ日支兩國共同防敵ノ必要消滅シタルヲ認メ茲ニ大正八年三月一日調印ノ日支軍事協定有效期限ニ關スル協定ヲ取消シ本書調印ノ日ヲ以テ軍事協定第八條第二項戰爭狀態終了ノ時ニ達シタルコトヲ承認ス

大正十年一月二十七日

中華民國十年一月二十七日

日本帝國海軍代表者

海軍大佐 八角三郎

中華民國海軍代表者

海軍少將 陳恩熙

(別紙第六號)

外交總長ヨリ小幡公使宛公文

外交總長顔

照會事案照中日兩國前因共同防敵起見曾由本國駐使與

貴國外務大臣換文並經兩國軍事當局商定陸軍軍事協定及海軍軍事協定各在案現中日兩國最高統帥部

認爲兩國共同防敵之必要業已消滅應即取消關於中日軍事協定有效期間之協定以簽名蓋印之日承認爲已達戰爭狀態終了之時機經兩國軍事當局遵此意旨簽訂節略本部查核上聞各節認爲與事實相符所有民國七年三月本國駐使與

貴國外務大臣之換文及根據換文雙方訂定之陸海軍軍事協定並基於該協定所訂各附件均應自本日起完全失其效力爲此備文聲明即希

貴公使查照須至照會者

右照會

大日本國欽命駐華全權公使 小幡

中華民國十年一月二十八日

(右譯文)

以書翰啓上致候陳者中日兩國ハ曩ニ協同防敵ノ爲メ駐日本本國公使ト貴國外務大臣トノ間ニ公文ヲ交換シ且兩國軍事當局者間ニ陸海軍軍事協定ヲ議定シ置タル處茲ニ中日兩國最高統帥部ハ兩國協同防敵ノ必要既ニ消滅シタルヲ認メ中日協定有效期間ニ關スル協定ヲ取消シ署名調印ノ日ヲ以テ既ニ戰爭狀態終了ノ時機ニ達シタルコトヲ承認シ兩國軍事當局者ニ於テ右趣旨ニ違ヒ覺書ニ調印致候本部調査スルニ右各節ハ事實ト相符合セルモノト認メタルニ付民國七年三月駐日本本國公使ト貴國外務大臣トノ交換公文及該交換公文ニ據リ双方締結ニ係ル陸海軍軍事協定並該協定ニ基キ締結セラレタル各附帶文書ハ均シク本日ヨリ完全ニ其ノ效力ヲ喪失セルコトヲ茲ニ聲明致候此段照會得貴意候

敬具

三一五

三二六

小幡公使ヨリ外交總長宛公文

以書翰致啓上候陳者本日附貴翰ヲ以テ御申越ノ趣閲悉日支兩國ハ曩ニ共同防敵ノ爲帝國外務大臣ト日本駐劄貴國公使トノ間ニ公文ヲ交換シ且兩國軍事當局者ノ間ニ陸軍軍事協定及海軍軍事協定ヲ議定シ置キタル處茲ニ日支兩國最高統帥部ハ兩國共同防敵ノ必要既ニ消滅シタルヲ認メ日支軍事協定有効期間ニ關スル協定ヲ取消シ署名調印ノ日ヲ以テ既ニ戰爭狀態終了ノ時機ニ達シタルコトヲ承認シ兩國軍事當局者ニ於テ右趣旨ニ遵ヒ覺書ニ調印致候查スルニ右各節ハ事實ト相符合セルモノト認メ候ニ付大正七年三月帝國外務大臣ト日本駐劄貴國公使トノ交換公文及該交換公文ニ據リ雙方締結ニ係ル陸海軍軍事協定並該協定ニ基キ締結セラレタル各附帶文書ハ均シク本日ヨリ完全ニ其ノ效力ヲ喪失セルコトヲ茲ニ聲明致候右照覆得貴意候 敬具

大正十年一月二十八日

日本帝國特命全權公使 小幡 西 吉  
支那共和國署理外交總長 順 惠 慶 殿